

大阪府吹田市所在

吹田操車場遺跡・吹田操車場遺跡B地点

—吹田信号場駅基盤整備工事・吹田地区貨車区改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2001年10月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

序 文

北摂の山塊から南に突き出す千里山丘陵の東には、北摂山地から流れ出す佐保川・安威川・芥川などの河川や、淀川とその分流が形成した肥沃な沖積平野が広がっています。

三島平野といわれるこの沖積地には、安満遺跡や東奈良遺跡といった弥生時代の拠点集落や多数の遺跡が形成されました。また古墳時代になると千里丘陵には、多数の須恵器窯が築かれて、周辺に須恵器を供給しています。また千里丘陵一帯とその周辺は、11世紀以降には「垂水牧」とよばれ、摂関家領から後に春日社領となります。また平安時代初期に成立したといわれる東寺領荘園「垂水庄」は、多くの関連する文書が残されていることでも知られています。

宮都が平安京に遷って後は、特に西国と都を結ぶ交通の要路として「山陽道」が北摂の山麓を直線的に貫き、淀川の舟運に伴う「江口」のような津泊が形成されるように、交通の要衝ともいえる地域です。

この地に大阪と京都を結ぶ鉄道交通が開始されたのは明治9年のことです。そして大正12年には鉄道貨物輸送の拠点として、当時東洋一といわれた「吹田操車場」が建設されて鉄道交通の重要性は増していったのであります。しかし、トラック輸送の隆盛とともに貨物輸送の需要が低下し、吹田操車場もその機能の大部分が廃止されました。しかし、このたび梅田貨物駅機能の一定部分をこの吹田操車場に移すことが計画されました。これに伴い、中世の遺跡として周知されていた吹田操車場遺跡において、平成10年度に実施した試掘調査に続き、当センターが今回事前に発掘調査を行う事となりました。

調査では、古墳時代の計画的な直線水路や10世紀ごろの掘立柱建物、10世紀まで確実に遡る条里水田が検出され、また谷地形の最下層から鬼界アカホヤ火山灰が検出されるなどなど、この地域の地形の形成やその開発にかかわる遺跡の実態の一部が明らかになりました。これらの成果が、この地域の歴史を語る資料として、また現在と将来を考えるための資料として活用されることを望んでやみません。

最後に、発掘調査及び遺物整理事業の実施にあたり、多大な御協力をいただきました日本鉄道建設公団国鉄清算事業本部西日本支社、日本貨物鉄道株式会社関西支社吹田機関区、吹田市立博物館など、関係各位に深く感謝いたしますとともに、今後とも文化財保護に御理解、御協力いただきますようお願い申し上げます。

平成13年10月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

理事長 水野 正好

例 言

- ・本書は、大阪府吹田市芝田町・平松町に所在する吹田操車場遺跡・吹田操車場遺跡 B 地点の発掘調査報告書である。
- ・調査は、財団法人大阪府文化財調査研究センターが日本鉄道建設公団国鉄清算事業本部西日本支社の委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもと実施した。
- ・吹田信号場駅基盤整備工事に伴う調査を吹田操車場遺跡（その 2）発掘調査、また、吹田地区貨車区改良工事に伴う調査を吹田操車場内発掘調査（その 3）として現地発掘調査を実施した。現地調査に続いて遺物整理および報告書作成作業を行った。
- ・調査委託契約期間は、吹田操車場遺跡（その 2）発掘調査が2000年 1 月17日～2000年 3 月31日・2000年 4 月1日～2000年 9 月30日、吹田操車場内発掘調査（その 3）が2000年 9 月 4 日～2001年 3 月31日である。遺物整理事業の委託契約期間は2001年 4 月 2 日～2001年10月31日である。
- ・現地調査は、財団法人大阪府文化財調査研究センター調査部長井藤 徹、調整課長中西靖人（2000年 3 月31日まで）赤木克視（2000年 4 月 1 日から）、北部調査事務所長藤田憲司（2000年 3 月31日まで）小野久隆（2000年 4 月 1 日から）、同事務所調査第一係長金光正裕（2000年 3 月31日まで）阪田育功（2000年 4 月 1 日から）の指示のもと、吹田操車場遺跡（その 2）発掘調査を阪田育功・黒須亜希子・福島正和、吹田操車場内発掘調査（その 3）を阪田育功・河端 智が担当した。また、遺物写真撮影・現像・焼付けは北部調査事務所主査上野貞子、樹種鑑定は中部調査事務所主査山口誠治が担当した。調査終了後、引き続き北部調査事務所にて整理作業をおこない、平成13年10月、本書の作成をもって全ての作業を完了した。
- ・調査に際しては、花粉・珪藻分析を株式会社古環境研究所に、火山灰分析を川崎地質株式会社に、放射性炭素年代測定をパリオ・サーヴェイ株式会社に委託し、本文中にその結果を掲載した。
- ・遺構実測図の基準高についてはすべて東京湾平均海水位（T.P.）を用いた。
- ・平面図は国土座標ののりつとった平面直角座標系、第VI座標系に準拠し、挿図における座標の記載はすべてキロメートル単位で表す。また方位の矢印の示す方向は座標北を示す。
- ・土色に関しては小山正忠・竹原秀夫編1988『新版標準土色帖』第 8 版（農林水産省農林技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）に準拠した。
- ・遺構番号は、今回の調査区ごとに通し番号を与えている。これは、調査時に与えた遺構番号を変更しないことを基本とし、整理事業において新たに認めた建物等の遺構については調査時に連続した新しい番号を与えた。
- ・本書の作成にあたっては、調査担当者がそれぞれ起稿し、執筆分担は目次に示すとおりである。
- ・本書の編集は、阪田・河端・黒須がおこなった。本文中の用語、記載方法等においては、執筆者の考えを尊重してあえて統一していないところがある。
- ・本調査に関わる遺物、写真、カラスライド、実測図などの各種記録類は、財団法人 大阪府文化財調査研究センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。
- ・調査の実施にあたっては、日本鉄道建設公団国鉄清算事業本部西日本支社、日本貨物鉄道株式会社関西支社吹田機関区、大阪府教育委員会、吹田市立博物館など関係諸機関のほか、下記の方々から御指

導、御教示を賜った。記して感謝を申し上げたい。

【調査指導・協力】〔順不同、敬称略〕

辻義四郎・佐用嘉夫（日本鉄道建設公団国鉄清算事業本部西日本支社）、石田武雄・奥秀達・藤原学・増田真木・西本安秀・田中充徳・賀納章雄（吹田市立博物館）、伊部貴雄（摂津市教育委員会）、松田順一郎・別所秀高（(財)東大阪市文化財協会）、楠原一輝（交通科学博物館）、穴吹省三・森本良和（日本貨物鉄道株式会社関西支社吹田保全センター）、今井弘良・高橋祥浩（日本貨物鉄道株式会社関西支社吹田機関区）、小川健二・斎藤隆司（日本貨物鉄道株式会社関西支社）、辻 喜男・井上秀樹（日本貨物鉄道株式会社吹田信号場駅）

【調査参加者】〔順不同〕

上河善子・鹿島真由美・田中正子・中川寿美・二宮栄子・八十千里・川崎朝子・今田明子・喜田真澄・前田千津子

本文目次

第1章	遺跡の位置と環境		
第1節	地理的環境	1. 北摂の地形	阪田 育功 1
		2. 千里丘陵周辺の地質	阪田 2
		3. 吹田操車場遺跡周辺の微地形	河端 智 3
第2節	歴史的環境	—考古学から—	福島 正和 5
第3節	歴史的環境	—文献資料から—	黒須 亜希子 9
第2章	調査の経過と方法		阪田 14
第1節	調査に至る経過		
第2節	発掘調査の方法		
第3章	基本層序と遺構面		
第1節	基本層序と遺構面		阪田 16
第2節	A・B地区の基本層序		黒須 17
第3節	C地区の基本層序		河端 19
第4章	A地区の調査成果		黒須 22
第1節	弥生時代以前の遺構と遺物		22
第2節	古墳時代前期の遺構と遺物		24
第3節	古墳時代後期から飛鳥・奈良時代の遺構と遺物		27
第4節	平安時代の遺構と遺物		36
第5節	中世から近世の遺構と遺物		42
第6節	近世から近代の遺構と遺物		47
第7節	包含層出土遺物		50
第8節	A地区のまとめ		56
第5章	B地区の調査成果		福島 61
第1節	古墳時代以前の遺構と遺物		61
第2節	古墳時代の遺構と遺物		61
第3節	古墳時代から飛鳥・奈良時代の遺構と遺物		62
第4節	平安時代から中世の遺構と遺物		63
第5節	中世から近世の遺構と遺物		64
第6節	近世から近代の遺構と遺物		65
第7節	包含層出土遺物		65
第8節	B地区のまとめ		68

第6章 C地区の調査成果	阪田・河端	69
第1節 はじめに		69
第2節 古墳時代以前		71
第3節 古墳時代		80
第4節 中世		81
第5節 近世以降		82
第6節 出土遺物		89
第7節 C地区のまとめ		90
第7章 自然科学分析		
第1節 花粉・珪藻分析	株式会社 古環境研究所	91
第2節 火山灰分析	川崎地質株式会社	110
第3節 放射性炭素年代測定	パリノ・サーヴェイ株式会社	119
第4節 自然科学的分析結果からみた谷の形成と埋没	阪田	123
第8章 まとめと考察		
第1節 調査成果と今後の課題	阪田	128
第2節 出土遺物からみた吹田操車場遺跡	福島	130
第3節 考察「摂津C型羽釜考」	福島	132
出土遺物一覧表		138

挿 図 目 次

図1 調査地点位置図	図15 1A区第4面 遺構平面・断面図
図2 吹田市および周辺地域の地質模式図	図16 1A区第4面 遺構平面・断面図
図3 吹田操車場遺跡周辺の地形図	図17 2A区第4面 遺構平面・断面図
図4 周辺の遺跡分布図	図18 2A区第4面 遺構断面図
図5 試掘調査位置図 調査区配置図	図19 溝2A-11土器溜り① 遺物出土状況図
図6 垂水庄指図（寛正四年）	図20 溝2A-12土器溜り② 遺物出土状況図
図7 調査区内地区割図	図21 A地区第4面 遺構内出土遺物実測図
図8 基本層序模式図	図22 溝A-19上層土器溜り 遺物出土状況図
図9 各地区基本断面図	図23 溝A-19上層 出土遺物実測図
図10 拡張トレンチ（第5-2面）と出土遺物（弥生時代）	図24 A地区第3面 平面図
図11 A地区第5-2面 平面図・溝A-19 断面図	図25 建物2A-91 平面・断面図
図12 A地区第5-1面 遺構平面図・断面図	図26 建物2A-91 P11・P35 平面・断面図
図13 1A区 遺構内出土遺物実測図	図27 A地区第3面 遺構内出土遺物実測図
図14 A地区第4面 平面図	図28 建物2A-92 平面・断面図

- 図29 建物2A-93・2A-94 平面・断面図
- 図30 A地区第3面検出ピット 平面・断面図
- 図31 A地区第2面 平面図
- 図32 落込み1A-12上面 遺物出土状況図
- 図33 落込み1A-12 平面・断面図
- 図34 落込み1A-12 出土遺物実測図
- 図35 A地区第1面 平面図
- 図36 A地区第1面 遺構平面・断面図
- 図37 井戸1A-10 平面・断面図
- 図38 A地区包含層(第4層) 出土遺物実測図
- 図39 A地区包含層(第3層) 出土遺物実測図
- 図40 A地区包含層(第1・2層) 出土遺物実測図
- 図41 遺構と土地利用の変遷図
- 図42 A地区における水田畦畔の変遷模式図
- 図43 淀川右岸地域における条里呼称概略図(服部原図)
- 図44 条里地割 復原図
- 図45 B地区確認トレンチ 位置図
- 図46 B地区確認トレンチ 断面図
- 図47 B地区古墳時代遺構面 平面図
- 図48 B地区古墳～古代遺構面 平面図
- 図49 溝B-2 土層断面図
- 図50 土坑B-3 土層断面図
- 図51 B地区古代末～中世遺構面 平面図
- 図52 土坑B-1 土層断面図
- 図53 土坑B-1 出土遺物
- 図54 B地区中世～近世遺構面 平面図
- 図55 B地区包含層出土遺物実測図
- 図56 C地区土層断面 模式図
- 図57 谷状地形部分 等高線図・土層断面図
- 図58 溝C-901・902・903 土層断面図
- 図59 C地区第9面 平面図
- 図60 溝C-601・602・603・604・605・606 土層断面図
- 図61 C地区第8面 平面図
- 図62 C地区第7面 平面図
- 図63 C地区第6面 平面図
- 図64 C地区第5面 平面図
- 図65 C地区第4面 平面図
- 図66 C地区第3面 平面図
- 図67 C地区第2面 平面図
- 図68 土留めC-103・溝C-201・206・207土層断面図
- 図69 C地区第1面 平面図
- 図70 埋桶C-101・井戸C-102 平面図・断面図
- 図71 C地区出土遺物実測図(1)
- 図72 C地区出土遺物実測図(2)
- 図73 花粉・珪藻分析 C地区b・c地点サンプリング 断面図
- 図74 C地区a地点における花粉ダイアグラム
- 図75 A地区南側断面における花粉ダイアグラム
- 図76 C地区b・c地点・溝C-801における主要花粉ダイアグラム
- 図77 A地区1A区南側断面における主要珪藻ダイアグラム
- 図78 C地区b・c地点・溝C-801における主要珪藻ダイアグラム
- 図79 A地区南側断面における主要花粉・珪藻と推定される植生・環境の変遷
- 図80 C地区の花粉・珪藻分析から推定される植生と環境
- 図81 A地区・C地区における植生・環境の変遷と対比
- 図82 火山灰分析試料採取地点 平面図
- 図83 火山灰分析試料採取地点 断面図-1
- 図84 火山灰分析試料採取地点 断面図-2
- 図85 火山ガラスの含有率(粒数%) グラフ
- 図86 谷の形成復原模式図
- 図87 沖積層基底面等深線(土地条件図より作成 5万分の1)
- 図88 周辺の地形図
(明治17年複製2万分の1地形図から作成 5万分の1)
- 図89 谷埋土 断面図
- 図90 最終氷期の古大阪平野(趙・松田原図)
- 図91 縄文海進最高水準期の河内湾
(松田・別所原図を一部改変)
- 図92 計画的三嶋路と幣久良山(足利原図)
- 図93 吹田操車場遺跡出土摂津C型羽釜
- 図94 摂津C型羽釜出土分布図
- 図95 高柳遺跡出土K型甕

写真図版目次

- 図版 1 1. 1A西区第1面 全景(南西から)
2. 1A東区第1面 全景(北東から)
- 図版 2 1. 2A区第1面 全景(南西から)
2. 井戸1A-10断割状況
3. 井戸1A-10井戸枠出土状況
4. 土坑2A-3断ち割り状況
5. 埋桶2A-2断ち割り・出土状況
- 図版 3 1. 1A区第2面 全景(南西から)
2. 人の足跡 完掘状況
3. 牛・馬の足跡 完掘状況
4. 落ち込み1A-12 杭出土状況
- 図版 4 1. 1A区第2面 全景(北東から)
2. 1A区第3面 全景(北東から)
- 図版 5 1. 落ち込み1A-12 完掘状況
2. 落ち込み1A-12 断面
- 図版 6 1. 1A区第4面 全景(南西から)
2. 溝1A-21周辺遺構 完掘状況
- 図版 7 1. 1A区第4面 全景(北東から)
2. 1A区溝群1A-31 完掘状況
- 図版 8 1. 2A区第2面 全景(南西から)
2. 溝2A-12 完掘状況(南から)
3. 溝2A-12 断面
4. 溝2A-11土器溜り1 遺物出土状況
5. 溝2A-12土器溜り2 遺物出土状況
- 図版 9 1. 建物2A-91 ピット検出状況(南から)
2. 建物2A-92-P9 検出状況(北から)
3. 溝2A-11・建物2A-93 検出状況
4. 建物2A-91-P11・P35 遺物出土状況
5. 溝2A-19上層土器溜り1 遺物出土状況
- 図版10 1. 1A区第5-1面 全景(北東から)
2. 溝A-19完掘状況
3. 溝A-19断面
4. 2A区第5-2面 不定形土杭検出状況
- 図版11 1. B地区第1面 全景(南西から)
2. B地区代2面 全景(南西から)
- 図版12 1. B地区第3面第 全景(南西から)
2. 溝B-1・土坑B-2 完掘状況
- 図版13 1・2. A地区第1・2層 出土遺物
- 図版14 1・2. A地区第1・2層 出土遺物
- 図版15 1・2. A地区第1・2層 出土遺物
- 図版16 1・2. A地区第1・2層 出土遺物
3～6. A地区第3層 出土遺物
- 図版17 1. 2. A地区第3層 出土遺物
- 図版18 1. 2. A地区第3層 出土遺物
- 図版19 1. 2. A地区第4層 出土遺物
- 図版20 1. 2. A地区第3層 出土遺物
- 図版21 1～6. 第4層 出土遺物
- 図版22 1. A地区第5-2層 出土遺物
2. B地区第4層 出土遺物
3・4. 土坑1A-33・35 出土遺物
5. 第5-2層 出土遺物
6. 土坑1A-33・35 出土遺物
7. 溝A-19 出土遺物
- 図版23 1・2. 溝2A-11 出土遺物
3～5. 溝A-19 出土遺物
6・7. 溝1A-20 出土遺物
8. 溝2A-13 出土遺物
9. 溝A-19 出土遺物
- 図版24 1～9. 溝2A-12 出土遺物
- 図版25 1・6. 建物2A-91ピット1 出土遺物
2・3. ピット2A-89 出土遺物
4. 溝1A-11 出土遺物
5. 溝1A-21 出土遺物
7. ピット2A-88 出土遺物
8. 溝2A-16 出土遺物
- 図版26 1・3. ピット2A-35 出土遺物
2. 建物2A-91ピット8 出土遺物
4. 落ち込み1A-12 杭

図版27	1・2. 落ち込み1A-12 出土遺物	2. C地区第6面 全景 (北東から)	
図版28	1. A地区第4層 出土遺物	3. C地区第6面 溝群 (西から)	
	2. B地区 出土遺物	4. C地区第6面 溝C-601断面 No. 3 (東から)	
図版29	1・2. B地区 出土遺物	5. C地区第6面 溝C-601断面 No. 1 (東から)	
図版30	1・2. B地区 出土遺物	図版37	1. C地区第7面 全景 (西から)
図版31	1・2. B地区 出土遺物	2. C地区第8面 全景 (西から)	
図版32	1・2. B地区 出土遺物	図版38	1. C地区第9面 全景 (南西から)
	3. 土坑B-1 出土遺物	2. C地区第9面 溝C-903断面 (南東から)	
	4・5. B地区 出土遺物	図版39	1. C地区第1面 埋桶C-101 出土遺物
図版33	1. C地区第1面 畝間溝群C-108~113 (北西から)	2. C地区第2面 溝C-207 出土遺物	
	2. C地区第1面 埋桶C-101 (南東から)	図版40	1. C地区第3層 出土遺物
図版34	1. C地区第2面 全景 (北東から)	2. C地区第3面・第3層 出土遺物	
	2. C地区第2面 段差C-204 (北西から)	図版41	1. C地区第3層 出土遺物
	3. C地区第3面 全景 (南西から)	2. C地区第4層 出土遺物	
	4. C地区第3面 青銅製品出土状況 (北西から)	図版42	1・2. C地区第4層 出土遺物
図版35	1. C地区第4面 全景 (西から)	図版43	1. C地区第5層 出土遺物
	2. C地区第5面 全景 (西から)	2. C地区第6層 出土遺物	
図版36	1. C地区第6面 全景 (南西から)		

表 目 次

表1	A地区における花粉分析結果	表8	分析試料の鉍物組成
表2	C地区における花粉分析結果	表9	火山ガラスの形状および屈折率
表3	A地区における珪藻分析結果	表10	分析試料の鉍物組成
表4	C地区における珪藻分析結果	表11	近畿地方における後期更新世以降の火山灰の性質
表5	火山灰分析処理・検出数量表	表12	放射性炭素年代測定および樹種同定結果
表6	No. 1地点の火山ガラスの含有量分析表	表13	摂津C型羽釜出土遺跡一覧表
表7	No. 2地点の火山ガラスの含有量分析表	表14	掲載遺物一覧表

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

1. 北摂の地形

吹田操車場遺跡は千里丘陵の南東部縁辺に近い低地部に位置している。まず、千里丘陵を含む北摂地域、旧嶋上・嶋下郡の地形について概観しておこう。

嶋上・嶋下は、北に北摂山地・南に淀川・西に千里山丘陵と、これらに挟まれた北東に長い三角形の低地部からなる地域である。

北摂山地は丹波高原から南に派生する山地で、砂岩・頁岩・チャート・輝緑凝灰岩などの古生層で構成されている。山地は南に向かって徐々に高度を減じ、この付近での山地の最高所は鉢伏山の294m・阿武山の281mを結ぶラインが尾根線となっている。山塊の南麓には大阪層群がはりつき、摂津富田付近には発達した段丘がとりついている。

千里丘陵は北摂山地の西端から南に向かって逆三角形に広がっている。千里丘陵は第三紀末鮮新世から第四紀更新世中期にかけて形成された大阪層群とよばれる砂層・礫層・粘土層・火山灰層からなっている。最高点は134mで、北から南と東にむかってゆるやかに下がっている。丘陵は多くの谷で複雑に開析されている。また丘陵の縁辺には中位・低位段丘がはりついている。

淀川は、山崎の峡谷をとおり北東から南西に流下する。途中、北摂山地から流れ出る桧尾川・芥川をあわせているが、かつては、安威川や佐保川も、また千里丘陵から流下する山田川なども直接淀川に合流していた時期があったと推定される。本流は江口（大阪市東淀川区）で大きく分流し、北は神崎川と

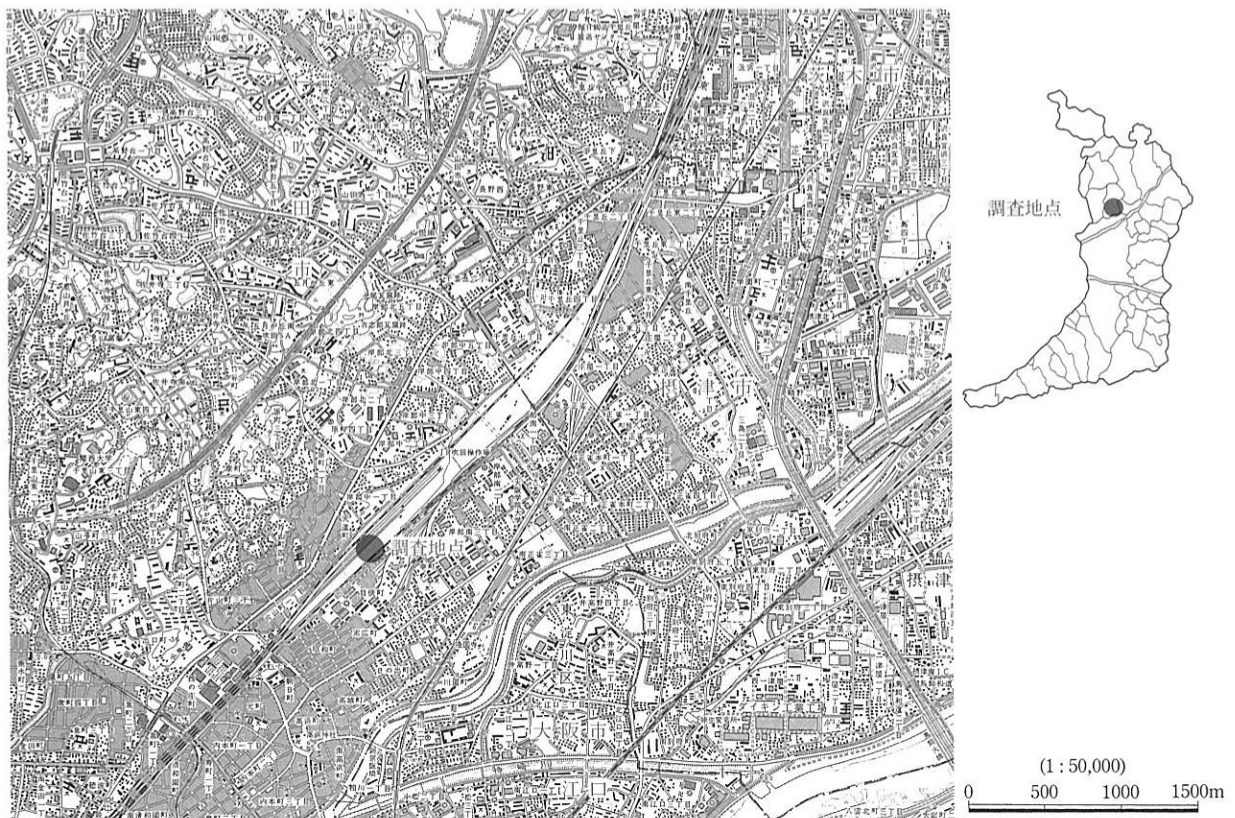


図1 調査地点位置図

なって千里丘陵から南に流下する糸田川・高川・天竺川をうけてのち猪名川と合流して南西に流れ、大阪湾に注いでいる。江口で別れた淀川は毛馬で北の中津川・南の大川に分かれてそれぞれ大阪湾に注いでいる。

山塊・丘陵・河川に囲まれた北摂平野は、ほぼ北西から南東にむかって低くなっているが、この中を流れる桜井川・芥川・安威川・佐保川（茨木川）は自然堤防を形成しながら、幾度か流路を変えて流れ下っている。これらの低地は、山地あるいは丘陵の縁辺に形成された扇状地性低地・氾濫原からなっているが、この低地には条里地割が施行されて主要な居住域・生産域となっている。

2. 吹田操車場遺跡周辺の地質

吹田操車場遺跡の北西に位置する千里丘陵は、地質的には第三紀後半の鮮新世から第四紀更新世中期に堆積した「大阪層群」の模式地となった丘陵である。千里丘陵における大阪層群は、北西部の島熊山

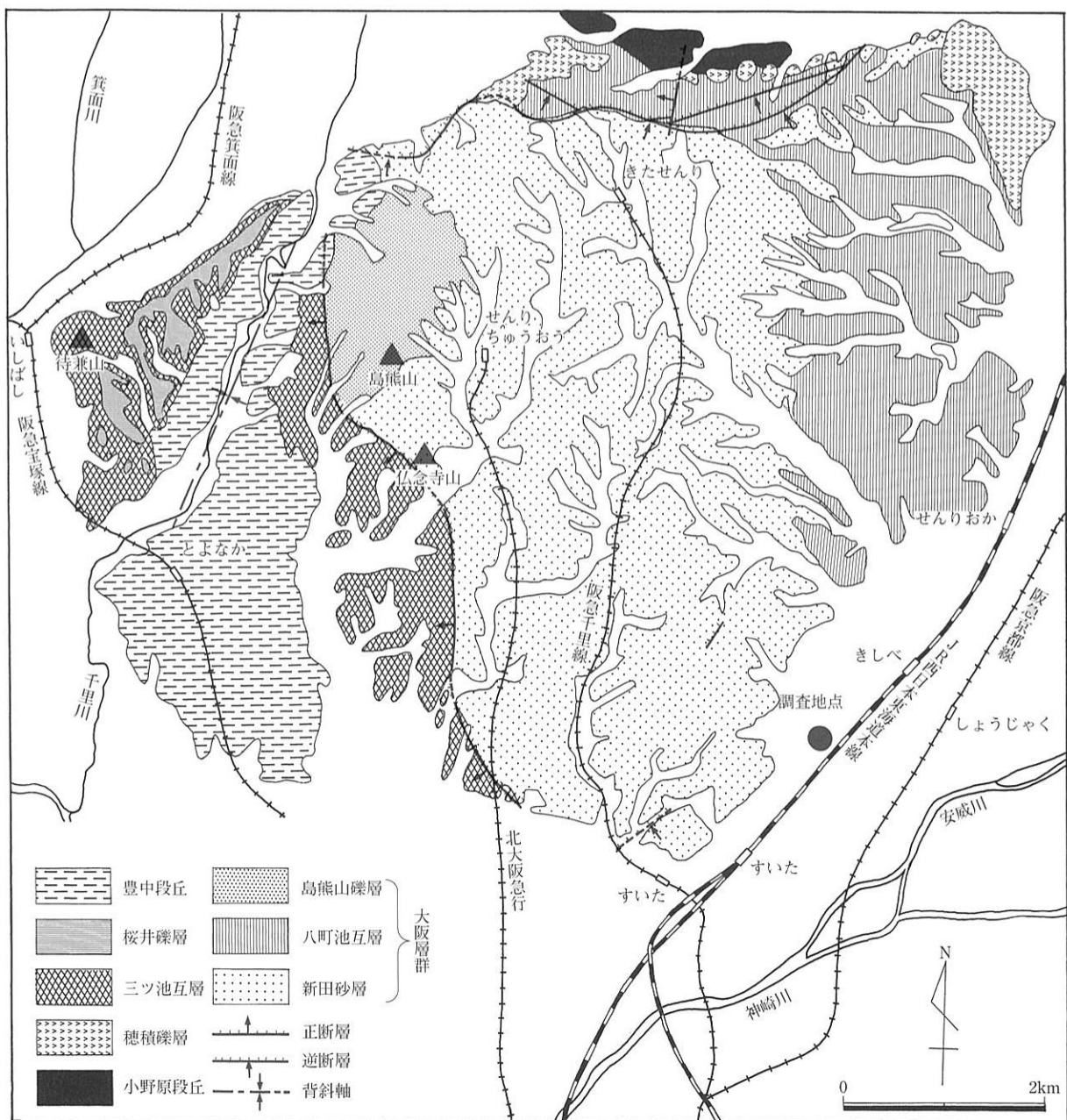


図2 吹田市および周辺地域の地質模式図

をピークに仏念寺山断層の東部では、東に向かって傾斜している。吹田市域では島熊山礫層の直上から第2海成粘土層までの堆積で、礫を主体とした「新田砂層」とよばれる層が露頭している。丘陵北東部の吹田市域では大阪層群上部のMa 3以上の「茨木累層」と呼ばれる海成粘土と砂礫の互層が露頭している。西側の豊中市域では仏念寺山断層の西に「三ツ池互層」とよばれる上部大阪層群が露頭している。この西には天竺川の沖積地を挟んで豊中段丘とよばれる上位・中位段丘が形成されている。

大阪層群の隆起で形成された千里丘陵には、多くの谷が開析されて谷底に狭小な沖積低地を形成している。丘陵の東南縁辺には小規模な段丘や、谷の開析によるごく小規模な扇状地がはりついている部分がある。土地条件図によれば吹田市岸部付近にも中位段丘が形成されていると認識されているが、おおかたは丘陵から古淀川の形成した沖積地に直接連続している。

沖積層の厚さは、土地条件図沖積層基底面等高線によれば現淀川と安威川の中間付近で20mと最も厚く、調査区周辺では5m程度と考えられている。沖積層の形成は、主に古淀川の堆積作用に因るものであるが、安威川・芥川など北摂山地を流下した川や、千里丘陵を開析した川の堆積も複雑に入り混じっているものと思われる。

3. 吹田操車場遺跡周辺の微地形

吹田操車場遺跡周辺の地形を概観する。周辺の微地形を読み取るため、昭和36年発行の大阪府地形図から1mごとに等高線をひろい、調査区付近の微地形の復元を試みた。しかし、吹田操車場跡地は大正期の造成に伴う盛土により旧地表面が埋没し、等高線の復元はできなかった。なお、T.P.20m以上は10mごとの等高線であるが、T.P.20m未満は1mごとの等高線で表した(図3)。

地形を概観すると、調査区の北西には千里丘陵が位置する。北西方向が高く、南東方向が低い。T.P.20m以上は等高線が近接しており、非常に急な地形となっている。一方、T.P.20m未満は緩やかな斜面を形成し、T.P.10m未満では傾斜がさらに緩やかになる。

千里丘陵は多数の谷が複雑に開析する。谷の先には扇状地が広がっていた。その扇状地の扇端部分に亀岡街道が位置する。そして東海道本線付近から平坦な地形となる。吹田操車場付近の平坦地ではもともと水田や畑などの耕作地が広がっており、広大な耕地が展開していた。ここに操車場が選定された経緯を考えても、吹田操車場跡地はほぼ水平で平坦な地形であったと考えられる。その平坦地の南西側には、北東方向から南西方向へ流れる安威川が位置している。

吹田操車場跡地の中央付近では、等高線が北西方向に位置する丘陵に向って上がっている場所が確認された。ちょうど、吹田機関区の北・西側を取り巻く形で谷の存在が窺われる。その部分は試掘調査成果では地山・旧地表面ともに低い。今回の調査でも谷状の地形が検出された。等高線が大きく入り込んでいることから、大きな谷の存在が考えられる。

また、吹田操車場跡地内だけを見れば、北東方向が高く、南西方向が低い傾向にある。等高線を見ても、南西のJR西日本吹田工場の付近はもともと地形が低かった可能性が高い。吹田第二機関区造成にあたっては、沼地を埋めたたともいわれている。逆に、地形的に高いのは、今回の調査区の南西側と考えられる。

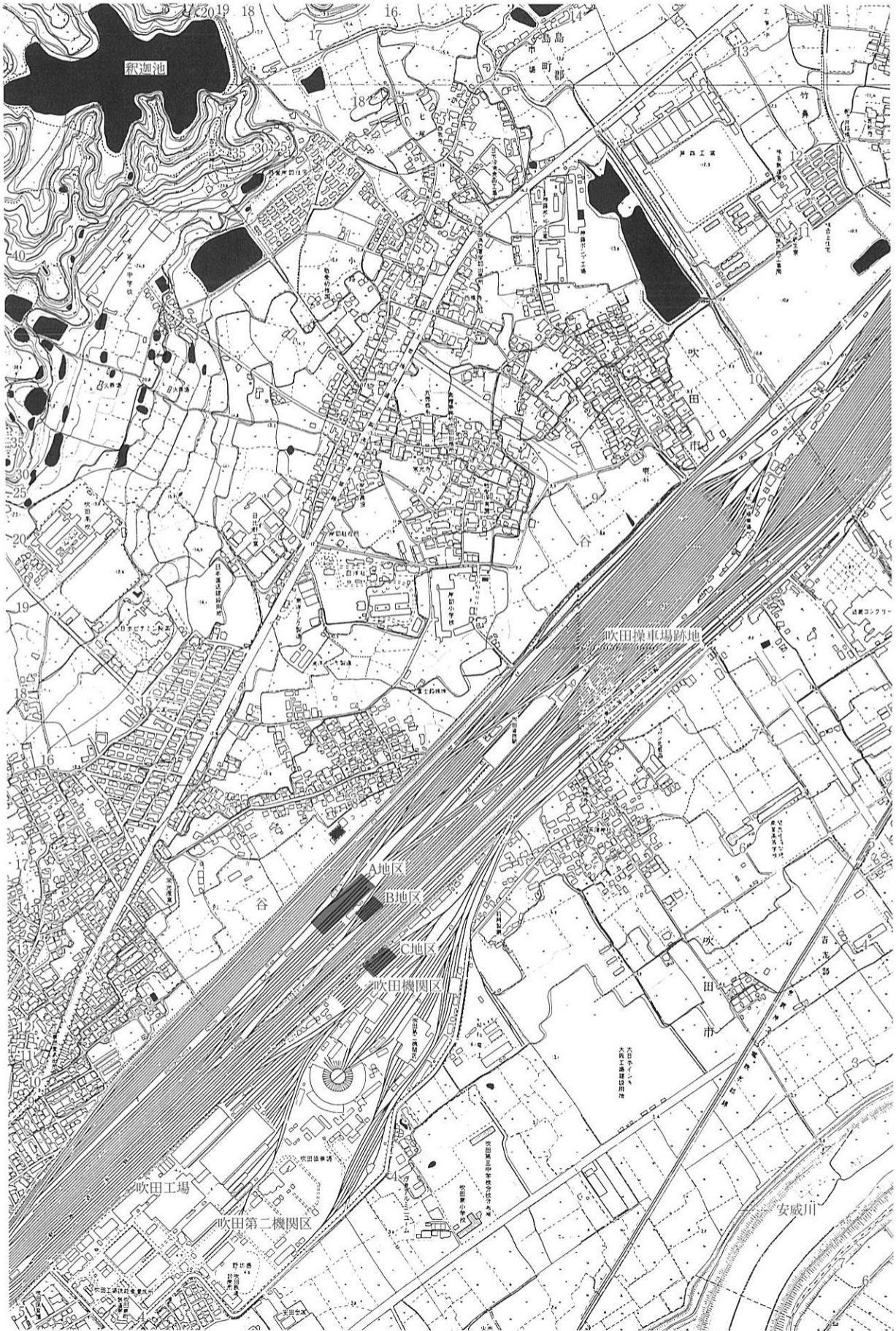


図3 吹田操車場遺跡周辺の地形図（1万分の1）

第2節 歴史的環境 —考古学から—

1. 旧石器時代

当遺跡周辺では、旧石器時代からの遺跡や遺物がいくらか確認されている。千里丘陵の裾に位置する吉志部遺跡では、サヌカイト製ナイフ形石器を中心に、錐状石器・搔器・削器など多数の石器類が出土している。また、千里丘陵より南に位置する平野部でも、旧石器時代の所産と考えられる石器が出土しており、当遺跡の程近くでも旧石器時代、人が活動していた証を遺物から見るができる。当遺跡の南、約500mに位置する目俵遺跡では、ナイフ形石器が出土している。垂水遺跡、高城遺跡などでも僅かながら旧石器が確認されている。

2. 縄文時代

前代に続き、縄文時代の遺跡や遺物もいくつか確認されている。中ノ坪遺跡では、縄文時代草創期の可能性があるチャート製有舌尖頭器が出土している。また、高浜遺跡では船元式土器が出土している。この船元式土器は、瀬戸内沿岸を中心に西日本に分布する縄文時代中期前半の土器である。この高浜遺跡が吹田砂堆上に位置することから、当時から吹田砂堆上が周辺よりやや高く、比較的安定していた土地であったと考えられる。縄文時代晩期には、七尾瓦窯跡の下層や目俵遺跡などで刻目突帯文が施された長原式、船橋式などの土器が出土している。しかし、縄文時代全般を通じて住居跡は確認されていない。今後、周辺の調査で縄文時代の集落が明らかになる可能性は高いと思われる。

3. 弥生時代

縄文時代では未確認の集落も弥生時代に入ると、千里丘陵周辺から淀川流域沿いにかけて多くみられるようになり、なかでも茨木市東奈良遺跡のような拠点集落をはじめ、集落がいくつも営まれる。千里丘陵の小高い尾根上から沖積平野にまたがる垂水遺跡は、このような拠点集落の一つであると考えられる。この遺跡は弥生時代前期から住居跡が存在し、中期末から後期全般にかけて最盛期を迎えると考えられている。また、集落は比較的小高い場所にも展開することから、千里丘陵南の平野を見下ろす高地性集落であったと考えられる。この遺跡では、近江や東海など他地域から搬入されたと思われる土器が出土し、広域な交流を窺わせると同時に当時から要衝の地であったことが考えられる。

千里丘陵では、吹田市山田で外縁付紐式四区袈裟襷文銅鐸が出土している。この山田銅鐸は高さ45.6cmを測る。出土地点が、東奈良遺跡の北西約1.3kmの丘陵上であることから、銅鐸の鋳型が出土した東奈良遺跡との関連性も注目されよう。

4. 古墳時代

すでに弥生時代から大規模な集落であった垂水遺跡では、古墳時代になっても集落が存続し、南に位置する垂水南遺跡にまで広がる。垂水遺跡では、熔解途中の状態と考えられる方格規矩鏡の破片が出土しており、古墳時代の青銅器製作を考えるうえで重要である。

古墳は、千里丘陵裾部分に位置する吉志部古墳群、垂水西原古墳などが周辺で確認されている。千里丘陵南西部に位置する新芦屋古墳は、方形の墳丘に木室を持つ終末期の古墳である。木室内からは須恵器、馬具などの豊富な遺物と横口式石棺が検出された。これより北に位置する茨木市上寺山古墳も木室を採用する古墳であり、両者の関係は密接なものであったと思われる。

千里丘陵に分布する千里古窯跡群は、豊中市に位置する桜井谷古窯跡群と吹田市に位置する吹田須恵器窯跡群に分かれる。この須恵器の一大生産地である千里古窯跡群野の中でも吹田32号窯跡は初期須恵器を生産しており、生産開始は朝鮮半島から須恵器生産が伝播して間もない頃であったと考えられてい

る。吹田32号窯跡から時間的断絶を経て、5世紀末頃に桜井谷古窯跡群で生産が本格化する。やや遅れて吹田須恵器窯跡群でも本格化し、7世紀中頃まで続いたようである。現在までに吹田古窯跡群では、50基以上の須恵器窯跡の存在が確認されている。

5. 飛鳥・奈良時代

全国で古墳築造が終焉し、本格的な寺院や宮都の造営が行われたこの頃、千里丘陵では須恵器生産が衰退、終息し、新たに瓦窯が構築され瓦生産が行われた。そのうち、発掘調査で明らかになった当該期の窯跡としては、白頭瓦窯跡と七尾瓦窯跡がある。丘陵の東に位置する白頭瓦窯跡は、白鳳期の茨木市穂積廃寺を供給先とするものと考えられている。一方、七尾瓦窯跡は丘陵の南端に位置し、出土した瓦から難波宮へ供給した瓦が生産されていたことが明らかである。

6. 平安時代から中世

千里丘陵では、平安時代にも瓦生産が行われている。奈良時代の七尾瓦窯跡と同じく丘陵南端に位置する吉志部瓦窯跡は、平安宮に供給する緑釉瓦を生産していた窯跡である。平安宮造営期に操業されたこの瓦窯跡では窯跡のみならず、それに付随する工房跡や原料粘土の採掘坑跡も確認されている。

窯業生産以外では、五反島遺跡で平安時代前期の河川堤防が検出され、当時の灌漑に関する土木技術を知ることができる。

集落遺跡である垂水南遺跡では多数の墨書土器が出土している。特に注目すべきは「垂庄」と墨書された土器である。文献史料にみられる「東寺領垂水荘」を示すものであると想定できる。この頃、周辺で荘園が拓かれていたことを考古学的に裏付ける資料である。当遺跡周辺では高城 B 遺跡、高畑遺跡などで平安時代中頃から末頃にかけての掘立柱建物跡が確認されている。このことから周辺ではいくつかの集落が点在していたと推察できる。

中世の集落では、蔵人遺跡で様子が明らかになっている。掘立柱建物、鍛冶工房、井戸などが確認されており、文献史料にみられる「垂水荘蔵人村」に比定される集落である。

7. 吹田操車場遺跡の既往調査

吹田操車場遺跡は、1967年4月瓦器など中世の遺物が発見され、遺跡として周知された。その後本格的な調査はされず、遺跡の範囲及び時代など詳細な様子は長らく不明であったが、1998年10月より遺跡の範囲確認のため、財団法人大阪府文化財調査研究センターが試掘調査をおこなった。調査は操車場内の約2.3kmの範囲に61箇所を試掘トレンチを設け実施し(図5)、摂津市明和池遺跡を含む操車場内全域にわたり遺構、遺物を確認した。

1922年にこの操車場は建設され、片山町2丁目付近の山を削ってトロッコで運ばれた土により2m近く盛土がおこなわれていた。その盛土の上に軌道敷のバラスが敷かれていた。盛土の下には、それ以前の耕土や床土があり、その下に包含層や遺構面がみられた。

旧石器時代の遺物は、No.36トレンチでサヌカイト製の石器や剝片が出土した。

縄文時代の遺物は、後期の土器片がNo.51トレンチで、石器がNo.12トレンチで出土した。

弥生時代の遺物は、中期から後期の土器片がNo.30・No.36・No.56・No.61トレンチから、サヌカイト製石鏃がNo.13トレンチから出土した。旧石器・縄文・弥生時代を通じて遺物の出土数はわずかであったが、近くに関連する遺構が存在する可能性を指摘できる。

古墳時代では、No.40トレンチやNo.57トレンチで遺構が検出された。いずれも後期のものであると考えられ、前者は須恵器大甕を据えた遺構、後者は群集土坑群であった。前者の大甕の中には田下駄の



- | | | | | | |
|-----------------|--------------|---------------|--------------|----------------|---------------------|
| 1. 吹田操車場遺跡 | 17. 吹田須恵器窯跡群 | 33. 上穂積山遺跡 | 49. 陶棺出土地点 | 65. 若竹町遺跡 | 81. 片山芝田遺跡 |
| 2. 吹田操車場遺跡 B 地点 | 18. 吹田32号窯跡 | 34. 地藏池南遺跡 | 50. 原東遺跡 | 66. 石蓮寺廃寺 | 82. 片山芝田遺跡 B 地点 |
| 3. 明和池遺跡 | 19. 白頭瓦窯跡 | 35. 茨木ゴルフ場内窯跡 | 51. 陶棺出土地点 | 67. 北条遺跡 | 83. 西の庄遺跡 |
| 4. 吉志部遺跡 | 20. 吉志部瓦窯跡 | 36. 弁天山遺跡 | 52. 円塚古墳 | 68. 小曾根遺跡 | 84. 西の庄遺跡 B 地点 |
| 5. 目依遺跡 | 21. 五反島遺跡 | 37. 松沢池北遺跡 | 53. 都呂須遺跡 | 69. 山田上遺跡 | 85. 正雀 1 丁目遺跡 |
| 6. 垂水遺跡 | 22. 蔵人遺跡 | 38. 松沢池池底遺跡 | 54. 昭和町遺跡 | 70. 王子遺跡 | 86. 東正雀遺跡 |
| 7. 垂水南遺跡 | 23. 高畑遺跡 | 39. 見付山遺跡 | 55. 昭和町 B 遺跡 | 71. 七尾東遺跡 | 87. 東正雀第 1 地点 |
| 8. 高城遺跡 | 24. 東奈良遺跡 | 40. 穂積城跡 | 56. 片山遺跡 | 72. 地徳寺遺跡 | 88. 東正雀第 2 地点 |
| 9. 高城 B 遺跡 | 25. 上寺山古墳 | 41. 松ヶ本北遺跡 | 57. 元町遺跡 | 73. 垂水中遺跡 B 地点 | 89. 庄屋 1 丁目第 1 地点 |
| 10. 中ノ坪遺跡 | 26. 穂積廃寺跡 | 42. 松ヶ本南遺跡 | 58. 吹田城跡 | 74. 泉遺跡 | 90. 千里丘 7 丁目第 1 地点 |
| 11. 高浜遺跡 | 27. 桜井谷古窯跡群 | 43. 中条小学校遺跡 | 59. 豊島郡糸里遺跡 | 75. 宮の前遺跡 | 91. 千里丘東 4 丁目第 1 地点 |
| 12. 七尾瓦窯跡 | 28. 郡遺跡 | 44. 青葉丘遺跡 | 60. 八雲遺跡 | 76. 宮の前遺跡 B 地点 | 92. 庄屋 2 丁目第 1 地点 |
| 13. 山田銅鑄出土地 | 29. 倍賀遺跡 | 45. 新芦屋瓦窯跡 | 61. 熊野田遺跡 | 77. 天道遺跡 | |
| 14. 吉志部古墳群 | 30. 春日遺跡 | 46. 新芦屋遺跡 | 62. 梅塚古墳跡 | 78. 金田遺跡 | |
| 15. 垂水西原古墳 | 31. 見付山古墳 | 47. 陶棺出土地点 | 63. 榎坂遺跡 | 79. 岸部中遺跡 | |
| 16. 新芦屋古墳 | 32. 上穂積神社西古墳 | 48. 峰前寺跡 | 64. 寺内遺跡 | 80. 岸部東遺跡 | |

図 4 周辺の遺跡分布図

一種「大足」が入っており、さらに大甕底部が穿孔されていたことから祭祀遺構である可能性が考えられる。遺物は、No.12トレンチから No.57トレンチにかけて広範囲で出土した。

飛鳥時代の遺構は、No.48トレンチで掘立柱建物跡が No.51トレンチと No.53トレンチで群集土坑群がそれぞれ検出された。この時代の遺物は、No.26トレンチから No.56トレンチまでの範囲で出土した。その遺物の中には白鳳期の平瓦も含まれていた。

奈良時代の遺構は、No.26トレンチで大型土坑が、No.51トレンチと No.56トレンチで掘立柱建物跡が検出された。この時代の遺物は、No.26トレンチから No.58トレンチまでの範囲で出土した。この時代の特筆すべき出土遺物として、奈良三彩小壺が挙げられる。

平安時代の遺構は、操車場内のほぼ全域で検出された。特に No.2トレンチや No.51トレンチでは、掘立柱建物跡が検出された。また、No.58トレンチでは井戸が検出され、その他では、耕作跡が検出されたトレンチもみられた。この時代の遺物は、遺構同様に No.2トレンチから No.61トレンチにかけての操車場内ほぼ全域で出土した。

中世の遺構は、No.11・No.13・No.16・No.28・No.29トレンチで掘立柱建物跡が検出された。古代よりも集落が拡大していることが判明した。また、No.33・No.36・No.41トレンチでは井戸が検出された。特に、No.41で検出された井戸の埋土中からは瓦器碗など多量の土器や大きなシジミやドブ貝の貝殻、曲物桶の底板、竹串、砥石、鹿角加工製品など多岐にわたる遺物が出土した。中世の遺物は、No.11トレンチから No.61トレンチにかけて出土した。

以上のように吹田操車場遺跡の既往調査では、試掘調査がおこなわれた。この調査により操車場内には旧石器から近世にいたる遺構及び遺物が比較的良好な形で検出された。そのうえこの遺跡は、時代はもとより遺構や遺物の種類がバラエティに富み、この地域の歴史を解明するうえで重要な位置を占めている遺跡であることが判明した。

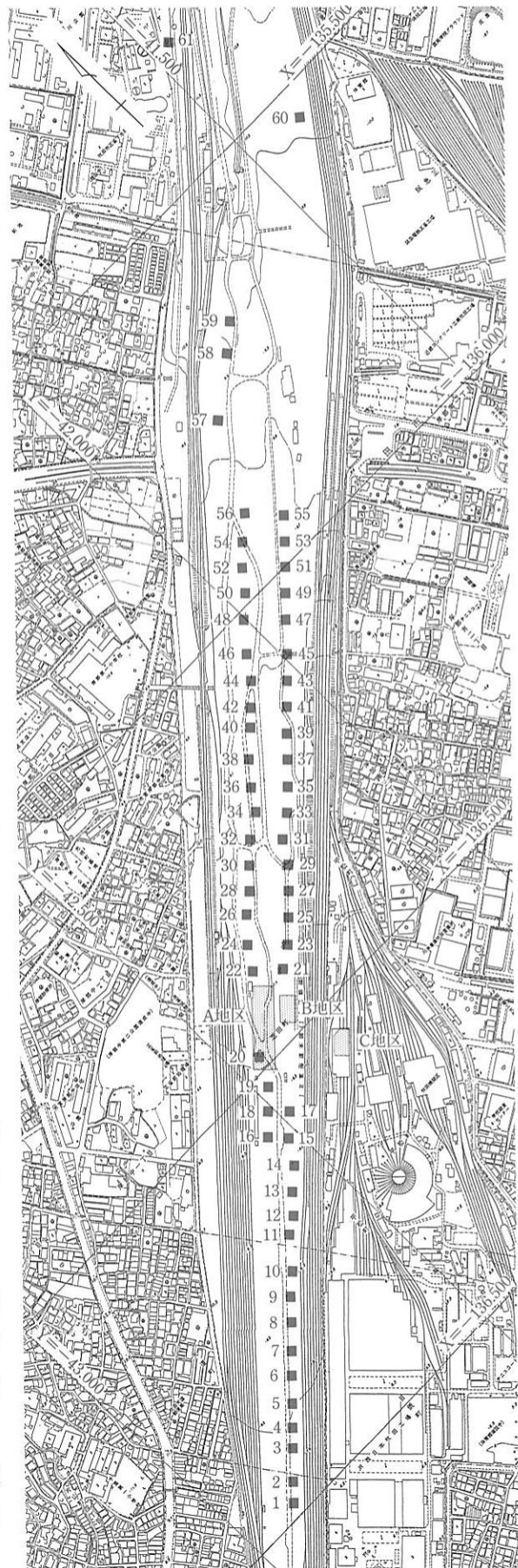


図5 試掘調査位置図 調査区配置図

第3節 歴史的環境 —文献資料から—

この節では、吹田地域の歴史を文献資料から概観する。ここで扱う「吹田地域」とは、律令期国郡里制下においては、摂津国嶋下郡穂積郷の南辺部、郷里制下においては嶋下郡吹田里近辺を指す。また、中世には現在の阪急吹田駅・JR吹田駅周辺が吹田村と呼称される地域にあたるが、調査区はこの地域よりも東の吉志部村（現吹田市吉志部地区・JR岸辺駅周辺）に近い。このため、中世以降の記述に際しては、吉志部地区に重点を置いた。

1. 水運の難所 浪速濟

現吹田市周辺に関する史料のうち、もっとも古い記録は『古事記』『日本書紀』（以下『記』『紀』と表記する）に記載された「なにわのわたり」に関するものである。『記』神武条の叙述には、瀬戸内海を東進してきた船団が、「浪速渡を経た」と記されている。また、『紀』神武天皇即位前紀の同記事は「難波碕に到る」とし、『紀』仁徳天皇三十年条には「濟（柏濟）」の地名が見える。「渡」「濟」はともに水をわたる意であり、地名としては陸路が河川を通過する地点を指す。また、「碕」は曲がった岸や長く続く水辺を指し、船舶の停泊所を表現する記述である。

弥生時代末期に形成された吹田砂堆と天満砂堆は、大阪湾と河内潟を隔絶する水門のように南北からのびていた。難波宮跡地から上町台地を北上して天満砂堆に至り、中津川・淀川・神崎川を隔てた対岸の吹田地域に渡る場所がおそらく浪速濟と呼ばれた場所であろう。

しかし、この難波濟は交通の難所であったと記録されている。『住吉大社神代記』には、神崎川を遡った三韓の船が難破したため、中津川を利用するようになったという記事が見られる。神崎川・淀川の河口付近は、水の流が速く、潮待ちをしながら船は往来したと考えられる。したがって『紀』神武天皇即位前紀にみえるような大型船が停泊する港湾施設は、さらに内湾側にあったと見る説が有力である。

いずれにせよ『記・紀』成立段階（8世紀）において、この一帯は、水陸ともに交通の要所として捉えられていたことに間違いはない。人馬や渡船の往来があったことも事実であろう。船着場のような施設が、今後発見される可能性はある。

2. 吹田の古代氏族

次に、実際に吹田地域に本拠を持っていた古代氏族について触れてみたい。『続日本紀』・『新選姓氏録』には垂水君・垂水史・大津造氏が、旧豊島郡垂水付近（現吹田市垂水町）に、吉志氏が、旧嶋下郡吉志部（現吹田市吉志部）に居住したと推定されている。

垂水君氏は『新選姓氏録』によると、豊城入彦命の後裔とされる在地氏族である。豊城入彦命の10世孫である阿利真公は、孝徳朝（白雉三年か？）の早魃の際に、垂水岡基から長柄豊碕宮まで高樋を繋いで、飲料水を供したという伝承をもつ。神崎川・中津川・堀江川を越えて約10kmの樋を直接繋ぐことは、現実的に無理である。しかし、何らかの中間行程を経て、飲料水を運搬することは可能であり、これは地域に根づいた在地勢力にしかできない業である。

垂水史氏は、上毛野朝臣と同祖であるという。上毛野朝臣は、垂水君と同じく豊城入彦命を元祖とするが、こちらは、渡来系氏族である。垂水史は、文筆に優れた渡来系氏族である田辺史氏と祖を同じくする。その田辺史氏の上表によると、彼らの祖は、北関東に本拠をもつ上毛野公竹合（竹葉瀬・多奇波世君）が将軍として朝鮮半島へ渡った際に現地人との間に儲けた子であるという。竹合は、帰国にあたって多くの渡来人を伴っており、垂水史氏・田辺史氏らの祖も、その際来日した氏族であったと考えられる。

また、大津造については、『続日本紀』大宝元年条に遣唐大通使（通訳者）大津造広人の名が見える。

広人は、住居地に因んで垂水君の姓を賜っており、前述の垂水君との関係が注目されるところである。しかし、広人が大通使であること、また同族に留学僧義法（還俗して陰陽頭大津連大浦）がいること等、大陸との関係が強い。大津の氏は、柿本人麻呂が挽歌の中で大浦を指した詞である「楽浪の志賀津」〔天數ふ大津〕を見る限り、滋賀県の大津に求められる。大津造は、本来志賀の漢人らと総称された渡来人氏族のひとつであり、摂津国垂水に起居した一族であったと推測されるのである。

吉志氏は、『紀』の安康～天武条にかけて頻出する氏族である。単に吉士を名乗る者と難波吉士・日鷹吉士のように氏+吉士の名で記載される者がある。「吉志」とは、「吉士」「吉師」「吉使」とも書くが、本来は古代朝鮮における地方首長を意味する語で、新羅では官位十七等の第十四位にあたる。わが国の吉士のルーツが、新羅本国に求められるのか否かはともかく、彼らは大和政権の構成氏族として、もっぱら対外交渉に関する職務に携わったようである。なかでも、難波吉士赤鳩が、越の国に到着した高句麗使のために船を難波津から遡らせ、近江まで迎えたという記事（『紀』欽明三十一年条）や、唐使の高表仁が難波に到着した際に、難波吉使小槻等が「導者」となって出迎え、唐船を客館前まで導いたとする記述（『紀』舒明四年条）は、かれらが「なにわのわたり」の水脈筋を熟知し、航海術に長けた集団であったことを示している。

なお、吉士に関する記事は一氏族にしては多いが、天武十年に着手された原『紀』ともいうべき歴史書の編纂に、同族の難波忌寸大形（日下部吉士大形）が携わっており、家伝の挿入が比較的容易な立場であったことがわかる。

現吹田市吉志部地区は、上記の難波吉士氏の部民が居住した地であると推測されている。部民とは、氏族に属し、その職務を実際に遂行する技能集団である。日頃は農業に従事するが、有事の際には、吉士氏統率の下、難波の荒海に船を漕ぎ出すべき役目を負っていた。吉志部の地は、河川に程近い耕作地帯であり、彼らの居住地としては適当かと思われる。尚、難波吉志氏自身の本拠地は対岸（現大阪市西成区・東成区周辺）であったと推測されている。

いずれにせよ、吹田地域に居住した古代氏族は、渡来系の色彩が濃い。文献記録には残っていないが、確実にこの地に起居した痕跡を残す「須恵器製作集団」の存在もそのひとつであることを掲げておきたい。

3. 行基の開削「次田堀川」

「すいた」の地名がはじめて文献上にあらわれるのは、『行基年譜』天平十三年記においてである。ここに「嶋下郡次田里」および「次田堀川」という記載がある。今のところ、Tsugita → Tsuita → Suita という段階を経て転訛したとする説が有力である。語義は二次的な田というような、不良耕作地やあまり上等ではない水田地に対する名称に由来すると思われる。

『行基年譜』は奈良時代の僧行基が造営した施設について、それぞれ名称と位置を記したものである。これによると、「次田堀川」は長さ700丈（2.12km）×幅20丈（60.6m）×深さ6尺（1.8m）を測り、水田開発の用水路というよりも、むしろ交通運輸を担う運河というべき規模を持つ。次田堀川の位置については、かねてから吹田村域の神崎川をあてる説が唱えられていたが、現在では逆川跡であるとする説が有力である。逆川跡は、旧西成郡淡路村引江（現大阪市東淀川区菅原）に位置した河跡で、かつては長さ2.1mにわたって淀川と神崎川を結んでいた。延宝七年（1679）の『中島大水道古図』には堤防を伴う河川として描かれているが、明治十八年（1886）の仮製測量地図には、その痕跡が凹地として残るのみとなり、市街化が進んだ現在では、平坦化されて確認することはできない。古義の「すいた」には、後

世の吹田村の南に広がる湿地も含まれており、有力視される学説である。

この堀川の開削により、嶋上郡衙（高槻市）から嶋下郡衙（茨木市）を経て、難波宮へと繋がる輸送ルートが確立され、吹田の地はその中継地点として、発展を見せることとなる。古来より河川の氾濫に脅かされてきた吹田地域は、逆に水陸交通の経由地という流通メリットを得ることとなったのである。

4. 開発の歴史 荘園と牧

奈良時代以前の吹田地域は、氾濫原と湿地が大半で、かろうじて千里丘陵の裾野に耕作地が営まれる程度であったが、天平十五年（743）、墾田永年私財法が施行された頃を契機に開発が進められ、多くの荘園が設置されることとなった。

『東寺百合文書』民部省符案によれば、桓武天皇の第五皇女布施内親王が所有した荘園の中に「摂津国垂水庄」があり、皇女没後、東寺へ施入されたとある。垂水南遺跡（吹田市垂水町）では、「垂庄」と記された墨書土器が出土しており、平安時代の初期には「垂水庄」が実在したことを裏付ける証拠となった。

さらに『醍醐雑事記』によれば、吉志部地区にも「吉志庄」と称される荘園があったことがわかっている。承平七年（937）、藤原式家の基経から醍醐天皇妃藤原穩子へ沽却されたが、後に醍醐寺の末寺宝塔院に寄進された。これには

「嶋下郡内吉志庄 田一七町余、池三所、同郡田外に在り」と記されており、吉志部村の郊外にある荒野を開墾した水田であったことがわかる。吉志部郊外の荒野といえ、おのずから村の西南地域が推定され、今回の調査地点も該当する可能性がある。

鎌倉時代に至り、幕府は全国に守護を設置したが、摂津国では王朝荘園体制が依然として続けられ、その勢力は強大であった。西摂津地域には、後白河院の知行国や上皇および后妃の所領が多く、幕府は地頭設置策をも後退させざるをえなかった。平安時代末期には79箇所が荘園として開発されていたが、その9割が鎌倉時代も存続し、南北朝時代にいたっても約7割が残存した。

また、吹田垂水地区周辺に

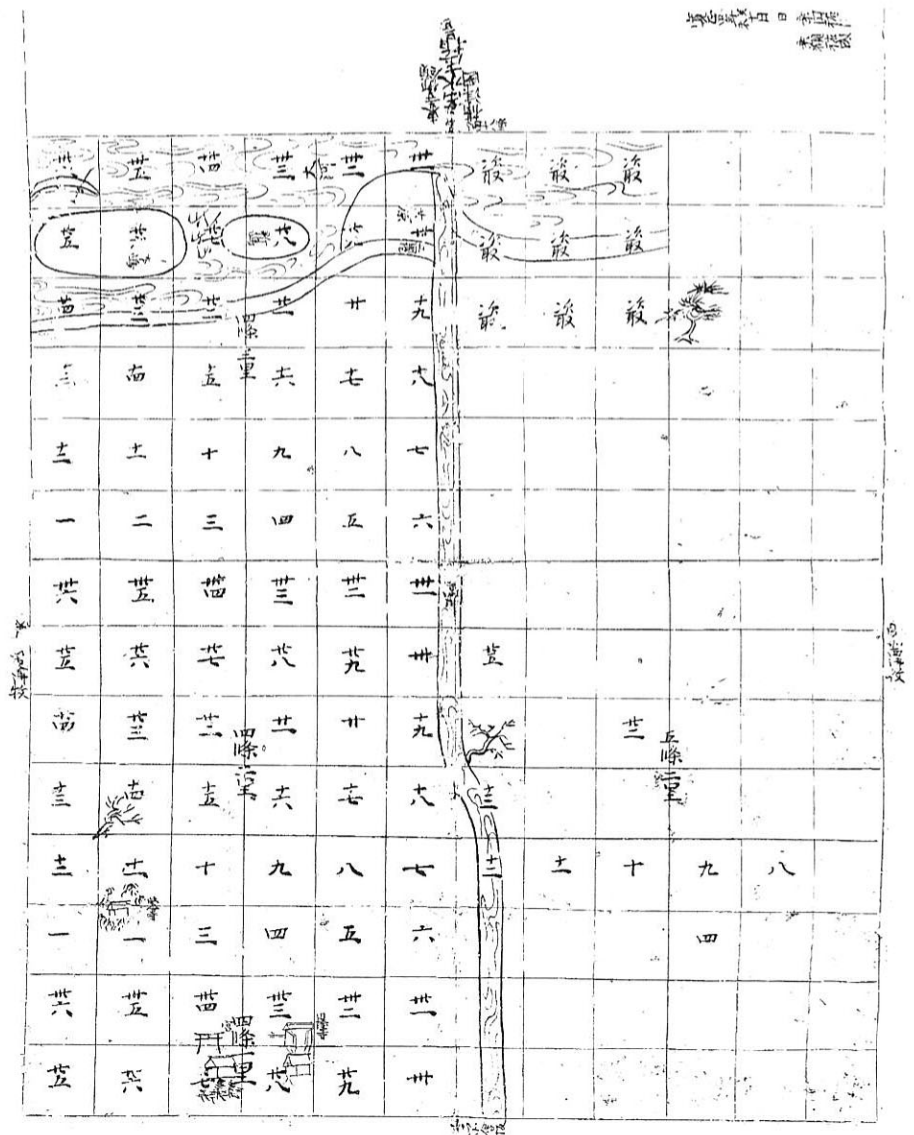


図6 垂水庄指図（寛正四年）

おいては、早くから放牧が行われていたことが、記録されている。もっとも古い記録は『日本書紀』安閑二年三月条に見える、難波の大隅嶋（現大阪市東淀川区大隅に比定）の牛牧である。安閑天皇の在位については解釈に諸説があり、この記事の真偽も問われるところであるが、『続日本紀』靈龜十年（716）に大隅嶋の二牧を廃止する記事があり、経緯はともかく、大隅嶋に牧が営まれていたことは事実であろう。

律令制下においては、兵馬供給のため、全国に国営の牧が設置された。中でも淀川北岸には右馬寮鳥飼牧、典薬寮味原牧など著名な牧が多く、これらは地方から集められた馬を一時的に放牧し、必要に応じて都へと供給するための施設であった。この国営牧は律令制度の解体に伴って10世紀には衰退し、かわって貴族が経営する私牧が増加する。吹田垂水牧は摂関家の経営する私牧で、はじめは嶋下郡から豊島郡にかけての不耕作地帯を利用したものであった。しかし、摂関家の隆盛とともに近辺の耕作地取り込みを行なって、牧の荘園化が進められた。『勝尾寺文書』『春日神社文書』等によると、吉志部地区は垂水東牧の範疇に含まれており、調査区南の安威川流域一帯が、これに相当すると思われる。

5. 在地領主の台頭と住民

牧や荘園の発達、在地役人の権力増大を促す。しかし、中世にいたると、次第に力をつけてきた住民や在地土豪らが、本所からの支配を逃れ自立する傾向を示し始めた。

『摂津国垂水東牧吉志部村定使・藤井貞宗重申状』には、長寛二年（1164）におこった「竹池事件」の顛末と、これに関わった在地住民らの記述がある。竹池は、摂関家より任命された村役人・藤井貞宗が構築した用水池で、吉志部村郊外の熊里にあったとされる。貞宗は、竹池の完成とともに周囲の開拓に努めたが、垂水東牧の在地役人である山田助俊・吹田成俊らが、裁可を得ずに熊里の原野開拓に竹池の水を引き、開発を行なった。貞宗は用水の使用に関して年貢米の賦課を求めたが、助俊らはこれを拒み、結果武力行使による争いにいたったようである。貞宗は摂関家の荘園を拡大することで、一定使としての権力強化を図ったが、助俊・成俊らは自己の開発田の荘園化を拒み、土地と農民の直接支配を図る、いわば在地領主へと成長する階層であったと言える。

やがて源平の動乱・南北朝時代を経るにいたって摂関家は衰退し、その支配権をめぐる攻防が相次いだ。室町時代の吹田地域では、先祖以来の垂水庄下司職を主張する日下部氏と直接支配を望む東寺僧、また台頭した土豪らが互いに支配権を主張し、有力農民や悪党らを巻き込んだ騒動が幾度も勃発した。文和三年（1354）、吹田三郎左衛門尉が垂水庄の田畑を横領し、幕府はこれを芥河真上将監に制圧させた。しかし、今度は芥河真上氏同族の芥河貞継が横領をおこなったため、幕府は守護赤松光範に命じてこれを制圧させたが、芥河氏は吹田氏と通じてさらに庄内への乱入を繰り返した。この混乱に疲弊した農民らは、結束して貞継の乱暴を訴え、芥河氏の庄内退去に成功するも、今度は守護代の奈良入道が庄の横領を企て、私腹を肥やした。

これら一連の横領事件にからむ人物は、すべて在地の豪族である。吹田氏・芥河氏・奈良氏は各々吹田・高槻・茨木に本拠を持つ土豪であり、それぞれが幕府や寺社・貴族に仕えながらも相互に交流し、権力を拡充した様相がうかがえる。

なお、吹田氏については、その後の記録が残る。戦国時代末期、摂津国は足利義昭・織田信長軍が統治したが、吹田氏は摂津3人衆の一人・池田勝正の配下にあった。勝正は旧三好勢に通じる配下によって追放され、勝正方であった吹田氏は一旦城を捨てたが、伊丹城主荒木村重と婚姻関係を結んで吹田城に復帰し、信長軍との戦いに参戦した。『言継卿記』には吹田氏がこの戦いに敗れて吹田伊賀守時通が処刑されたことが記されている。

6. 村の発展と石高の推移

動乱の中世を経て迎えた近世、旧郷は急速に解体されて「村」の形成が進んだ。村は農業開発を行なう末端組織として結束し、農作物生産高の向上を推進する動力となった。文献史料からは、近世における旧嶋下郡の村数と石高を追うことができる。

『摂津一国高御改帳』によると、寛永～正保期（1624～48）の石高は52,426石余（村数60）であるが、『元禄郷帳（元禄期・1688～1704）』には52,680石余（村数98）となり、石高・村数ともに増加する。『摂河泉石高帳（享保二十年・1735）』では56,079石余、『天保郷帳（天保期・1830～1844）』では、56,801石余（村数99）を数えるまでとなる（グラフ1）。隣接する嶋上郡の石高が200年間でわずか96石増の伸びにとどまっているのに対して、嶋下郡は4,375石余の増加が記録されている。

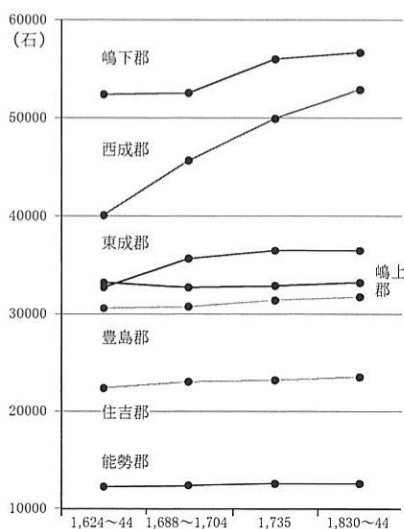
この理由として、嶋下郡南部の新田開発の成功が掲げられる。郡南の安威川・神崎川流域一帯は、低湿地であり、季節によっては河川の氾濫原となる不耕作地帯であったが、享保五年（1720）、幕府は新田開発を希望する者を募り、これを許可する御触を公布した。

はじめに名乗りをあげたのは町人伏見屋嘉助・坂本屋久兵衛の両者で、地代を上納して請人となった。彼らは地元農民を雇い入れて開墾を行ったため、この地内には百姓家はなく、水田のみが広がっていたと記録されている。この時期には、悪水を対岸へと導く「伏越樋」や、排水の逆流をふせぐ「鯨尾堤」など、これまでにはなかった土木施設が考案され、各所に設置されたようである。

また、嶋下郡同様、飛躍的に石高を伸ばした郡に、西成郡（現大阪市西成区）がある。西成郡は、淀川河口付近に位置する郡で、古代の条里はほとんど残っていないことから、不耕作地が大半を占めていたと思われる。元禄年間に幕府は、大阪湾河口デルタ地帯における新田開発の許可を公布し、結果多くの町人請負新田（川口新田）が開発された。その方法は、内陸から徐々に潮除け堤防を設置し、用水路を引いて水田地化していくもので、以後有利な新田経営が展開されていった。

嶋下郡吉志部村の村人も、神崎川の附洲の開発に参画したと記録されている。しかし、上記の請負耕作は、富農と多くの小作人を生み出す結果となった。

以上、地理学・考古学・文献史料学の各分野から吹田地域の歴史的背景を調査し、記述した。結果、今回の調査では、中世以降の遺構面が良好に検出されることが予測され、またこれ以前の遺構および遺物の出土が期待された。



グラフ1 近世摂津国における石高の推移

【参考文献】

- 1 吹田市史編纂委員会「吹田市史」第1巻、1990
- 2 吹田市史編纂委員会「吹田市史」第2巻、1975
- 3 吹田市総務部市史編纂室編「郷土吹田の歴史」1983
- 4 吹田市立博物館「東寺領垂水庄～悪党の時代～」2001（平成13年度特別展資料）

図6は参考文献4 P22よりコピー、一部加筆

第2章 調査の経過と方法

第1節 調査に至る経過

吹田操車場遺跡は、吹田市芝田町・岸辺中町地内を中心に広がる遺跡である。

1967年、操車場内の道路・水路整備工事に伴い、瓦器を主体とした中世遺物包含層が吹田市教育委員会によって確認された。しかし、遺跡の大部分は旧国鉄所有地内であったため、今日まで本格的な調査は行われず、その実態は明らかではなかった。

1998年、日本国有鉄道清算事業団近畿支社（当時）は、梅田貨物駅（大阪市北区内）の機能の約2分の1を旧国鉄吹田操車場跡地内へ移転することを計画した。この計画に伴う埋蔵文化財の取扱について、大阪府教育委員会文化財保護課と日本国有鉄道清算事業団近畿支社（当時）との協議の結果、操車場跡地内全域を対象として試掘調査を行うことで合意し、財団法人大阪府文化財調査研究センターが試掘調査を実施することとなった。

試掘調査は、1998年10月から12月にかけて、調査区を61箇所設定して行った。試掘調査の結果、場内は大正時代操車場建設時に大規模な盛り土が行われており、地下の埋蔵文化財はほとんどそこなわれておらず、ほぼ全域にわたって古墳時代から近代にいたるまでの遺構面が良好に保存されていることが明らかになった。古墳時代の土坑や埋甕・7世紀代の建物群・奈良時代の遺物が集中して出土する区域、鎌倉時代の井戸が確認されるなど、広範囲において各時期の多様な遺跡のありかたの一端が明らかになった。また、遺跡の範囲は操車場全域に拡大し、摂津市の明和池遺跡に連続することが明らかになった。

これらの試掘調査結果をふまえ、場内に貨物駅の駅舎および倉庫建設を計画していた日本鉄道建設公団国鉄清算事業本部西日本支社は、大阪府教育委員会文化財保護課と協議を行い、その予定地約4200m²を対象に、2000年3月から9月まで発掘調査を実施した（A・B地区）。

A・B地区の調査と並行して、日本鉄道建設公団国鉄清算事業本部西日本支社は吹田操車場遺跡の南に接する地点で貨車区の改良工事を実施することとなり、文化財保護課と協議した結果、建て替え対象となった旧貨車庫3号床面のコンクリート撤去工事の後で試掘調査を行うこととした。文化財保護課による試掘調査の結果、先に調査したA・B地区と同様の土層の堆積状況がみられ、中世遺物が包含されていることが確認された。

この結果をうけて、日本鉄道建設公団国鉄清算事業本部西日本支社から文化財保護法第57条の6に基づく遺跡発見通知が出され、吹田操車場遺跡B地点として周知されることとなった。また発掘調査は財団法人大阪府文化財調査研究センターが引き続き担当することとなり、同年10月から2001年1月まで現地発掘調査を実施した（C地区）。

第2節 発掘調査の方法

1. 調査区の呼称

調査は倉庫部分をA地区、駅舎部分をB地区、貨車庫部分をC地区として実施した。

A地区においては、調査予定地の南西寄りを斜めに横切る構内道路があるため、この北東部分を先行して調査することとし、これを1A区、残る南西部を2A区と呼称した。

1 A 区においては機械掘削途中で水道管が埋設されていることが判明したため、これを避けて残る部分について機械掘削に着手した。調査は上層から操車場軌道路床などの層、操車場造成時の盛り土、操車場直前の耕作土を機械掘削で除去した後、人力掘削によって第1面の調査に着手した。調査の結果、第1面は近世から近代の水田面であることが判明したので、第1面の調査はこの部分(1 A 西・1 A 東)のみとし、水道管移設後1 A 区全体を第2面まで機械掘削し、以後人力掘削によって調査を行った。

2 A 区においては、当初1 A 区の調査終了後、これを埋め戻したのち着手する計画であったが、2 A 区で現地説明会を実施し成果を公表する際に、1 A 区についても埋め戻さずに公開することとし、構内道路の切り替え部分のみ埋め戻して道路を設置し、2 A 区の調査を行った。機械掘削土層は1 A 区と同様である。

B 地区の調査は1 A 区と並行して開始し、ほぼ並行して調査を実施し、2 A 区と同時に終了した。機械掘削土層は1 A 区と同様である。

C 地区は、貨車庫床のコンクリート撤去後の試掘調査によって遺物包含層の存在が明らかになり、発掘調査を実施することとなった。発掘調査は貨車庫撤去工事が完了した後着手した。本調査区は貨車庫建設時の攪乱および、撤去工事による攪乱部分が大きな面積を占めていた。従って、攪乱部分を機械で掘削し、わずかに基本層序の観察できた部分は近世耕作土を含めて人力掘削で調査をおこなった。

2. 調査区内の区画割

各調査区内は国家座標第VI系を基準として、図7のように区画を設定し、遺物の取り上げや調査時の測量等の基準とした。

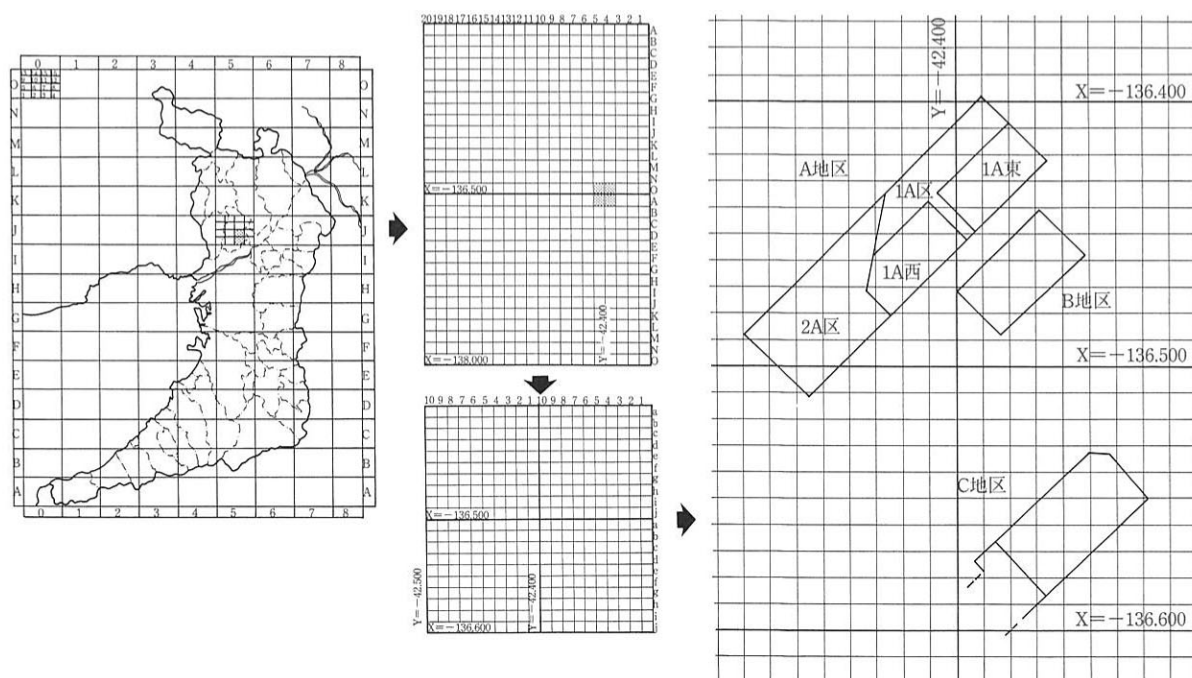


図7 調査区内地区割図

第3章 基本層序と遺構面

第1節 基本層序と遺構面

今回の発掘調査においては、A地区およびB地区を同時並行して実施し、C地区はA・B地区終了後着手した。A・B地区とはほぼ隣接するものの、C地区は東海道線を挟んで位置的にも少し離れていたため、両者での共通した層序の名称は付されていない。従って、各調査区での層序と遺構面の記述は、それぞれの調査区での呼称そのまま記述している。

ここでは各調査区での層序と遺構面の基本的な対応関係を述べる。

大きく見て、調査区の土層は以下の4層に区別できる。

第I層 盛土。操車場・機関区造成時（大正8年から12年）の盛土で厚さ1～2 m。吹田市片山町2丁目付近の千里丘陵を掘削して運搬された大阪層群のシルトないし砂礫と、その上層の厚さ30センチ程度の線路敷きのバラス。

第II層 ほぼ水平に堆積した耕作土。A・B地区では1～4層が、C地区では1～5層がこれに該当する。各層の層厚は15～20cm程度で、全体では、厚い部分で70cm（C地区北東部）、薄い部分はIV層直上に現代耕土が堆積する部分もあり（2 A区西端部）この部分では層厚は30cm程度である。III層上に堆積した区域では灰色ないしオリーブ灰色を呈した粘質土でややグライ化している。IV層上に堆積した部分は地盤が高いため乾燥しており、

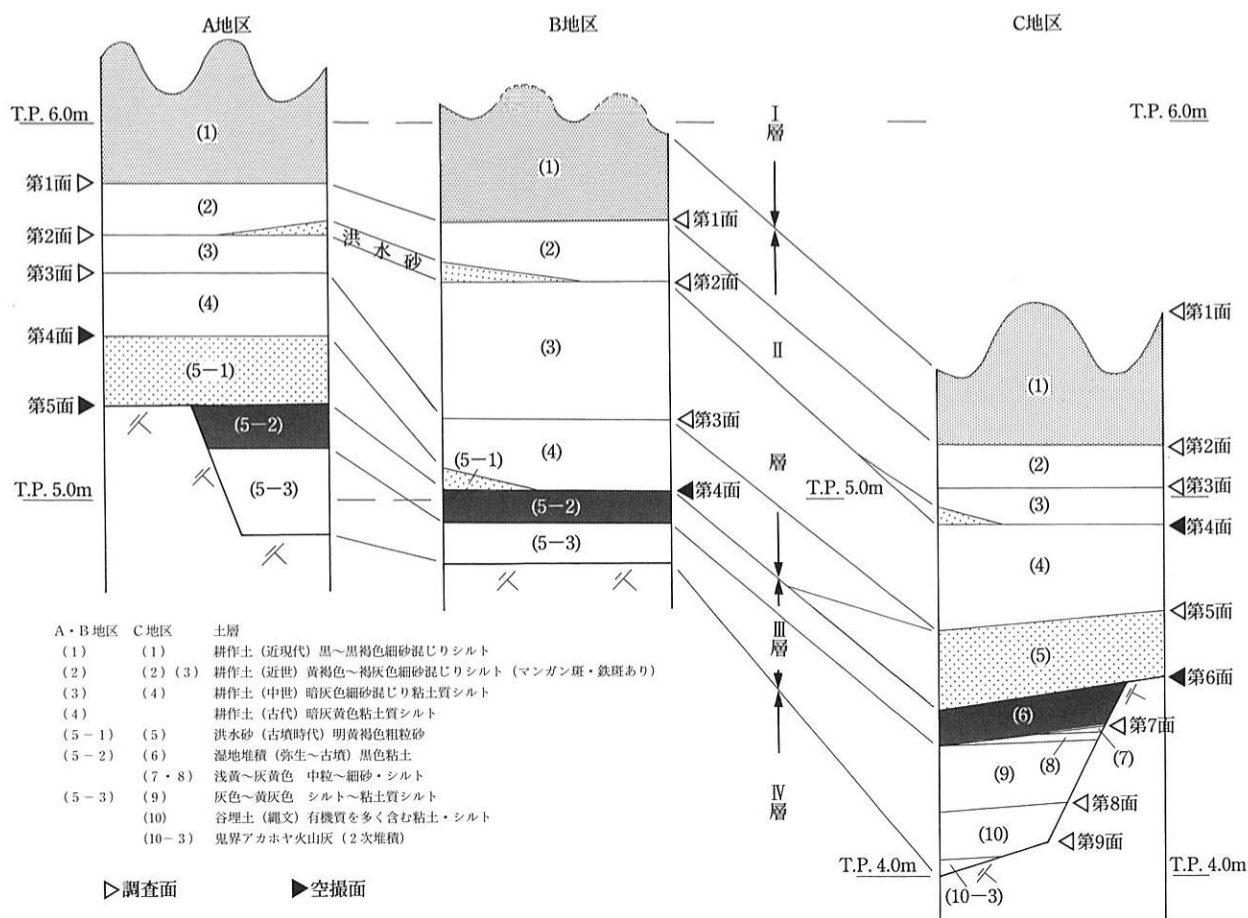


図8 基本層序模式図

褐色が強く鉄斑がみられる。各面上面では条里地割にそった畦畔や耕作面の段差、すき溝などの耕作痕跡が検出されている。A 地区 3 層上面には自然堆積の砂層が薄く残存している部分があり、人や牛馬の足跡が検出されている。同様の砂層は B・C 地区でもわずかに検出されており、層序の対応関係を示す鍵層となっている。

第Ⅲ層 第Ⅳ層の地山層が谷状に窪んだ部分に堆積した褐色ないし黒色の粘土層。この層の最下層（地山直上）には部分的に鬼界アカホヤ火山灰層の堆積（降灰時にごく近い時期の二次堆積）が確認されている。A 地区ではこの層の最上層に粗砂層が堆積している部分がある。A・B 地区では 5-1・2・3 層が、C 地区では 6～10 層がこれに該当する。第Ⅲ層の堆積範囲は、A 地区北西辺のほぼ中央部を中心として狭い扇形に南東方向に広がっており、A 地区南東辺では幅 30m 程度、B 地区の全域を含み込み、C 地区北東部分約 20 m に及ぶ。C 地区での谷肩は調査区にほぼ並行でほぼ北西-南東方向である。Ⅲ層の厚さは A 地区の北西部分で 30cm 程度、最も厚い C 地区北東部分で 70cm 程度である。花粉分析によれば、不安定に乾湿を繰り返す環境のもとに堆積した腐植の多い土壌の環境と推測されている。

第Ⅲ層は、C トレンチでは花粉珪藻分析及び火山灰分析・谷埋土中の樹木の 14C 年代測定によって、縄文時代前期の谷地形とそれを浸食して弥生時代に形成された新しい谷に堆積した層に分離できる。（第 7 章参照）

第Ⅳ層 シルトおよび細砂ないし粗砂の無遺物自然堆積層（地山）。1 A 区井戸 10 の断ち割りに伴う北東-南西方向の断面観察では、上層から黄灰色シルト（層厚 35cm）、灰色シルト（60 cm）、緑灰色粘土（30cm）、緑灰色中～粗砂（40cm）、緑灰色細砂（10cm）、オリーブ灰色粘土（10cm）、灰色シルト質粘土（25cm）、灰オリーブ色粘土（80cm 以上、T.P. 2 m まで掘削）が、ほぼ水平に堆積していた。各層では明確なラミナは観察できなかった。一方これに直交する北西-南東方向の断面では、対応する各層が北西（千里丘陵）方向に向かって 10 度程度の傾斜で下がっている。この堆積を切って不整合に、上層からシルト、下層になるにしたがって徐々に粒径が大きくなり深さ 1 m 程度で粗砂、その下層は 3 m 程度の単位のカロスラミナが観察される粗砂・シルトの互層が堆積している。Ⅳ層上面は後世の耕作等による削平をうけて平坦になっている部分と、谷状の凹地をなしている部分がある。平坦化された部分では、北西が高く、南東が低くなっており、2 A 区北西では 6.2m、最も低い C 地区北東部分で 4.8m を計る。C 地区の谷部分では、このⅣ層の上面に亀甲状の乾痕が観察され、この亀裂にⅢ層の黒色粘土層が侵入堆積している状態が観察された。

第Ⅳ層の主要な供給源は「古淀川」と考えられるが、これに加えて千里丘陵からの侵食と堆積が重なって形成された地層であると考えられる。

第 2 節 A 地区・B 地区の基本層序

今回の調査対象である遺物包含層は、上記の第Ⅱ層・第Ⅲ層にあたる。A 地区では、各層の特性から、第Ⅱ層を 4 層に細分し、さらに部分的に枝番を付した。また、B 地区の層序は、基本的に A 地区に類似するため、これに準じた付番をおこなった。

また、A 地区および B 地区は、中央を横断する谷状地形の影響を大きくうけているため、もっとも低い地点（A 地区では中央部・B 地区では北東端）ともっとも高い地点（A 地区・B 地区ともに南西端）とでは、層序の堆積状況に差異があった。従って、同じ層でも、場所によって色調や土質が若干異なる。

第 1 層 近・現代の耕作土と、その下に薄く堆積する床土を指す。耕作土は、2.5Y3/2黒褐色シルト層で、ほぼ均質である。畝状に盛られていることから畑作が営まれていたと解される。床土は、2.5Y4/2暗灰黄色細流砂まじりのシルトである。部分的に 2～4 cm 程度の堆積が認められた。遺物は染付片が多く見られた。今回の調査に付随しておこなった花粉分析では、第 1 層から多量のアブラナ科花粉が検出された。また、明治14年の『農事会開設調』によると、吹田地域で栽培されていた商業農産物の割合は、米55.3%・麦30.2%・菜種10.4%・木綿2.9%・大豆1.1%で、菜種が麦に次ぐ主要な商品作物であったことが記録されている。（第 7 章参照）

第 2 層 近世～近代の耕作土である。2.5Y5/3黄褐色砂質シルトで、マンガン粒を多く含む。A 地区・B 地区のほぼ全域に堆積しており、厚さは15～20cm を測る。よく攪拌された水田耕作土である。主に染付や陶磁器・瓦など17世紀以降の所産とみられる遺物を包含していた。

1 A 地区の中央南辺および B 地区の北西隅には、2 層の下に薄い灰白色の粗粒砂の堆積が認められた。これは、近世におこった洪水砂の流入によるものであると思われる。

第 3 層 中世の耕作土層である。1 A 区では10cm 前後の厚さで残存していたが、2 A 地区では削平され、ほとんど確認できなかった。また、B 地区では20～30cm の厚さで、ほぼ均一に堆積していた。第 2 層に比べて固くしまっており、水稻耕作が営まれていたと推測される。瓦器・土師器・陶器など、主に13・14世紀所産の遺物が多く出土した。

A 地区の第 3 層は、2.5Y5/2暗灰黄色粘土質シルトで、鉄斑の沈着が各所に見られた。B 地区では10YR5/4にぶい黄褐色粘土質シルトである上層（3-1層）と、2.5Y5/3黄褐色粘土質シルトである下層（3-2層）とに細分される。3-2層は低地である東半部にのみ堆積する。

第 4 層 古墳時代後期から古代にかけて堆積した包含層で、さらに 3 層に細分される。

最上層4-1層は、10YR4/1褐灰色粗砂まじりシルトである。これは平安時代に耕作された耕作土であり、水田が営まれた1A 区にのみ堆積していた。土師器や黒色土器を多く包含しており、10・11世紀初頭の製品が大半を占める。

中位の4-2層は、2.5Y4/1黄灰色シルトで、第4-1層よりも粘質が強く径 1 cm 未満の礫が多く混入する。2 A 区と 1 A 区の西南部のみに、5～10cm の厚さで堆積する。古墳時代から古代の遺物を多く包含するが、特に古墳時代後期から飛鳥・奈良時代の須恵器の出土が目立った。

最下層の4-3層は、10YR5/2灰黄褐色粘土質シルトで、1 A 区の中央から北東にかけての低地と B 地区の東半部に10cm 前後の厚さで堆積する。遺物の出土は少なかった。

第 5 層 谷状地跡に堆積した層で、前節の第Ⅲ層に相当する。調査時には、さらに 3 層に細分した。現在認識している限りでは、中位の5-2層までが遺物包含層である。

最上位5-1層は、洪水によって流入した砂で構成される層である。2.5Y6/1～6/6灰白色

～黄灰色の粗粒砂が、ラミナを形成しながら堆積し、もっとも厚い1 A 区中央では30cmを測る。調査区両端へむかって徐々に薄くなり、2 A 地区では削平されて、遺構内の埋土としてのみ残存していた。B 地区では東半部に3～5 cm 程度の厚さで部分的に堆積していた。遺物は古墳時代前期以前の土器や石器が、わずかに出土する。このため、上記の洪水は古墳時代前期から中期にかけておこったと推測される。

次の5-2層は、2.5Y2/1黒～黒褐色を呈する粘土である。1 A 区中央と B 地区北東端の低地でのみ確認された。もっとも低い地点では、厚さ40cmを測る。谷状地跡の窪地が湿地化して形成された層で、葦類等の植物遺体をわずかに包含する。5-2層からの遺物の出土はなかったが、下面から弥生土器とサヌカイト切片が出土した。

最下層の5-3層は、5Y7/1～5/1灰白色～灰色の均質な粘土質シルトである。上位は5-2層の影響を受け、濃灰色を呈する。A 地区北辺では20cm 程度の堆積であるが、B 地区では5-2層と混じりあい、40cm の厚さを測る。遺物の出土はなかった。

第3節 C 地区の基本層序

C 地区最終面の地形は調査区の南西側が平坦であり、調査区の北東側に谷状地形が広がっていた。その谷状地形部分に第6層以下第10層までが堆積し、谷が埋没し地面が平坦化した後、調査区全体にわたって耕作土層（第1層から第5層）がほぼ水平に堆積していた。

- 第1層 10Y2/1黒色の細砂～シルトである。旧耕作土層である。先述の盛土層により覆われており、大正時代までの耕作土層である。
- 第2層 10YR5/1褐灰色の粘土混じり中砂～細砂である。耕作土層である。鉄分を多く含んでいる。
- 第3層 5Y6/1灰色の粘土混じり中砂～シルトである。耕作土層である。下層の第4層を攪拌するため、第4層をブロック状に含むのが特徴である。鉄分を多く含む。第3層と第4層の間には調査区の北東端で砂が堆積していた。砂層は2.5Y7/3浅黄色の中砂～細砂である。
- 第4層 第4層は上下2層に分層できる。上層の第4-1層は2.5Y6/1黄灰色の中砂混じり粘土シルトである。耕作土層である。第3層よりも粘質であり、鉄分を多く含む。
下層の第4-2層は2.5Y6/1黄灰色の細砂混じりシルトである。耕作土層である。調査区の北東端に堆積する。下に位置する谷状地形の影響を受けて、部分的に堆積したものと考えられる。下層の第5層を直接攪拌するため、第4-1層より粘質である。
- 第5層 2.5Y4/1黄灰色の細砂混じりシルトである。第5層は調査区の北東端に堆積する。調査区の北東部分で、第6層との間に洪水砂が覆ったと考えられ、その砂を攪拌しているため、やや砂っぽくなっている。
- 第6層 2.5Y2/1黒色のシルトである。谷状地形部分に堆積する。
- 第7層 2.5Y7/3浅黄色の中砂～細砂である。
- 第8層 2.5Y6/2灰黄色シルトである。第7層・第8層ともに第6層と第9層に挟まれる層である。調査区の東端部分で検出した。
- 第9層 第9層は、計4層に細分できる。第9-1層は、2.5Y5/1黄灰色の細砂～シルトである。谷状地形部分全体に堆積する。

第9-2層は5Y7/1灰白色の細砂～シルトである。検出当初は谷状地形部分全体に堆積すると考えていたが、弥生時代の新しい谷の堆積層と分離される。(第6章第1節 図56 (9-2層) (9-3層))

第9-3層は2.5Y5/1黄灰色のシルトである。第9-1層に近い土層を示す。谷状地形部分に堆積するが第9-2層と同様に新旧に分けられる。

第9-4層は10Y4/1灰色のシルト～中砂である。上層の有機質が染み込み、土壌化の影響を受けたようである。谷状地形部分に堆積する。

第10層 第10層は4層に分層でき、さらに第10-1層は2層に細分層される。

第10-1-1層は5Y4/1灰色のシルトである。谷状地形部分に堆積する。

第10-1-2層は10Y4/1灰色の細砂～中砂である。上下層は土壌化しているが、この層自体は土壌化していない。

第10-2層は5Y3/1オリーブの黒色シルトである。有機質を含む土層である。

第10-3層は7.5Y7/2灰白色の粗砂～中砂である。火山灰層の2次堆積と考えられ、火山ガラスを含む。火山灰分析の結果、鬼界アカホヤ火山灰層と特定された。7300年前頃(cal. B.P.)に降灰したのと考えられる。吹田市の既往の調査(賀納章雄・堀口健二・海辺博史1999『目俵遺跡』吹田市教育委員会)からも鬼界アカホヤ火山灰層が検出されている。

第10-4層は5Y7/1灰白色細砂～シルトである。地山に近い感じを受けるが、上層の有機質が染み込んだという感じである。

地山は5Y7/2灰白色細砂混じりシルトである。高まったところでは、平面で亀甲状に模様がみられ、当時の地面が乾燥していたことが窺える。

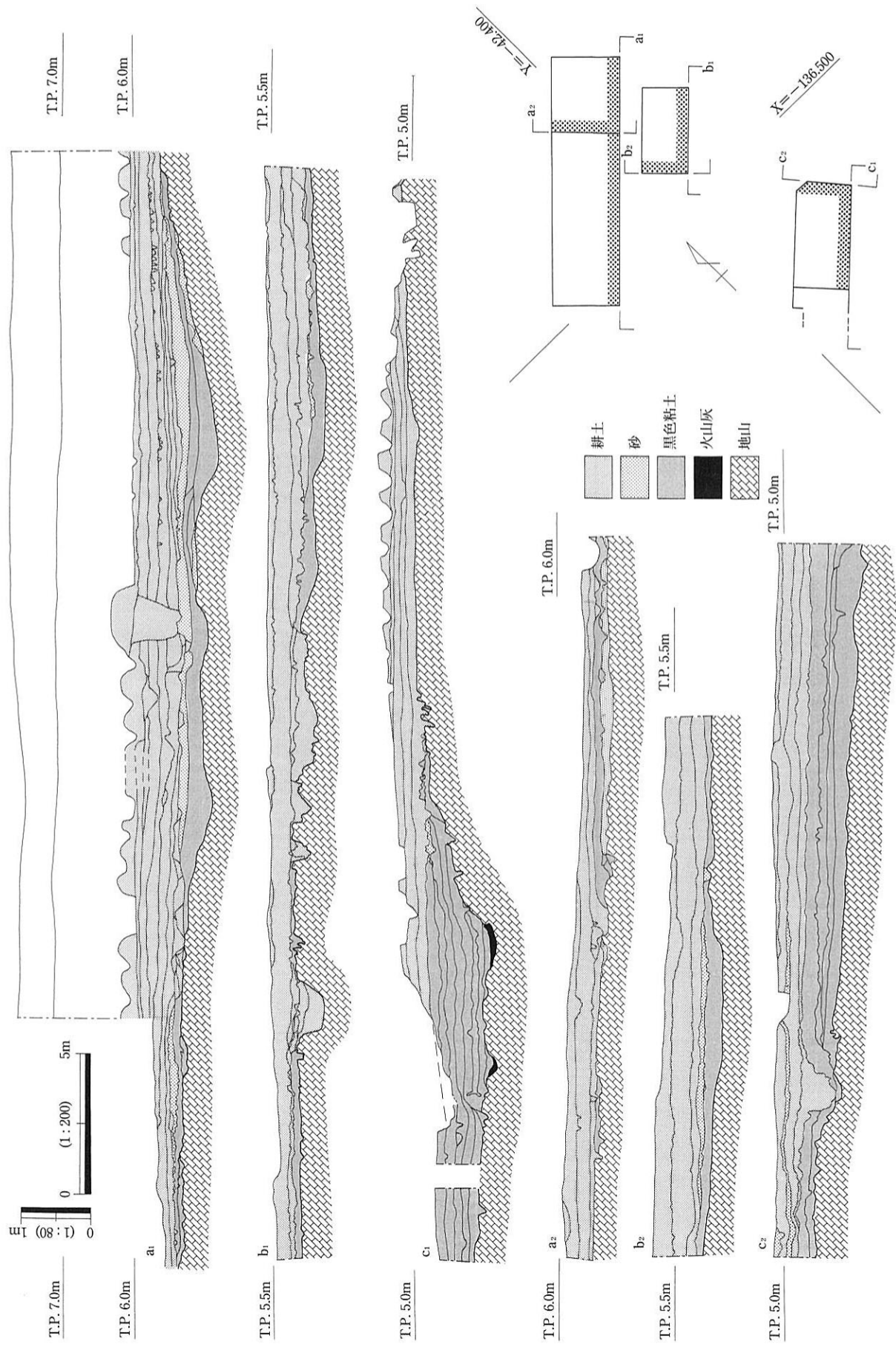


图9 各地区基本断面图

第4章 A地区の調査成果

千里丘陵からのびる谷が調査区を横断するため、概してA地区中央部の地山面は標高が低く、両端へむかって徐々に高くなる。そのため、1A区と2A区とでは包含層の残存状況に差異が生じたが、ここでは出土遺物によって遺構の時期を決定し、相互の関連性を勘案して計6時期に分期して提示した。以下、時代を追って各面の検出状況と主要な遺構および遺物の出土状況について報告する。

第1節 弥生時代以前の遺構と遺物

弥生時代と推定される遺構面は、第5-2層を除去した面において検出された。第5-2層は、谷底であるA地区中央部のみに堆積する黒色～暗オリーブ色の粘土層である。A地区北西壁地点で幅5m程度であるが、放射状に広がって南東壁では25mを測る。北半部では1.5～20cmの厚さをもって明確に識別でき、南東へ進むにつれて下層の灰色粘土質シルトと混和して淡い色調となる。全体的に乾痕や管状の匍匐茎痕の広がりが認められた。葦類など水辺に生育する植物が繁茂していた様相がうかがえる。この層は、人為的な遺構を伴わない無遺物層であると予見していたが、部分的に設定した確認トレンチでの調査により、弥生土器を包含することが確認された（「確認トレンチ」とは、最終遺構面に設置して、以下の堆積が無遺物層であるか否かを確認するためのトレンチである）。A地区では、第5-2層の堆積範囲の中央に谷の開析方向を軸として、幅1m×深さ50cmのトレンチを設置した。第5-2層を除去したところ、その下位に厚さ5cmの黒褐色粗粒砂が部分的に堆積するのが認められた（溝1A-76）。この粗粒砂の広がりや遺物の有無を確認するために、トレンチの拡張をおこなった（図10参照）。

溝1A-76 最大長8m×最大幅2.8m×深さ5～25cmを測る不定形な溝状遺構で、底面には凹凸がある。埋土は黒褐色中～粗粒砂一種である。確認トレンチより北東半部では、随所に埋土の潜り込みが認められた。南西半部では、底面は縁辺にむかってゆるやかに上がり、やがて地山土と混じりあって消滅する。遺物は、確認トレンチ内から出土したもの以外には発見できなかった。

この遺構は、形状から考えて人為的なものとは言い難い。おそらく流砂による挟り込みや沈み込み、あるいは地震による液化現象に伴って形成されたものと推測される。出土した弥生土器も、他所からの流入によるものと解される。

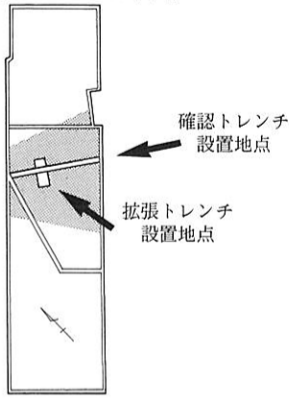
弥生土器 平底の甕もしくは壺で、底部1片・体部6片が出土した（図10-1）。焼成は甘く、径5mm未満の石英粒を混和材として多用する。かろうじて内面には指圧痕が認められるが、全体に摩滅がひどく外面の調整の観察はできなかった。また、第4層からも壺の底部片1点が出土している（図38-76）。

石鏃 土器の他にも弥生時代の遺物が上層あるいは上面遺構内より出土している。図10-235は、サヌカイト製の平基式石鏃である。第5-1層より出土した。ほぼ全面に調整を施して整形しているが、裏面基部側に素材面を一部残している。

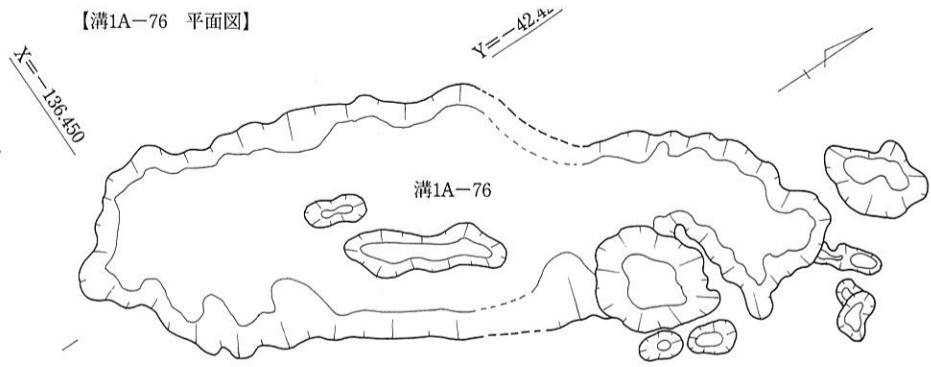
剥片 図10-236は、サヌカイトの剥片である。幅広で、縦に長い長方形を呈する。折れ面を打面とし、背面には、この折れ面からの剥離痕が残る。片側に平滑な自然面を残す。

石槍 図10-237は、サヌカイト製の大型石槍である。溝A-19埋土最下層より出土した。先端は尖頭状を呈し、基端部はやや外彎する。中央に最大幅を有し、先端と基部に向かって幅を減じる。調整は、階段状剥離や幅広の剥離面が多くみられることから、押圧剥離は用いられていないと考えられる。

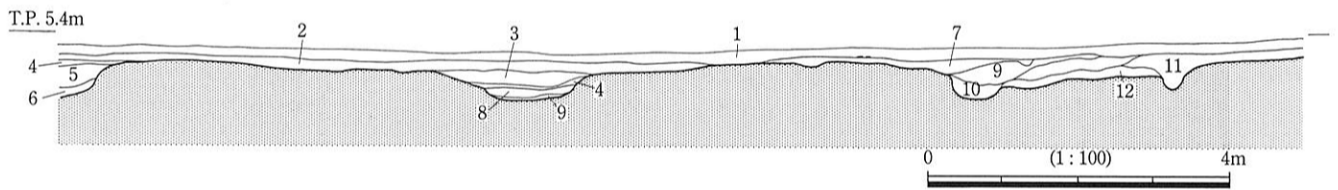
【確認トレンチ設置図】



【溝1A-76 平面図】

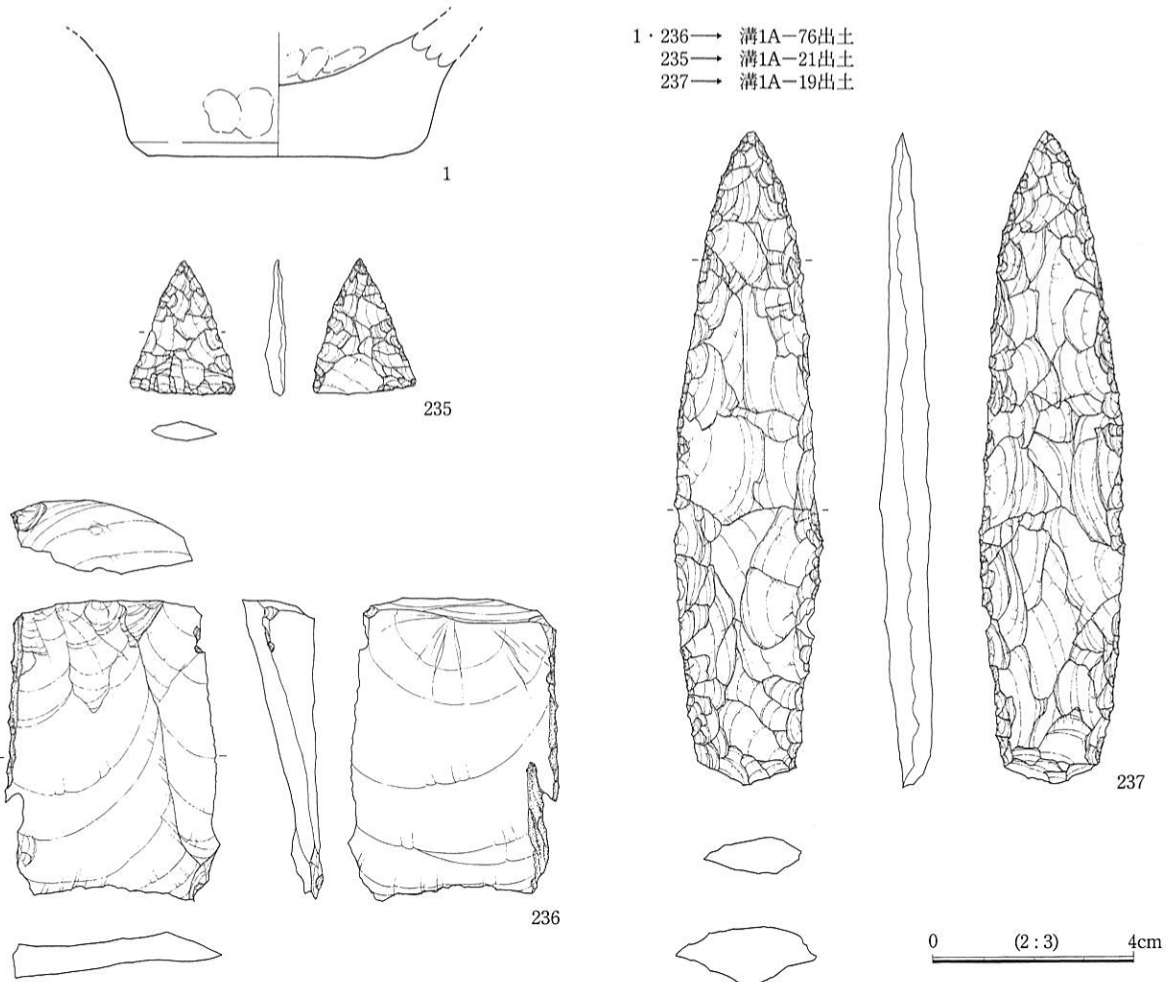


【確認トレンチ断面図】



- | | |
|-----------------------------------|------------------------------|
| 1. 2.5Y3/1 黒褐色粘土に炭化物わずかに混入 (5-2層) | 7. 2.5Y6/4~6/3 にぶい黄色粒砂 (溝76) |
| 2. 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト (5-2層) | 8. 7.5Y6/1 灰色シルトに7層混入 |
| 3. 2.5Y4/1 黄褐色シルトに微粒砂混入 | 9. 2.5Y5/1 黄灰色細粒砂に礫混入 |
| 4. 2.5Y5/1 黄灰色中粒砂 | 10. 地山に9層がブロック状に混入 |
| 5. 7.5Y6/1 灰色粗砂まじりシルト (地山) | 11. 10YR4/1 褐灰色粘土 |
| 6. 7.5Y6/1 灰色粘土 (地山) 上位に乾痕 | 12. 7.5Y6/1 灰色粘土質シルト (地山) |

【出土遺物 (弥生時代)】



- 1・236 → 溝1A-76出土
 235 → 溝1A-21出土
 237 → 溝1A-19出土

図10 拡張トレンチ (第5-2面) と出土遺物 (弥生時代)

第2節 古墳時代前期の遺構と遺物

古墳時代前期の遺構面は、湿地化した第5-2層上面もしくは地山上面より掘り込まれている。大溝(溝A-19)・小溝群・不定形土坑・足跡を検出した(第5-1面・図11)。

これらの遺構は、すべて洪水砂(第5-1層)によって埋没している。この洪水砂内から出土した遺物は僅かな土師器片のみであり、須恵器は認められなかった。出土した土師器は布留IV型式に分類される特色を持つ。このことから、上記の遺構の下限年代および洪水がおこった時期は古墳時代前期と考えられる。

溝A-19 調査区のほぼ中央を南西から北東方向へと直線に走る溝である。2A区の南西端で幅2m30cm×深さ1.2m、北東端で幅1.5m×深さ0.5mを測る。底面のレベル高は、2A地区の南西端でT.P.5.45m、1A区北東端でT.P.5.05mを測り、約40cmの高低差をもつ。これは10mの長さに対して約3cmの勾配を持つ計算となる。断面はU字形を呈するが、激しい水流のため、所々に壁面を大きく抉る箇所がある。

この溝には、A地区のほぼ中央地点において、円形に幅を広げる部分がある(図11※地点)。その南岸には高さ40cm程度の盛土状のたかまりが確認された。これは、灰色シルトに黒色粘土と黄褐色粘土ブロックとが混じり合ったもので、溝A-19の下層部埋土に近似している。

この※地点を境とする北東半部と南西半部とは、溝の埋土に大きな差異がある。北東半部では、埋土の主体は粘土および粘土質シルトであり、その上を砂層(第5-1層)が覆っている。下層には拳大サイズの地山粘土ブロックが混入する。これに対して、南西半部では埋土全体が第5-1層である細粒～粗粒砂であり、ラミナの形成が随所にみられる。また、北東半部から出土した遺物は、土師器甕片が1片と高坏の裾部1片のみであったのに対して、南西半部からは弥生土器・土師器甕・須恵器甕・坏類・石器など多彩な遺物が出土した。

これらのデータをもとに、この溝の埋没過程を推測すると以下ようになる。地山および第5-2層の上面から掘り込まれた溝A-19は、泥土や掘削土の流入によって徐々に埋没した。これを南西部のみ再び掘削した直後、この地域は大規模な洪水に見舞われた。洪水砂は、溝A-19を一気に埋没させ、さらに低地部分に厚く堆積した。その後、この溝の上面にできた窪みに古墳時代後期の包含層が堆積したと考えられるのである。

この溝が一定の水量を確保するため計画的に掘削されたものであることは明白であるが、その用途が何であったのかを確定するには至っていない。溝底の高低差が、延長120mに対してわずか0.4mの高低差しか持たないことは、この溝が長距離にわたる勾配を考慮して掘削された計画的なものであることを示している。また、居住適地である地盤の高い区域において、上幅を広くとり、相対的に深く掘り込んでいることから、小規模な地形の起伏をこえた連続性をもつ溝として掘削されたものであることがわかる。

不定形土坑1A-41・43 1A区の西部で検出した土坑である(図12)。4～6mの幅をもち、5～7cm程度の深さを測る。埋土は微～細粒砂(第5-1層)である。その壁面が垂直に掘削されていることから、人為的な遺構として認識した。鋤状工具等を使用して粘土を採取した痕跡であろうか。

溝1A-40 1A区の中央に密集する小溝群の中で、他に比べてやや深さを持つ溝である(図12)。彎曲して両端は調査区外へと続く。規模は最大幅2.1m×最深70cmを測る。埋土は砂が主体で、断面③地点ではラミナが認められた。底面直上から土師器甕片が1点出土した。

足跡 不定形土坑の周辺に人間と水鳥のものと思われる足跡を数点検出した。このうち溝A-19北岸に

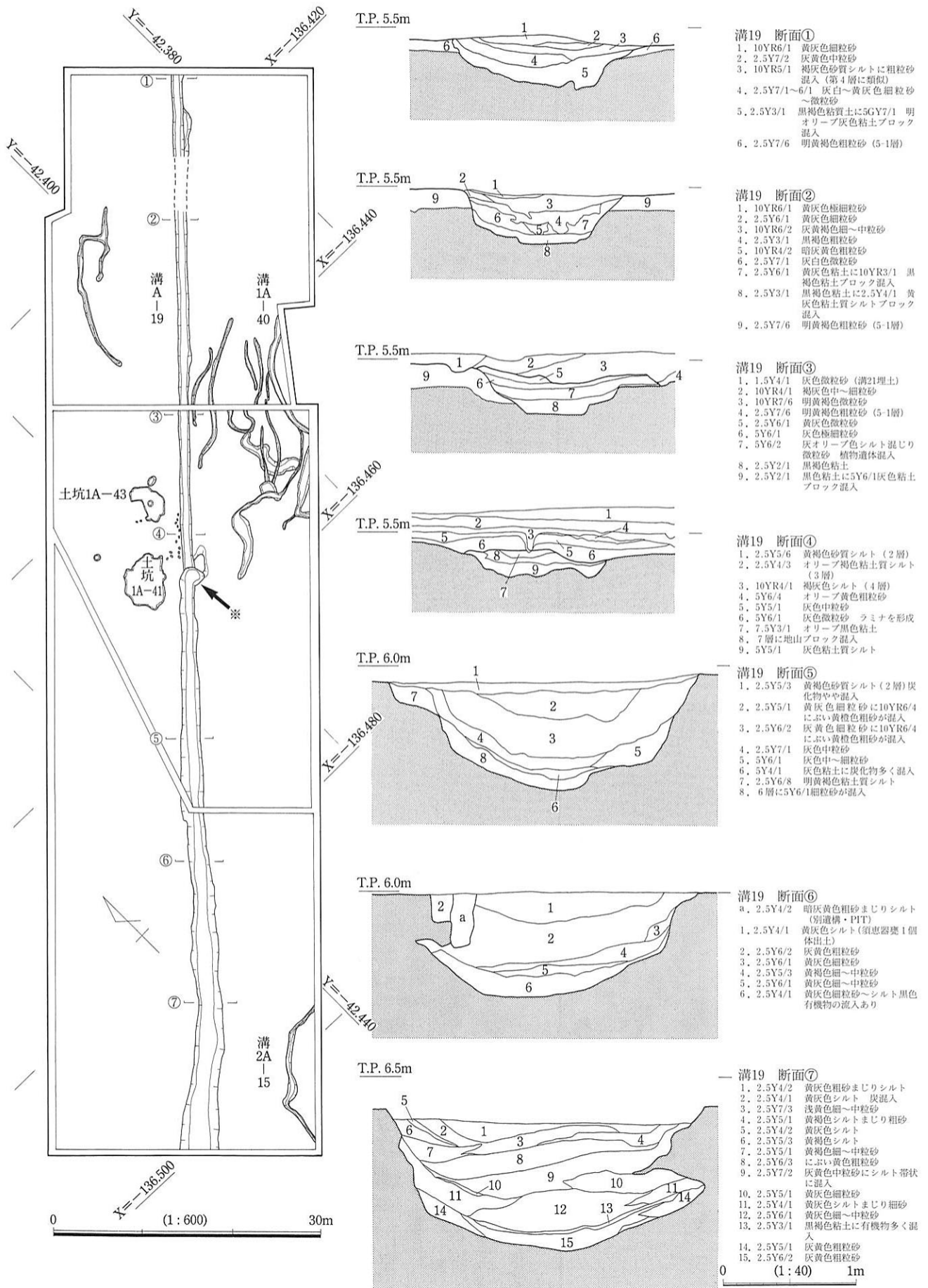


図11 A地区第5-2面 平面図・溝 A-19 断面図

は、溝に沿って人間が歩行した足跡が鮮明に残っていた。

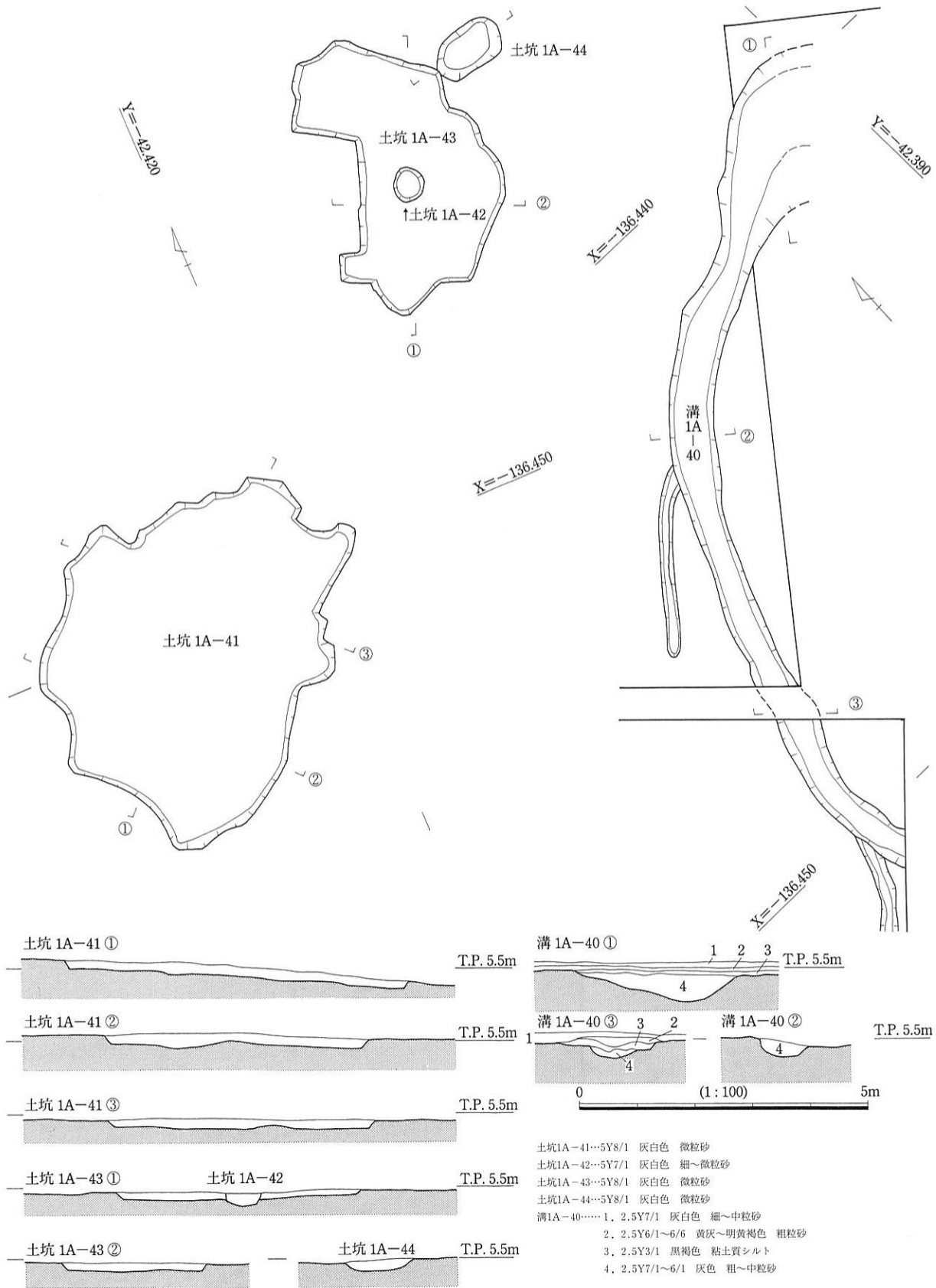


図12 A地区第5-1面 遺構平面図・断面図

第3節 古墳時代後期から

飛鳥・奈良時代の遺構と遺物

古墳時代後期から奈良時代にかけての遺構面は、古墳時代前期の遺構面を埋没させた第5-1層の上面において検出した遺構群と、地山直上に掘られた2A区の遺構のうち、同時期性をもつものによって構成される（第4面・図14）。

第5-1層は、大規模な洪水によって運ばれてきた大量の土砂である。もっとも厚く堆積する谷底地点では、30～35cmを測る。第4面においては、第5-1層の堆積により、地表の起伏は幾分和らいだが、依然として谷地形の上部にあたる1A区の中央部が低く、標高はT.P.5.3m程度であった。もっとも高かったのは2A区の北西端で、標高はT.P.6.3mを測り、その高低差は1m程度である。

第4面では、流路・溝・ピット・土坑を検出した。遺物の出土量は比較的多く、このうちの大半が須恵器であった。出土遺物から、遺構の下限年代は6世紀後半～8世紀に求められる。

溝1A-16 1A地区の南西端地点から蛇行して調査区外へと流出する溝である。確認できた長さは17mで、最大幅1m×深さ20cmを測る。埋土は黄褐色砂質シルトの上位に灰黄色粘土質シルトが堆積する。遺物は須恵器の坏蓋・坏身・甕片等が出土した（図21-5・7・15）。

図21-5・7は、須恵器坏蓋である。ともに図化は反転復原で、頂部を欠く。図21-5は、溝の底部直上より出土した。稜の屈曲は比較的明瞭で、沈線を残す。口縁端部には内傾する面をもつ。図21-7は、溝の上層から出土した。平坦な頂部と短い口縁をもつ。稜は鈍く、沈線によってかろうじて表現されている。口縁端部は外傾して段を有するが、不明瞭である。胎土は粗く、径3mm程度の白色粒が多く混入していた。図21-5・7ともに6世紀前半期の所産である。

図21-15は須恵器高坏の脚部である。3方向にスカシをもつが、2段の可能性もある。裾部には、にぶい沈線を一条めぐらせる。6世紀後半のものである。

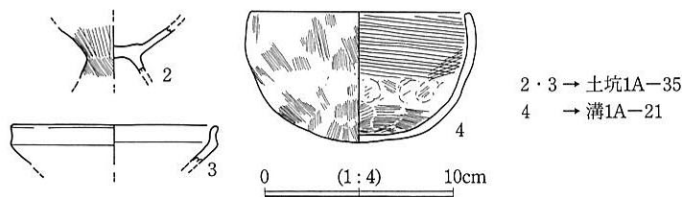


図13 1A区 遺構内出土遺物実測図

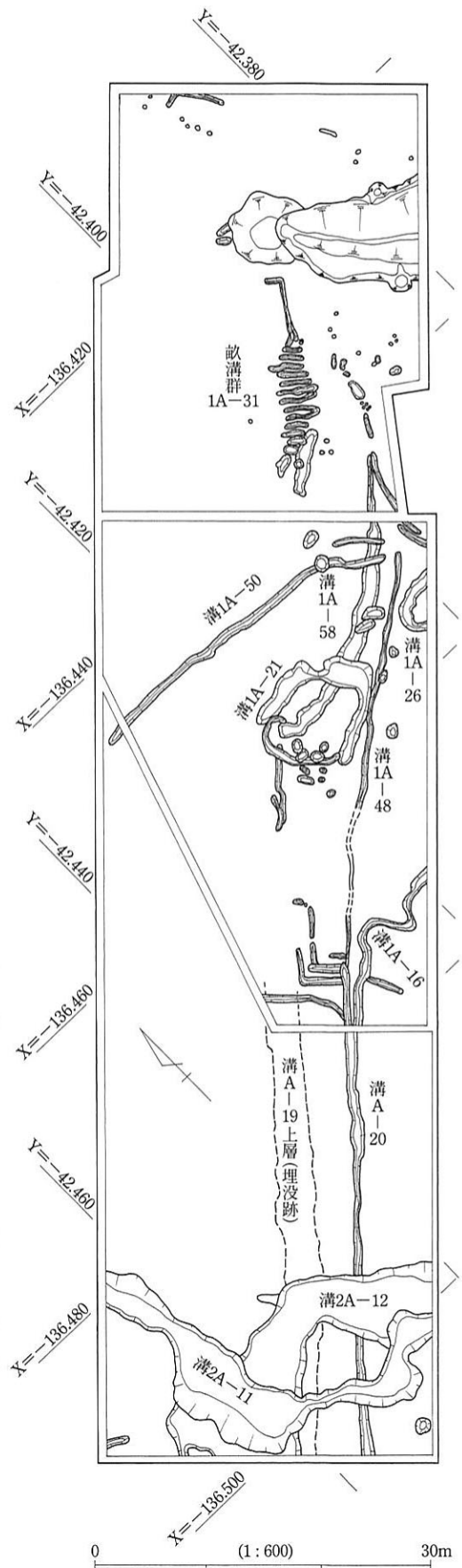


図14 A地区第4面 平面図

溝1A-21 1 A 地区中央部にあり、「コ」字形にめぐる溝である (図16)。最大幅1.8m、深さ40cmを測る。埋土は主に土壌化したシルト質である上層部と、ラミナを形成する砂質の下層とに大別される。底面は湿地層 (第5-2層) にまで達するため、下層埋土には黒色粘土ブロックが混入し、暗灰色を呈する。遺物は須恵器甕・須恵器坏・土師器甕・椀形の土師器 (図14-4) 等が出土した。

図14-4は、椀形の土師器である。口縁が内湾し、全体に丸みを帯びたフォルムをもつ。内面に粗いハケ目 (3~4本/1cm)、外面に細かいハケ目 (9~10本/1cm) を施す。体部内面に胎土接合のための指圧痕が残るが、ここに炭化物の付着が認められる。6世紀前半期のものと思われる。

溝1A-26 調査区南端にかかる湾曲した溝である。最大幅1m×深さ10cmを測る。埋土に炭化物が多く混入していた。遺物の出土はなかった。

溝群1A-31 1A-2地区中央に並行して検出された溝群である。長さ1.7~3.5m×幅25~50cmの小溝が、約9mにわたってほぼ等間隔に並ぶ。端部がつながり、V字形となるものもある。埋土は黄褐色細粒砂の一種のみである。遺物の出土はなかった。耕作に伴う畝溝群と解釈される。

土坑1A-35 溝1A-50を切る楕円形の土坑である。長さ1.8m×幅0.8m×深さ20cmを測る。埋土は第5-1層に第4層シルトブロックと細かい炭化物片が混入する。土師器器台片が出土した (図14-1・2)。

図14-1・2は、ともに土師器の器台である。図14-1は体部から脚部にかけての破片である。外面全体に粗いハケメを施す。図14-2は坏部である。口縁部は、稜をもってほぼ垂直に短く立ち上がる。ともに古墳時代前期の所産とみられることから、第5-1層からの混入ではないかと考えている。

溝1A-47・49 1A-2地区から1A-1地区へと流れ込む小溝である。ゆるやかに弧を描き、調査区外へと流出する。この辺りがA地区内で最も低いところである。規模は最大幅30cm×深さ8~10cmを測る。埋土は黄灰色粗流砂で、遺物の出土はなかった。

溝1A-48 1A地区の南西端から長くのびる溝である。溝A-20の延長上にあり、本来はつながっていた可能性がある。連続して確認した規模は、長さ28m×最大幅12cm×深さ5~8cmである。溝A-19に対して並行に走る様相から同時期性を考えたが、5-1面上面からの掘り込みが確認されたため、古墳時代後期の遺構として扱った。

溝1A-50 溝A-19と溝1A-58を切り、西から東へと伸びる溝である。遺構が希薄な北西半部にあって唯

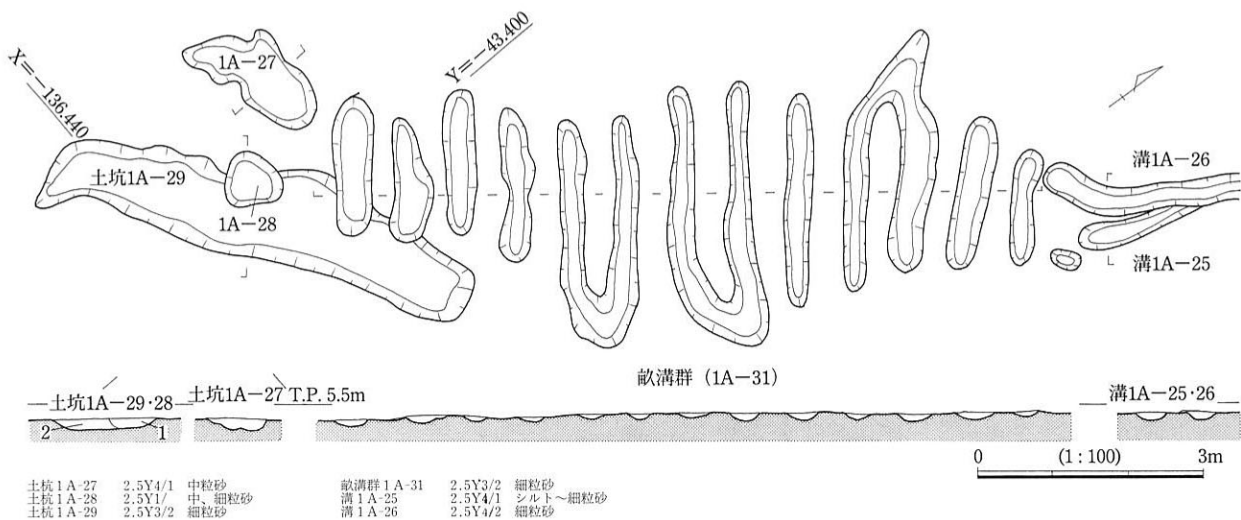


図15 1 A 区 第 4 面遺構平面・断面図

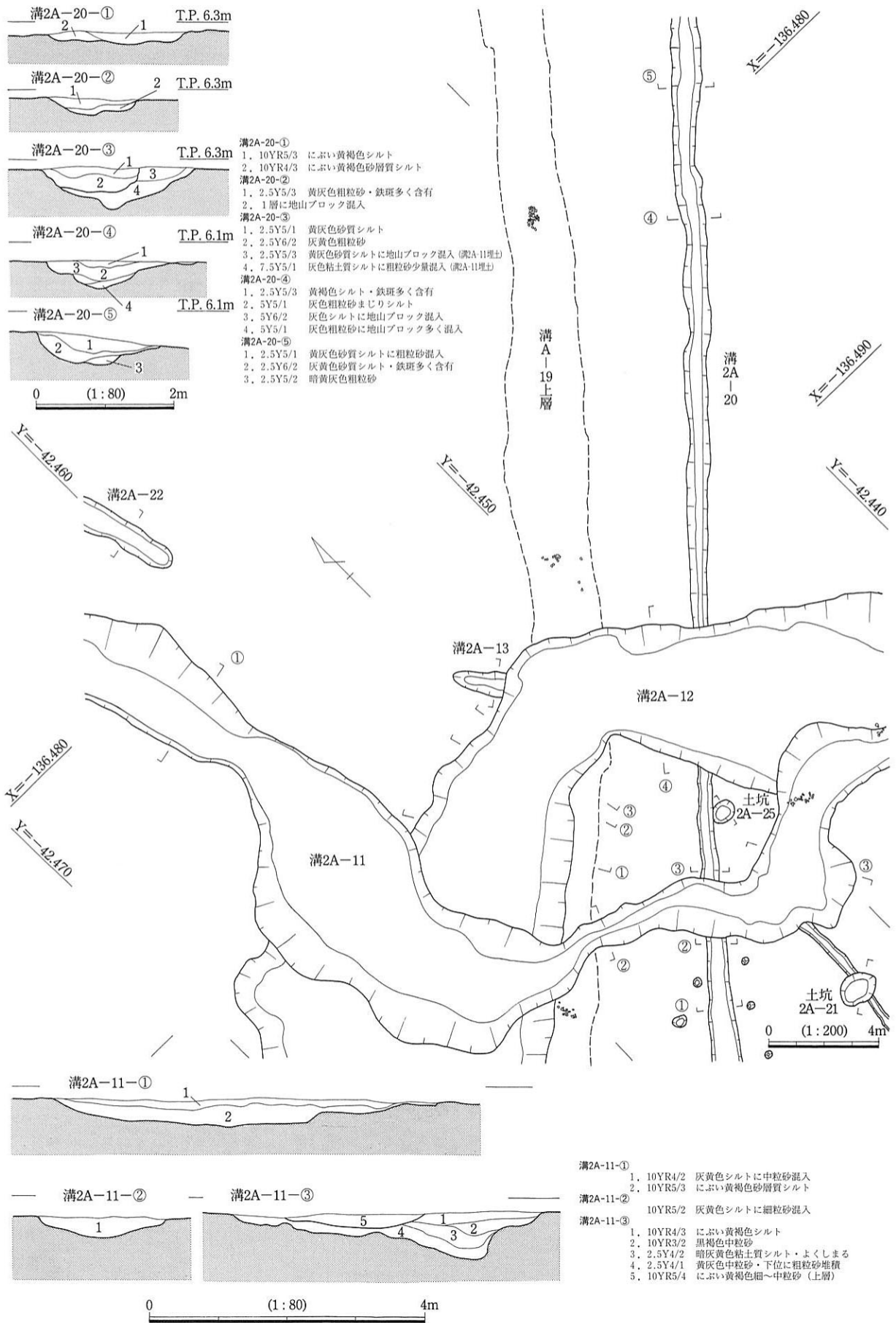


図17 2A区第4面 遺構平面・断面図

一検出されたもので、確認できた規模は、長さ28m×最大幅0.7m×深さ15cmである。埋土は黄色粗粒砂と4層シルトから成る。須恵器・土師器の細片が出土した。

土坑1A-56 ほぼ円形の土坑で、溝1A-48の東に近接する。長径85cm×短径70cm×深さ15cmを測る。埋土は黒褐色を呈するシルトと砂が主体である。第5-2層まで掘り込んで、時を経ずして埋めたものと思われる。須恵器坏片と甕片・土師器甕片が出土した。

溝1A-58 溝1A-21や溝1A-50に切られる流路で、1A区北東部から中央部に流れ込む。長さ30m×最大幅1.35m×深さ30cmを測る。底面には凹凸が目立ち、安定しない。埋土は、粘土が筋状に混じり込む砂が主体で、随所にラミナを形成する。遺物は土師器甕片およびサヌカイト製石鏃1点が出土した(図10-235)。遺物および形状から人為的な遺構ではなく、流水が砂面を削ってできた跡ではないかと考えている。

土坑1A-66 長径90cm×短径50cm×深さ22cmを測る、平面楕円形の土坑である。埋土は、にぶい黄褐色中へ粗粒砂を主体とする。遺物の出土はなかった。

土坑1A-67 土坑1A-66に南接する平面楕円形の土坑である。長径1.2m×短径90cm×深さ20cmを測る。埋土は土坑1A-66に類似する。遺物の出土はなかった。

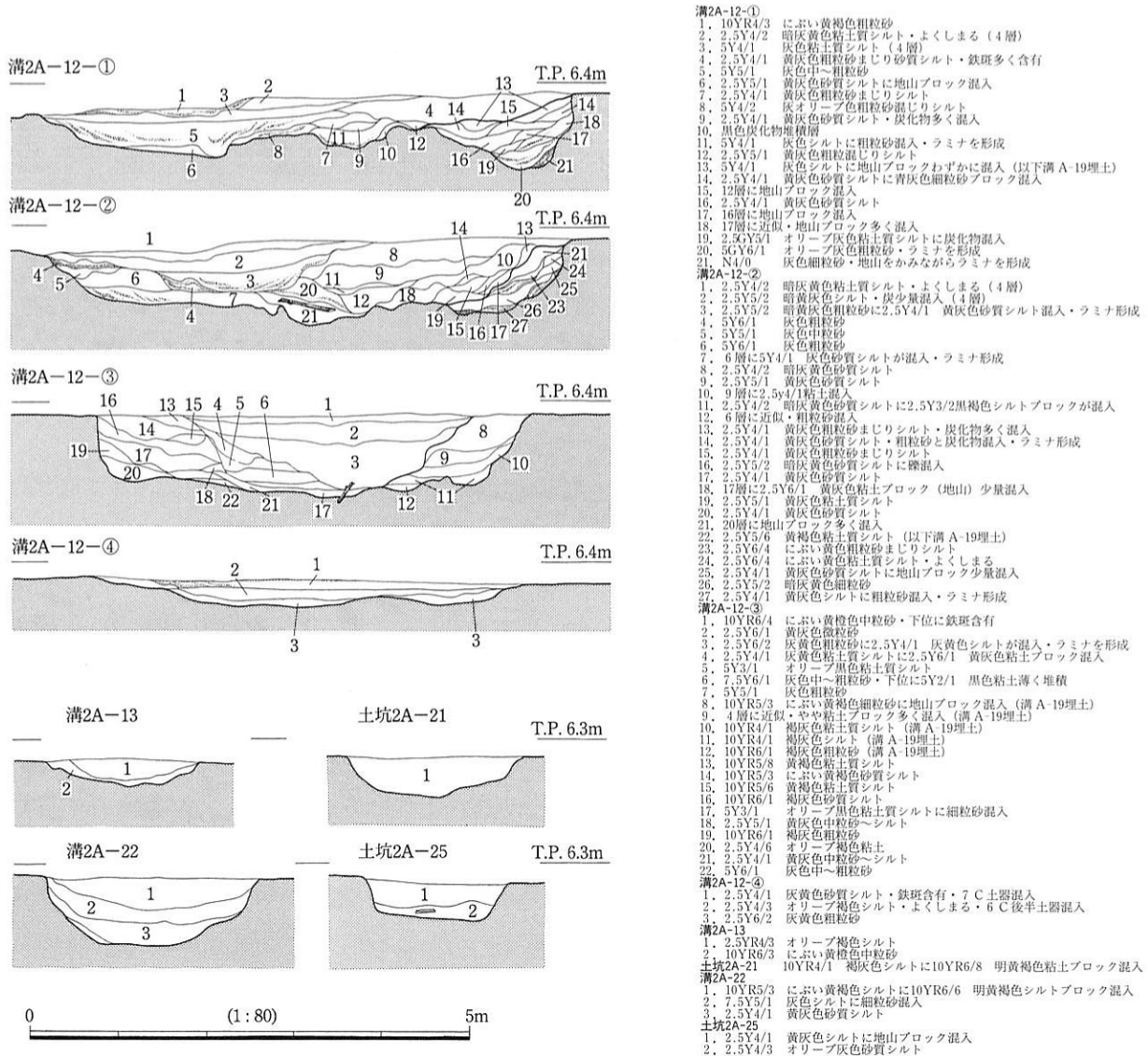


図18 2A区第4面 遺構断面図

土坑1A-68 溝1A58の南端近くに位置する。平面では楕円形を呈する。長径1 m×短径70cm×深さ28cmを測る。埋土は土坑1A-66に似るが、比較的シルトブロックの混入量が多い。遺物の出土はなかった。

土坑1A-69 土坑1A-67と1A-68との間に位置する平面楕円形の土坑である。長径1.2m×短径1 m×深さ35cmを測り、土坑1A-66、68に比べてやや深さがある。埋土は土坑1A-68に類似する。遺物の出土はなかった。

溝1A-70 溝1A-21に西接する溝で、南端ではこれを切っている。長さ9 m×幅20～50cm×深さ30cmを測る。一定の深さがあり、しっかり掘り込まれているが、北端では細く浅くなり、弧を描いて消滅する。埋土は上層が褐色シルト（第4層）、下層が粗粒砂である。遺物の出土はなかった。

溝1A-71・72 とともに溝A-19の上面を流れる幅20cm×深さ5 cm程度の小溝である。埋土は鉄斑が沈着し、細かい炭化物が混入する。別遺構として捉えたが、溝A-19の最終形態である可能性が高い。遺物の出土はなかった。

溝2A-11 2A地区南西端で検出した、北から南へと蛇行する流路である。溝幅は広狭の差が大きく、北西端では3.5m、東端では1.2m、この間1～6 m前後の拡縮を繰り返す。深さは0.4～1.2mを測る。溝2A-12と交わる地点で最深および最大幅を測るが、これは砂を主体とする溝2A-12の埋土が脆弱であったことに起因する。埋土は上下の2層に分けられる。下層は中粒砂で、この上を灰黄色シルトである上層が覆っていた。遺物は上層内から多く出土し、7～8世紀の須恵器が大半を占める。このうち溝2A-12と切り合う地点から出土したものは、残存状態が良好であった（図21-11・12・16）。また、南西壁に近い交差点からは、須恵器甕と土師器坏2個体が、まとまって出土した（図19・土器溜り①）。

図21-11は、須恵器壺の底部である。外面にはヘラケズリを施している。6世紀のものと思われる。

図21-12は、須恵器坏蓋である。扁平な円柱形のつまみをもつ。8世紀前半のものである。

図21-16は須恵器の高坏である。大きく開いた坏部と太く短い脚部から成る。脚部には円形のスカシが2カ所に認められる。焼きが甘く、白色に近い灰色を呈する。6世紀末～7世紀初頭のものである。

図21-17・20・21は、溝12の南西岸に沿う「土器溜り①」地点より出土した。図21-17は、須恵器甕の口縁部である。外面には頸部から肩にかけて幅広のカキ目を施す。7世紀のものである。

図21-20・21は、土師器坏である。20はやや厚みのある口縁を持つ。外面体部にはヘラミガキ、底部にはヘラケズリを施し、一部に黒斑を有する。21は、20よりも口径が大きく浅い。指ナデにより口縁端部をわずかに内傾させ、外面に稜をつくる。ともに7世紀後半期のものである。

溝2A-12 2A地区の南西端、溝A-19とほぼ同地点から流れ込む流路である。南西壁面では幅20m×深さ1 mを測るが、途中南東へと屈曲する部分で急に浅くなり、南東壁面では幅6 m×深さ30cm程度となる。埋土は大きく上層と下層とに分けられる。上層は黄灰色粗粒砂が主体で7世紀代の遺物を包含する。下層は中粒砂と粘土質シルトが主体で、流木や炭片とともに6世紀後半期に遡る遺物が出土した。

溝2A-12の形状と埋土から、その埋没過程を復原すると以下のように考えられる。溝2A-12は、溝A-19の北岸方向から流れてきたが、屈曲地点で溝A-19の南岸にぶつかった。この南岸はよくしまった粘土と礫とで構成された地山層である。このため溝2A-12は、その主流を、より軟弱な土層堆積である溝A-19の埋没跡に沿って、北東方向へと進路を変えた。その際、オーバーフローした分流が南東方向へと流れ出た結果、屈曲した浅瀬を形成することになったと考察される。

遺物は須恵器甕・坏身・坏蓋・高坏・土師器甕・坏などが出土した（図21）。また、2A区南東壁付近では、須恵器坏身2点がほぼ完形で出土した（図20・土器溜り②）。

図21-8・9は土器溜り①地点から出土した須恵器坏身である。8は完形品で、溝底から正位置で出土した。焼き歪みが目立ち、口径は10.5～11.5cmを測る。口縁の立ち上がりは短く退化し、著しく内傾する。底部外面はヘラケズリが認められるが、一部に粘度塊を残す。胎土はやや粗く、径1～3mmの白色砂粒の混入が多い。全般的に粗雑な作品である。7世紀前半期のものである。

9は、一部を欠損するが、全体復原が可能である。8とは30cmほど距離を置いた地点から、正位置で出土した。歪みはなく、胎土は密、調整も丁寧で8よりも良品である。7世紀前半期の所産である。

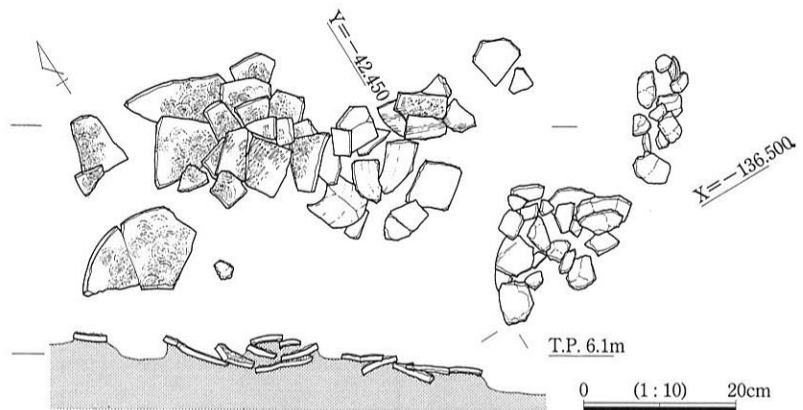


図19 溝2A-11土器溜り① 遺物出土状況図

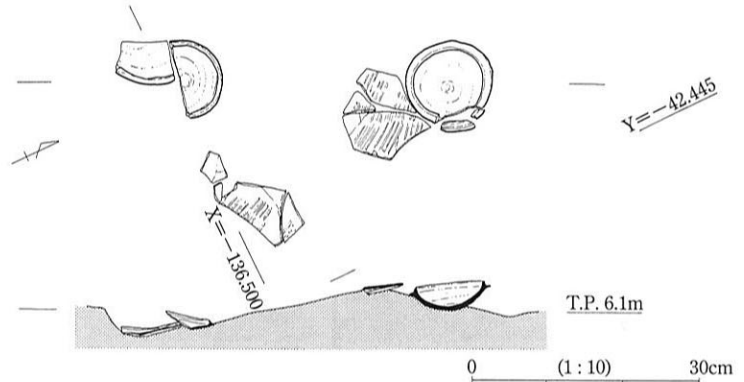


図20 溝2A-12土器溜り② 遺物出土状況図

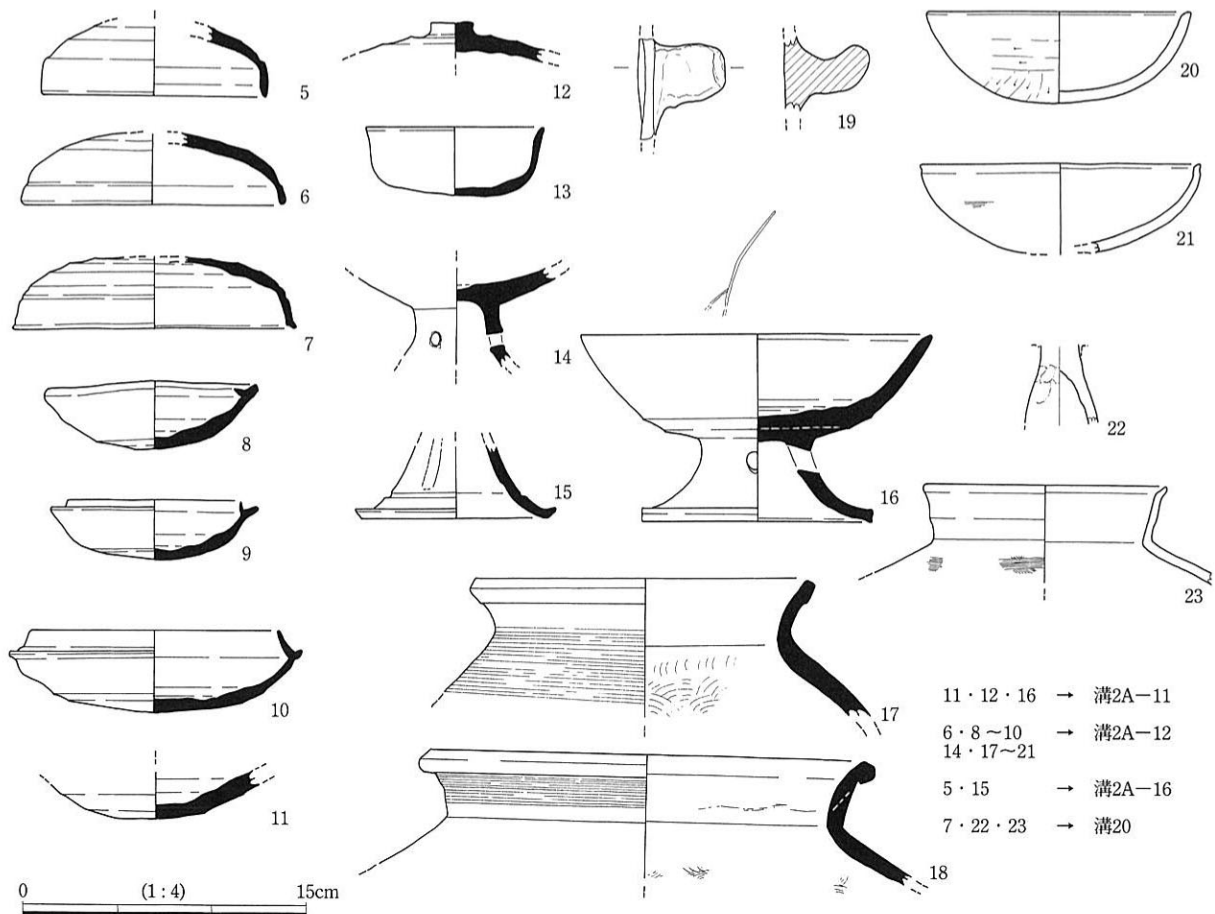


図21 第4面 遺構内出土遺物実測図

図21-10は、須恵器坏身である。口径は13.5cmを測る。受部は短く、口縁の立ち上がりは内傾する。溝2A-14上層から出土した。6世紀後半期のものである。

図21-14は須恵器高坏である。脚部に3ヶ所に円形のスカシを設ける。焼成は甘く、灰白色を呈し、磨滅も進んでいる。溝2A-12と溝A-19との交差点より出土した。6世紀の初産と思われる。

溝2A-13 溝2A-12に切られる小溝で、最大幅90cmを測る。埋土は砂質シルトである。溝2A-12との接点から土師器甕片と須恵器甕片が出土したが、ともに溝2A-12から出土した遺物と同一個体であることが認められた。溝2A-12に切られた際に遺物が混入したと思われる。

溝2A-20 溝1A-19に並行してのびる溝で、第4面上ではもっとも古い遺構である。途中、溝2A-11・12・14に切られながらも、北東方向へ向かって1A区内へと続き、溝1A-48に連続する様相を見せる(前述)。確認できた規模は、長さ44m×幅0.8~1.3m×深さ10~30cmである。底面の高さは、2A地区南西隅でT.P.6.22m、2A地区北東壁地点で5.66mを計測する。埋土は黄灰色砂質シルトが主体で、下層には地山ブロックが混入する。第17図断面③地点から土師器高坏脚柱部と土師器甕の破片がまとまって出土した(図21-22・23)。甕は細片ではあったが、薄い器壁に粗いハケ目があり、外面に炭化物が付着していた。しかし、風化による剥離がひどく、採取できたのは口縁の一部のみであった。

土坑2A-21 2A地区南端に位置する楕円形の土坑で最大径1m×深さ20cmを測る。埋土は径2~3cmの地山ブロックが混入するシルト1種のみである。遺物の出土はなかった。

土坑2A-25 溝2A-20に接して位置する円形の土坑である。直径80cm×深さ10cmを測る。埋土は4層シルトに地山ブロックが混入する。下層から、焼成不良でにぶい黄褐色を呈する須恵器甕片が出土した。

溝A-19上層 溝A-19は遺構埋土の堆積状況から、掘削時期を古墳時代前期と考えている。しかし、出土遺物から、最終埋没時期は6世紀末にまで下ることが明らかとなった。最終埋没層内において、3カ所の土器溜りを確認した(図22・図23)。

土器溜り①地点からは須恵器甕2個体が出土した(図23-24・25)。2点ともに焼成が甘く、白色~淡黄色を呈する。

図23-24は、頸部から体部にかけてのみ復元が可能であった。頸部外径は、15.6cmを測る。頸部内面には口縁部以上を接着した痕跡が認められる。内面には同心円状タタキが施されているが、外面は損傷がはげしく、調整が確認できなかった。

図23-25は頸部外径18.2cmを測り、24よりも薄手で、やや大形である。内面には同心円タタキを、外面には平行タタキとカキ目を施す。口縁部外面には、回転ナデの下に平行タタキを施した痕跡が残る。これは、頸部の成形段階において、体部から連続した粘土にタタキを施した後、折り返して頸部を形作つたためである。したがって24の体部内面のように、頸部との接合痕が残っていない。24・25は、ともに破砕した状態で出土したが、当初は並べて据えられていたようである。

土器溜り②地点からは須恵器甕が2個体と坏蓋頂部細片が出土した。須恵器甕は2個体ともに下半部のみの出土である。これらも正位置で据えられていたために、後世の削平によって上半部が欠失し、下半部のみ残存したと思われる。2点ともに24・25とは違い焼成良好で、内面には丁寧な同心円状タタキ痕が認められた。

土器溜り③地点からは、須恵器甕底部1点と坏身口縁部1片が出土した。これも肩部より上は出土しなかった。以上の土器は、すべて6世紀後半期の所産であると思われる。

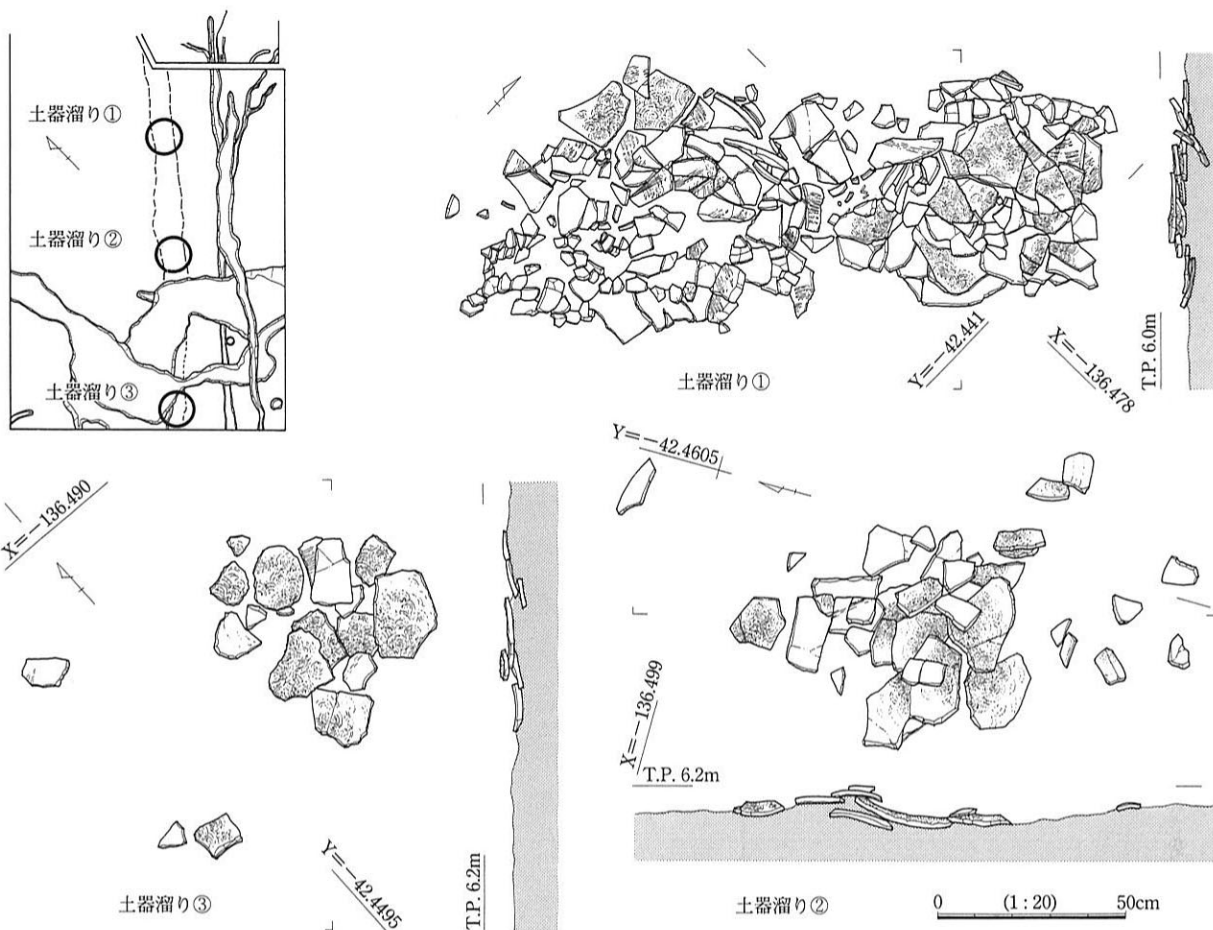


図22 溝 A-19土器溜り上層 遺物出土状況図

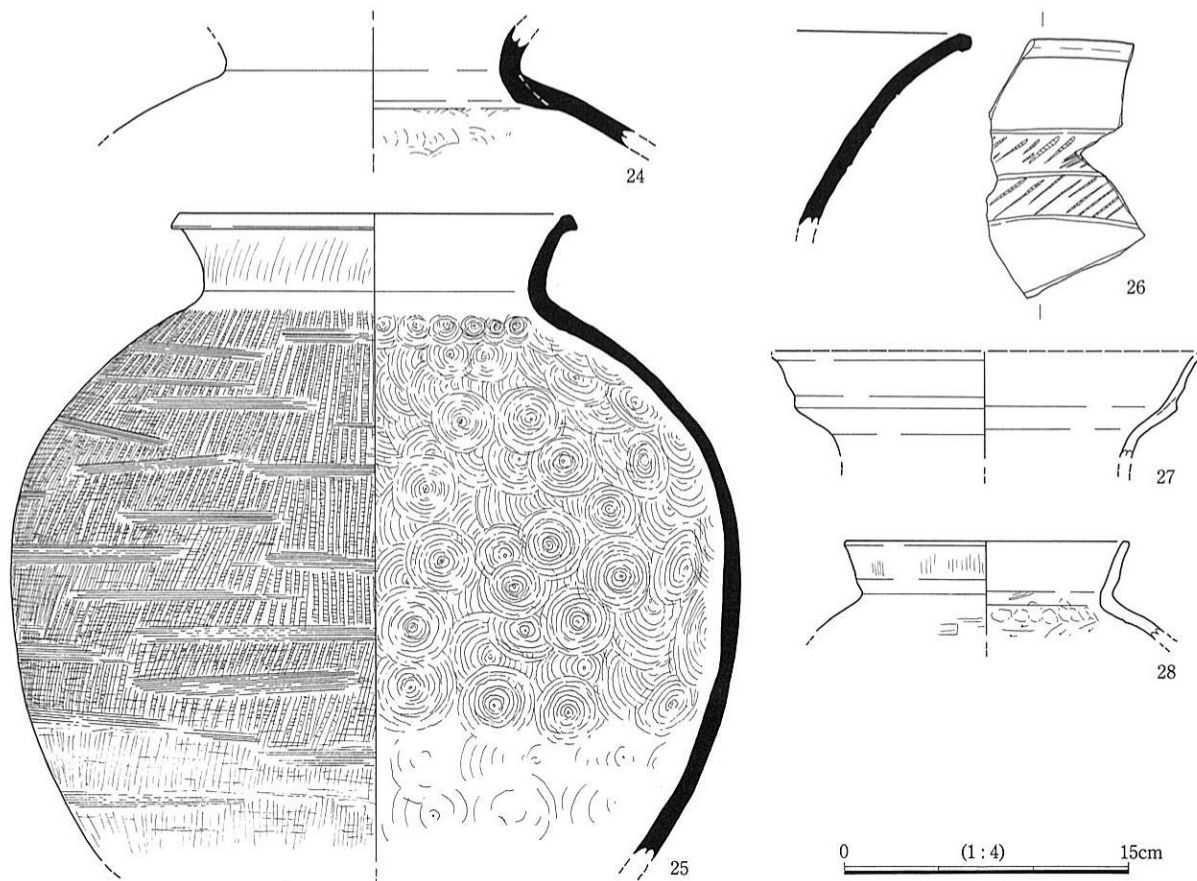


図23 溝 A-19上層 出土遺物実測図

第4節 平安時代の遺構と遺物

平安時代の遺構面（第3面）は、第4層の上面において検出した。第4層は、奈良時代の遺構面（第4面）上に堆積した、褐色～アズキ色を呈するシルト層である。1A区では、10～15cm程度の厚みをもって堆積していたが、2A区では確認できなかった。この層には、古代の遺物が多く含まれており、このうち、もっとも新しい遺物は10世紀末頃と推定され、この上面で検出した第3面の上限年代もその頃に求められる。

第3面における調査区内の標高差は、前時代遺構面に比べてさらに縮まった。もっとも高い2A地区北西端でT.P. 6.3m、もっとも低い1A地区東部でT.P. 5.6mを測り、高低差は80cm程度である。この面では、低地である1A地区で格子状に広がる水田畦畔を、微高地である2A地区では掘立柱建物4棟および溝を検出した（図24）。

水田・畦畔 1A区のほぼ全域で検出された水田畦畔である。南西端から精査をおこなったところ、褐色粘土面上において、時間の経過に伴い、やや褐灰色に変化した箇所が認められた。変色部分は一定幅をもって帯状につながり、これが水田畦畔の痕跡である可能性を示した。そこで1A区中央の側溝断面において観察をおこなったところ、頂幅1m×裾幅1.8m×高さ5cm程度の起伏が確認できた。また、1A区北東部付近では、この起伏に沿って両脇に鉄斑の沈着が認められた。これを手がかりとしてさらに精査を進めたところ、格子状に広がる畦畔を検出することができた。

この畦畔は、南北方向に対して約33°西にふった角度を主軸とし、四方へのびている。各々長短があり、長いもので25m、短いもので15mを測る。畦の長さ和水田1枚の面積は、それぞれ $16 \times 17\text{m} = \text{約}272\text{m}^2$ ・ $17 \times 20\text{m} = 340\text{m}^2$ ・ $15 \times 25\text{m} = 375\text{m}^2$ であり平均 329m^2 である。方形の水田をかたちづくる畦畔は、条里制との関係から重視すべき遺構である。淀川北岸では、歴史地理学的方法によって条里地割が復元されており、その軸は西に33°ふった方向である。今回検出した畦畔のうち、調査区北東端から3本目のものは、N33°Eの角度をもつ。この畦はおそらく坪境を示すと推測されるもので、地割の基幹を成すものである（第8節詳述）。すなわち第3面で検出された平安時代末期頃と推定される水田畦畔は、条里制に基づくものであると考えられる。

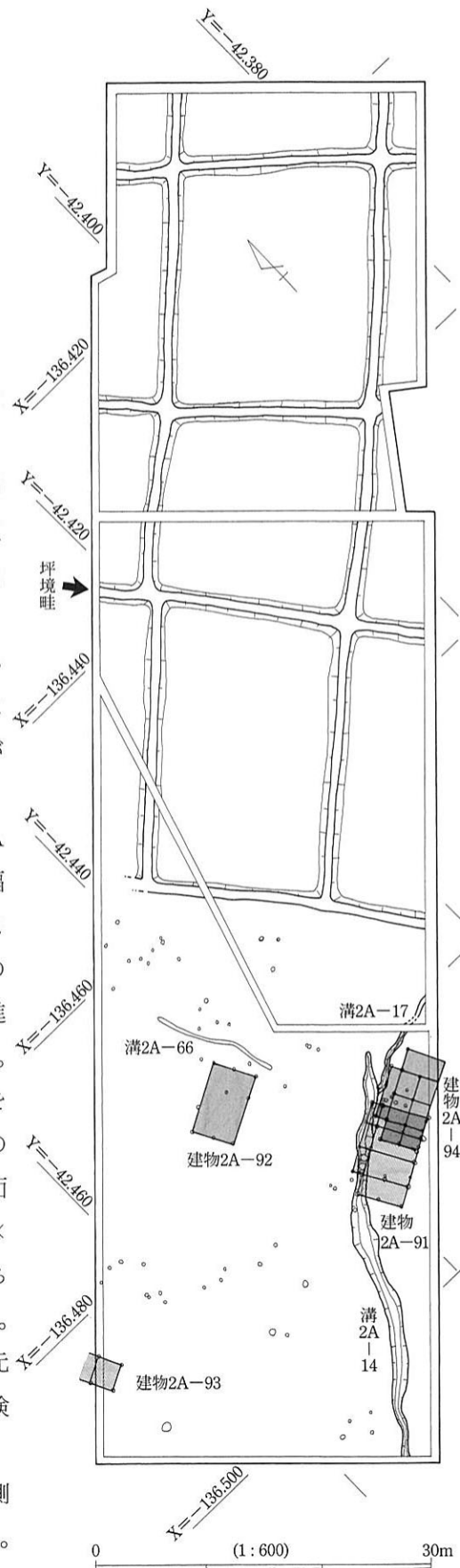
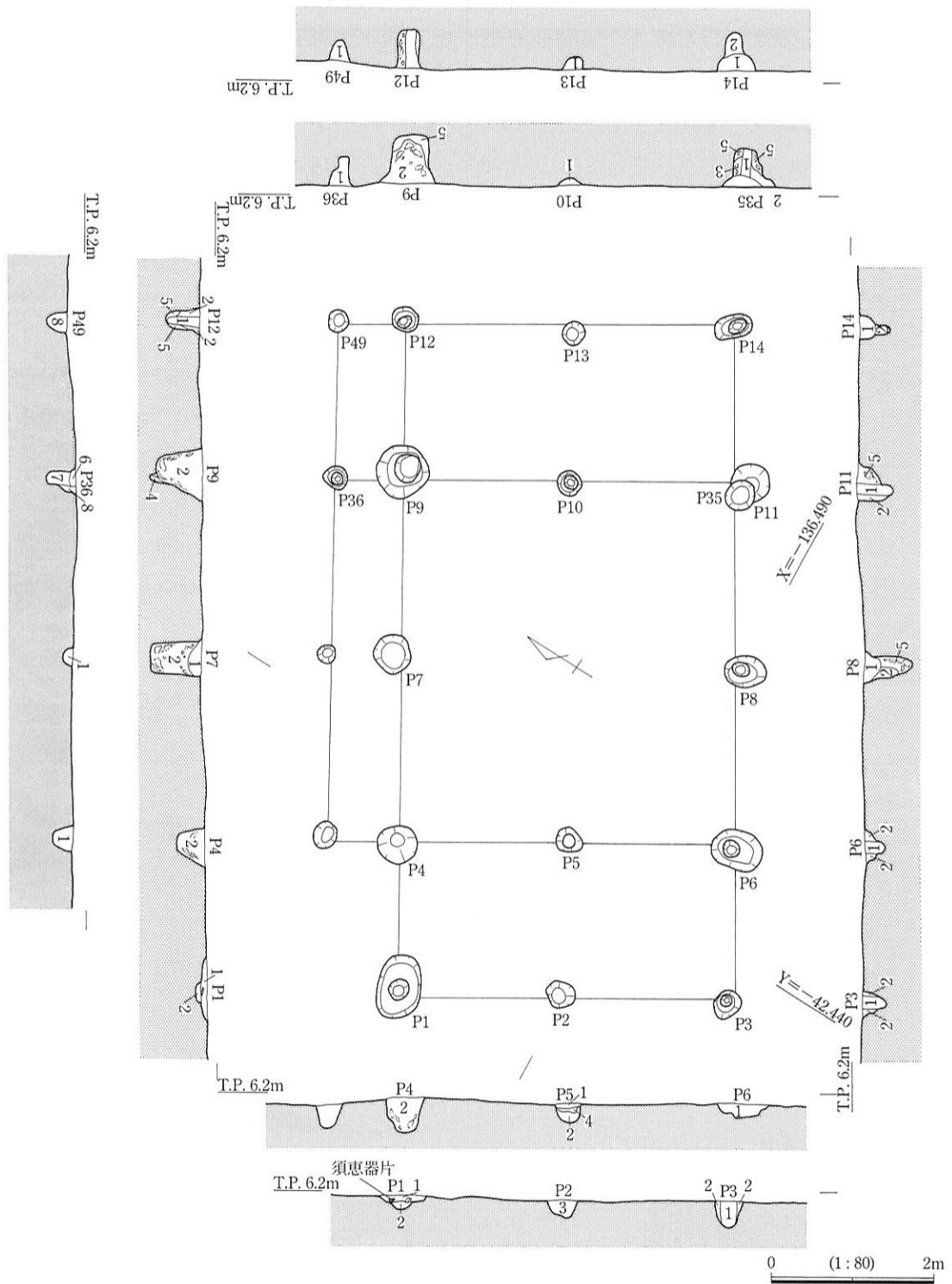


図24 A地区第3面 平面図



- 1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト
- 2. 2.5Y4/1 黄灰色砂質シルトに地山ブロック混入
- 3. 2.5Y5/3 黄褐色シルト
- 4. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト
- 5. 2層よりも地山ブロック多く含む
- 6. 2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト
- 7. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質シルト
- 8. 2.5Y5/3 黄褐色砂質シルト

図25 建物2A-91 平面・断面図

建物2A-91 2A区で検出された4間×2間の掘立柱建物で、北辺に1間×3間の庇もしくは縁側が付く構造をもつ(図25)。溝2A-12と溝A-19の直上を避けた、2A区南東壁沿いに位置している。建物の主屋の規模は8×4mで、これに3.1×0.8mの庇部分が付随する。主軸はN60°Eをとる。

この建物跡は、14本の主屋柱と4本の庇柱で構成されている。すべて地山直上に薄く堆積する黄褐色砂質シルトの上面から掘り込まれていた。この砂質シルトは、溝14の埋土が一部南辺へと流出した際に堆積したものである。なお、建物中央の柱跡は精査を重ねたが、検出できなかった。

この建物は柱間の長さに特徴がある。ピット1からピット12までの間隔は、それぞれ1.86m・2.21m・2.23m・1.88mである。つまり、中央の2間と脇の2間とが各々ほぼ同値であり、左右対称的な構造をもつ。

柱穴は各々大小の差があるものの、大きく3タイプに分けられる。まず、比較的大きく深い掘り形をもつもので、ピット4・7・9がこれにあたる。直径・深さともに50~60cmを測り、埋土中に地山ブロックが多く混入する。柱根跡が確認できないことから、建物の廃絶時に柱の抜き取りが行われたものと考えられる。次が、前者ほど大きくはないが柱の痕跡が残るもので、ピット1・3・6・8・11・12・14が該当する。掘り形は直径30~40cm×深さ30~50cm程度、柱根跡の太さは12~15cmを測る。最後は上記以外のもので、比較的に浅く小規模なピット2・5・10・13である。これらは長軸の中列に配されるピットで、補助的に桁をささえる支柱であったと解釈される。

遺物は、ピット8から黒色土器碗(図27-34)が出土した。また、ピット11を切るピット35から黒色土器碗(図27-35)と土師器羽釜(図27-36)の破片がまとめて出土した(図26)。図27-35の黒色土器碗はピット8から出土した細片と接合する。図27-34, 35ともにA類で、高台が付く。10世紀のものである。

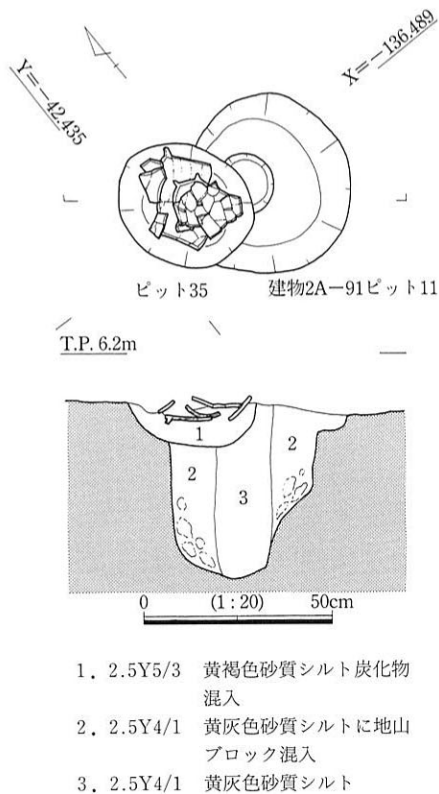


図26 建物2A-91 P11・P35 平面・断面図

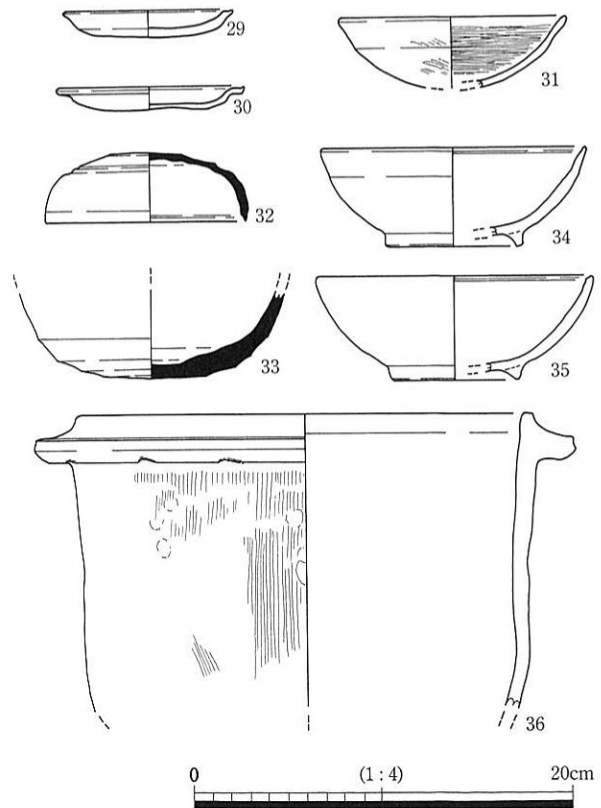


図27 A地区第3面 遺構内出土遺物実測図

土師器羽釜（図27-36）は摂津C型と分類されているもので、短い口縁が特徴である。

これらの遺物は11世紀初頭を下限とする。したがって建物91の存続期間はそれ以前に求められる。尚、ピット1からは須恵器坏蓋・坏身（図27-32・33）と甕体部の破片が出土したが、これらは第4層包含層から同一個体が出土しているため、ピット掘削時に混入したものと思われる。

建物2A-92 2A区のほぼ中央、溝A-19跡北岸に位置する掘立柱建物である（図28）。2間×4間で、規模は6.4m×2.4m、計9個のピットを検出した。主軸は建物2A-91と同じくN60°Eをとる。ピットは全体的に小規模で、直径30cm以内×深さ20cm程度である。埋土も灰黄色シルトで共通している。東側に同じ埋土の細い溝を伴う（溝2A-66）。ピット72から土師器皿片が、ピット67から土師器甕片が出土したが、図化には至らなかった。

溝2A-66 建物2A-92の東側に位置する小溝である。長さ12m×最大幅17cmを測る。北から南へやや湾曲しながらのびる。建物2A-92の東片柱列からは1.2～2m程の距離を置く。埋土は灰黄色シルト単層で、建物2A-92のピットと同質である。建物に付随する遺構である可能性がある。遺物の出土はなかった。

掘立柱建物2A-93 2A区北東端の微高地上に位置する建物である（図29）。4個のピットを検出したが、柱列はさらに調査区外へと連続すると思われる。主軸はN28°Wをとる。ピットの直径は30～40cm、確認できた規模は1間×1間、柱間は2.4mで他の建物と比べて30cmあまり長い。埋土は黄灰色～ぶい黄褐色シルトである。遺物の出土はなかった。

掘立柱建物2A-94 建物2A-91と一部重複して検出した掘立柱建物である（図29）。2間×4間、北側に1間×2間の庇をもつ。主屋部の規模は8.2×3.4m、これに5.3m×0.9mの庇が付く。建物2A-91とほぼ同じプランである。主軸も同様にN60°Eをとる。ピットは直径20～30cm×深さ30cm未満のものがほとんどであるが、北東角・南東角を含むピット39・50・87は直径40cm×深さ60cm前後で大形である。ともに、柱根跡が断面で観察できた。ピット内からの遺物の出土はなかった。

この建物を構成するピットのうち、ピット37～56までは建物2A-91と同地表面で検出し得たが、ピット79と87は溝2A-14最終埋土のオーバーフローによって堆積したシルト層を除去した時点で検出した。このことから建物2A-94は、溝2A-14の最終埋土上に建設された建物2A-91に先行するものであり、建物2A

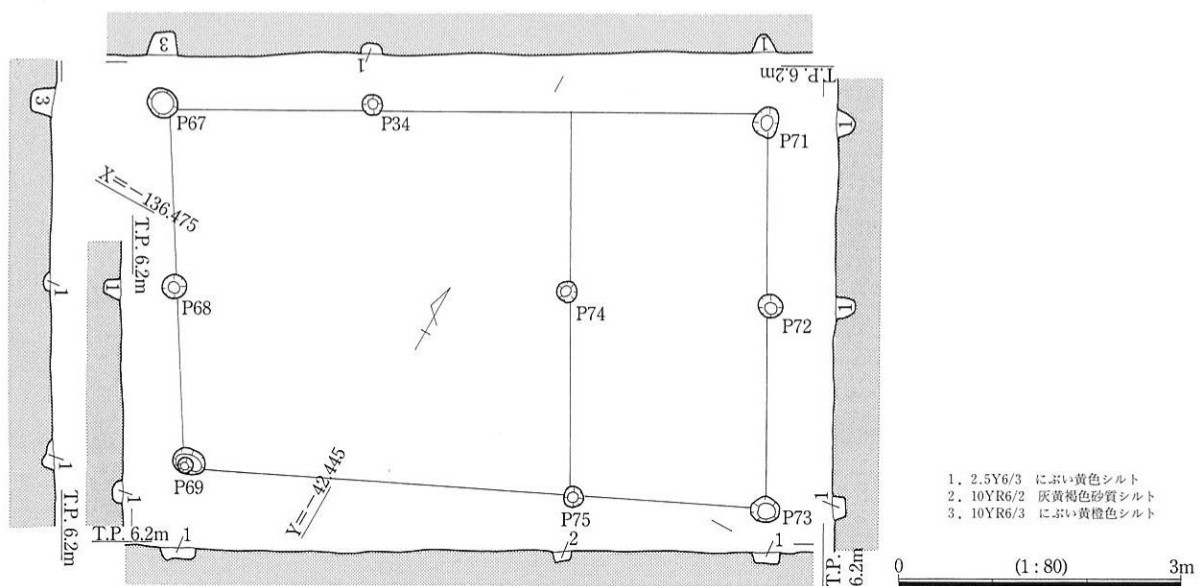


図28 建物2A-92平面・断面図

-94と溝2A-14の存続には、一部重複する時期があったものと解釈される。

以上の建物群は、微差があるものの1A区の水田畦畔とはほぼ軸を揃えており、建物と水田の同時期性を示唆している。

溝2A-14 2A区南西端から建物2A-91および建物2A-94の北辺へとのびる溝である。確認できた長さは36.0m、最大幅は1.7m、最深値は22cmを測る。埋土は下層が灰～黄灰色粗粒砂、上層は黄褐色砂質シルトである。建物2A-91を構成するピットは、この溝の上面において検出された。また、この溝の上層を除去した段階で、建物2A-94の底部ピットが検出された。

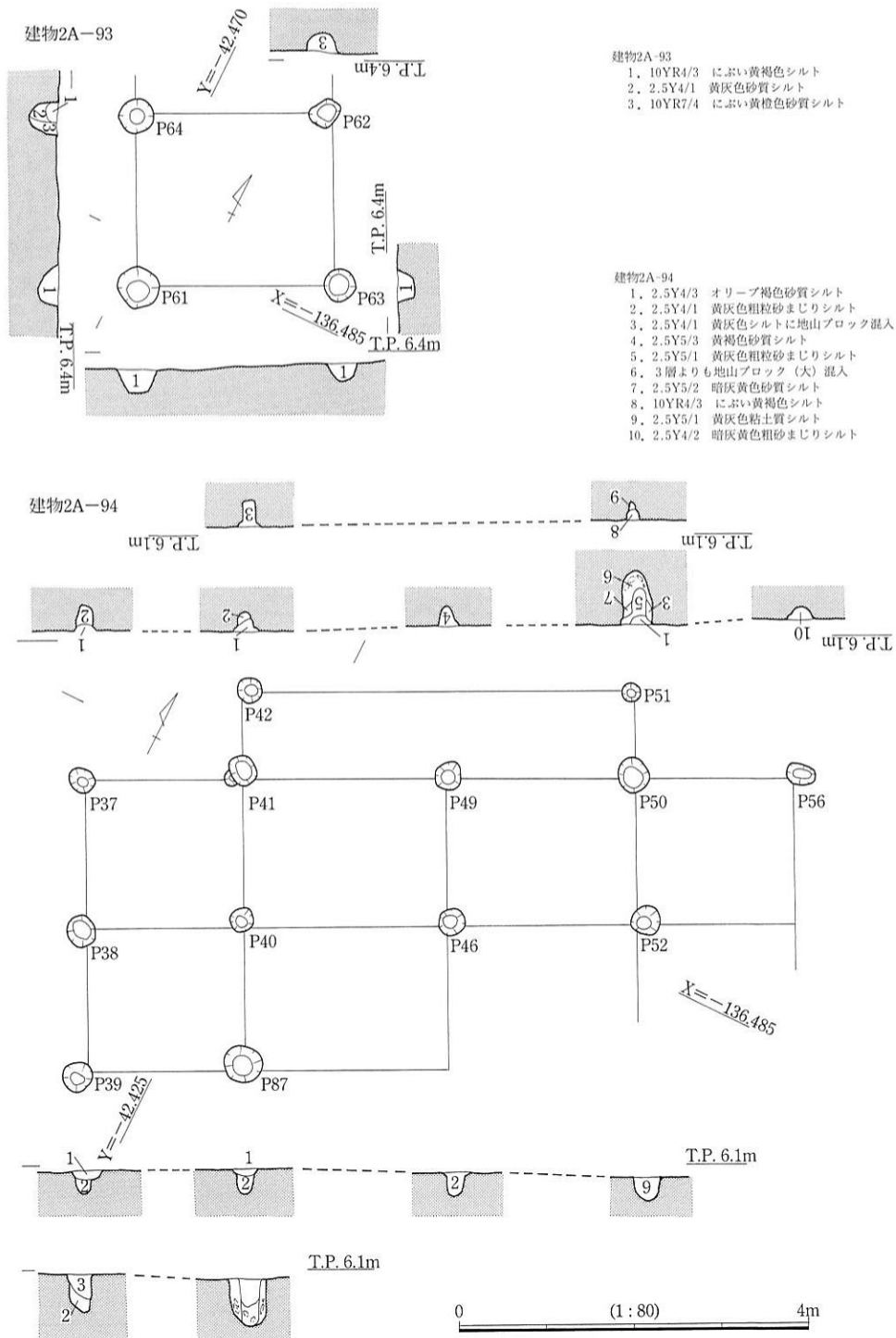


図29 建物2A-93・2A-94 平面・断面図

溝2A-17 建物2A-94の北辺で検出された溝である。確認できた規模は、長さ10m×最大幅18cm×最深値10cmを測る。埋土は黄褐色砂質シルト一種である。建物2A-94同様、溝2A-14の上層埋土を除去した面において確認した。建物2A-94に関連する遺構であった可能性がある。

その他のピット 建物2A-91・94の周辺では、このほかにピット18個を確認した(図30)。ピット43～55までは建物2A-91と同面、ピット80～90までは地山直上面での検出である。直径20cm×深さ20cm未満のものが多く、総じて浅い。このうち、ピット88・89は大型で、他とは性格を異にする。ピット88が直径50cm×深さ25cm、ピット89が直径60cm×深さ36cmで、89が88に先行することが土層観察から確認できる。上位には、溝2A-14の埋土が堆積するが、部分的に焼土と多量の炭化物が混入していた。ピットの埋土は両者とも類似し、灰黄褐色シルトに明黄褐色の地山粘土ブロックが混入する。ピット88からは黒色土器碗(図27-31)が1点、ピット89からは土師器皿(図27-30)が1点出土した。ともに10世紀の所産とみられる。なお、焼土の上から土師器皿(図27-29)が1点出土した。これは11世紀のものと推測され、ピット88・89の下限年代を決定づけるものである。この2個のピットは、平面上では建物2A-91の北辺柱列に並び、丁度柱間に掘られているように見える。しかし、土層観察からは、ピット88・89の上面に溝2A-14の最終埋土が覆い、建物2A-91のピットはさらにその上から掘り込まれていた。このことから、ピット88・89が建物2A-91に付随する遺構であるとは考えにくい。

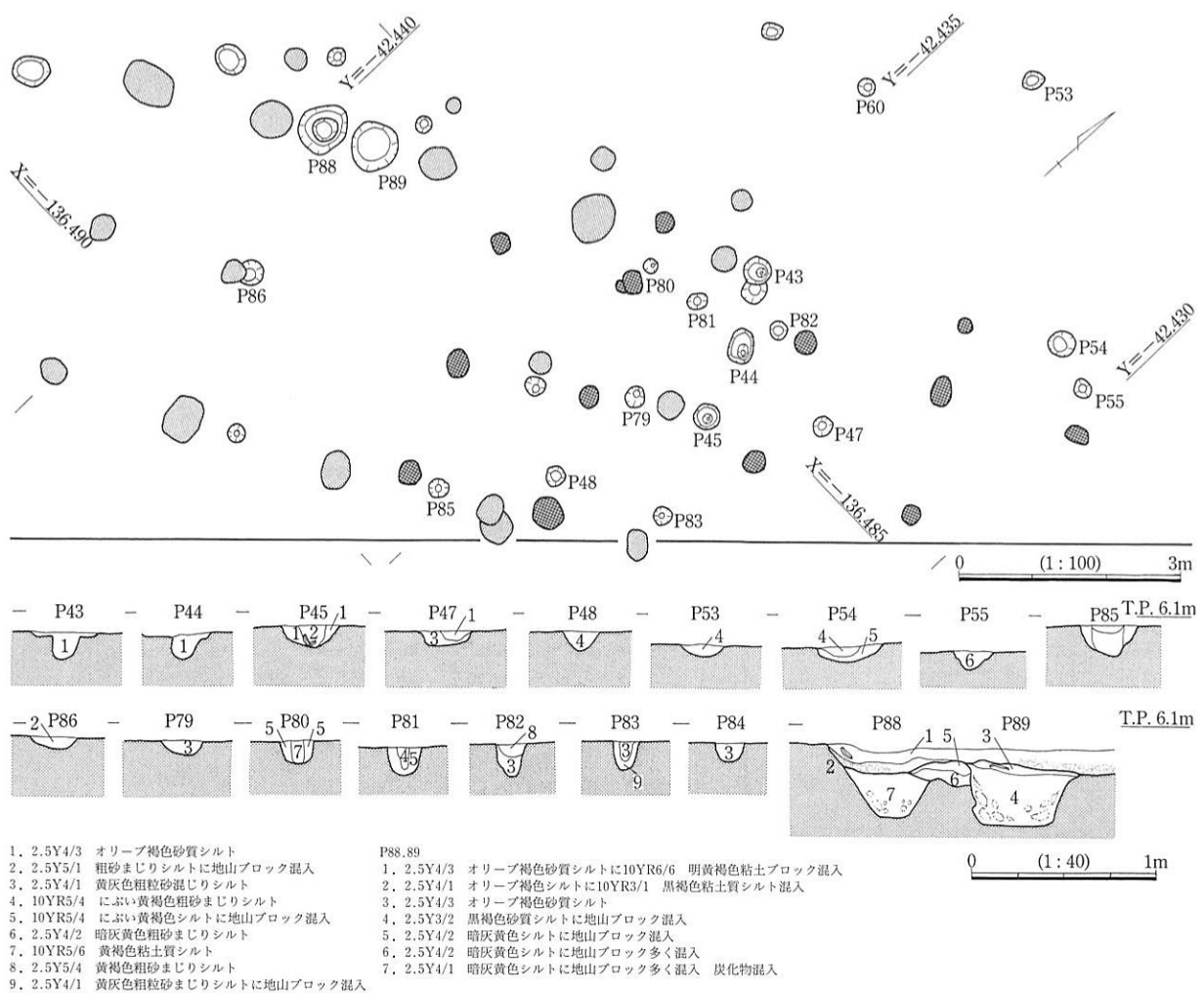


図30 A地区第3面検出ピット 平面・断面図

第5節 中世～近世の遺構と遺物

中世から近世にかけての遺構は、第3層の上面において検出された（第2面・図31）。

第3層は暗灰黄色粘土質シルトを主体とする耕作土層である。他の層に比べてしまりがよく、瓦器や土師器を多く包含する。1A地区では15cm程度の厚みをもって堆積するが、2A地区では南西にむかって徐々に薄くなる。

第2面は、調査区内全域で耕作地跡を検出した。平安時代には居住区であった2A地区も、中世には水田として利用されたようである。第3面と同様に、調査区内の標高は依然として2A地区南西部が最も高く、1A地区東部が最も低い。しかし、なだらかな勾配を持つ奈良時代までの遺構面とは違って、水田区画ごとに階段状を呈していたと思われる。

第2面は、遺構の埋没過程と遺物の出土状況から、2時期に分けて図示した。古相である第2-1面では、1A区東端において大規模な落ち込みを検出した。また新相である第2-2面では、耕作に伴う区画溝と杭列・足跡・井戸等を検出した（図31）。

落ち込み1A-12 1A区北東部に位置する大規模な谷状の落ち込みで、南東方向へ開析する。検出した平面は三角形、断面はV字形を呈する。長さ13m×最大幅10m×深さ1.6mを測るが、さらに調査区外へと続く。埋土は、大きく3層に分けられる。上層はシルト質で、混入する遺物は第2層と類似する。中層は、細粒砂の堆積であり、下層は青灰色の粘土および粘土質シルトである。上層は、ほぼ均一の厚さで堆積するが、中層は頭である北西端で20～30cmと最も厚く、南東にむかって徐々に薄くなる。

掘削は、上層・砂層・下層を順に除去する方法でおこなった。上層を除去すると、谷頭近くの砂面上に杭列と埋木があらわれた（図32）。

杭は落ち込みのカーブに沿うものと、埋木を固定するように打たれたものがある。すべて開析方向にむかって50～60°の角度で斜めに打ち込まれていた。杭自体には、刺部の削り出し以外、特に加工はみられなかった。

埋木は、長さ2.7m×直径20cm程度、枝を払った幹部分である。落ち込みを横切るように配されていた。表面断面ともに顕著な加工痕は認められなかった。これは、井戸1A-10から汲み上げた水を一次貯水する堰の役割を果たしていた可能性がある。

次に中位の砂層を除去すると、壁面に段が確認された。（図33）この段階で落ち込みの左右2個所で井戸を検出した（井戸1A-17・18）。最後に下層を掘削すると、底面が確認された。露出した地山は礫と砂質シルトが層状に重なっており、底部からは常に湧水が認められた。

遺物は上下両層から出土した（図34）。図35-43～52が上層から、53・54が下層からの出土したものである。

図34-43は小型の鉢形を呈する須恵器である。器壁を屈曲させて稜をつくり、口縁部はやや丸みをもって内傾する。外面は底部にはヘラケズリが施され、体部から内面にかけては回転ナデを施す。類例を見ない器形であるが、調整技法から6世紀の所産であろうかと推測される。

図34-44は青磁の鉢である。外面に退化した画花文を描く。14世紀のものである。

図34-45は瀬戸・美濃系の陶器皿である。釉は黄オリーブ色を呈する。口縁部の釉は、使用のため剥落している。高台と底面の釉は、一部剥離している。17世紀初頭のものである。

図34-46は灰白色を呈する土師器の皿である。内面に強いヨコナデが残る。14世紀のものである。

図34-47は肥前系の染付碗である。器高が低く、器壁が薄い。外部口縁に風景を模した絵付を施す。18

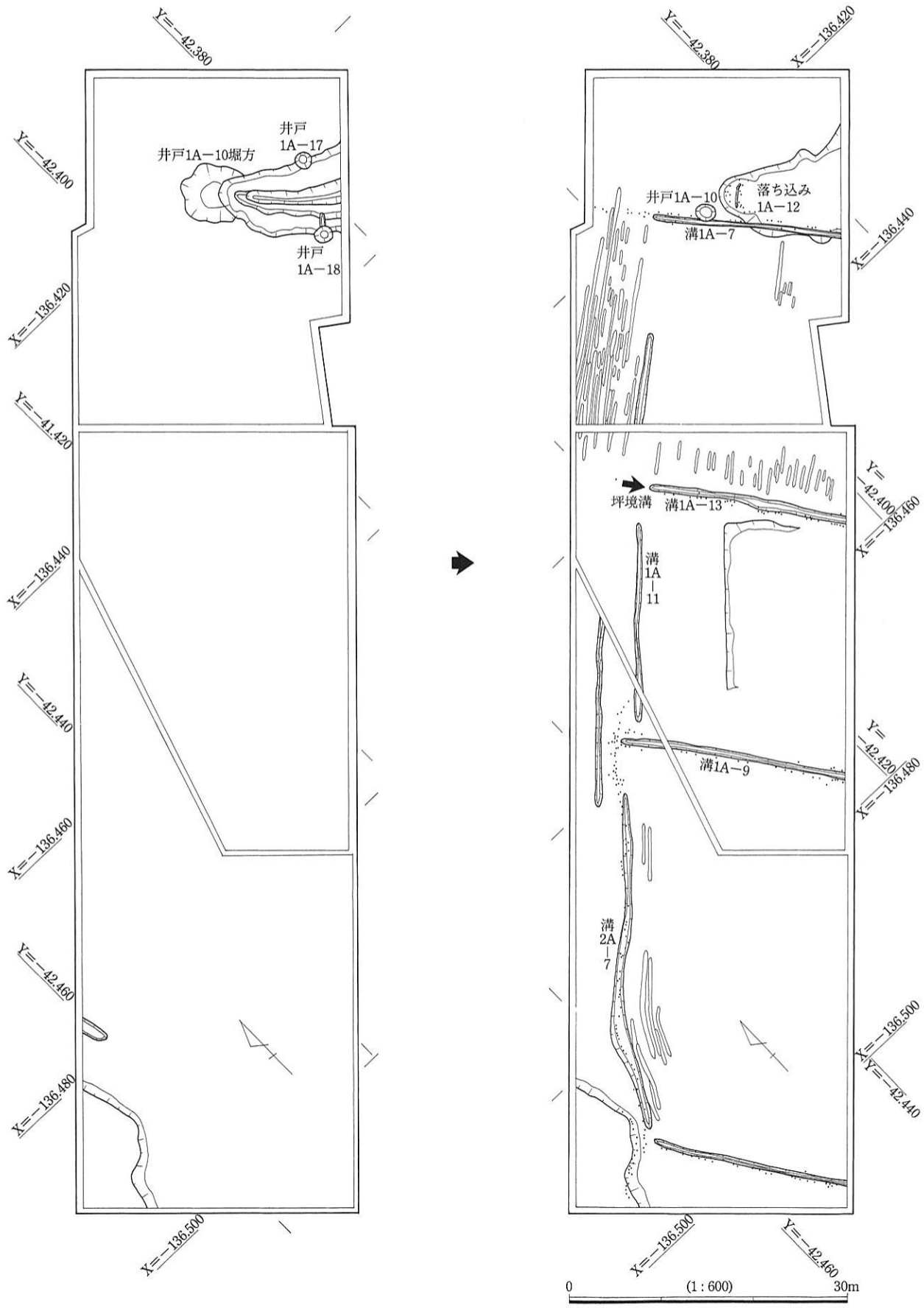


图31 A地区第2面 平面图

世紀中期のものである。

図34-48・51は黒褐色の鉄釉が施された、瀬戸・美濃焼の天目茶碗である。48は口縁部のみ、51は底部のみが出土した。51は高台を作らず、糸切り痕を底面に残す。使用后、縁辺を円形に打ちかいて、二次利用したものと思われる。ともに16世紀後半期のもものとみられる。

図34-49は備前焼の壺である。器壁を外反させて折り曲げて口縁部を成形する。本来は口径50cmをこえる大型品であったと思われる。

図34-50は白磁碗の口縁部である。外面は口縁部にのみ釉を施す。10～11世紀のものである。

図34-52は波佐見焼の三股青磁皿である。外面には把手（装飾？）を付着させた痕跡があり、器壁にキズをつけ、把手部分を接着させた手法が観察できる。内面には草花を象ったと思われる文様が片切彫で陰刻されている。高台端部は無釉で、はなれ砂が付着していた。17世紀中期頃のものである。

図34-53は東播系の捏鉢である。内面には、ナナメ方向になでた痕跡が残る。外面は、強い回転ナデを施す。

図34-54は土師器の羽釜である。復原口径は16cmで、一般的な物に比べて小型の製品である。ほぼ垂直に立ち上がる口縁と、端面をなでて外反させた口縁部をもつ。12世紀後半～13世紀中頃の所産である。落ち込み底面直上の粘土層から出土したことから、落ち込みが埋没しはじめた時期にもっとも近い年代の遺物であろうと考えている。

井戸1A-10 落ち込み1A-12の頭に北接する井戸である。井戸1A-10は近代の遺構であるが、落ち込み1A-12との関係から、ここに記述した（次節図37）。直径6.6～7 m×深さ2.7mの巨大な掘り形をもつ。掘形の断面はU字形を呈し、底面の標高はT.P. 2 m前後を測る。埋土は拳～人頭大の地山ブロックを多量に含む砂質シルト一種であった。これは掘削後、時期を経ずして埋められた状況を示している。土師

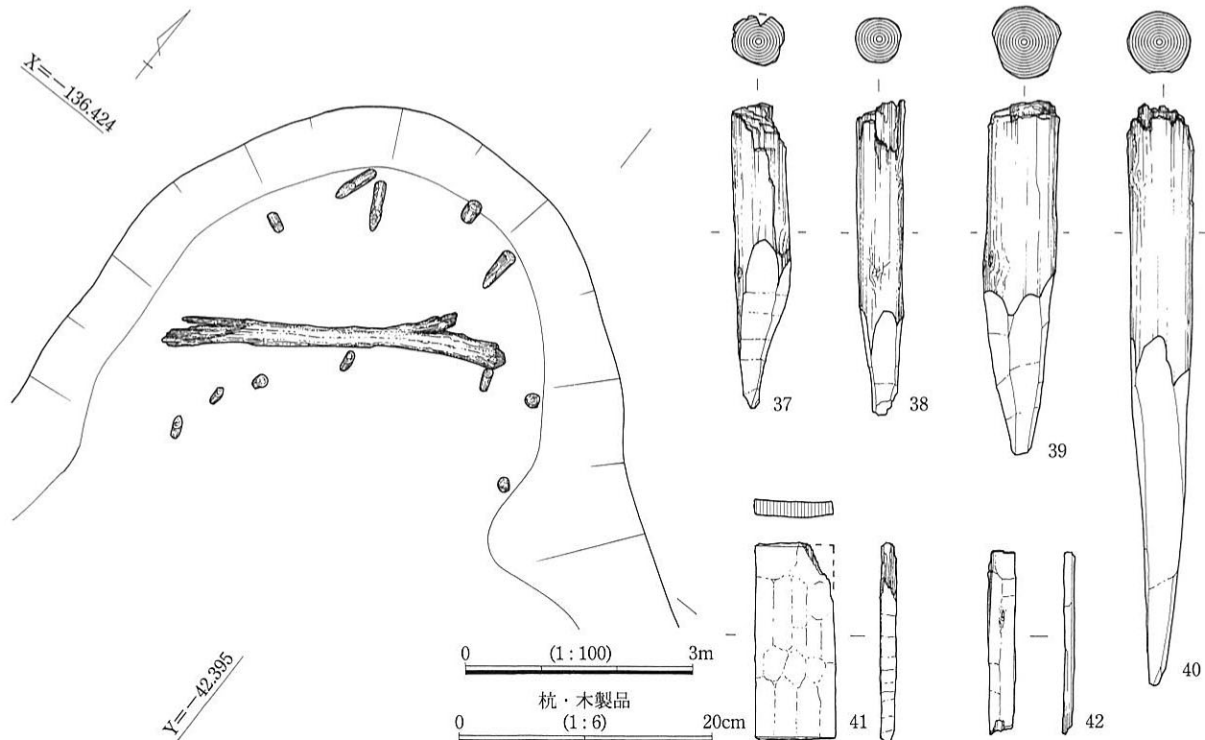


図32 落ち込み1A-12上面 遺物出土状況図

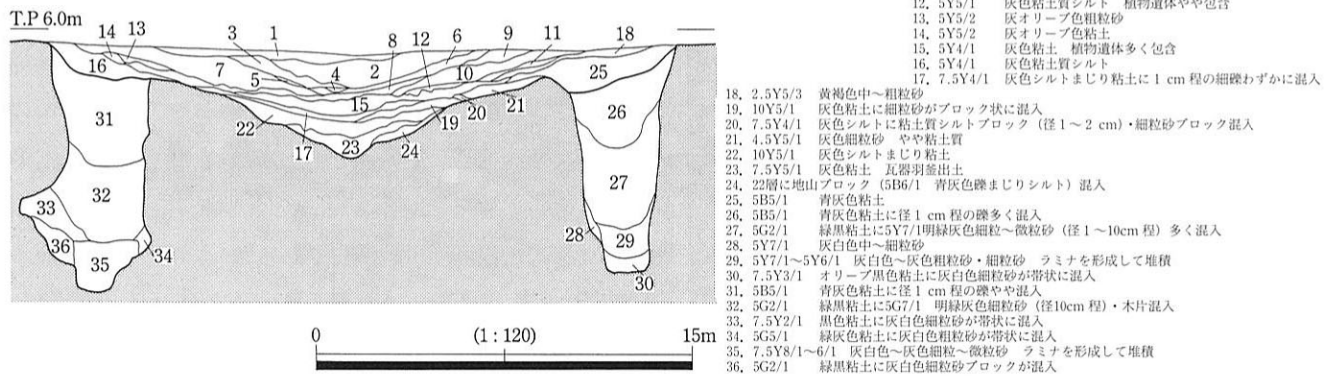
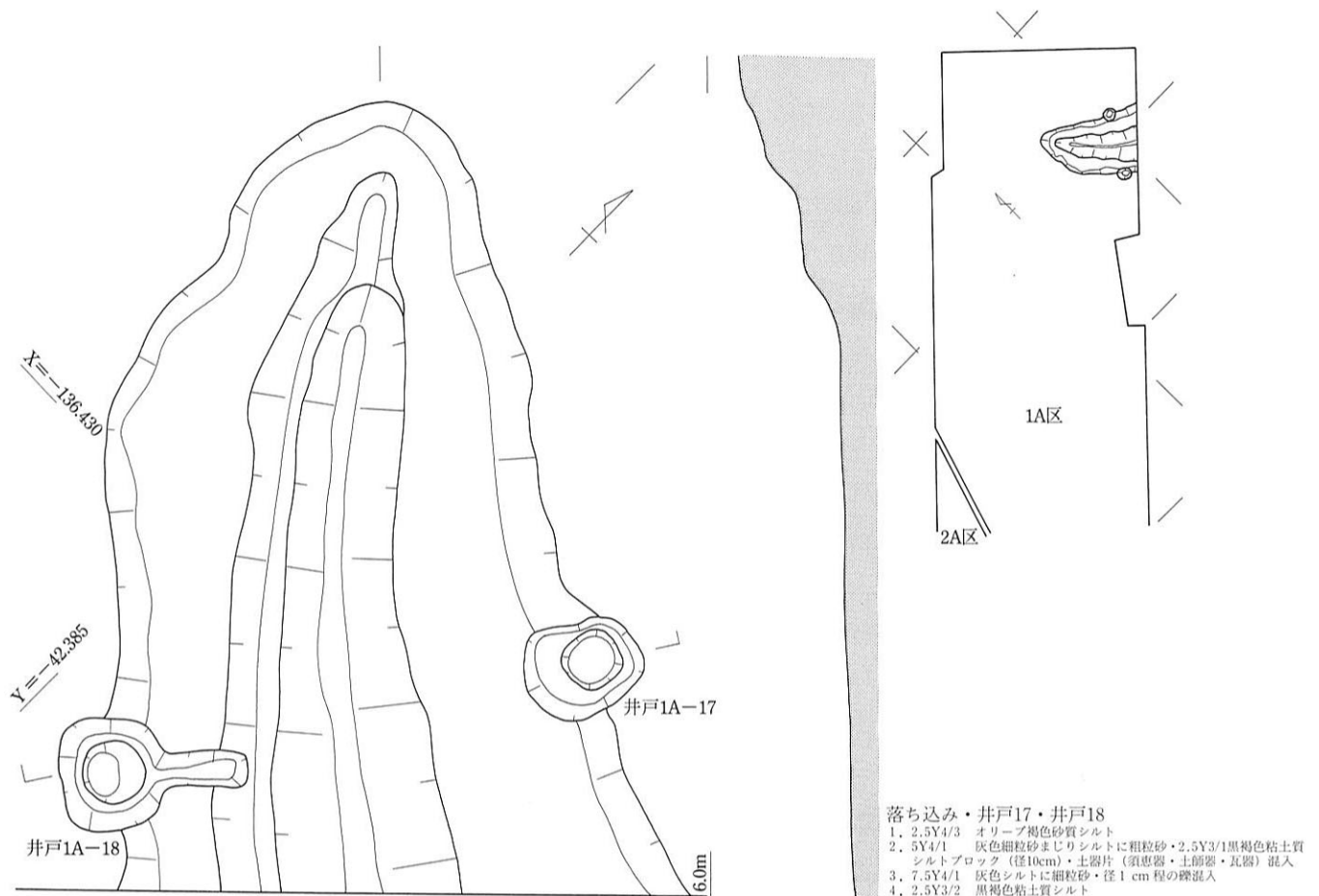


図33 落ち込み1A-12 平面・断面図

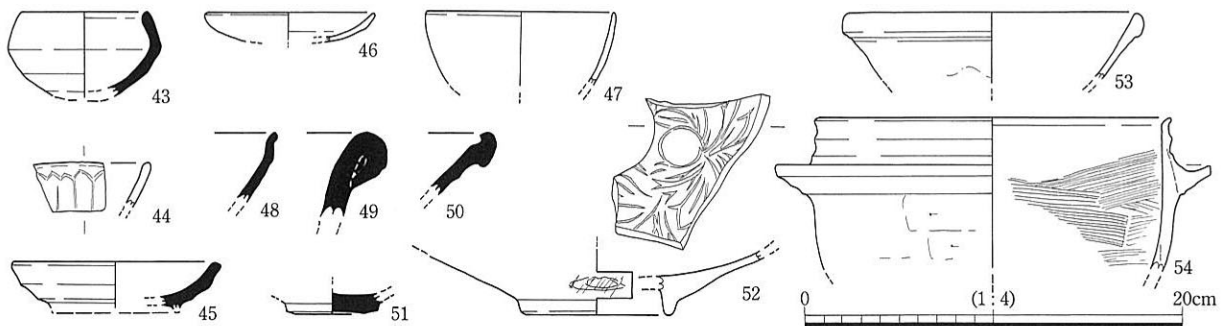


図34 落ち込み1A-12 出土遺物実測図

器皿の口縁部 1 片のみが出土した。

掘形の中央部分に平板を桶状に組み合わせた井戸枠が、設置されていた。3 段までは確認し得たが、下部構造は未調査のため不明である。枠材は平板で、長さ80cm×幅12～15cm×厚さ 2 cm 前後のものを、1 段につき19～20枚使用している。板を円形に配し、その上を竹タガで固定していた。井戸枠の直径は70～80cm 程度で、地表面における最終時期の開口形態は、1.6m を測る円形である。井戸枠内の埋土は黒オリーブ色粘土質シルト（第 1 層）と土圧によって沈み込んだ大正時代以降の盛土であり、この井戸の最終埋没時期が近現代であったことを示している。井戸枠内部からは染付碗・陶器甕片・井戸瓦等が出土した。

井戸1A-17・18 落ち込み1A-12の東西において検出した 2 基の井戸である。落ち込み埋土上層を除去した時点で確認した。

井戸1A-17は、上面では直径1.6～2 m を測る楕円形、底面では直径90cm を測る円形を呈する。深さは3.6m で、標高は T.P.2.4m である。埋土の大半が粘土であったが、地表面から 3 メートル以下は、細粒砂が堆積していた。

井戸1A-18は、上面では直径1.6m、底面では直径が60cm を測る。深さ3.9m、底面の標高は T.P.1.8 m で、井戸1A-17よりも若干深い。T.P. 3 m 付近で、壁面が大きくオーバーハングしているが、これは崩落によるものと思われる。また、掘削段階において、井戸1A-18から落ち込みへとつづく溝を検出した。長さ1.6m×幅25cm×深さ15.20cm 程度で、埋土は灰色粘土の単層である。井戸から汲み上げた水を落ち込みへと配水する機能を果たしていたと思われる。

井戸1A-17・18は上面からの掘削が困難であったため、重機による掘り込みを井戸の南側に設け、横面から土層観察をおこなった。危険を伴うため井戸埋土の除去作業はおこなわなかった。このため、遺物の混入状況を把握することはできなかった。

以上 3 基の井戸と落ち込みとの関係を考慮しながら、それぞれの機能と存続時期を推察すると以下のようなになる。まず中世期において、湧水地点に谷状の掘り込みが設けられた（落ち込み1A-12）。これは取水と排水を目的としたものである。この掘り込みは徐々に埋まり、幅 3 m 前後の溝として形骸を留めた。この段階で、両脇に井戸 2 基が設けられた（井戸1A-17・18）。井戸1A-18に接して掘られた配水溝は、落ち込み中央に流れ込んでいたと思われる。その後近世に至ると、落ち込みの北側に井戸1A-10が設けられる（巨大な掘形の中央に井戸枠を据えて埋め戻す工法は近世的な手法である）。井戸1A-10は取水用として近代まで機能し、堰を備えた落ち込みは汲んだ水を一時溜める施設として使われた。土地の利用状況から、汲み出された水は、農業用水として使用された可能性が高い。

坪境溝・区画溝 杭列を伴う区画溝を北西－南東方向に 4 本、北東－南西方向に 4 本検出した。2A 地区北西部では、地形の影響を受けた溝2A-7 がやや湾曲するものの、その他はほぼ直線にのびている。北西－南東方向 4 本の溝のうち、N33°E の角度をもつ溝1A-13は「坪境溝」である可能性が高い（第 8 節詳述）。幅は20～25cm 程度、埋土は灰色もしくは黄灰色の中～粗粒砂である。北西－南東方向 4 本の溝の間隔は、それぞれ30m・27m・42m で、平均33m である。

足跡 第2-2面では、薄く堆積する粗粒砂が所々で認められたが、特に1A 地区中央南東部において顕著であった。これは、この地点の標高がやや低く、上層の巻き込みを免れたためと考えられる。この付近で人間および牛馬の足跡を検出した。特に人間の足跡は、歩行の痕跡を克明に残していた。爪先から踵までは約24cm で、歩幅は50～55cm 程度であった。

第6節 近世から近代の遺構と遺物

近世から近代にかけての遺構面は、第2層の上面において検出した(第1面)。第2層は酸化が進んだ黄灰色砂質シルト層で、約10~20cmの厚みをもって、A地区の全域に堆積していた。この層は、中世から近世の遺物を包含し、下限年代は18世紀頃と思われる。したがって第1面の上限年代もこの頃に求められる。

第1面では、ほぼ調査区の全域にわたって水田跡が検出された。地山面の起伏により勾配を保ってきたA地区であったが、この時期には段をもつ平田として整備されたようである。標高はもっとも高い2A区北西部でT.P.6.3m、もっとも低い1A区東部ではT.P.5.9m、およそ40cmの高低差を測る。

水田・鋤溝 第1面では1A地区の一部を除いた調査区内の全域で鋤溝が検出された。規模は大小多様で、長さ20cm、12.5m×幅10cm、50cmを測る。

水田は、調査区内の標高差の大きい地点に段を設け、その上に畦畔を築いて営なまれた。この大畦は、断面観察において幅60cm×高さ15cm程度の隆起をもち、北西-南東方向に調査区内を横断する。これは、第2面で確認された区画溝の方向を踏襲したものである。鋤溝は、この大畦に平行する方向をもつものが大半であった。また、調査区南西側にはこれに直交するものも若干認められた。

また、1A区の中央部には鋤溝が稀薄な範囲がある。ここは第2面で坪境と推定される溝が通っていた地点である。明治38年の地図には、調査区内に里道が通っていたことが記されており、坪境に相当するこの地点が里道跡に相当するのではないと思われる。

埋桶2A-2 2A区の北東に位置する。板材を桶形に組んで底板を入れたもので、直径82cm×深さ24cmを測る。埋土は褐色シルトで黄褐色の細かい粘土ブロックが混入していた。今日の田畑でも見られる肥料の仮置き場である。桶内から染付椀と石製硯の破片が出土した(図40-138)。

土坑2A-7 埋桶2A-2の南側に位置する。長軸1.8m×短軸1.2m×深さ40cm、平面楕円形を呈する土坑である。埋土は灰黄褐色の粘土質シルトで、炭が少量混入する。土坑内には合計8本の杭が乱立するが、土坑2A-7に伴うものは、4本のみである。2本の杭が土坑内に打たれ、それぞれに1本ずつ丸木が添えられている。この丸木は底部が平坦で、杭の様に削り

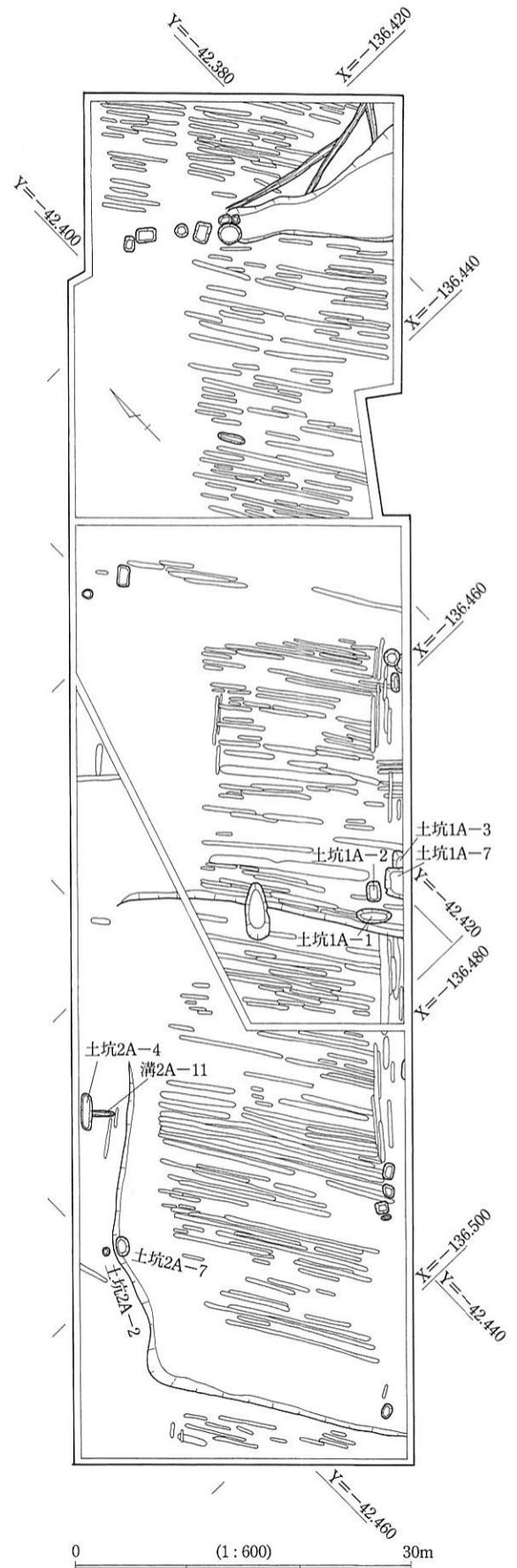


図35 A地区第1面 平面図

出されたものではない。さらに埋土上面において、直径5 cm×長さ40cmの丸木材が1本づつ置かれていた。これも近代の田畑にみられる、藁と堆肥を混和させるための施設であると考えられる。丸木材付近から、播鉢の口縁部が出土した(図40-121)。

土坑1A-1 土坑1A-1～7は、1A区南東壁に位置する土坑群である。A地区では水田脇に用途不明の土坑を多く検出した。

土坑1A-1は長軸1.6m×短軸0.7m×深さ10cmの楕円形を呈する。底面はほぼ平らである。埋土は黄褐色砂質シルトである。遺物の出土はなかった。

土坑1A-2 土坑1A-1の東に位置する。長辺0.9m×短辺0.5mの長方形を呈する。最深値は5cmで皿状

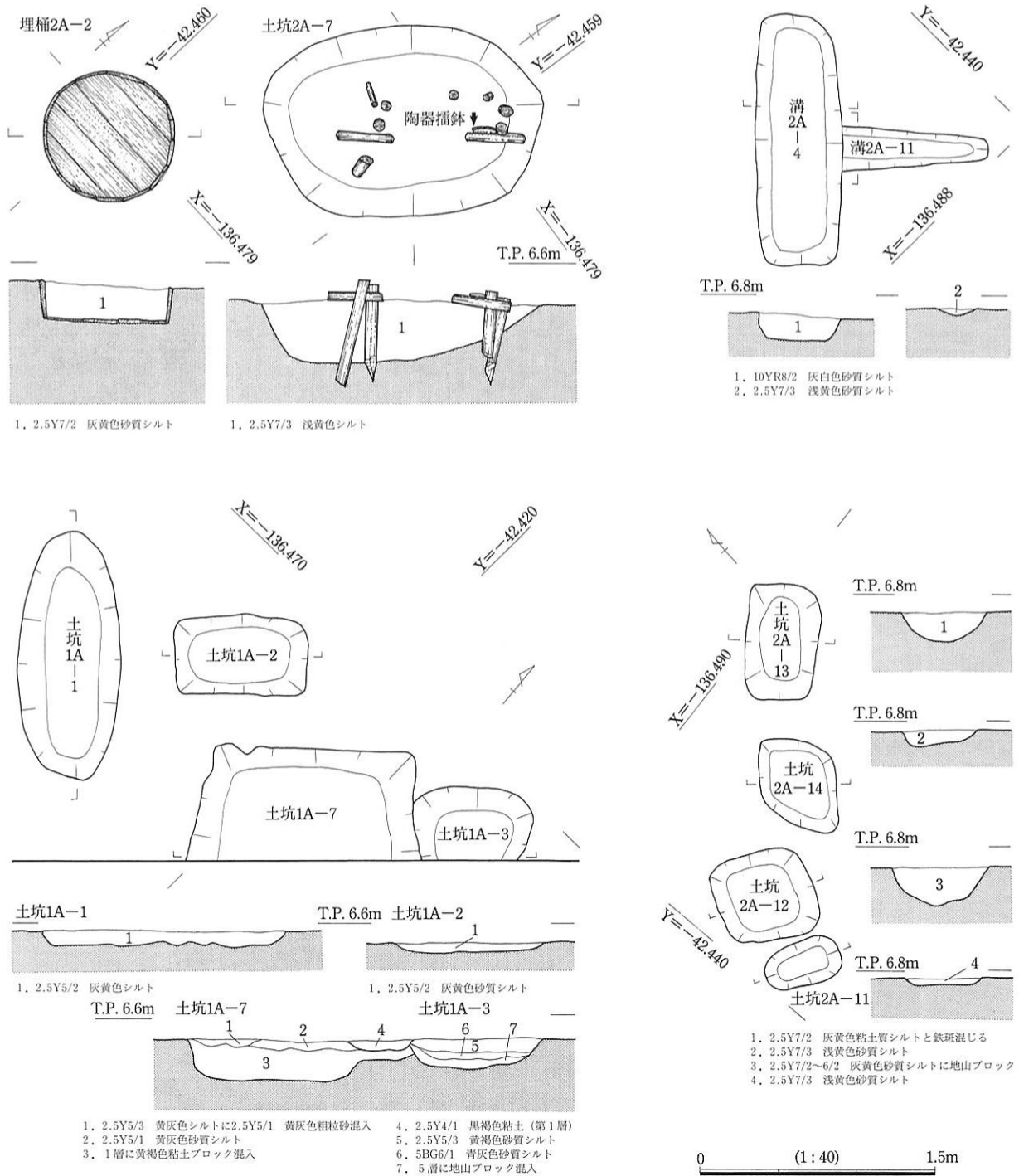
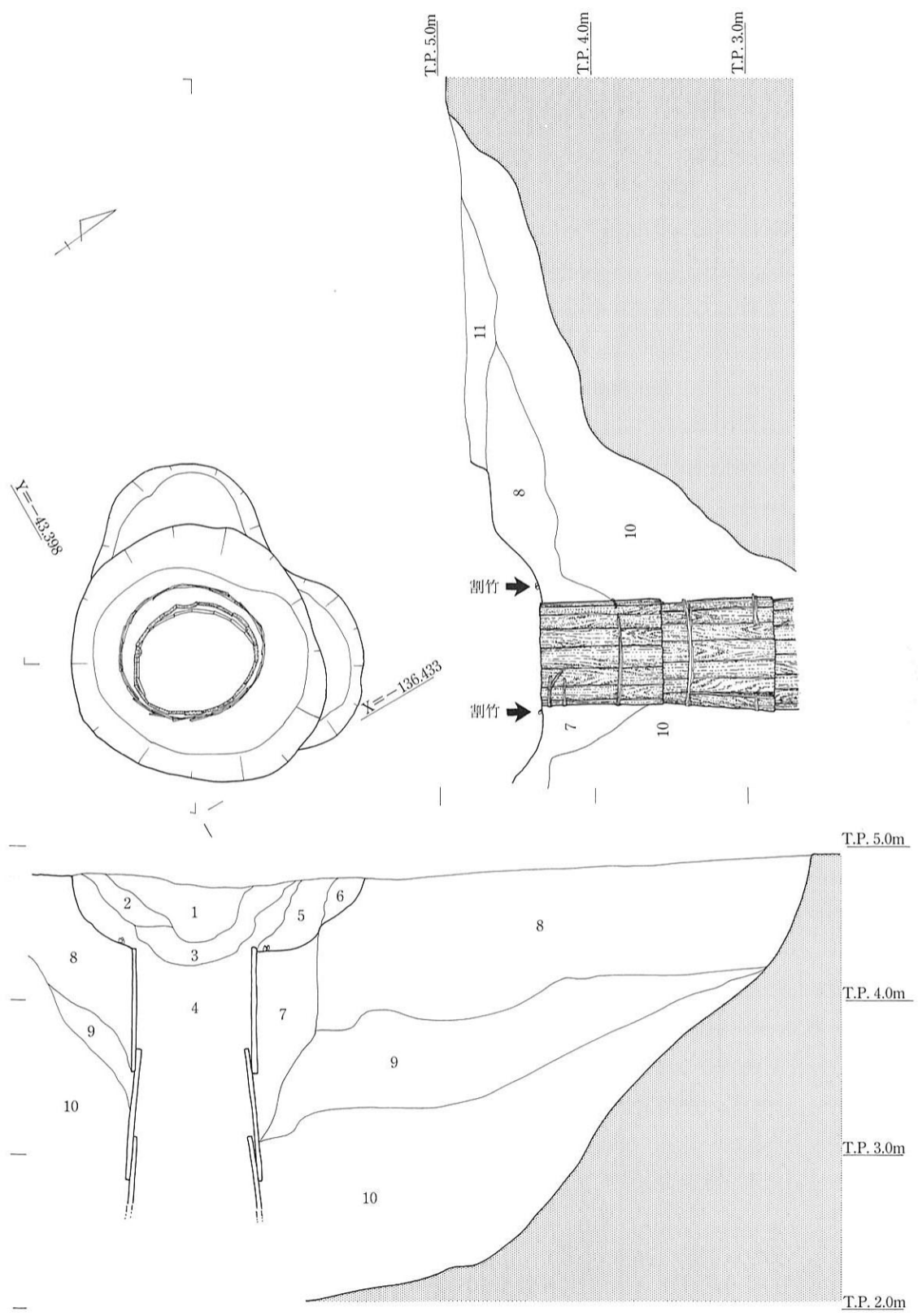


図36 A地区第1面 遺構平面・断面図



井戸 1 A-10

- | | |
|---|--|
| 1. 10Y5/1 灰色粗粒砂 角礫多く混入 盛土 | 8. 7.5Y4/2 灰オリーブ色シルトに粘土ブロック混入 |
| 2. 10Y5/1 灰色粗粒砂まじりシルト | 9. 7.5Y4/2 灰オリーブシルトに7.5Y5/1 灰色シルト質粘土ブロック混入 |
| 3. 10Y4/1 灰色粗粒砂に粘土ブロック混入 | 10. 7.5Y5/1 灰色シルト質粘土 |
| 4. 7.5Y3/1 オリーブ黒色粘土質シルト (1層近代耕作土) | |
| 5. 5PB5/1 青灰色シルト | |
| 6. 5PB5/1 青灰色シルトに2.5Y5/6 黄褐色シルトブロック混入 | |
| 7. 5PB5/1 青灰色シルトに7.5Y3/2 オリーブ黒色粘土ブロック混入 | |

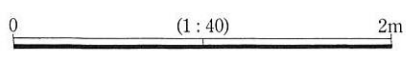


図37 井戸 1A-10 平面・断面図

の底面をもつ。土坑1A-1同様、上層の床土を埋土とする。遺物の出土はなかった。

土坑1A-3 土坑1A-1の南に位置する。一端を側溝に切られるが、直径0.7m×最深値20cmの円形とみてよい。埋土はにぶい黄褐色シルトに粗流砂が混入する。遺物の出土はなかった。

土坑1A-7 土坑1A-3に接して位置する。長辺1.5m以上×短辺1.3m×深さ25cmの長方形である。長辺は調査区外へと続くため、計測は不可能であった。埋土はにぶい黄褐色シルトで、上位に褐灰色細粒砂が堆積する。染付椀片が出土した。

土坑2A-11 土坑2A-11～14は、2A区中央南東側側溝付近に位置する土坑群である。2A区の土坑は1A地区のものに比べて概して小規模である。

土坑2A-11は長軸0.5m×短軸0.3mの楕円形を呈する。皿状の底面をもち、最深値は3cmである。埋土はにぶい黄褐色シルトで、染付椀片が出土した。

土坑2A-12 土坑2A-11に隣接する土坑で、1辺0.6mの菱形を呈する。椀形に掘られており、中央の最深値は25cmである。埋土はにぶい黄褐色シルトでやや粘質を帯びる。遺物の出土はなかった。

土坑2A-13 土坑2A-11の北東に位置する。長辺70cm×短辺40cm×深さ20cmの長方形を呈する。断面は椀形、最深値は20cmである。埋土はにぶい黄褐色シルトで、陶器甕片が出土した。

土坑2A-14 土坑2A-12と土坑2A-13との間に位置する不定形土坑である。深さ10cm程度の浅いものである。埋土はにぶい黄褐色シルトで、染付片が出土した。

第7節 包含層出土遺物

この節では、A地区の包含層から出土した遺物のなかから図化が可能な物を選出して掲載した。

第4層包含層出土遺物（図38） 第4層からは、弥生土器・須恵器・土師器・黒色土器・瓦が出土した。第4層の下限年代は10世紀中期頃であるが、これは上面である平安時代の遺構面に近い地点より出土したものを含んだ年代幅である。出土遺物の個体数では、6世紀後半から8世紀の須恵器がもっとも多く、土師器他を凌駕していた。

図38-55～62、64～71は、須恵器である。

図38-55・57は、坏蓋の天井～口縁部である。ともに天井部にはヘラケズリ、口縁部から内面にかけては回転ナデを施す。57の外面には、強い横ナデによる段が残る。溝2A-11近辺から、ほぼ完形で出土した。6世紀末～7世紀初頭のものである。

図38-56・62は、坏身の一部である。56は、受部破片で、内面外面ともに回転ナデを施す。6世紀のものである。62は、底部片であり、湾曲した底部に細い高台が付く。外面はヘラケズリ、内面は回転ナデおよび不定方向の指ナデが施されている。特に内面のナデは丁寧であるため、滑らかである。7世紀のものである。

図38-58・59は、つまみを持つ坏蓋である。58は、鍵状の口縁端部と乳頭状のつまみを持つのが特徴的である。内外面ともに指ナデを施す。内面に煤が付着していることから、孔を設けた香炉の蓋である可能性がある。59は、口縁部のみの出土である。58に比べて扁平で、稜および口縁端部の屈曲がゆるやかである。ともに8世紀のものと思われる。

図38-60は、壺類の底部である。底縁端に高台を貼付け、なでて接合させている。調整は内外ともにナデを施すが、内面のナデは粗く、段が残る。焼成は甘く、内面は灰褐色を呈する。底部外面に墨痕および浅い凹みが認められることから、破損後に硯として転用されたものと見られる。8世紀前半期のもの

である。

図38-61は、台付鉢である。蓋坏を反転させて短い脚部を付した形状を呈する。杯部は浅く、厚い器壁をもつ。脚部は、基部から外反させて端部を短く屈曲し、接地面をつくる。坏部外面に一部ヘラケズリが認められるほかは、すべてナデを施すが、外面に比べて内面のナデは粗く、筋や粘土塊が付着する。焼成が甘いため、底部内面は褐色を呈する。製作時期は6世紀末期～7世紀前半期頃かと思われる。

図38-64・65は、甕の口縁部である。64は、口縁外面をつまみなでて、断面三角形に尖らせ、その下に幅8mmの波状文を施す。内外面ともに指ナデを施し、最後に端部をなでて面を作り出している。

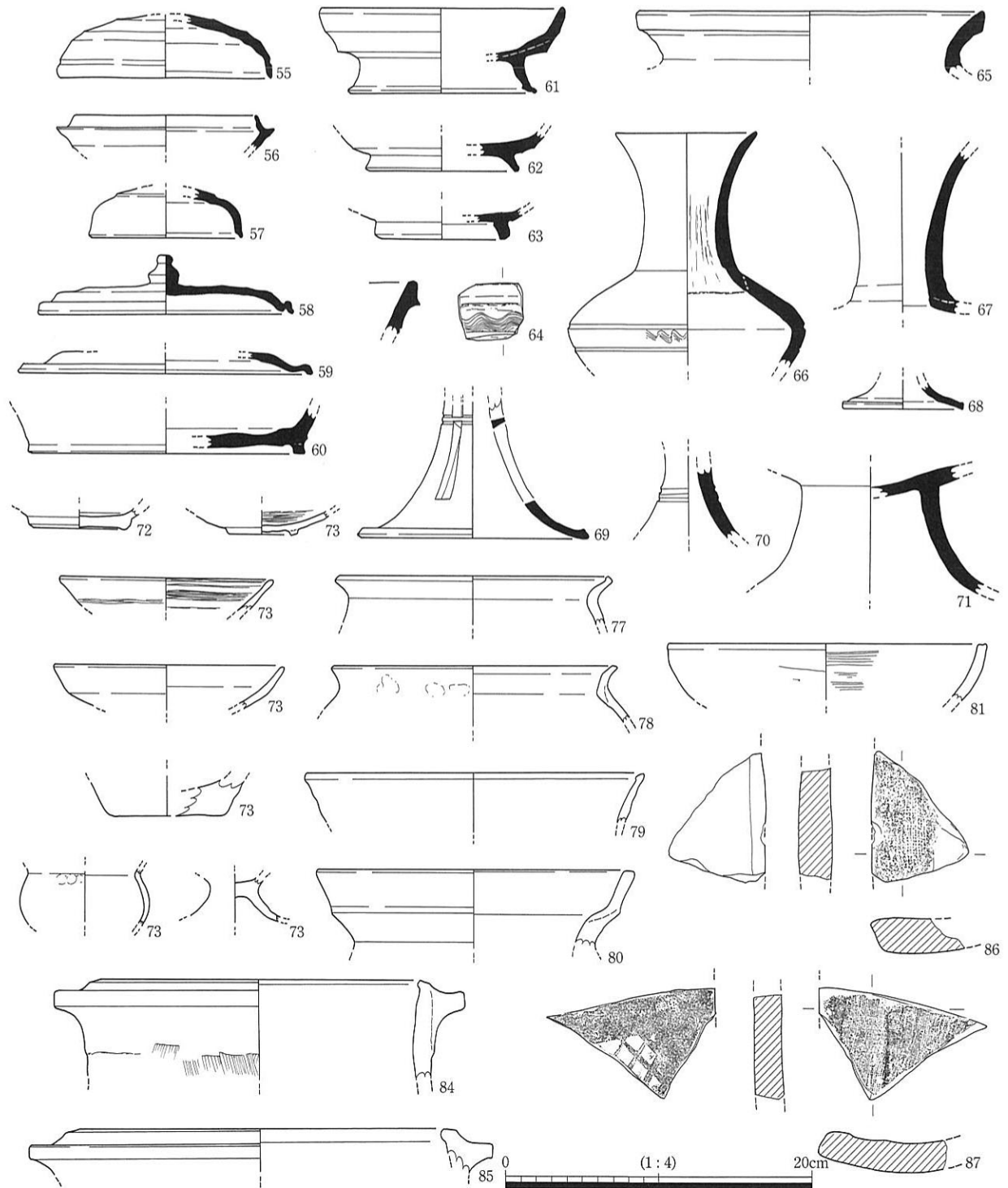


図38 A地区包含層（第4層）出土遺物実測図

図38-66・67は、長頸壺である。66は、口縁から底部まで、破片で出土した。やや丸みを帯びた稜をもつ胴部に、不明瞭な2条の沈線とその間に波状文を施す。図化はできなかったが、底部には台が付いたと思われる。調整は、内外面ともに回転ナデを施しているが、内面頸部には一部タテ方向の指ナデが認められる。また、頸部外面には右上がりの絞りがあり、頸部内面下方には絞り痕がみえる。部分的にオリブ色の自然釉が付着し、随所で火ぶくれをおこしている。7世紀のものである。67は、頸部のみの出土である。大型品であるが、調整は丁寧で胎土焼成ともに堅緻である。頸部内面に自然釉が一部付着する。7世紀末～8世紀初頭のものである。

図38-68～71は、脚部のみ出土した破片である。

図38-69は、2段3方向に長方形のスカシを持つ長脚高坏である。上下のスカシの間に2条の浅い沈線を施す。調整は内外面ともに回転ナデである。6世紀後半のものである。

図38-70は、高坏あるいは台付椀の脚柱部である。中央に幅3mm程度の沈線を2条めぐらせ、一部に工具の当痕が残る。調整は、内外ともに指ナデを施す。7世紀初頭のものである。

図38-71は、器台あるいは台付鉢の脚柱部と思われる。坏部口縁から脚部にかけて断片が出土したが、脚柱部以外は図化が不可能であった。体部の破片は全体的に丸みをもち、口縁へ向かって外反し、肥厚して方形に近い断面を呈する。脚部は裾にむかって大きく広がる様相をみせる。調整は、脚部内面から基部内面口縁にかけて回転ナデを施す。坏部内面底部は同心円状タタキの後、指ナデを施す。一般的な器台に見られるような装飾は、特に認められない。焼成はやや甘く、坏部に火ぶくれが見られる。また、広範囲にわたって暗オリブ色の自然釉が、基部内面以外の部分に付着している。これは口縁を下にして焼成したことを示している。したがって、脚部裾径よりも口径が大きな器形であると考えられ、台付鉢の可能性を掲げた。

図38-63は、灰陶陶器底部である。内面には部分的に浅黄色・黄緑色の釉が残っていたが、本来は内面全体に施釉があったようである。底面には縦長の貼り付け高台を有する。畳付には一部釉が付着する。内面と高台内の一部に墨痕が認められ、硯として使用された痕跡を残す。

図38-72は、白磁の碗底部である。底部には、断面方形の低い削り出し高台を有する。内面のみ、灰白色の釉が施されている。底部内面に使用痕かと思われる擦痕が認められる。

図38-73・74は瓦器碗片である。73は、退化した高台をもつ底部片である。外面には指ナデ・圧痕が残る。磨滅によってイブシがすべて飛んでいるため不明瞭であるが、内面には密な暗文が施されていた痕跡がある。74は、イブシがよく残っており、外面内面ともに指ナデの後横方向の暗文を施す。ともに和泉型で、13世紀のものである。この2点の瓦器碗片は、1A区西南端の第4層が薄く、地盤が高い地点より出土した。このため上位包含層からの混入品であると思われる。

図38-75・77～83は土師器である。75は、坏口縁の一部である。外面にゆるく屈曲した稜をもつ。外面内面ともに指ナデを施す。77・78は甕の口縁部である。77は屈曲して外反し、端部は受け口状に短く立ち上がる。78は立ち上がり気味に短く外反し、端部をなでて面を作る。ともに磨滅が著しく、調整は不明であった。古墳時代の製品である。

図38-79～83は、古式土師器に分類されるものである。79は甕の口縁部である。ゆるく外反して立ち上がり、端部内面に段を設ける。80は土師器二重口縁壺の口縁部であるが、段は鈍く、口縁の伸張も少ない。82は小型丸底壺の体部である。83は器台である。直線的に広がる脚部をもつ。すべて磨滅がひどく、調整は確認できなかった。布留IV型式の特徴を有することから、5世紀のものと同推測される。

図38-84・85は、土師器羽釜の鏝部である。ともに口縁が短く立ちあがる「摂津C型」と呼称される器形で、山城地域において多く出土する。84は、内面から鏝にかけては丁寧な指ナデ、体部外面にはハケメが残る。内面には炭化物が付着する。85は84に比べてやや大型であるが、胎土が粗く粗製である。ともに10世紀末～11世紀初頭のものである。

図38-76は、弥生土器壺もしくは甕の底部である。胎土には径1～4mmの白色～灰白色粒が多く混和されており、第5-2層出土の弥生土器と近似する。

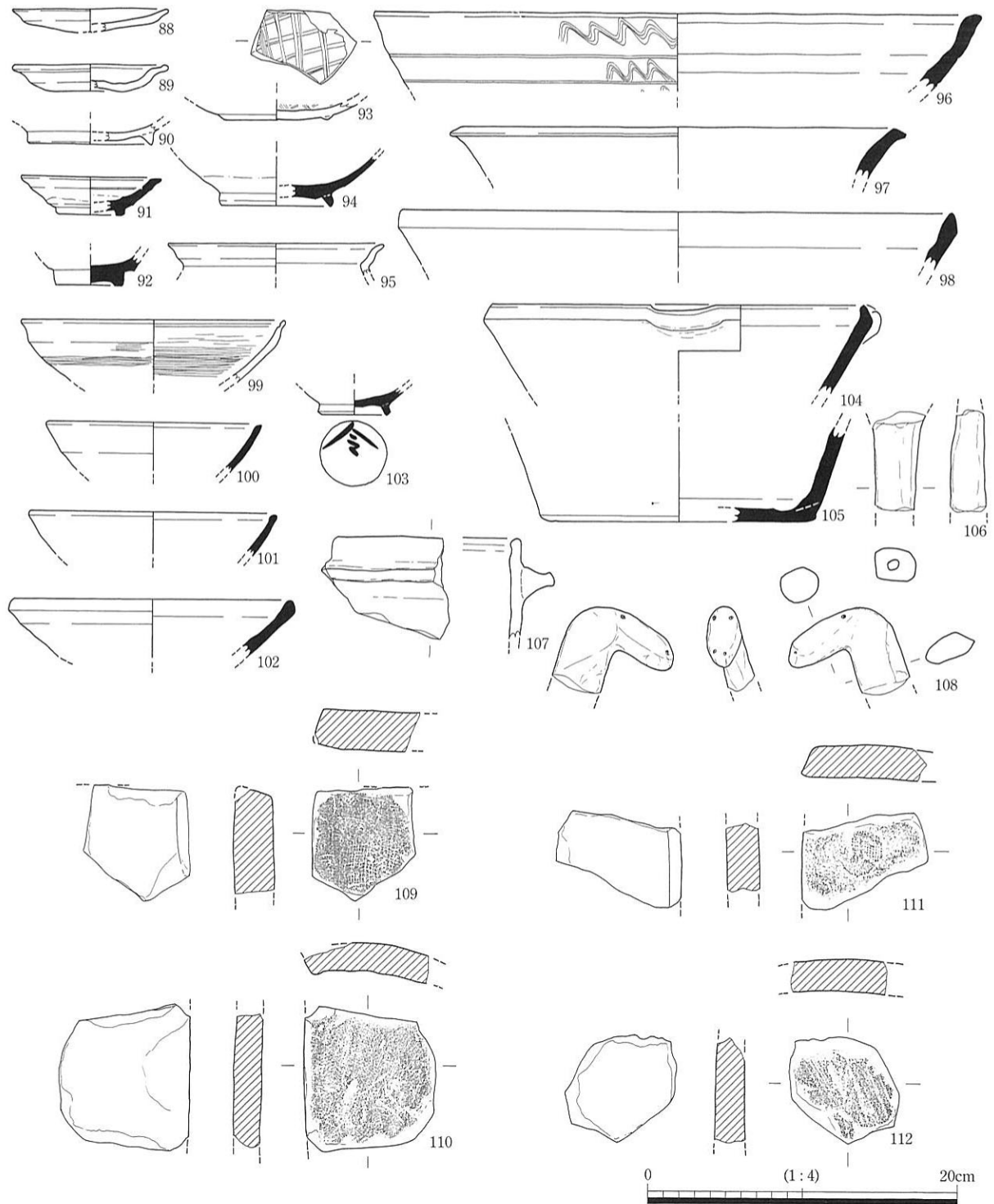


図39 A地区包含層（第3層）出土遺物実測図

図38-86・87は平瓦の一部である。86は内面に布目、外面に縄目の痕跡をもつ。色調は橙色で焼成はきわめて甘い。

図38-87は内面に布目、外面に格子状のタタキ痕をもつ。色調は青灰色で須恵質である。

第3層出土遺物（図39） 第3層からは土師器・須恵器・瓦器・陶器・瓦・土製品が出土した。

図39-88・89は土師器皿である。ともに全体復原がほぼ可能である。88は内面および外面口縁部に指ナデが施されているが、底部外面には指頭圧痕による凹凸が目立つ。89は「て」字状の口縁をもち、端部をまるくつくり、内面に段を有する。底面は、中央部を盛り上げる。12世紀のものと思われる。

図39-90は、黒色土器碗の底部である。内面黒色のA類で平らな底面に断面三角形の高台が付く。磨滅がひどく、調整は確認できなかつた。10世紀頃のものである。

図39-91・92は瀬戸美濃産の施釉陶器である。91は、ややオリーブがかつた灰釉が施された皿で、精良な製品である。内面釉表に一条の沈線、見込部に蛇の目釉剝がみられる。口縁端部は使用のため、釉が磨滅していた。また、高台は削り出しが小さく、脇に一定幅のケズリを施す。16世紀末頃の製品である。92は瀬戸美濃産天目茶碗の底部で、内面に鉄釉が施されている。17世紀前半期の製品である。

図39-93・99は、瓦器である。93は、和泉型の皿である。底部外面には退化した断面三角形の高台が貼り付けられている。内面には2条1組で格子状に暗文が施されている。12世紀頃のものである。99は、楠葉型碗の口縁部である。内面の一部にのみイブシが残存する。外面は指ナデ、内面には密に暗文を施す。13世紀の所産である。

図39-94・103は、灰釉陶器である。94は、碗の底部である。内外面ともに丁寧な回転ナデが施されている。底面には糸切り痕を残す。内面見込み部と底部外面および高台は露胎する。外面には釉のハケヌリが認められるが、内面の釉は粒状に付着する。精良な製品である。103は碗もしくは皿の底部である。見込み部と底面は露胎するが、重焼きのため、高台には釉が付着する。高台内は、高台接合の際、丁寧になでられており、その上詰位置に「令」の文字が墨書されている。筆の運びは流暢で、文字を書き慣れた人物の手によるものかと思われる。

図39-96・98・100～105は須恵器である。

96は、内湾する口縁部片であり、外面に粗雑な沈線と波状文を施す。器台の可能性はある。

97・105は、甕である。97は、口縁部の一片である。口縁端部をつまみあげて短く屈曲外反させ、内側に面をつくる。外面に自然釉が付着する。105は、底部である。内面は粗いナデ、外面はヘラケズリを施す。

98・102は鉢の口縁部である。98は、外面端部をなでて面をつくり、先端を尖らせる。内外面ともに強い指ナデの痕跡を残す。外面に煤が付着していた。102は、薄手で、肥厚した口縁をやや内傾させる。内面には強い指ナデと圧痕を残す。

100・101は碗で、ともに口縁端部外面に自然釉が薄く付着する。101には火嚮が認められる。104は注口をもつ鉢である。口縁外面に釉化物が多く付着する。

以上98～105は中世須恵器を呼称されるものであり、その所産は11世紀・14世紀とみられる。

図39-106は、土師器三足釜の脚部と思われるが、下方向からの穿孔がある。成形時に設けられたものであるが、他に類例を見ない。

図39-107は土師器羽釜の鑊～口縁部である。口縁に比して鑊は短い。ケズリが甘く、端面は鈍い。表面は磨滅しているが、内面には指頭圧痕がわずかに残る。

図39-108は馬形土製品（土馬）である。楕円形の顔面に目2点と鼻を表現している。首はやや扁平で、後側をつまんで鬘を作っている。体部は発見できなかった。類似品がB地区からも出土している。

図39-109～112は平瓦である。109・110・112は瓦質で表面に布目圧痕、裏面に縄目圧痕を残す。111は焼きが甘く褐灰色を呈する。表面に布目圧痕がわずかに認められる。

第2層出土遺物（図40） 第2層からは、須恵器・土師器・瓦器・陶器・染付が出土した。

図40-113～115は、土師器の皿である。114は端部を「て」字状につくる、京都洛外所産のもので、10世紀末～11世紀初頭の製品である。

図40-116は須恵器杯蓋で、外面にはヘラ削りと回転ナデを施す。6世紀のものである。

図40-120は、東播系須恵器の捏鉢口縁部である。内面には、横ナデの後、縦方向のナデが施される。12世紀末～13世紀初頭のものである。

図40-117・119・121・130・131・132・136は陶器の製品である。

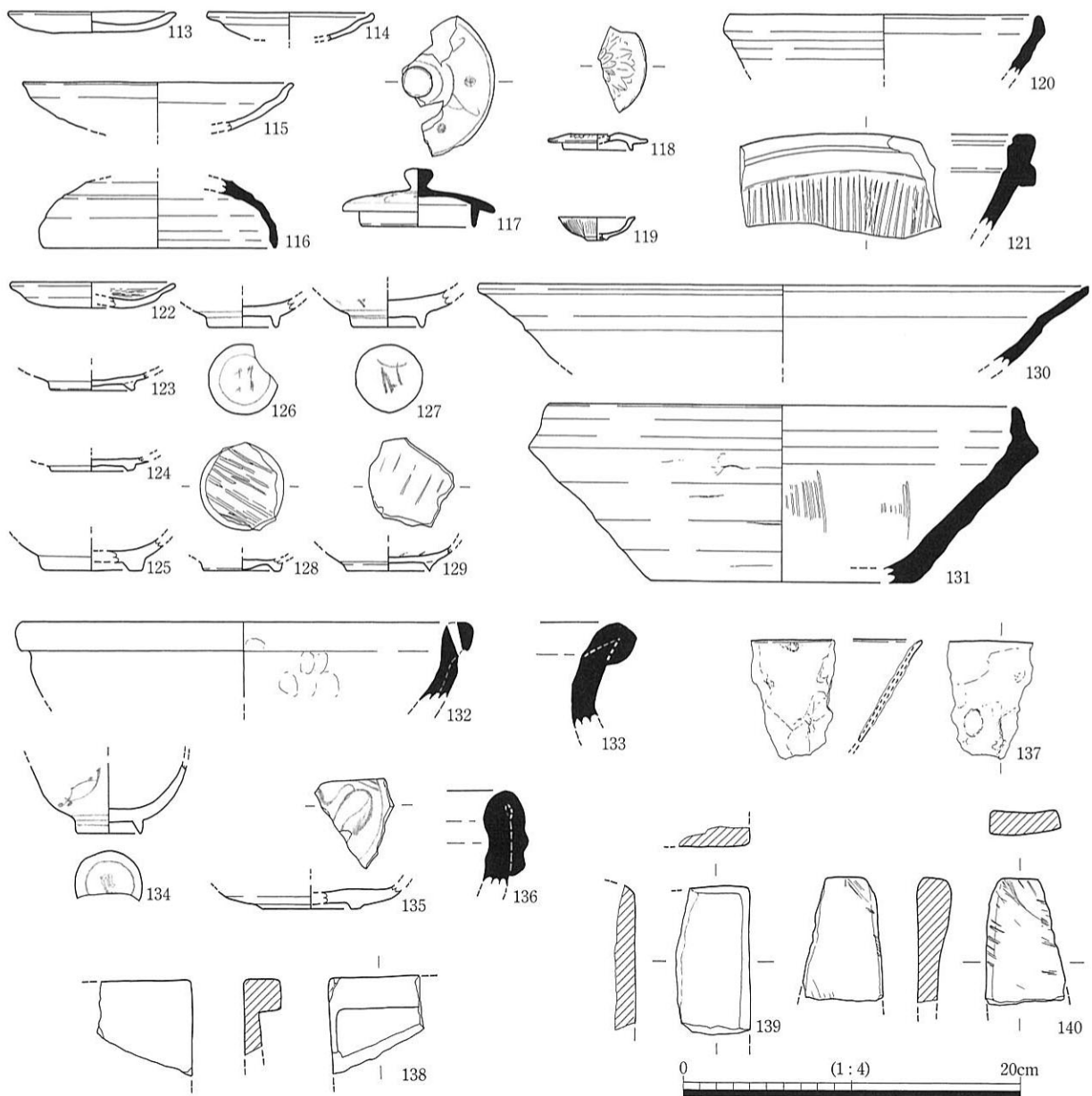


図40 A地区包含層（第1・2層）出土遺物実測図

117は、伊賀信楽産土瓶の蓋である。乳白色の釉を外面に施し、黒灰色と藍色で文様を描く。内面は釉懸けされていない。19世紀後半期の製品である。121は、播鉢の口縁部である。2A地区の埋め桶および堆肥施設近辺より出土した。表面の残存状態は良く、近代のものと思われる。

130・133・136は、鉢の口縁部である。130は、唐津系のもので、内面および外面口縁にオリブ灰色の釉を施す。内面口縁には乳白色の釉で刷毛目文様が描かれている。また、口縁端部は、使用のためか、釉が一部剥落していた。17世紀後半期の製品である。131は備前系播鉢である。胎土が非常に粗く、径1cm未満の礫が多く混入する。口縁および内面には強いナデを施すが、外面のナデは弱く、粗雑である。使用のため摩滅が著しく、内面の条痕もわずかに残る程度である。焼成は甘く、内面は褐灰色を呈する粗製品である。15世紀後半のものと思われる。132は、素焼きの炮烙である。口縁端部になでて面をつくり、上方から孔を穿っている。在地の製品で、17世紀のものである。133は、丹波産壺の口縁部である。17世紀の製品である。136は丹波産の甕で、大型品である。口縁端部に釉化物が付着する。

図40-119は肥前産磁器の紅皿で、内面のみ施釉されている。外面に細かい筋をつけ、菊花弁を象る。

図40-122～124・128・129は瓦器である。122は、皿である。高台を持たず、底面には凹凸を残す。内面の暗文は密に施されている。12世紀末から13世紀にかけての製品である。123～129は、椀の底部である。123は、断面三角形の高台を付す。内面には縦方向のミガキが認められる。13世紀のものである。124は、摩滅のためイブシはすべてとんでいる。断面三角形の高台は一部つぶれて方形を呈する。13世紀のものである。128は、高台の周りを丁寧に打ち欠いて、円形の底面だけを残したものである。内面には縦方向のミガキが密に残る。高台内中央には粘土塊が凸形に残る。12世紀のものと思われる。129は、高台が形骸化した段階のものである。内面には約1cm幅で縦方向に暗文が残る。ない外面ともにイブシはとんで、灰白色を呈する。

図40-125は、白磁碗の底部である。低い削り出し高台を有する。内面にのみ灰白色の釉を施す。15世紀後半期のものである。

図40-126・127・134は染付の底部である。

図40-126・127・134は、すべて肥前産碗で、高台内に「大明年製」の文字を書く。127・134の文字は省略されて組合せ文字の体裁をとる。畳付にはなれ砂が付着する。

図40-135は初期伊万里焼の皿底部である。削り出し高台を有する。17世紀前半期の製品である。

第8節 A地区のまとめ

以上、A地区の調査において検出した遺構と遺物について成果を述べた。ここでは、各遺構面におけるA地区の景観の復元と土地利用の変遷について、一部説明を加えたい。

弥生時代（第5-2面）

千里丘陵からのびる谷が、地表面に強い傾斜をつくりだしていたため、A地区内にも強い起伏があったと思われる。度々水害にみまわれたため、地盤は土砂の潜り込みや抉りによって随所に凹凸があり、地表面は常に乾湿を繰り返していた。人間の居住を許さない、不安定な土地である。流入した土砂に含まれていた遺物から近隣では集落が営まれていたと推測されるが、A地区内にはその形跡は認められなかった。

古墳時代前期（第5-1面）

地盤の凹凸はやや和らぎ、A地区内の標高差は1.3mを測る程度となる。谷状地は湿地化し、葦類が繁

茂した。初めてこの土地に人々が入植し、大規模な開発を手がけた時期である。A地区を貫く大溝は、その形状から広範囲にわたる遺構と推測されるが、その背景には計画性をもって広範囲に開発し得る勢力を持った集団の存在が想定される。しかし、この開発は古墳時代後期以前におこった大規模な洪水によって一時廃絶し、遺構面は厚い洪水砂のなかに埋没した。

古墳時代後期～飛鳥・奈良時代 (第4面)

洪水砂が谷を埋没させたため、A地区内の標高差は縮まり、1m前後となる。調査区内には、周辺から谷地へむかって掘られた溝や流路が錯綜して流れていたと思われる。遺物の出土状況から、近隣に集落が営まれていたと予想される。

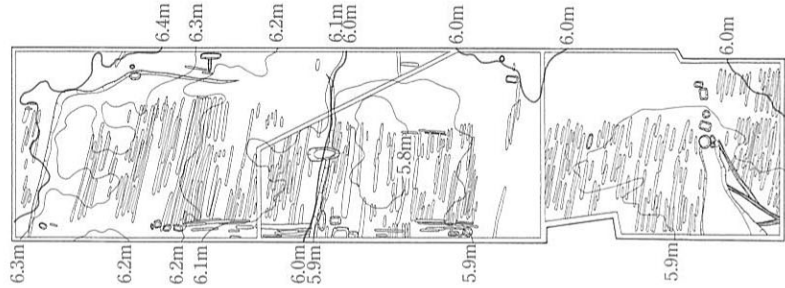
平安時代後期 (第3面)

本格的に水田開発が行われた時代である。土地の平坦化が進み、A地区内の標高差は0.8mを測る程度となる。1A地区では条里制を施行した水田が営まれ、微高地である2A地区では人々が居住するようになった。墨書土器や転用硯の出土から、識字能力のある人物の起居が考えられる。

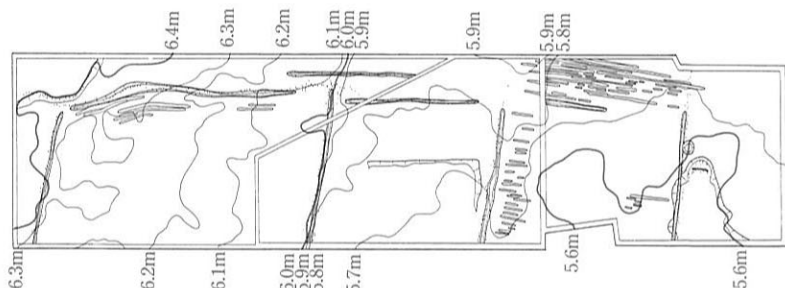
中世～近世 (第2面)

A地区全域において耕作が営まれた時代である。土地の平坦化はさらに進み、A地区内の標高差は0.7mを測る程度となる。水田には、区画ごとに杭列と溝が設け

【第A-1面】近世～近代



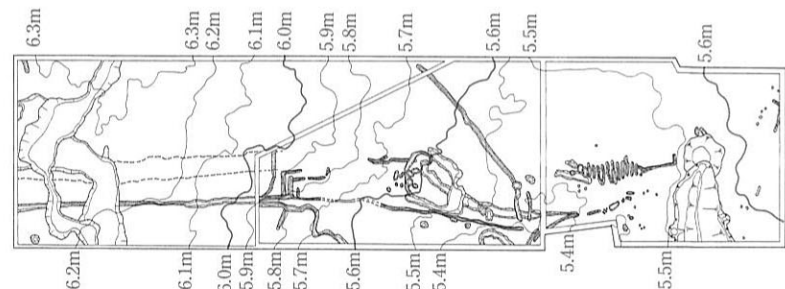
【第A-2面】中世～近世



【第A-3面】平安時代後期



【第A-4面】古墳時代後期～飛鳥、奈良時代



【第A-5-1面】古墳時代前期

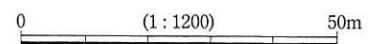
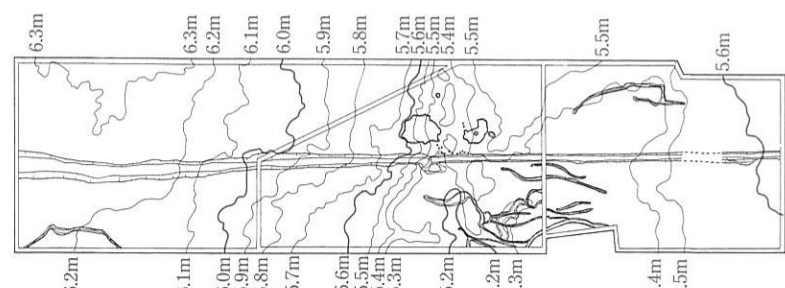


図41 遺構と土地利用の変遷図

られた。1A 地区東部では、地下水脈上に大規模な掘り込みと 3 基の井戸を検出した。取水および配水を目的としたものと思われる。

近世～近代 （第 1 面）

ひきつづき、耕作が営まれた時代である。A 地区内の標高差は 0.4m 程度となる。段をもって水田を区画し、標高差の大きい地点には大畦が作られた。整地によって作付面積の拡大化が図られ、これに伴って生産高も増大したものと考えられる。水田脇には堆肥の仮置き場が作られた。また、坪境線上には、高槻街道から吉志部村へと通じる道路が設けられた。

次に、今回検出した遺構について、地理的環境と時代背景を考慮して、一部考察を加えたい。

条里制地割をもつ水田遺構について 淀川右岸の条里地割は歴史地理学的手法によって早くから復元されてきた。淀川右岸（現三島郡島本町・高槻市・茨木市・吹田市・豊中市・箕面市・摂津市）の条里地割は、ほぼ東西・南北方向の正方位を示す。しかし、摂津市の一部から吹田市街部にかけては、これとは異なる方向軸が存在する。今回、調査をおこなった吹田操車場遺跡が位置する地域も、この範疇に含まれる。

この異方向条里は、詳しくは摂津市味舌上・庄家・正音寺・味舌下から吹田市吉志部・旧吹田地域にかけて認められる。図44は、昭和36年に大阪府が作成した3000分の1地形図をもとにして、調査地周辺の条里地割を復元したものであるが、正方位とは別系統である N33°W の方向軸をもった条里地割を示している。

現在、この異方向条里は嶋下郡第13条から第18条までが想定されている。第13条の東辺は境川に接し、第18条の西辺は吹田砂堆の非条里地帯と接している（図43参照）。このうち、第14条と第15条は、第1里から8里までが想定されている。また、第13条と第16条～第18条は、第6里～8里までが設定されている。しかし、第14条・15条の1里～5里までは、千里丘陵の斜面に設けられたものであり、36坪すべてが開墾されていたわけではない。また、各条の第6里は、千里丘陵の扇状地形の影響が強く、良田が営まれていたとは考えにくい。また、第8里は安威川によって大半が浸食されており、耕作可能な地区であったとは言いがたい。吹田操車場遺跡は、地形図上では、第16条7里に属する。第7里は、吹田の異方向条里域において、丘陵と河川にはさまれた、かろうじて耕作を営みうる地帯であったと思われる。

今回調査をおこなった A 地区および B 地区は、「摂津国垂水庄差図」（図 6 参照）の例にならえば、第16条7里の四坪と五坪に属することが想定された。理論上では、四坪と五坪の間に「坪境」と称されるラインが存在する。この坪境が、考古学的にどのような形態で検出されるのかは、今回の調査における

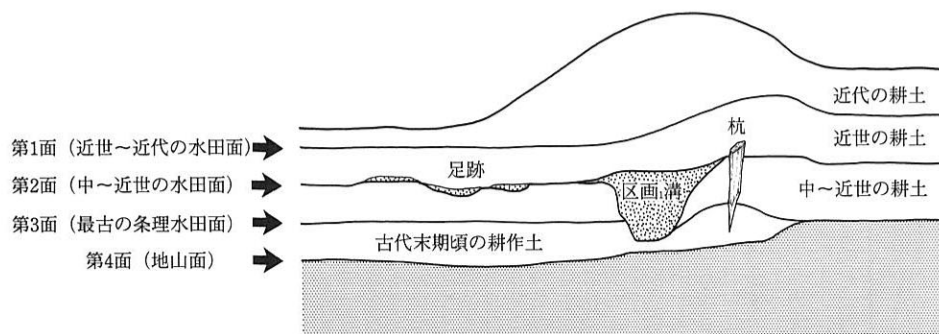


図42 A 地区における水田畦畔の変遷模式図

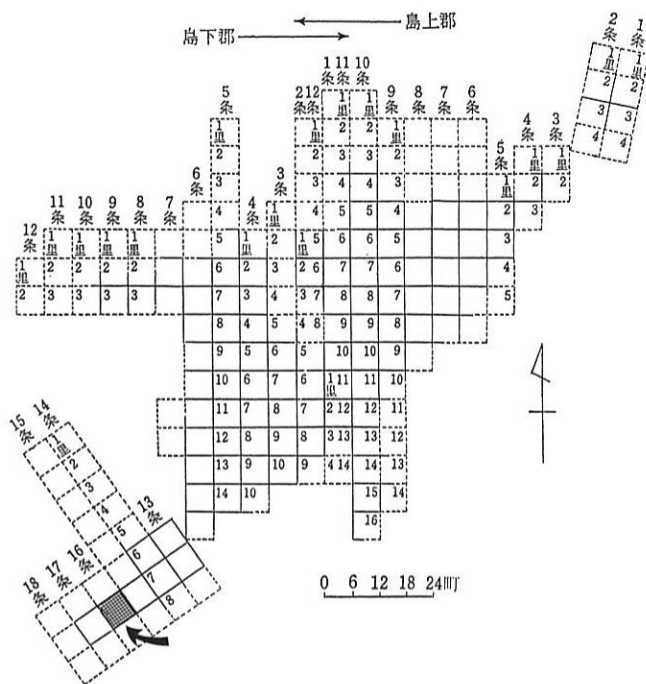


図43 淀川右岸地域における条里呼称概略図
(服部原図)

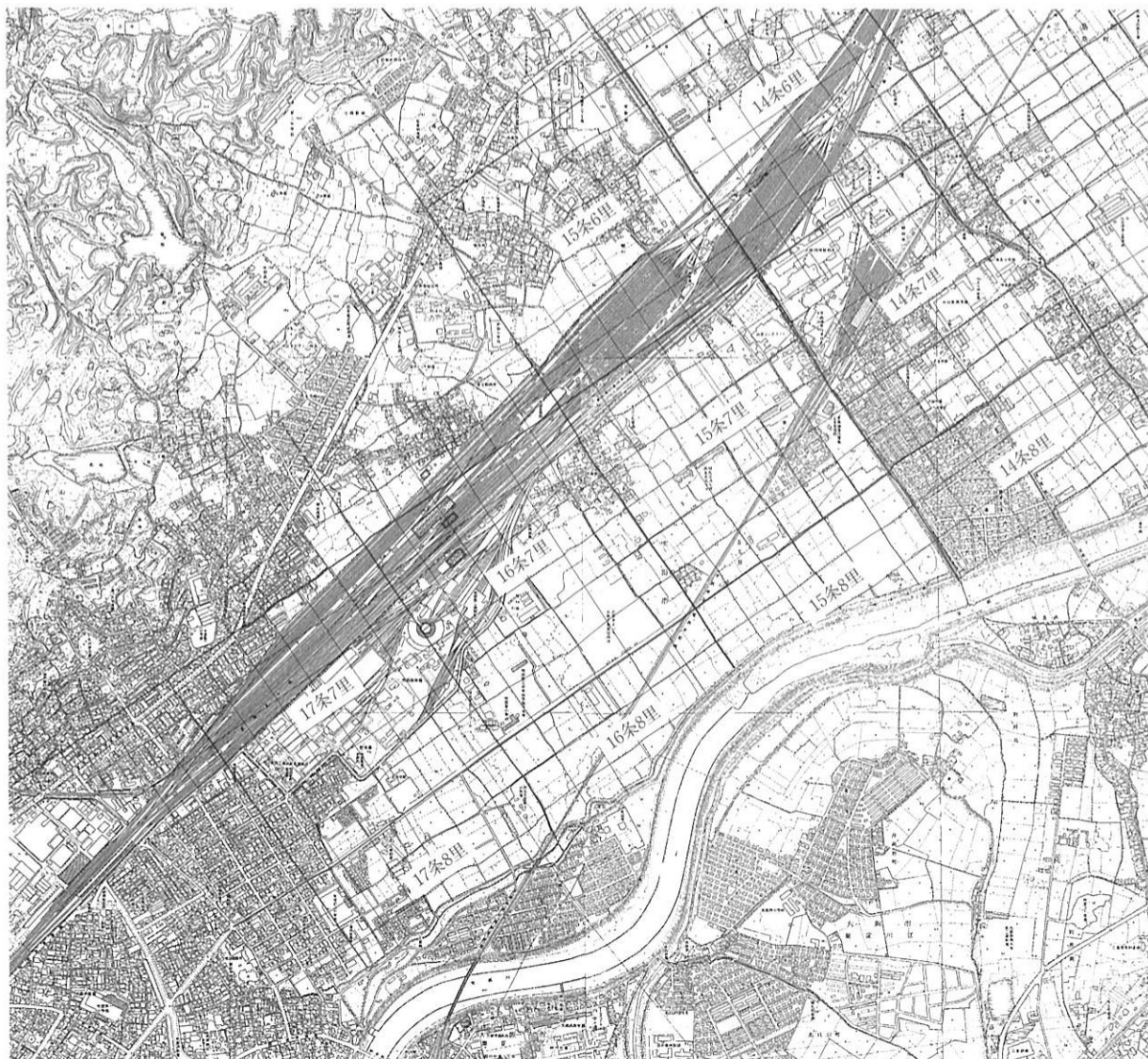


図44 条里地割 復原図 (2万分の1)

注目点のひとつであった。

結果、A 地区では平安時代末期～近代相当面において、坪境推定位置に各種の遺構が検出された。(図42) すなわち、平安時代(10世紀末頃)には格子状畦畔の一系列として築かれ、中世期には杭列を伴う溝の1本として掘削された。近世～近代にいたっては、この坪境ラインに里道が通された。B 地区では奇蹄類の足跡が検出されており(次章詳述)、人馬の往来のあったことがわかる。

A 地区は原地形の起伏が激しい地点であるが、この坪境ラインは、常に N33°E の角度を保っており、他の畦や溝も、基本的にはこれに平行もしくは直交する。地形の影響をうけつつも、坪境ラインの角度は乱されることなく、現在まで存続したことがわかった。

今回の調査では、これまで不明瞭であった吹田異方向条里の歴史が、一部解明されたとと言える。考古学的手法によって吹田市域内の条里地割が確認されたのは、今回の事例が初めてであり、さらに、その初源が10世紀末に遡ることが明らかとなった。この地割は、現代にいたるまで土地区画ベースとなってきたのである。

以上、A 地区の調査成果を述べた。調査の開始段階においては、前年度の試掘調査の結果から、中世～近代にかけての遺構は検出しうるが、これ以前の遺構面は発見できないのであろうと予測していた。しかし、今回調査を終えて、弥生時代・古墳時代前期・古墳時代後期～飛鳥・奈良時代・平安時代の各遺構面を検出しえたことは、予想外の喜びであった。

特に古墳時代前期相当面において検出した溝 A-19は、大規模な開発を想起させる遺構であり、注目すべきもののひとつである。溝はさらに調査区外へと連続しており、隣接する地域の調査が待たれるところである。また、古墳時代後期から古代所産の遺物が多量に出土したことは、近隣に集落があったことを予想させるものである。

さらに現代まで継承される条理地割の初源が考古学的に立証されたことは、大きな成果のひとつであり、同時期の遺物に墨書された灰釉陶器や転用硯があったことは、吉志部地区の先住者が何者であったのかを解明する大きな手がかりであると思われる。

【参考文献】

- ・ 宇野隆夫「井戸考」『史林』第65巻5号、史学研究会、1982
- ・ 服部昌之「律令国家の歴史地理学的研究」大明堂、1983(図43は本書P.161よりコピー、一部加筆)
- ・ (財)大阪府文化財調査研究センター「吹田操車場遺跡」、1999

第5章 B地区の調査成果

第1節 古墳時代以前の遺構と遺物

今回の調査では、古墳時代の遺構面より下層及び下面は1.0m×16mの確認トレンチを設け、調査をおこなった。トレンチの断面では、明瞭な人為的な遺構は確認されなかったが、植物遺体を含む湿地状の堆積がみられた。特に、古墳時代遺構面の基盤層である第5-2層は、黒色粘土に植物遺体を多く含むものであった。この様相は、当調査区より北に位置するA地区の東半とほぼ同様である。

また、遺物は出土しなかったが、後世の包含層中から弥生時代のものと思われるサヌカイト製石鏃、サヌカイト剥片が出土した。

第2節 古墳時代の遺構と遺物

遺構面は、土質や土色により湿地状堆積と判断した層(第5-2層)の上面である。部分的に、厚さ2～3cm程度の洪水砂で覆われている。この洪水砂は、A地区第5-1層と対応すると思われる。北から南に向けて傾斜し、標高は、北端で5.4m、南端で5.0mを測る。

湿地は、主に調査区西側と東側に分かれて広がる。調査区中央では、湿地状堆積の黒色粘土層がみられないことより、調査区中央部は、本来、湿地の途切れる微高地であったと考えられる。

東側湿地帯

調査区北東でみられ、標高は、5.20～5.25mを測り、北から南に向けて傾斜下降する地形である。

西側湿地帯

調査区南西でみられ、標高は、5.02～5.23mを測る。上面は、洪水砂により覆われており、この洪水砂を除去することで遺構を検出することができた。

溝 B-4

調査区西隅の一角に位置する。規模は、幅20～40cm、深さ10cmを測る。平面の形状は、途中でほぼ直角に折れ曲がる。埋土は、細粒砂～中粒砂を主体とする洪水砂からなる。遺物は出土しなかった。

溝 B-5

調査区南隅に位置する。規模は、幅20～40cm、深さ4cmを測る。埋土は、細粒砂～中粒砂を主体とする。遺物は出土しなかった。

これら2本の溝は、位置、規模、形状、埋土から判断して、それぞれ一連のものである可能性が高く、2本の溝が結合する部分は、南西の調査区外に存在するものと思われる。

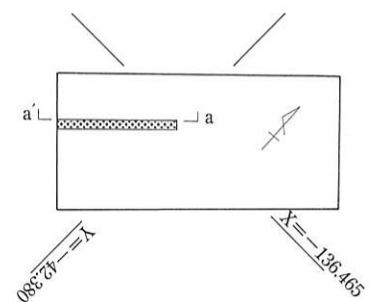


図45 B地区確認トレンチ 位置図

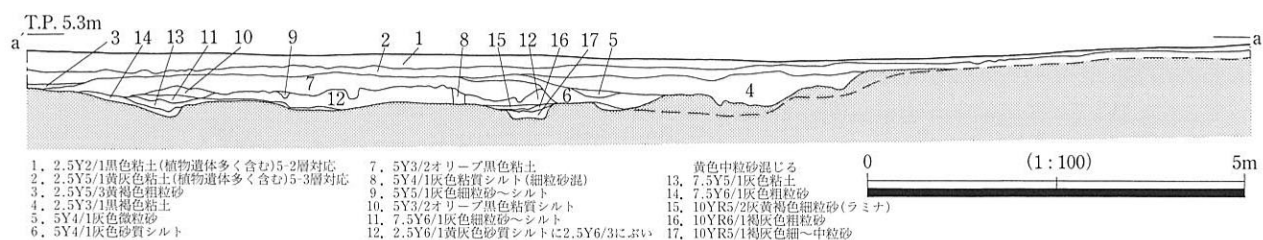


図46 B地区確認トレンチ 断面図

足跡

調査区の南西側、溝 B-4・溝 B-5に挟まれるように多数の足跡を検出した。これらの足跡は、すべて人間のものである。おおむね東西方向に連続するように見えるが、個々の足跡は、大小様々な大きさのものがみられ、歩行方向は看取できない。埋土は、前述した溝 B-4・溝 B-5と同様、細粒砂～中粒砂である。これらの足跡は、遺構面を覆う洪水砂の上からは検出されなかった。このことから、洪水砂の上からの踏み込みではなく、溝 B-4・溝 B-5と同様洪水砂堆積以前に踏み込まれ、洪水砂によって埋没したものと考えられる。

第3節 古墳時代から飛鳥・奈良時代の遺構と遺物

遺構面は、包含層である褐色シルト（第4層）を除去した面である。遺構は、主に調査区中央からやや東側にかけて検出された。

溝 B-2

北西から南東に向って、ほぼ一直線に調査区を横断する。規模は、北西部分で幅0.7m、深さ35cmを測り、南西部分で幅1.2m、深さ40cmを測り、北西から南東に向け傾斜下降する。底面の標高は、北西部分で5.09m、南東部分で4.90mを測る。埋土のすべてが砂であり、微細な砂粒から粗い砂粒までが、それぞれ層を成して堆積している。遺物は出土しなかった。

土坑 B-3

調査区のほぼ中央からやや南東よりに位置する不定形な土坑である。規模は、南北長8.2m、東西長7.5m、深さ20cmを測る。埋土は、直上の包含層である第4層に近い褐色の粘質シルトである。

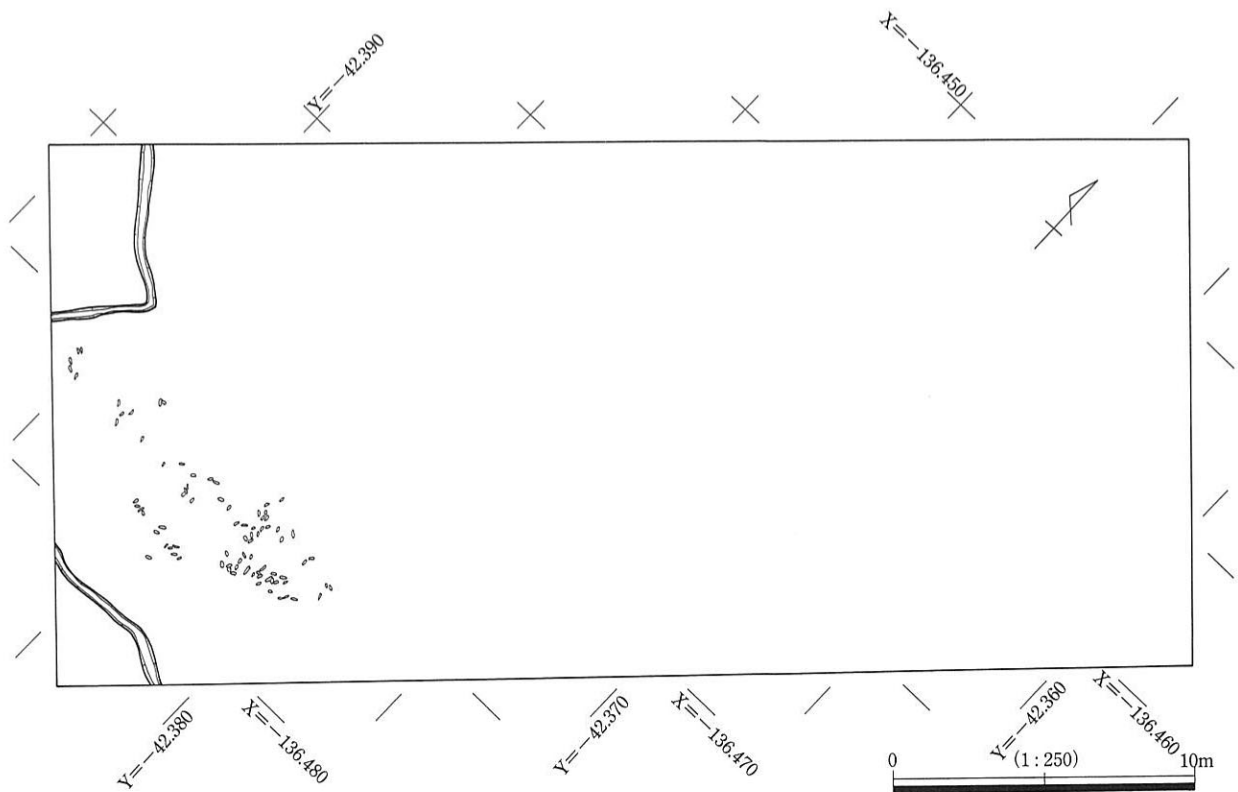


図47 B地区古墳時代遺構面 平面図

不定形土坑群

土坑 B-3の北西に 1 基、南東に 6 基検出された。規模、形状ともに一定ではない。埋土は、土坑 B-3と同じ褐色の粘質シルトである。遺物は出土しなかった。この土坑群は、土坑 B-3とともに規模や形状に一定のまとまりがなく、埋土も自然堆積によるものと思われる。よって、これらの土坑群の性格は不明ではあるが、少なくとも土壇墓のような性格のものではないと考えられる。

第 4 節 平安時代から中世の遺構と遺物

遺構面は、包含層である第 3 層を除去した面である。北から南に向けて徐々に傾斜下降する地形で、その比高差は約 30cm を測る。遺構は、調査区全体で畦畔が検出された。

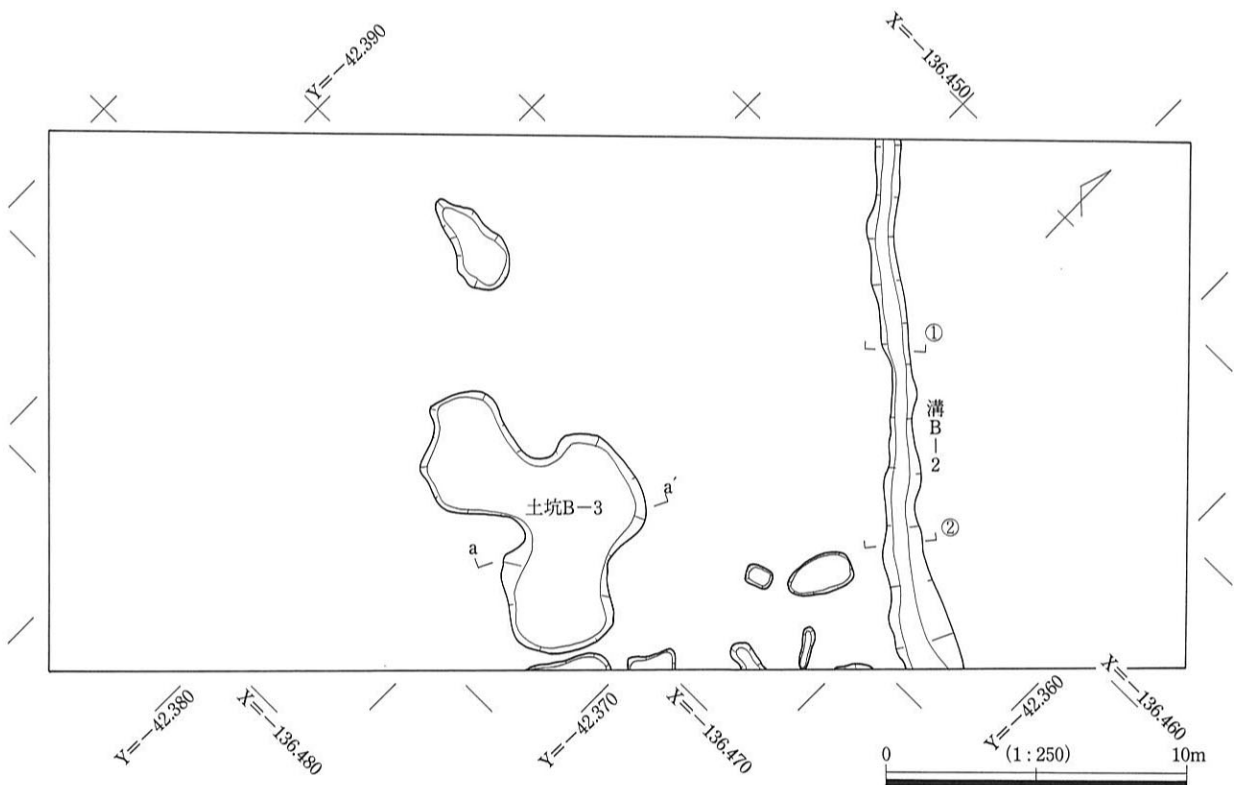


図48 B地区古墳～古代遺構面 平面図

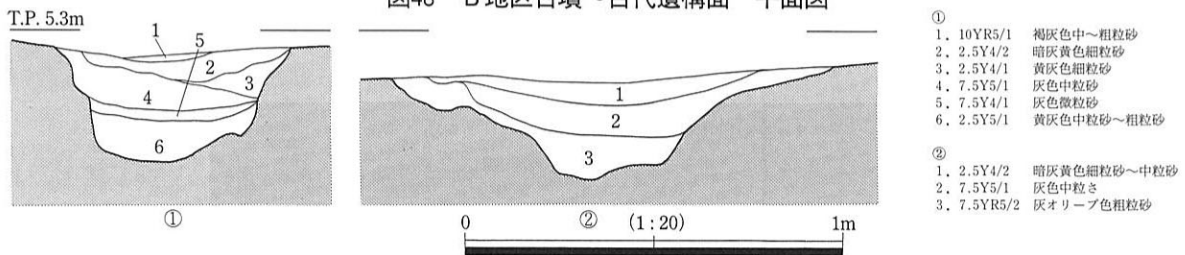


図49 溝 B-2 土層断面図

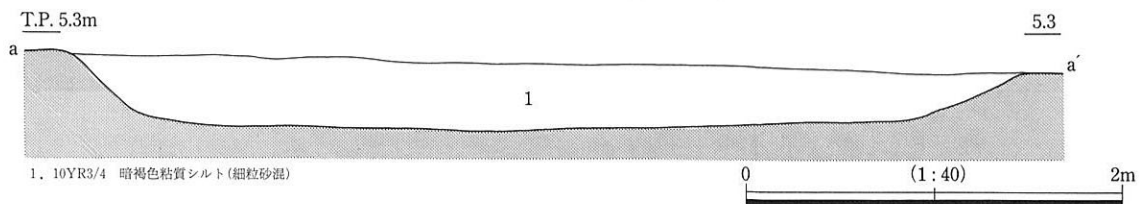


図50 土坑 B-3 土層断面図

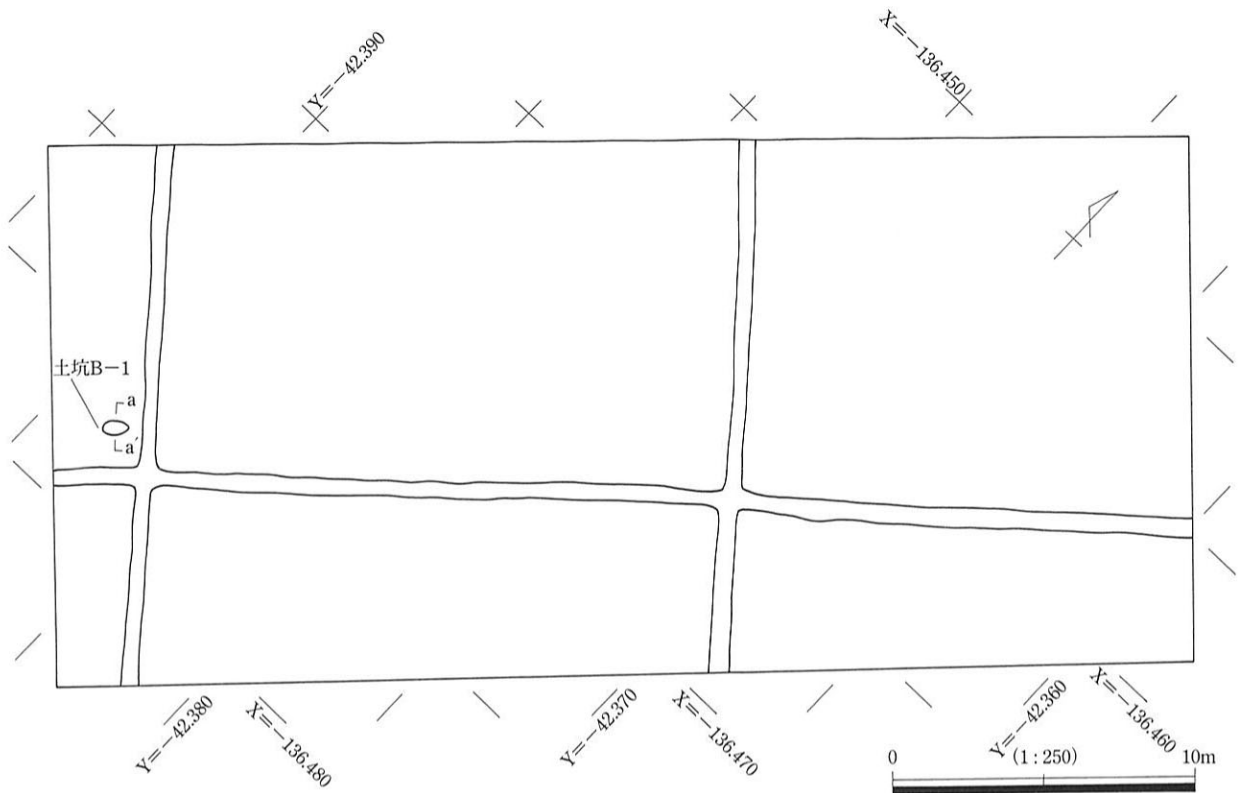


図51 B地区古代末～中世遺構面 平面図

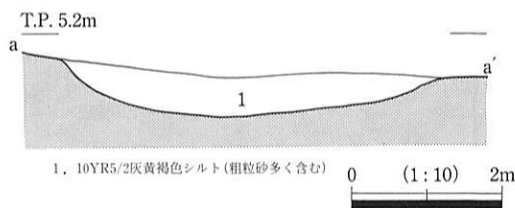


図52 土坑 B-1 土層断面図

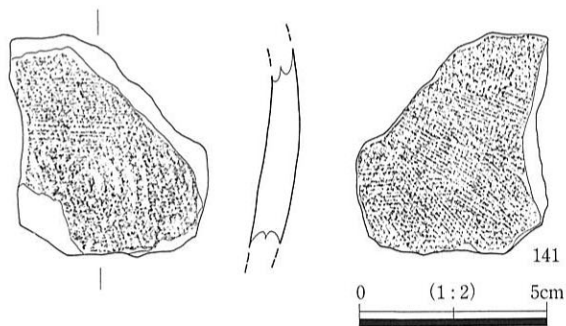


図53 土坑 B-1出土遺物

土坑 B-1

調査区の西側に位置する平面楕円形の土坑である。規模は、長径80cm、短径50cm、深さ5.2cmを測る(図52)。埋土は、粗粒砂を多く含むシルトの単層である。遺物は、須恵器甕体部の破片が1点出土した。調整は内面に同心円当具痕を残すものの、外面には不整方向の細かいハケメ、内面では当て具痕跡のうへにナデがみられ、調整は土師器的である。焼成は須恵器としてはやや軟質で灰白色を呈する。甕体部の破片であるため厳密な時期の特定は難しいが、概ね古代のものであると思われる。

畦畔

北西から南西方向にかけて走る2本の畦畔とそれらに直交する1本の畦畔である。平行する2本の畦畔間の距離は18.50mを測る。水田区画単位は、本調査区では完全な1区画を確認することができなかった。各畦畔は、削平のためか畦畔本来の高まりや水口は確認できず、ほぼ水平な状態で検出された。

第5節 中世から近世の遺構と遺物

遺構面は、包含層である第2層を除去した面である。畦畔とそれに伴う杭列が検出された。

畦畔

調査区の長辺方向にほぼ平行して走る1本の畦畔と、調査区外でほぼその畦畔に直交すると思われる

畦畔を調査区西隅でわずかに確認した。各畦畔は、削平のためか畦畔本来の高まりや水口は確認できず、ほぼ水平な状態で検出された。

杭列

畦畔に1～3 mの間隔で打ち込まれた杭列である。杭自体は、頭部の欠損したものが多く、残存する長さは20～40cmのものが大半を占めている。この杭列は、畦畔上に打ち込まれていることから、本来は畦畔構築時の補強用基礎杭として機能したものであると考えられる。

第6節 近世から近代の遺構と遺物

遺構面は、操車場造成に伴う盛土、近代の耕作土とその直下の水田耕作土及び床土（第1層）を除去した面である。調査区全域で耕作に伴う犁溝を検出した。

第7節 包含層出土遺物

第1層出土遺物（142・143）

142は丹波捏ね鉢である。口縁端部は内側にふくらむ玉縁状をなす。器壁は暗褐色から褐色を呈する。胎土は0.5からmmの白色砂粒を少し含み明るい灰色を呈する。細片であるため復元した口径は不正確である。

143は伊万里染付皿である。内面には雪輪草花文、外面には一本引きの連続唐草文を描く。143は18世紀後半の所産である。

第2層出土遺物（144～147、174）

144は中国製青花染付碗口縁部破片である。外面には雲龍文、内面は四方嚮文を描く。

145は竜泉窯青磁鉢である。口縁部外面に雷文が施される。

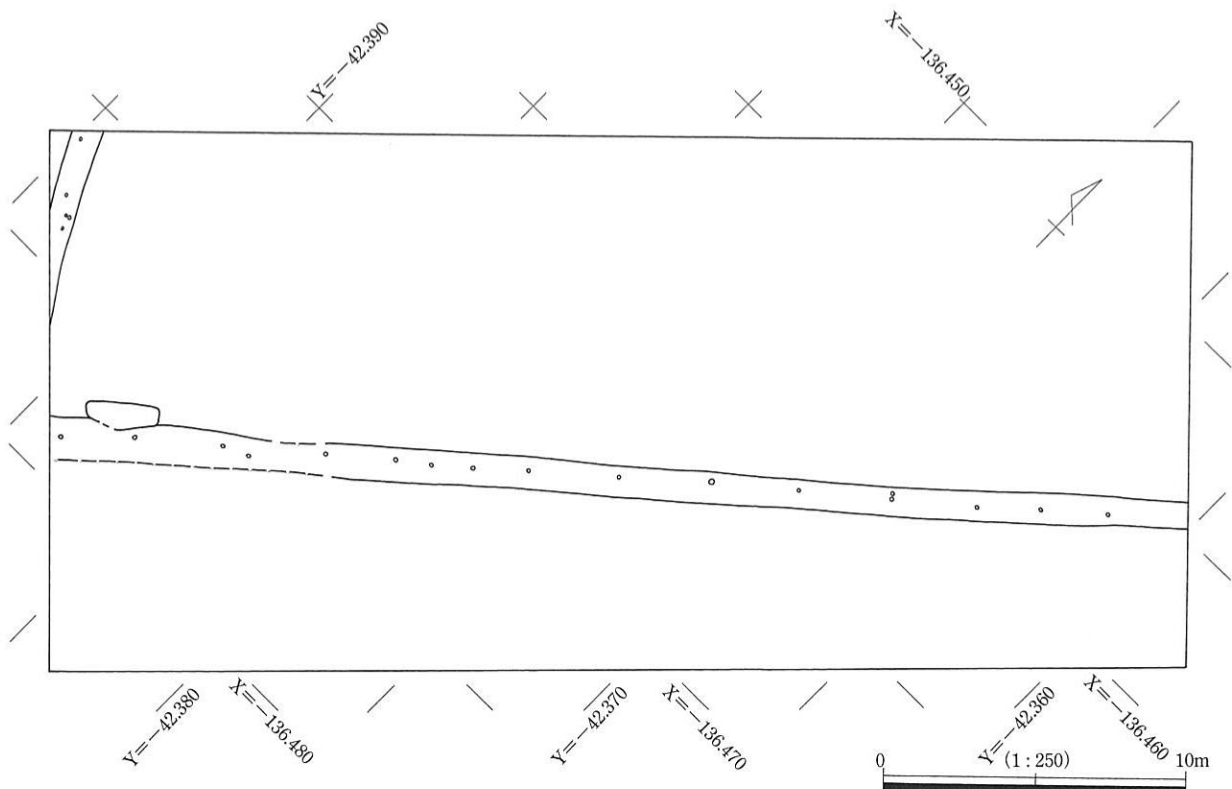


図54 B地区中世～近世遺構面 平面図

146は中国製白磁皿である。口縁は外に折れる形状で、端部には強い稜がみられる。

147は瀬戸・美濃焼天目茶碗である。外面高台脇の削りは小さく、高台の削り出しも浅い。釉は黒褐色で底部を除く外面と内面に厚くかかる。16世紀末から17世紀の所産であろう。

174は不明須恵器片である。外面には不定方向の平行タタキ、内面にはナデ調整が施されている。最大器厚は1.9cmを測り、破片には湾曲もみられないことから、非常に大型の器や須恵質陶棺片などが考えられる。

第3層出土遺物（148～166、175～179）

148～152はいずれも土師器鍋である。153・154は東播系須恵器鉢である。いずれも口縁部の破片であり、154は片口部分である。

156は瓦質土器である。器種は明確でないが、台もしくは脚部の破片であると思われる。上面には接合した痕跡が認められる。一方にのみ楕円形の透かしがある。イブシは消失している。

157・158は瓦器碗である。いずれも遺存状態はよくないが、外面にはユビオサエの痕跡を明瞭に残す。157は内面にミガキが、わずかに残る。158は底部の高台が確認できる。

159は白磁小碗である。口縁端部の釉が掻き取られたいわゆる「口禿げ」のものである。

160・161は白磁碗である。いずれも玉縁状の口縁を有する。

162は青磁碗である。口縁端部に端面を持ち、小片ながら内面に文様が認められる。

163は瀬戸小皿である。内外面ともに底部以外は施釉され、外面には釉垂れが認められる。底部には、糸切りの痕跡を残し、トチン跡が1ヶ所残る。

164は白磁である。底部のみの破片のため、器種は特定できないが、形状や大きさから壺や水注が想定される。施釉は、底部外面まで及んでいない。

165は須恵器もしくは施釉陶器壺である。高台は、貼り付けで、断面の形状が台形を呈する。焼成不良のため軟質である。釉の剥離した緑釉陶器など須恵器以外の可能性も考えられる。

166は不明施釉陶器壺である。頸部のみの破片のため、全体の形状を窺い知ることはできない。素地は須恵質である。施釉は外面にのみ認められ、剥離している箇所もあるが破片全体に薄く掛かる。釉は緑灰色を呈し、ガラス質とは異なる鈍い光沢がみられる。

175は馬形土製品である。土師質に焼成されており、頭部のみの破片である。目と鼻は、直径3mmの細い管状工具の刺突により表現されている。頭部の断面形状はケズリにより多角形を呈し、鼻先も同様にケズリにより整形されている。たてがみ部分は、上方向にツマミ出されることにより表現されている。それ以外の口や耳、馬具の表現はなされていない簡素な裸馬である。

176・177は瓦である。176は凹面に布目痕のある丸瓦片である。177は凹面に布目痕のある平瓦片である。

178は銭貨である。621年に初鑄された唐の開元通寶である。

179はサヌカイト製石鏃である。

第4層出土遺物（167～173）

167は瓦器碗である。器表面のイブシは消失し、ミガキも不鮮明であるが、外面に施されたユビオサエの痕跡は明瞭に認められる。口縁のヨコナデは、口縁が外反するほど強く、そのため体部外面にも強い稜線を残す。

168は黒色土器碗であると思われる。断面逆三角形の貼り付け高台を有する。

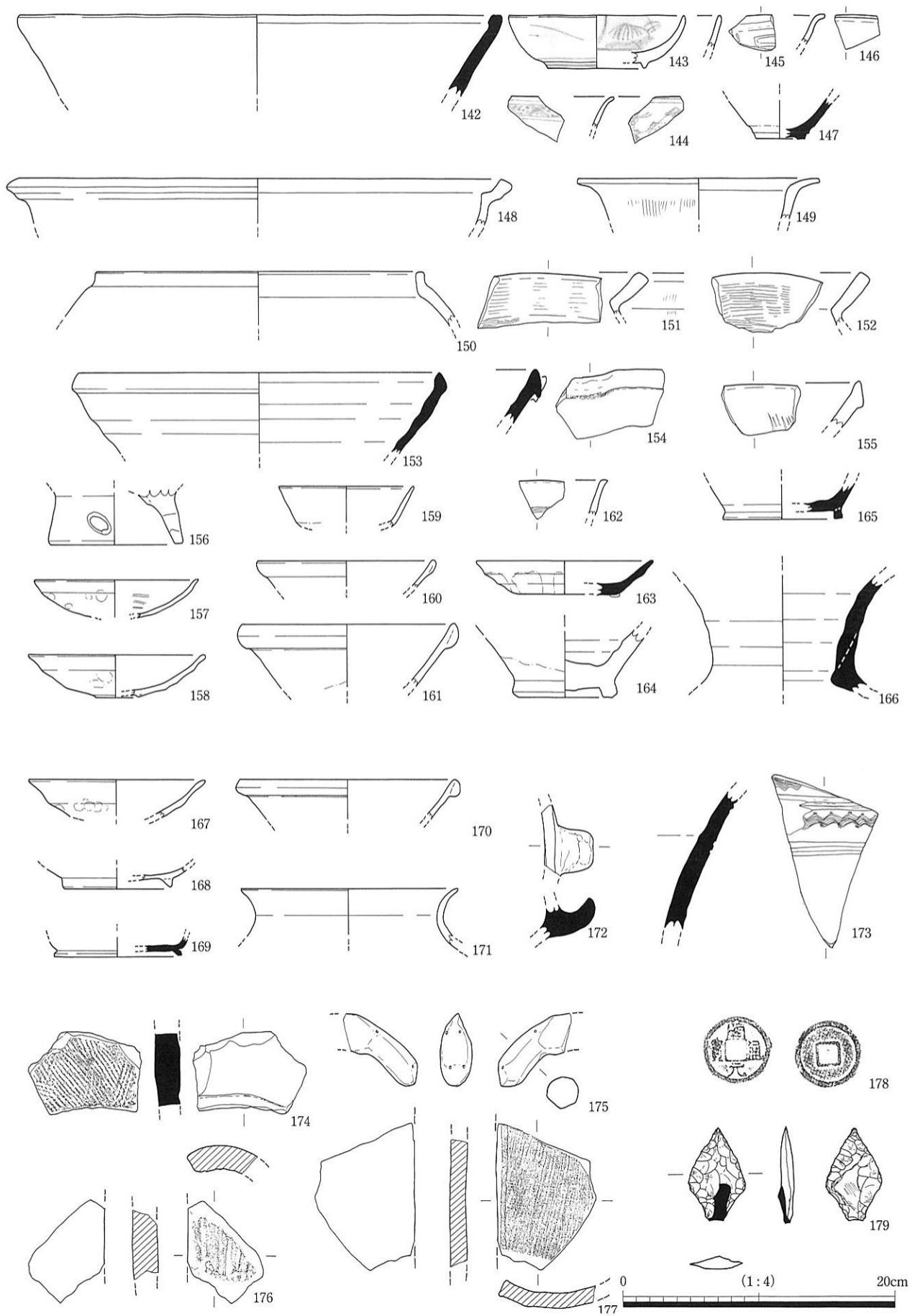


图55 B地区包含層出土遺物実測図

169は須恵器杯身である。小さい貼り付け高台を有する。

170は白磁碗である。玉縁状の口縁を有する。

171は土師器甕である。内外面ともに摩滅が著しく、調整は不明である。頸部は、緩やかに屈曲して口縁に続く。

172は須恵器把手である。本来、甕や壺などの体部についていたものであろう。

173は須恵器甕である。頸部から口縁部にかけての破片であると思われる。水平に施された沈線によって区画された文様帯を有し、文様帯の中には波状文がみられる。

第8節 B地区のまとめ

B地区では、6面の遺構面と包含層を検出し、調査した。その結果、古墳時代を遡る遺構は検出されなかった。

最下面は、同一のものであると考えられる2本の溝と湿地帯上に検出された足跡群である。出土遺物が皆無であったので、遺物による時期の特定は困難である。しかしながら、A地区からC地区にかけて対応する一連の湿地帯を基盤層とするためA・C両地区と同一時期である古墳時代が考えられる。

古墳時代後期から古代にかけての遺構面では、不定形を成す土坑群、北西から南東に向けて走る1本の溝B-2を検出した。不定形土坑の規模は、不揃いで群の中での規則性は見出せない。埋土からは、故意に埋められた様子は看取できなかった。調査区南東端の断面にもこの土坑群がみられるため、より南東に広がる可能性が考えられる。また、出土遺物は無く、遺構の詳細な時期は不明である。溝B-2の埋土は、すべて砂からなり、ラミナも観察できた。このことから、この溝は流水していたことが想定できる。また、この溝も土坑群と同様に出土遺物は無く詳細な時期は不明である。

古代末から中世にかけての遺構面では、畦畔が検出された。畦畔本来の高まりや水口は、検出されなかった。この畦畔は、近代にまで続く耕作のため削平を受け、このように擬似的なものとして検出されたと考えられる。この畦畔の軸角は、正方位より45度振っており、周辺の古条里研究の成果からも条里型の畦畔であることが推測される。隣接するA地区と同一遺構面上でも同じ軸角の畦畔が検出されており、両者地区の畦畔が連続することは明らかである。畦畔以外では、土坑が1基検出された。畦畔との関係が見出せないこと、土坑から出土した土器片が8世紀から9世紀のものであることなどから、断言は避けなければならないが畦畔構築以前に掘られたものが検出された可能性も考えられる。

中世から近世にかけての遺構面は、南西から北東方向に走る畦畔と調査区西端でわずかに検出された畦畔からなる。この畦畔は前代の条里地割りを踏襲しつつ新たに構築されたものと考えられる。畦畔の中心には、杭が一定間隔で打ち込まれており、畦畔自身の補強材として機能するものであると考えられる。2本近接して打たれている箇所も確認できた。遺構面の時期は、それを覆う包含層出土遺物が14世紀から15世紀半ばまでのものが主体を占めることから中世であると考えられる。

近世から近代の遺構面も鋤溝のわずかな痕跡から耕作面であったと考えられる。鋤溝から遺物の出土は確認できなかった。

出土遺物は、包含層ごとに取り上げたが、中世以降に連綿と繰り返された耕作のため混入遺物も多くみられた。よって、包含層及び遺構面の時期については隣接するA地区との関係も踏まえた判断が必要であると思われる。

第6章 C地区の調査成果

第1節 はじめに

C地区は、JR 東海道本線を挟んでA・B地区の南東側に位置する。C地区は、吹田操車場遺跡の南に接して今回の工事に先だって新規に発見された遺跡であり、吹田操車場遺跡B地点として周知された。今回の発掘調査は、吹田機関区構内で実施された吹田地区貨車区改良工事のうち、貨車庫3号の建て替え工事に起因している。

貨車庫3号の建物は初代の木造の建物を解体して、昭和40年代に建て替えられた2代目の建物であり、貨車を検査・修繕するための検査坑が3線分(4・5・6番線)と、その上屋があった。これは、今回の発掘調査に先立ち、平成12年8月に解体・撤去された。調査区は貨車庫3号の北東側約半分に相当するが、貨車庫建設・解体・撤去時に大きく攪乱を受けていた。さらに検査坑の基礎部分には、PC杭が2mおきに2列にわたって打たれ、攪乱が深く及んでいた。

調査は解体工事後の整地層の上面から、吹田機関庫建設・造成工事の盛土および攪乱部分を重機で掘削・除去した後、その下層については近現代耕作土層を含めてすべて人力で掘削した。調査着手前の現況地盤高はT.P.6m前後、最終遺構面のもっとも低い部分でT.P.3.8mであった。

基本層序模式図をもとに各層の堆積状況を概観しておく(図56)。第1層以下、第4層までは遺物を少量包含する耕土層で、調査区全域に広がっていた。調査区の北東部分では砂が第4層上面に堆積していた。また、第4層の下には第4-2層が堆積していた。これは下の谷状地形の影響を受けた為と考えられる。第4層を除去すると、調査区の南西側では地山が露出したが、調査区の北東部分では第5層が残存していた。第5層はやや砂を含んだ粘土層で耕作土と考えられる。

それらの各層を除去すると、調査区の南西側約4分の3ではいわゆる地山を、調査区の北東側約4分の1では谷状地形に堆積した黒色粘土層(第6~10層)を検出した。谷状地形は北東に向かって低くなっている。

谷状地形の最上層には第6層が堆積していた。その下の第7層と第8層は部分的に確認したものであり、調査区全体には広がっていない。第9層・第10層は湿地に堆積した様子を示す粘質の土層であり、強く土壌化した部分の上面をもって、第9層と第10層に分層した。花粉・珪藻分析によれば、これらの谷堆積粘土は乾湿を繰り返す環境で堆積し、有機質を多く含んでいる。最下層、つまり地山直上には、鬼界アカホヤ火山灰層が2次堆積していた。従って、第6~8面は谷状地形部分のみでの遺構検出となった。

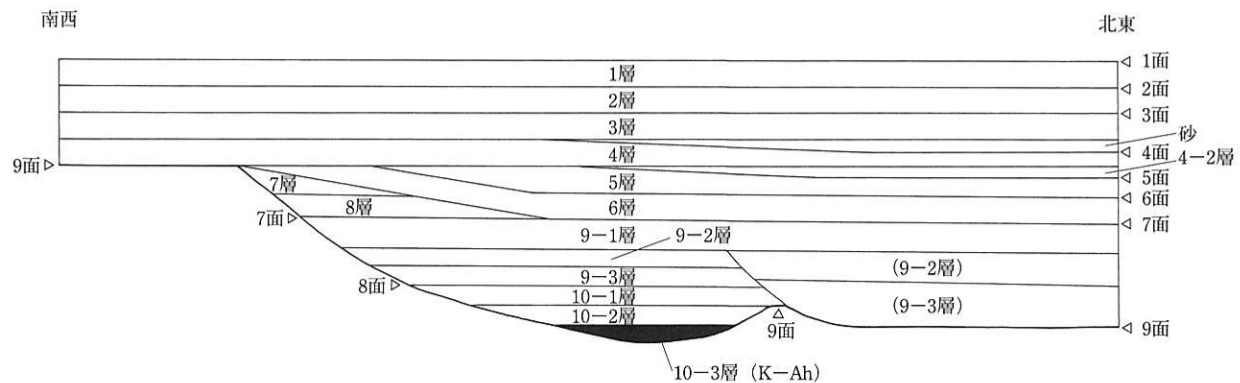


図56 C地区土層断面 模式図

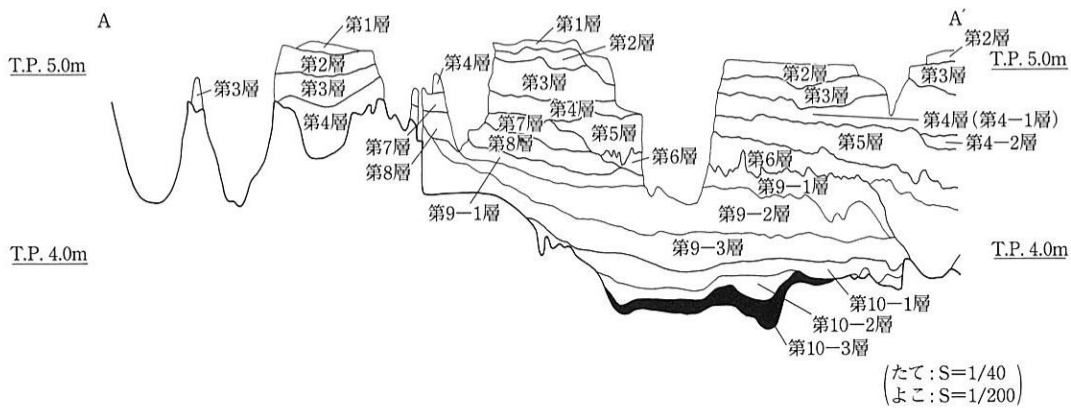
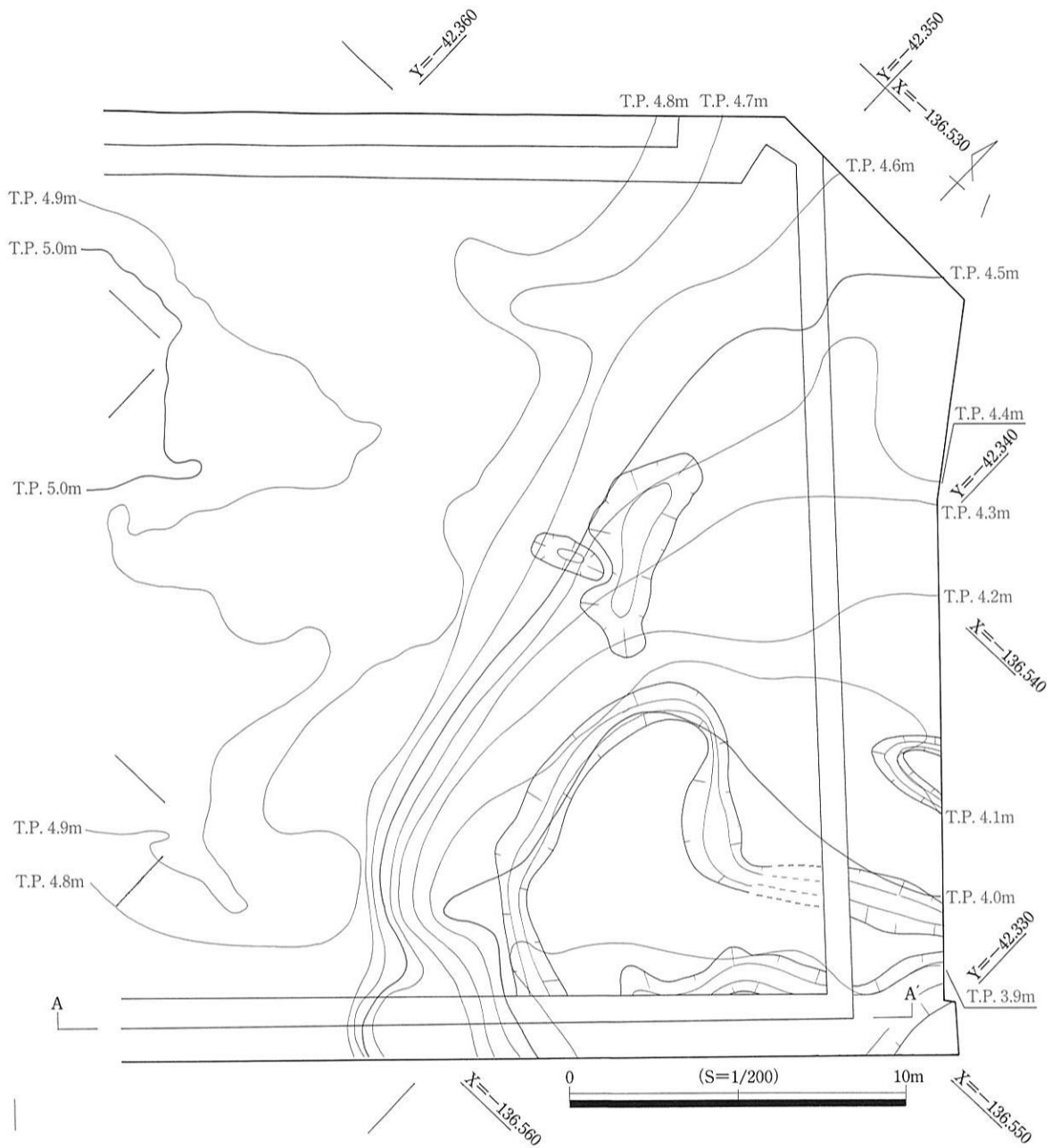


図57 谷状地形部分 等高線図・土層断面図

調査時点での分層と土層の認識は上記のとおりであったが、南壁断面の再検討の結果、谷埋土の第9層・第10層を切って、新しい谷が開析していることがわかった。図56の(9-2層)および(9-3層)がこれにあたり、埋没した樹木の¹⁴C年代から弥生時代ごろの堆積と考えられる。

最終遺構検出面である第9面は、第1層から第10層までのすべての堆積層を除去した、いわゆる地山層の上面である。地山は、やや粘質を帯びた粗砂・シルト層で広い範囲にわたって均質な層相を示している。

出土遺物から時期を推定できたのは、第1層から第6層までである。第7層以下では遺物が出土しなかった。次節には第1面以下、第9面までを下位から順番に述べる。

第2節 古墳時代以前

第9面

第9面はC地区の最終遺構検出面であり、いわゆる地山層(5Y7/2灰白色細砂混じりシルト)の上面である(図59・図版38-1・図版36-1~3)。谷状地形部分では第10層が、南西の高い部分では第4層がこの面を覆ってその上に堆積していた。調査時点では上を覆う各層を除去した面を遺構面として把握し、遺構名称を付した。このため谷地形の斜面においては地山上面を覆う層が異なるため、異なった面の遺構名称となっている。ここでは地山層上面で検出した遺構を第9面として、まとめて記述する。

第9面の地形を概観すると、調査区南西部分が高く、北東部分には谷状の地形が広がっていた。地形的に高い調査区の南西部分は、南西隅でT.P.5.1m、北東方向に傾斜し、T.P.4.8mまで緩やかに低くなって谷に続く。特にこの部分で起伏はない。後述の火山灰分析によれば、この部分は降灰当時の地表面そのものを残すものではなく、後世の耕作等による削平を受けていると考えられる。

調査区北東の谷状地形の肩部分ではT.P.4.7mを測る。谷の肩は北西・南東方向であり、千里丘陵方向からの開析であることがわかる。(図57)。その肩から北東方向に一段と低くなり、最も低い東端部分でT.P.3.8mを測る。地山上面では亀甲状の乾痕がみられ、堆積時の低湿な地面が次第に乾燥していったことが窺える。

地山層上面で検出した遺構は、溝12条、土坑12基、ピット4基である。

溝 C-901 調査区の東端、谷状地形の中でも、特に低くなった部分に位置する。南西・北東方向であり、蛇行している。北東端は調査区の外に延びる。溝の東側の肩は南方に開いて調査区外へ続く。南西端は蛇行して溝C-902に続く可能性がある。幅は1.4~1.9m、深さは10~20cmを測る。検出した長さは5mである。埋土は3層あり、下から第10-4層・第10-3層(火山灰層)・第10-2層が順に堆積していた(図58)。

溝 C-902・903 調査区の東端、谷状地形の中でも傾斜変換点に位置する。南東方向から遺構を検出した際、溝C-902と溝C-903の2条の溝と認識して遺構番号を与えていた。しかし、最後に北西端を精査した段階で、2条の溝が結合した。したがって、ここでは同一の溝として述べる。

平面形は蛇行しているが東に開いたU字形であり、両端は調査区の外に続く。南東端は蛇行して溝C-901に続く可能性がある。幅は1.5~1.6m、深さは24~25cmを測る。埋土は4層あり、下から第10-4層・第10-3層(火山灰層)・第10-2層・第10-1-2層が堆積していた(図58・図版38-2)。それぞれの層は自然地形の窪んだ部分に堆積したものと考えられる。

溝 C-904 調査区の東端に位置する。平面形はU字形である。両端は調査区の外に続く。幅は0.4~0.7m、深さは6~10cmを測る。

土坑C-905 調査区の東端に位置する。平面形は楕円形である。長径は80cm、短径は60cm、深さは4cmを測る。

土坑 C-906 調査区の北東に位置する。平面形は不定形である。土坑 C-907を避けるように広がっており、切り合い関係はなかった。南東・北西方向は6.4m、南西・北東方向は2.5m、深さは20cmを測る。

土坑 C-907 調査区の北東に位置する。平面形は楕円形である。長径は2.3m、短径は0.9m、深さは15cmを測る。土坑 C-906との切り合い関係はなかった。埋土はやや土壌化した自然堆積層である。

上記の遺構にはいくつか共通点がある。それは、断面形状がゆるやかで比較的浅いものであること、土坑の埋土には土壌化した自然堆積層である第10-4層が堆積していること、また、溝はその第10-4層の上に、第10-3層（火山灰層）・第10-2層・第10-1-2層が層序順に堆積していること、遺物が出土しないことである。このことから、上記の遺構は人為的なものではなく、自然地形の窪みである可能性が高い。

溝 C-601 調査区の南西側に位置する（図版36-4・5）。東西方向であり、東に向かって途中でY字に分岐している。両端は調査区の外に続く。幅は2～5 m、深さは80cm～90cmを測る。埋土は粗砂～中砂が主体であり、ラミナが認められた。埋土の堆積状況から自然流路と考えられる。埋土の状況や地形から考えると、西から東に向かって水が流れたと考えられる。断面 F-F'（図60）をみると、土層にやや不整合がみられた。南東側の溝のほうが時期的に新しいと考えられる。

溝の底は、一部ではあるが二段になっており、底は細く、平らに掘られた様子を呈した。このことから自然流路を利用して人為的に溝を掘削した可能性が考えられる。そして、最終的には洪水で埋没したと考えられる。切り合い関係から時期的には最も古くなる。

溝 C-602 調査区の南端に位置する。蛇行しているが、東西方向をとる。両端は調査区の外に続く。幅は0.8～1.2m、深さは50～54cmを測る。断面形はU字形である（図60G-G'）。埋土は粗砂～中砂が主体であり、ラミナが認められた。地形から考えると、西から東に向かって水が流れたと考えられる。埋土の堆積状況から自然流路と考えられる。溝 C-603を切っている。

溝 C-603 調査区の南端に位置する。途中で折れ、南東・北西方向をとる。両端は調査区の外に続く。幅は1.2～1.5m、深さは0.9～1.1mを測る。埋土は粗砂～中砂が主体であり、ラミナが認められた（図60H-H'）。埋土の堆積状況から自然流路と考えられる。しかし、溝の底はさらに一段低く、平らである点を考慮に入れると、自然流路を利用しながら人為的に溝を掘削した可能性が考えられる。そして、最終的には洪水で埋没したと考えられる。地山層の上面遺構であり、溝 C-602に切られ、溝 C-601を切っている。

溝 C-604 調査区の南西部分に位置する。幅は0.7～0.8m、深さは15～20cmを測る。断面形は半円形である。埋土は灰黄色中砂～細砂である（図60F-F'）。ラミナは認められなかった。人為的な遺構の可能性は低い。切り合い関係から、溝 C-601よりも時期的に新しい。

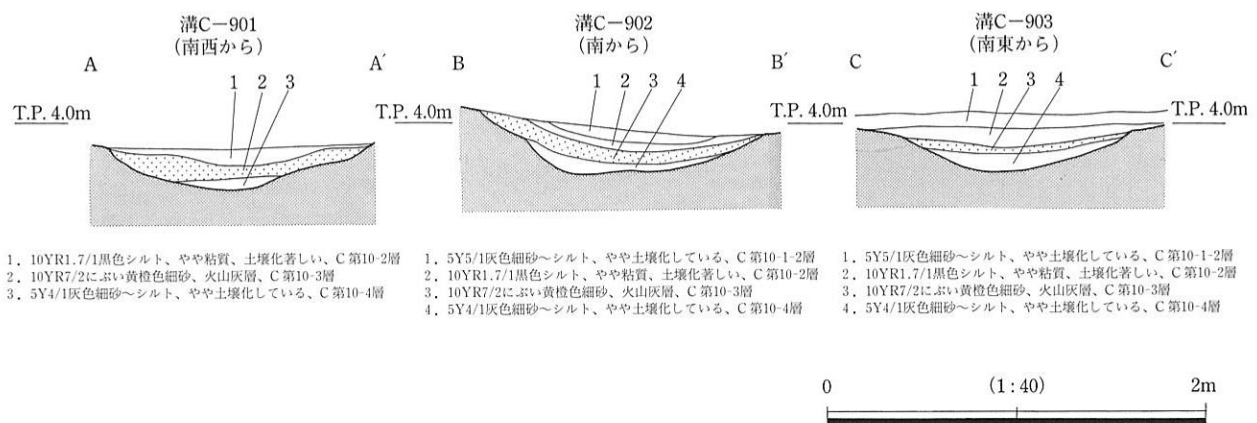


図58 溝 C-901・902・903 土層断面図

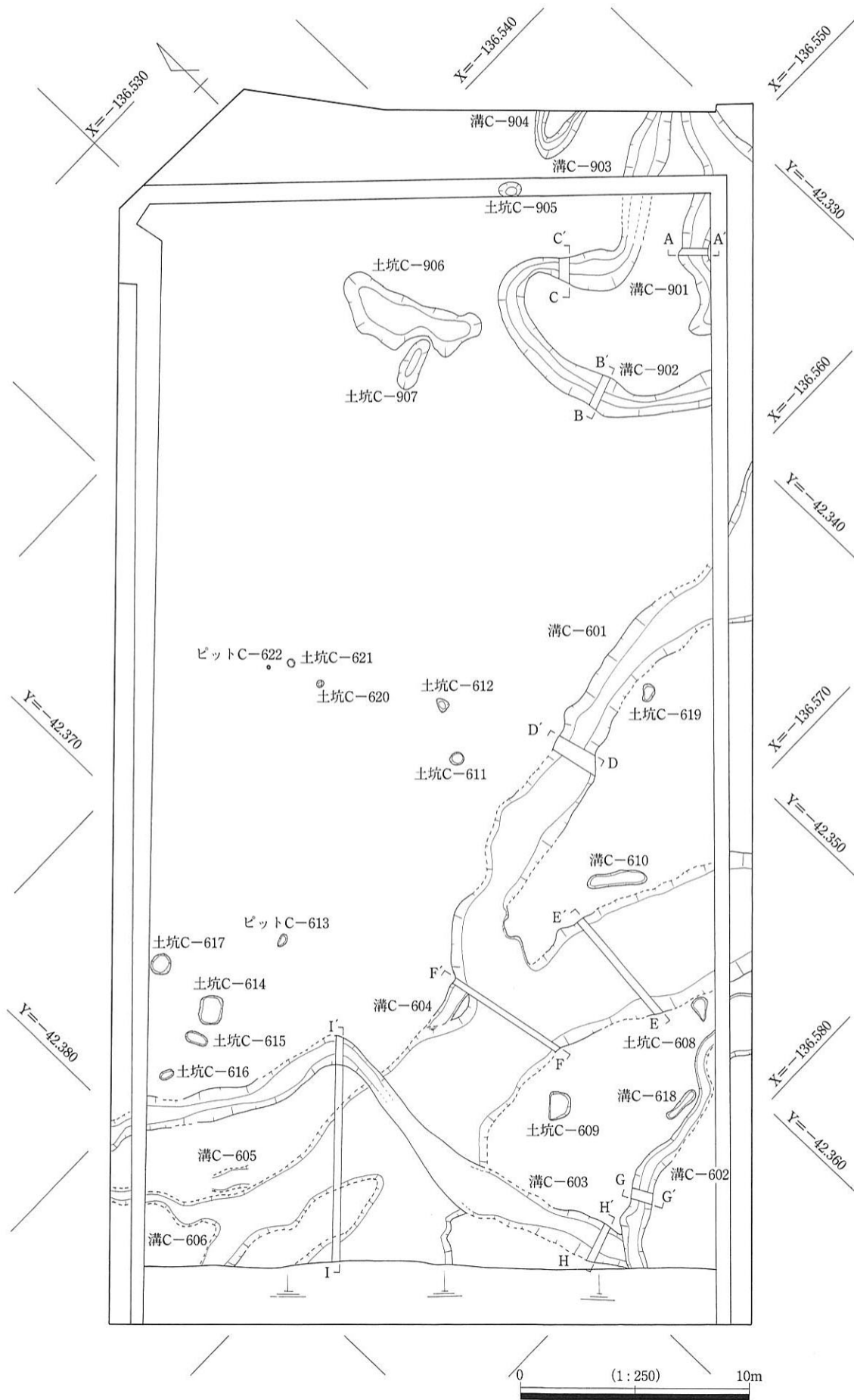


図59 C地区第9面 平面図

溝 C-605 調査区の南西角に位置する。南東・北西方向である。大きく攪乱を受けており、底の一部分を検出したにすぎない。幅は0.8~1.0m、深さは30cm程度を測る。埋土はシルト~細砂で、自然堆積と考えられる。南西・北東方向の土層断面 I-I' (図60) をみると、溝 C-605がほぼ同じ位置で埋没した後、掘り直されていることが確認された。時期的には溝 C-601・溝 C-606よりも新しいと考えられる。

溝 C-606 調査区西端に位置する。東西方向であり、溝 C-601と切り合い関係は平面では認められなかった。攪乱を大きく受けている。幅は1.8~2.4m、深さは40~50cmである。埋土は灰色中砂~シルトで、自然堆積と考えられる。埋土は溝 C-601と同じであり、溝 C-601と切り合いが認められなかったことか

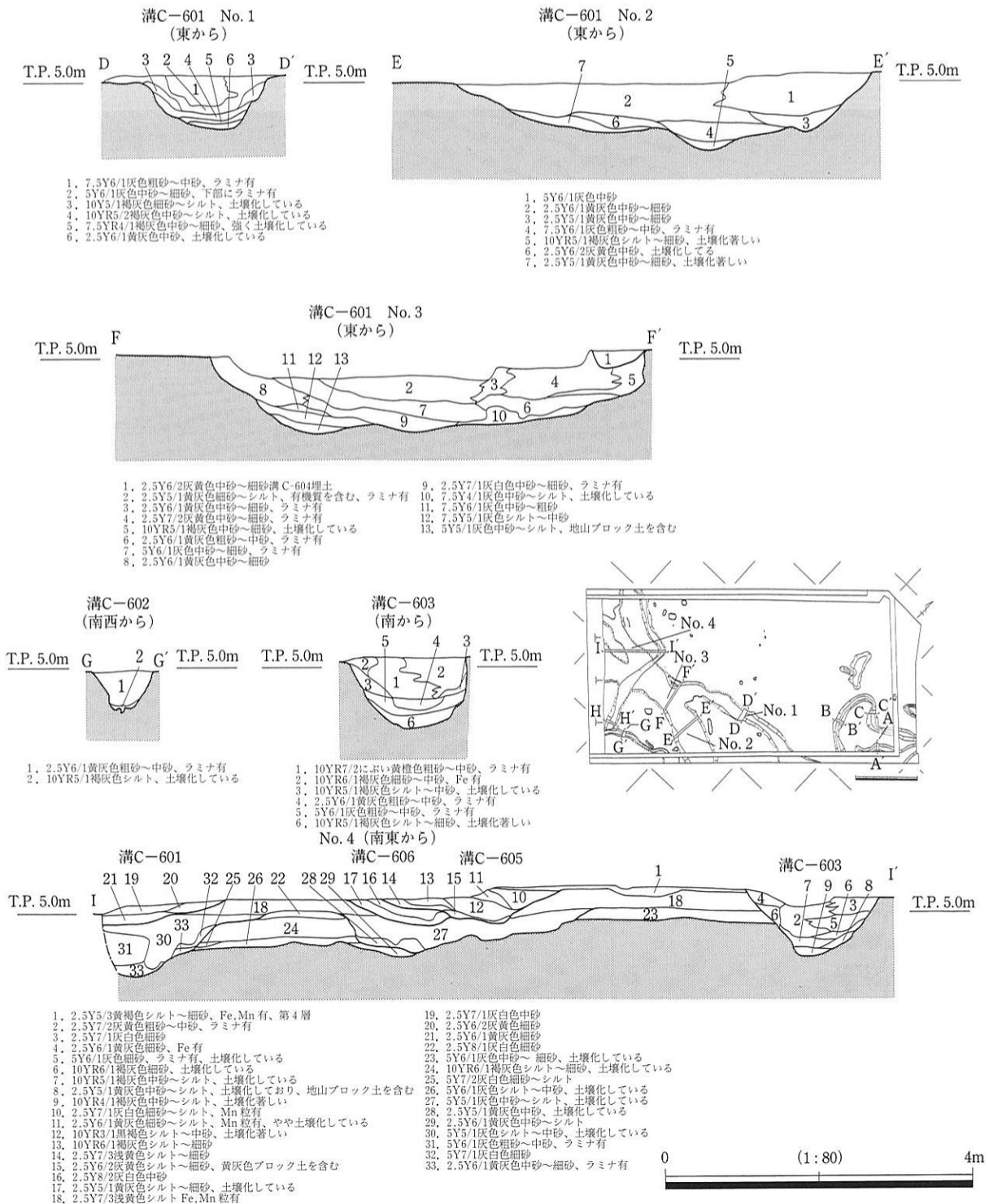


図60 溝 C-601・602・603・604・605・606 土層断面図

ら、溝 C-601 と同時期と考えられる。

以下の12基の遺構は、埋土が第4層に近い土質を示す灰褐色砂質土で共通しており、いずれも遺物は出土しなかった。

遺構番号	位置	平面形	規模	深さ
土坑 C-608	南端	円形	直径1m	30cm
ピット C-611	中央	円形	直径60cm	5cm
ピット C-612	中央	円形	直径60cm	4cm
ピット C-613	西側	楕円形	長径50cm、短径30cm	5cm
ピット C-614	西側	角丸長方形	長辺1.3m、短辺0.9m	9cm
ピット C-615	西側	楕円形	長径90cm、短径50cm	5cm
ピット C-616	西側	楕円形	長径70cm、短径40cm	4cm
ピット C-617	西側	円形	直径80cm	3cm
土坑 C-619	南東	不定形な円形	直径80cm	16cm
土坑 C-620	中央	円形	直径30cm	3cm
土坑 C-621	中央	円形	直径40cm	2cm
ピット C-622	中央	円形	直径20cm	2cm

これらの遺構に共通する埋土の灰褐色砂質土は第4層に類似した土層であることから、これらの遺構は第4層の耕作に伴うものである可能性が高い。

これ以下、3基の遺構の埋土は地山層が部分的に土壌化した褐色粘質土で、いずれも遺物は出土しなかった。

土坑 C-609 調査区の南端に位置する。北西端は攪乱で切られているが、平面形は角丸方形である。一辺は1.2m、深さは26cmを測る。

溝 C-610 調査区の南側に位置する。溝の両端は丸く、幅は50～65cm、長さは2.7m、深さは38～43cmを測る。

溝 C-618 調査区の南端に位置する。直線で、東西方向である。東端は攪乱で切られており、検出した長さは1.6mである。西端は丸く、幅は30～40cm、深さは20～30cmを測る。

第9面で検出した溝 C-901・C-902・C-903に堆積していた火山灰層は、分析の結果、鬼界アカホヤ火山灰層であることが判明した(第7章第2節)。谷状地形の底部に形成された溝から二次堆積とはいえ良好な火山灰の堆積が検出されたことは、谷底部が今から7300年前ごろ(¹⁴C 較正年代)の自然地形を残していることを示している。

なお、今回の調査では谷底部の第9面地山層直上で樹木片を検出し、樹種鑑定を2点実施した。1点はサンプルが変形しているために樹種を限定できなかったが、ほぼトチノキ科の樹種であろうという結果を得た(樹種鑑定は当センター保存科学担当の山口主査による)。もう1点は、ハンノキ属ハンノキ亜属と同定された(樹種鑑定はパリノサーヴェイ株式会社による)。また、同時に委託した放射性炭素年代測定では BP2150±80年という結果を得た。これらの樹種は地山層直上で検出したが、第6層にも同様の樹木が多く含まれていた。これらの年代差は弥生時代の新たな谷の開析の結果と考えられる。

第8面

第8面は、谷状地形に堆積した第10層の上面に形成された遺構面である(図61・図版37-2)。第8面の基盤層となる第10層は、植物遺体を含んだ土壌化したシルト層と、植物遺体をあまり含まないシルト層の互層である。上層から、第10-1-1層(5Y4/1灰色シルト)・第10-1-2層(10Y4/1灰色細砂～中砂)・第10-2層(5Y3/1オリーブ色シルト)・第10-3層(7.5Y7/2灰白色粗砂～中砂)・第10-4層(5Y7/1灰白色細砂～シルト)に分層可能であった。第10-1-1層と第10-2層は、土壌化して有機質を含むが、第10-1-2層自体は土壌化していない。また、第10-3層は火山ガラスを含む火山灰層であり、鬼界アカホヤ火山灰層の2次堆積層である。第10-4層は、やや土壌化した自然堆積層である。

遺構面は谷状地形の肩から調査区の北東端に向かって低くなり、東側はさらに低くなっている。谷状地形の肩の部分は T.P.4.7m、東方向に傾斜し、最も低い部分では T.P.4.0m を測る。

第 8 面で検出した遺構は溝が 1 条、土坑が 3 基である。

溝 C-801 調査区の東端に位置する。南東・北西方向であり、平面形は L 字形である。幅は 1.3~1.7m、深さは 20~40cm を測る。埋土は第 6 層に類似しており、腐植した有機物を多く含んでいる。この付近には、第 6 層の下に位置する第 7 層・第 8 層が堆積しておらず、第 6 層が第 8 面を覆っている。溝 C-801 は第 8 面で掘り込まれた後、この面全体を覆う第 6 層で埋没したと考えられる。遺物は出土しなかった。

埋土については花粉・珪藻分析を委託した。これによれば、溝 C-801 の堆積環境は第 6 層の堆積環境とほぼ同じであって水草の生育する水域を呈し、好塩性珪藻の *Rhopalodia gibberula* が優占して検出されている。

土坑 C-802 調査区の北東に位置する。平面形は楕円形である。長径は 2.0m、短径は 1.1m、深さは 15cm

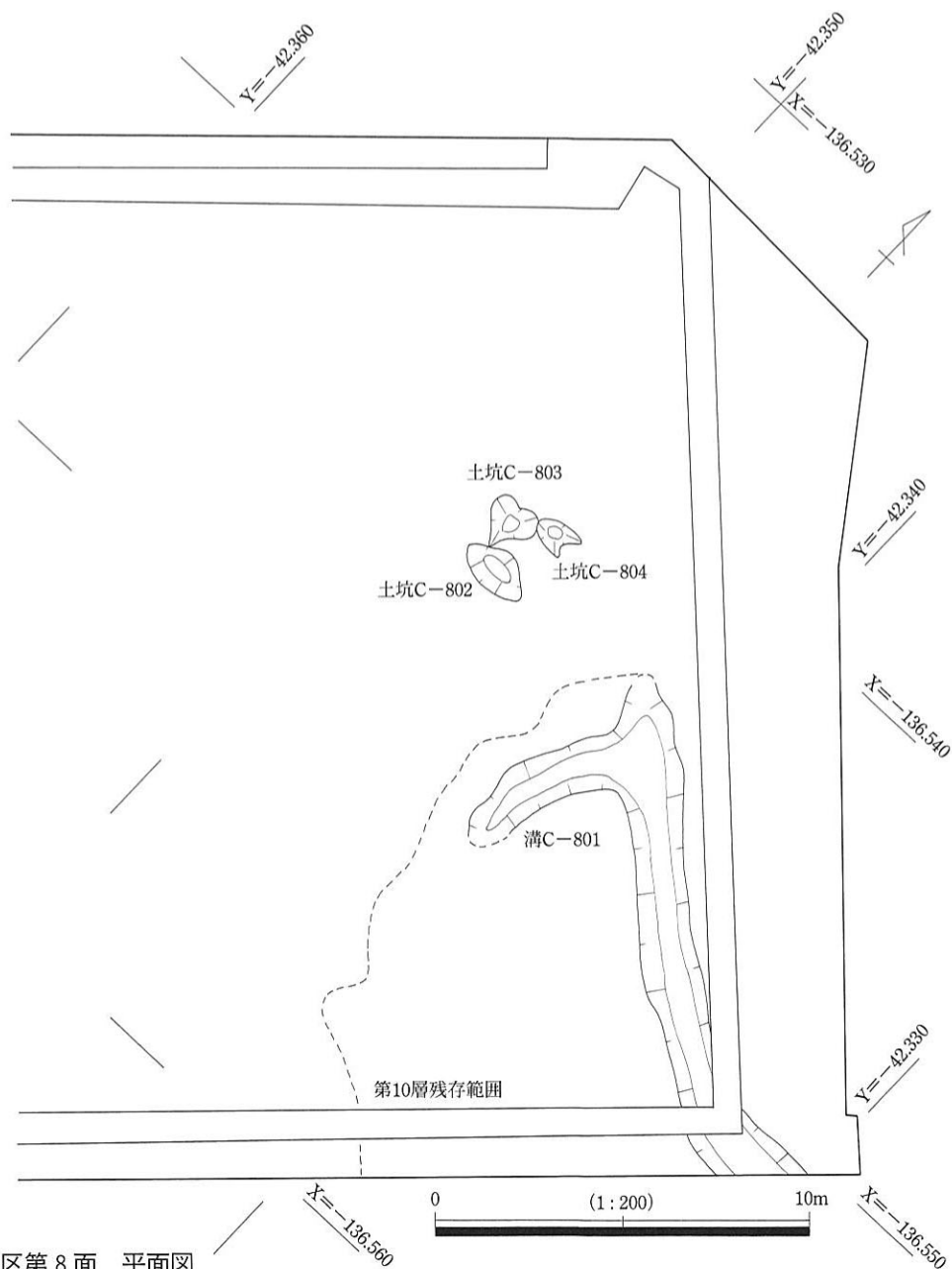


図61 C地区第8面 平面図

を測る。

土坑 C-803 調査区の北東に位置する。平面形はハート形である。東西方向は1.4m、南北方向は1.3m、深さは10cm を測る。

土坑 C-804 調査区の北東に位置する。攪乱に切られているが、平面形は楕円形である。長径は1.2m、短径は0.8m、深さは10cm を測る。

これら 3 基の土坑の埋土は、やや土壌化した自然堆積の灰褐色シルトである。遺物は出土しなかった。

第 7 面

第 7 面は、第 9 層の上面で検出した遺構面である(図62・図版37-1)。第 7 面の基盤層となる第 9 層は、植物遺体を含んだ土壌化したシルト層と、植物遺体をあまり含まないシルト層の互層である。上から第 9-1層 (2.5Y5/1黄灰色細砂～シルト)・第9-2層 (5Y7/1灰白色細砂～シルト)・第9-3層 (2.5Y5/1黄灰色シルト)・第9-4層 (10Y4/1灰色シルト～中砂) に分層できた。この中でも第9-1層と第9-3層は有機質を

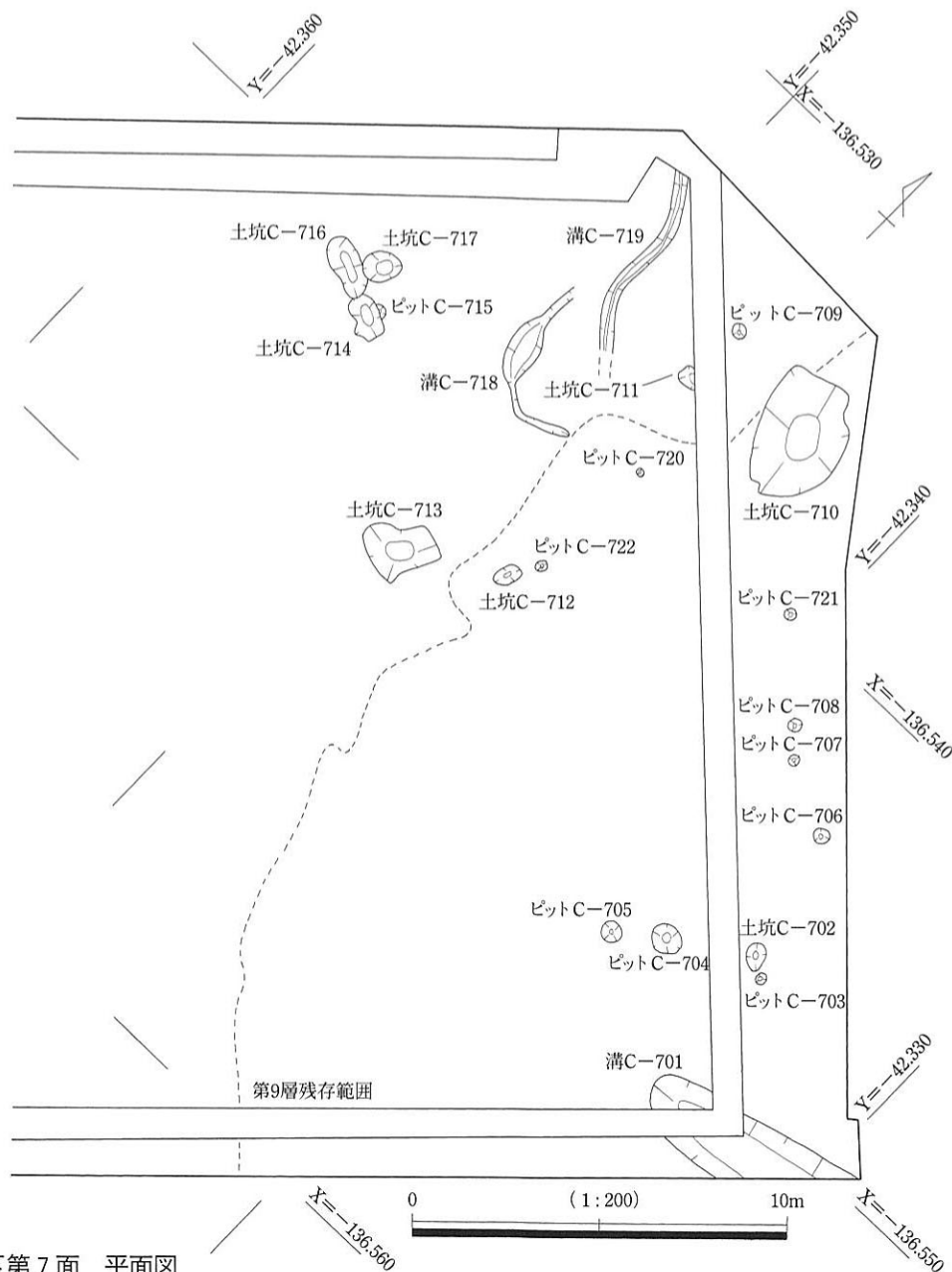


図62 C地区第7面 平面図

含み、相似た土質を示す。第9-4層は上の有機質が染み込んだ様相を呈している。

第7面も北東部分にむかって傾斜する。谷状地形の肩の部分では T.P.4.7m、東端の最も低い部分では T.P.4.3m を測る。

第7面で検出した遺構はピットが12基、土坑が8基、溝が3条である。

溝 C-701 調査区の東端に位置する。直線で、東西方向である。長さは6mにわたって検出した。東は調査区の外に続く。幅は1～2m、深さは9～36cmを測る。溝の底は、東が深い。溝 C-701は、第8面で検出した溝 C-801の直上に位置し、溝 C-801が遺構面全体を覆う第6層で埋没していたことから判断して、溝 C-801が埋没する過程で残った窪みであると判断される。遺物は出土しなかった。

溝 C-718 調査区の北東に位置する。平面形はL字状に曲がり、その途中で緩やかに膨らみを持つ。東端は攪乱を受けており、続きは不明である。部分的に膨らんでいるところで幅は80cm、平均的に幅は20cmを測る。深さは5cm～20cmを測る。埋土は第6層と同じ黒色粘質土であり、この面全体を覆う第6層で埋没したと考えられる。遺物は出土しなかった。

溝 C-719 調査区の北東に位置する。南東・北西方向であり、やや蛇行している。東端は調査区の外へ続く。幅は30cm程度、深さは10～20cmを測る。この面全体を覆う第6層で埋没したと考えられる。遺物は出土しなかった。

以下の15基の遺構は、埋土が黒褐色粘質土であり、遺物が出土しない点で共通しており、この面全体を覆う第6層で埋没したと考えられる。

遺構番号	位置	平面形	規模	深さ
土坑 C-702	東端	楕円形	長径80cm、短径30cm	4cm
ピット C-703	東端	円形	直径30cm	5cm
ピット C-704	東端	円形	直径80cm	5cm
ピット C-705	東端	円形	直径60cm	4cm
ピット C-706	北東端	円形	直径50cm	5cm
ピット C-707	北東端	円形	直径30cm	2cm
ピット C-708	北東端	円形	直径40cm	2cm
ピット C-709	北東端	円形	直径40cm	19cm
土坑 C-710	北東端	不定形	南北3.5m、東西2.4m	17cm
土坑 C-711	北東	円形	直径80cm	8cm
土坑 C-712	北東	楕円形	長径80cm、短径40cm	7cm
ピット C-715	北東	円形	直径40cm	13cm
ピット C-720	北東	円形	直径20cm	5cm
ピット C-721	北東端	円形	直径30cm	10cm
ピット C-722	北東端	円形	直径30cm	6cm

以下の4基の遺構は地山上面で検出された。埋土はこの面を覆う第6層の黒色粘質土であることから上述の遺構と同時に形成されたと判断し、ここに記述している。これら遺構は埋土が踏み込まれて底面は凹凸が激しい。踏み込みが集中した部分を遺構として検出したものである。

土坑 C-713 調査区の北東に位置する。平面形は不定形である。南西・北東方向は1.8m、南東・北西方向は1.4m、深さは15cmを測る。

土坑 C-714 調査区の北東に位置する。平面形は不定形である。東西は1.1m、南北は0.6m、深さ15cmを測る。

土坑 C-716 調査区の北東に位置する。平面形は不定形である。南東・北西方向は2.7m、南西・北東方向は0.7m、深さは20cmを測る。

土坑 C-717 調査区の北東に位置する。平面形は楕円形である。長径は1.0m、短径は0.8m、深さは10cmを測る。

第6面

第6面は、第6層(2.5Y2/1黒色シルト)の上面である(図63・図版36-1)。第6面は、上層の第5層を除去した面であり、北東部では上層の耕作によって第6層上面は削平されている。調査区南西側では第5層直下に地山層が露出した。したがって、この部分で検出した遺構は第9面で記述した。

第6面の基盤層となる第6層は、谷状地形部分の最上層にあたり、自然堆積層と考えられる。第6層は非常に土壌化が強く、上層の第5層と比べるとやや黒色であり、砂を含まず粘質である。第6層残存範囲は図63の破線よりも北東の部分である。その付近の高さはT.P.4.8mを測り、そこからさらに傾斜して、北東端ではT.P.4.4mを測る。

第6層の下には、調査区東端で部分的に第7層(2.5Y7/3浅黄色中砂~細砂)、第8層(2.5Y6/2灰黄色シルト)が堆積していた。調査区の北端部分では、第6層の上面に自然堆積と思われる砂層を確認した。しかし、極めて少量であったため、砂がもたらされてきた方向などは不明である。

第6面で検出した遺構は、落ち込み1基である。

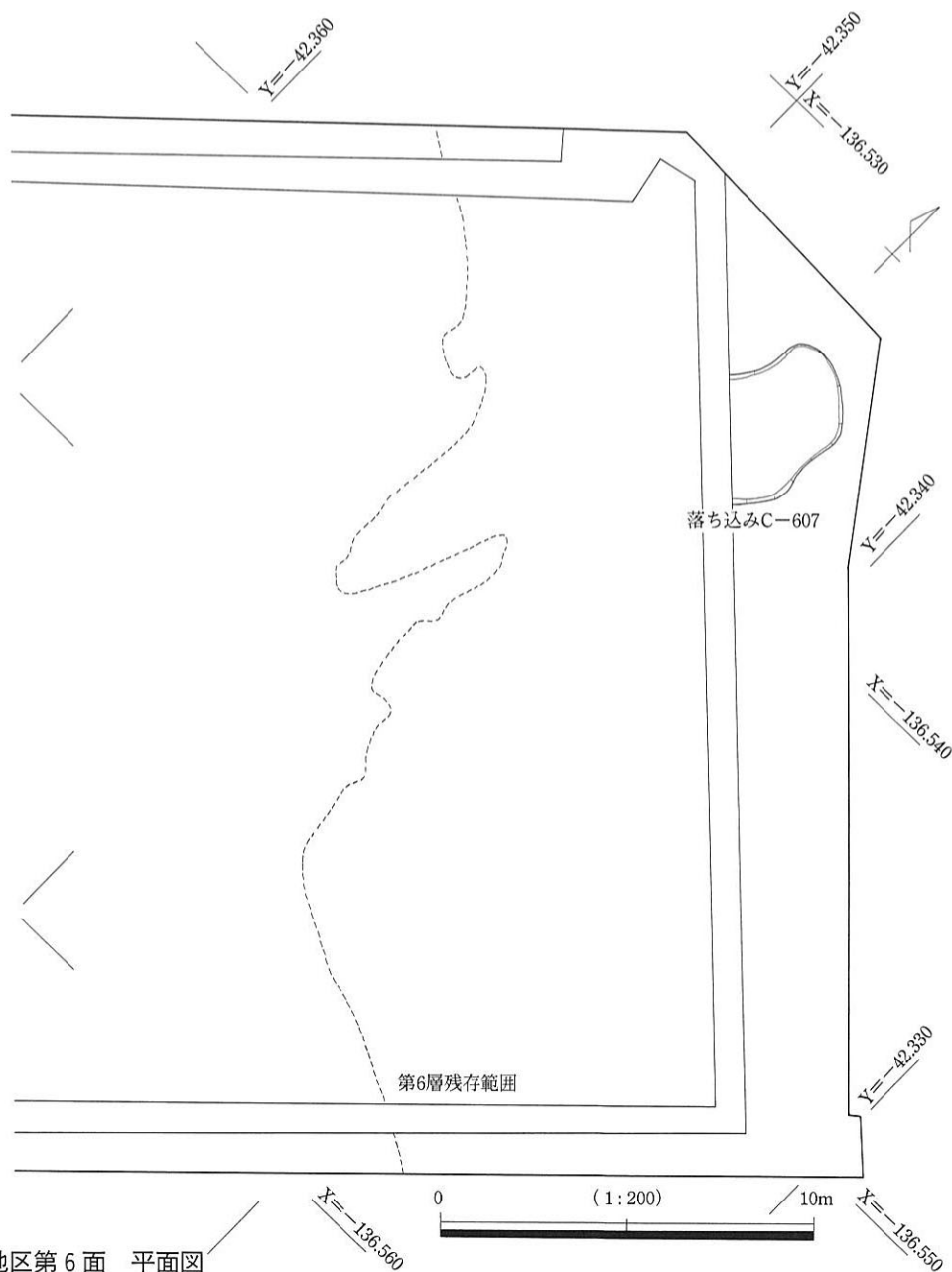


図63 C地区第6面 平面図

落ち込み C-607 調査区の北端に位置する。南東・北西方向は3.5m、南西・北東方向は 3 m、深さは 5 cm を測る。南西方向の続きは検出できなかった。埋土は第 5 層であり、落ち込みは第 6 層の上面遺構と考えられる。遺物は出土しなかった。

第 3 節 古墳時代

第 5 面

第 5 面は、谷状地形が埋没した後に堆積した第 5 層 (2.5Y4/1黄灰色細砂混じりシルト) の上面である (図64・図版35-2)。第 5 面の基盤層となる第 5 層は、調査区の北東側、約 4 分の 1 に残存していた。第 5 層は、本来、調査区全体に堆積していたと推定され、調査区の南西側では第 4 層の攪拌・削平を受けたと考えられる。

調査区の地形は南西方向が高く、北東方向が低い。調査区南西部分は T.P.5.1m、緩やかに傾斜して、調査区北東部分では T.P.4.6m を測る。

検出した遺構は第 5 層残存範囲で土坑 3 基、ピット 1 基である。また第 5 層と第 6 層の間に挟まれた洪水砂が平面で帯状に連続する部分を検出した。第 5 層残存範囲外では土坑 C-501・溝 C-502 を検出した。これら 2 つの遺構埋土は第 4 層に類似しており、第 4 層下面遺構と考えられる。しかし、遺物は出土しなかった。

土坑 C-501 調査区の中央に位置する。平面形は角丸長方形である。長辺は 1 m、短辺は0.6m、深さは 10cm を測る。

溝 C-502 調査区の中央に位置する。南西・北東方向であり、長さは2.3m にわたって検出した。幅は 10 cm、深さは 2～3 cm を測る。

土坑 C-503 調査区の北東端に位置する。円形の土坑である。直径は2.1m、深さは36cm を測る。埋土は褐灰色細砂混じりシルトであり、第 4 層に近い土質である。溝 C-503 の下には第 6 面の落ち込み C-607 が位置する。その遺構の影響を受けて窪んでいるものと思われる。人為的な遺構の可能性は低い。

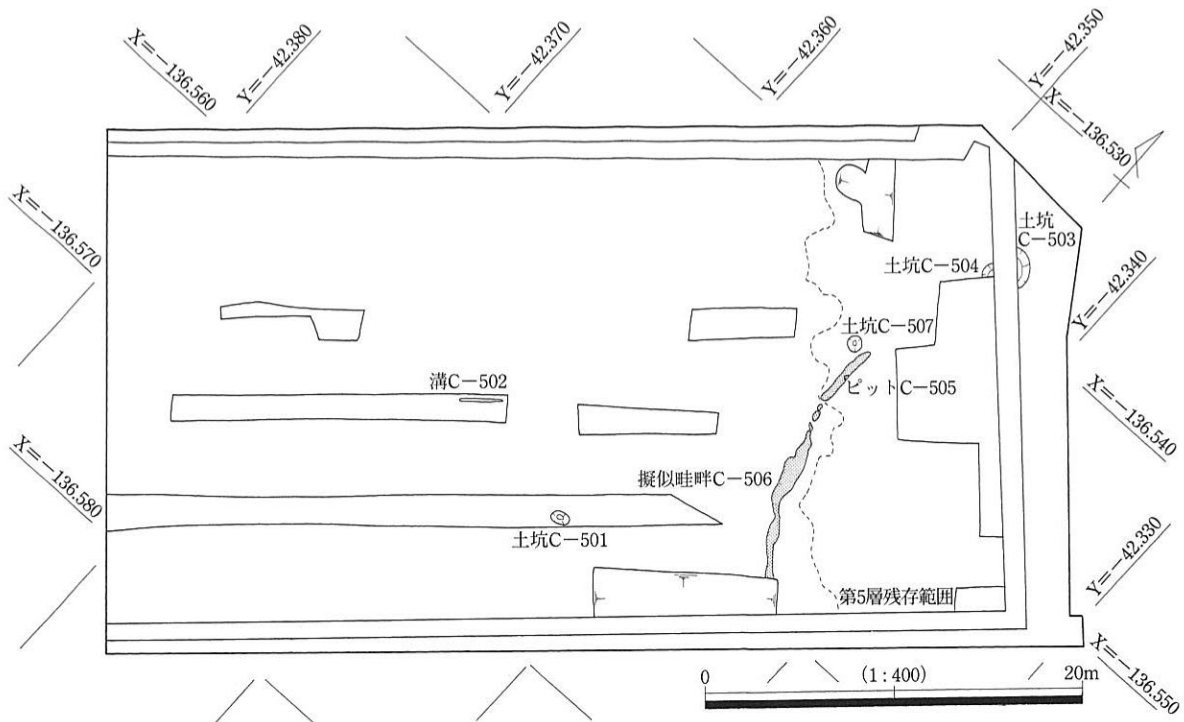


図64 C地区第5面 平面図

土坑 C-504 調査区の北東端に位置する。約 4 分の 3 を欠しているが、平面形は円形と考えられる。直径は60cm、深さは36cm を測る。埋土は第 4 層に近い土質であり、それに覆われることから、第 4 層下面の遺構である。遺物は出土しなかった。

ピット C-505 調査区北東側に位置する。平面形は円形である。直径は20cm、深さは10cm を測る。溝 C-506 を切っている。その部分は第 5 層が堆積せず、下層の砂が露出していることから、第 5 層下面遺構の可能性はある。遺物は出土しなかった。

擬似畦畔 C-506 調査区の北東に位置する。第 5 層残存範囲に沿って砂を帯状に検出した。断続的であるが、一連のものと考えられる。幅は50cm、長さは13m にわたって検出した。砂は、この部分では少し盛り上がるような形で残っていた。調査当初は溝とも考えられたが、掘られた部分に堆積した砂というよりも、むしろ、盛り上がっており、残存した砂と確認した。さらに、第 5 層は耕作土層であり、その部分は、第 5 層と第 6 層の間に堆積した砂が残存したことから、畦畔が存在した痕跡であると考えられる。遺物は出土しなかった。

土坑 C-507 調査区北東側に位置する。平面形は円形である。直径は80cm、深さは20cm を測る。遺物は出土しなかった。

第 4 節 中世

第 4 面

第 4 面は削平を受けた第 4 層の上面である (図65・図版35-1)。第 4 面の基盤層となる第 4 層は、さらに分層が可能である。第4-1層 (2.5Y6/1黄灰色中砂混じりシルト) は、調査区の全域に堆積しており鉄分を多く含む。下層の第4-2層 (2.5Y6/1黄灰色細砂混じりシルト) は、調査区の北東端部分のみに堆積している。第4-2層は第4-1層より粘質となっている。

また、調査区の北端で、部分的に第 4 層の上面で砂 (2.5Y7/3浅黄色中砂～細砂) を検出した。砂は洪水砂と考えられるが、もたらされてきた方向は不明である。この砂で覆われている部分は、第 4 面が削

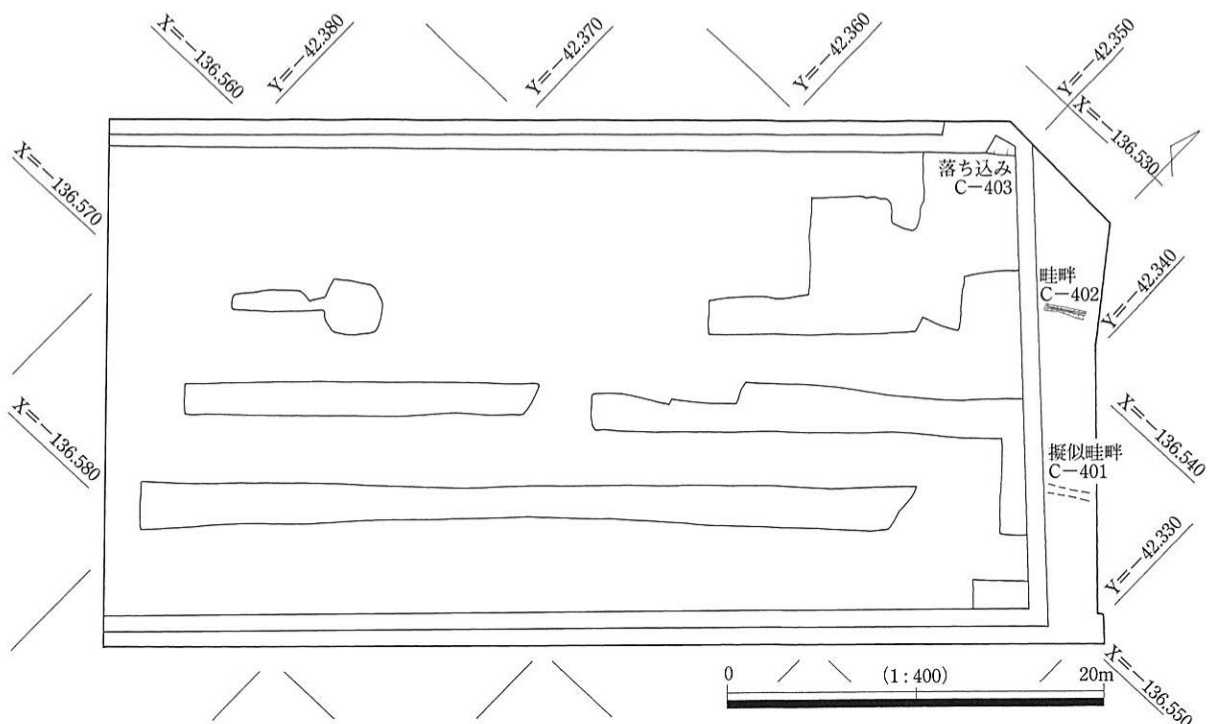


図65 C地区第4面 平面図

平を受けず、地表面が良好に残存していた。

第4面の地形は調査区の南西方向が高く、北西方向が低い。調査区の南西部分は T.P.5.2m を測る。北東方向に緩やかに傾斜して、調査区の北東部分では T.P.4.9m を測る。

第4面で検出した遺構は条里に伴う畦畔と擬似畦畔、落ち込みである。

擬似畦畔 C-401 調査区の北東側に位置する。畦畔は特に高まらず、平面で土質がやや粘質で暗色を呈していたことから検出した。畦畔は直線で、南西・北東方向である。北東端は調査区の外に続く。南西端は続きを検出できなかった。擬似畦畔の幅は50cm を測る。第4層下面が盛り上がらなかったことから、第3面で検出した畦畔 C-301の影響を受けて、形成された擬似畦畔と考えられる。

畦畔 C-402 調査区の北西側に位置する。第4面を覆って堆積した砂を除去した結果、畔状に盛り上がった。畦畔は直線で、南西・北東方向である。北東端は調査区の外に続くが、南西端は続きを検出できなかった。幅は40cm を測る。

落ち込み C-403 調査区北端に位置する。全容が確認できなかったが、北に落ち込む肩を検出した。緩やかに北方向に傾斜している。遺物は出土しなかった。

第5節 近世以降

第3面

第3面は、第3層(5Y6/1灰色中砂～シルト)の上面である(図66・図版34-3)。上面は上層の第2層による削平をうけている。第3面の基盤層となる第3層は、鉄分を多く含む、やや粘性の土質であり、第4層をブロック状に含む。

第3面の地形は調査区の南西方向が高く、北東方向が低い。調査区の南西部分では T.P.5.3m を測る。北東方向に緩やかに傾斜し、調査区の北東部分では T.P.5.0m を測る。

第3面で検出した遺構は、条里に伴うと考えられる擬似畦畔と犁溝群である。

擬似畦畔 C-301 調査区の北東側に位置する。畦畔は耕作土である第2層を除去して検出した。第2層を

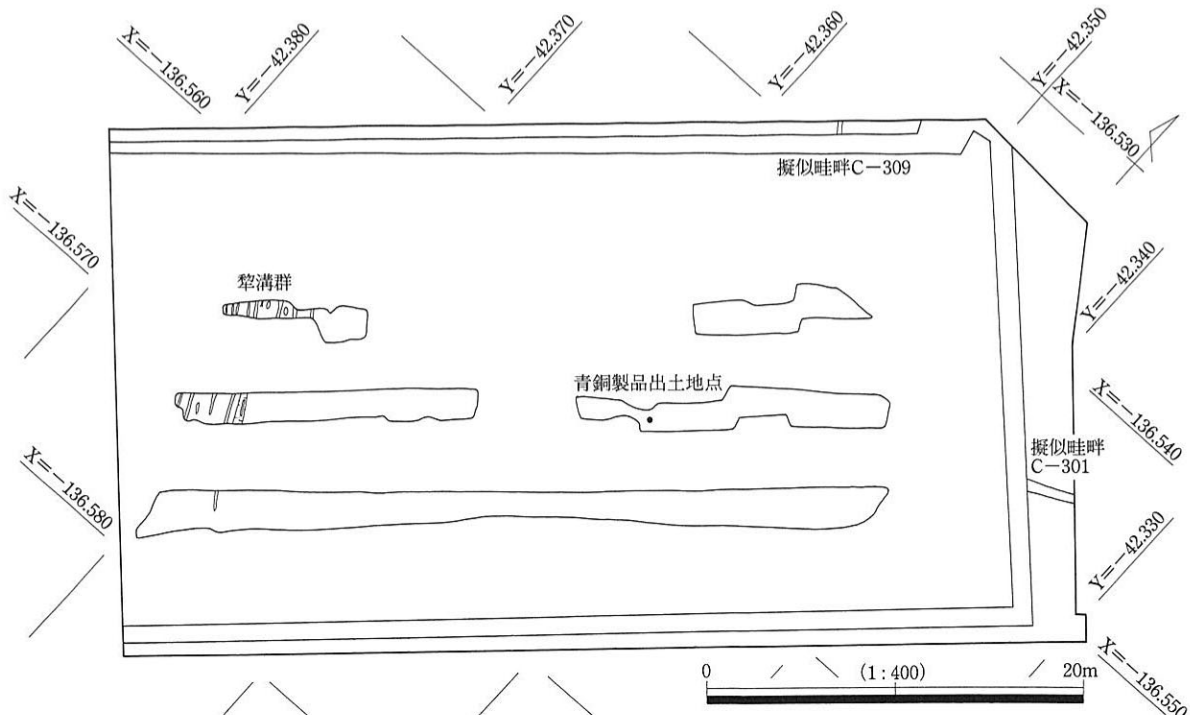


図66 C地区第3面 平面図

除去すると、畦状に盛り上がっていた。直線で、南西・北東方向である。北東端は調査区の外に続く。南西端は続きを検出できなかった。畦畔の幅は50cm、高さは10cmを測る。

この盛り上がり自体は、第2層の耕作に伴うものと考えられる。また、本来残存すべき第3層と第4層に挟まれた砂が畦畔C-301の下で良好に残っていない点を考慮すると、第2面の擬似畦畔の可能性が高いと考えている。

今回検出した畦畔は第2面の擬似畦畔と考えているが、この部分では第3層の下面も盛り上がっており、第4面に擬似畦畔を形成していることから、この第3面でも畦畔が存在した可能性が高い。

擬似畦畔 C-309 調査区の北側に位置する。畦畔は耕作土である第2層を除去して検出した。第2層を除去すると、第3面自体が盛り上がっていた。この盛り上がりは第2層の耕作に伴うものであり、第2面の擬似畦畔と認識した。

直線で、南東・北西方向である。条里地割方向に合致する畦畔である。北西端は調査区の外に続く。南東端は続きを検出できなかった。畦畔の幅は40cm、高さは10cmを測る。

今回検出した畦畔は、畦畔C-301と同様に第2面の擬似畦畔である。しかし、第3層下面自体が盛り上がっており、第4面に擬似畦畔を形成していることから、第3面でも畦畔が存在した可能性が高い。

犁溝群 調査区の南西側に位置する。直線で、南東・北西方向である。攪乱を受けて途切れているが、一連の耕作に伴うものと考えられる。それぞれ幅は10cm～15cm程度であり、深さは5cm程度のものが多い。いずれも第2層下面に伴う遺構である。遺物は出土していない。

第2面

第2面は、第2層（10YR5/1褐灰色中砂～細砂）の上面である（図67・図版34-1）。上面は第1層の耕作により削平されている。第2面の基盤層となる第2層は、鉄分を多く含み、よくしまっている。

第2面の地形は南西方向に高く、北東方向に低い。調査区の南西部分ではT.P.5.4mを測る。調査区の北東部分ではT.P.5.1mを測る。

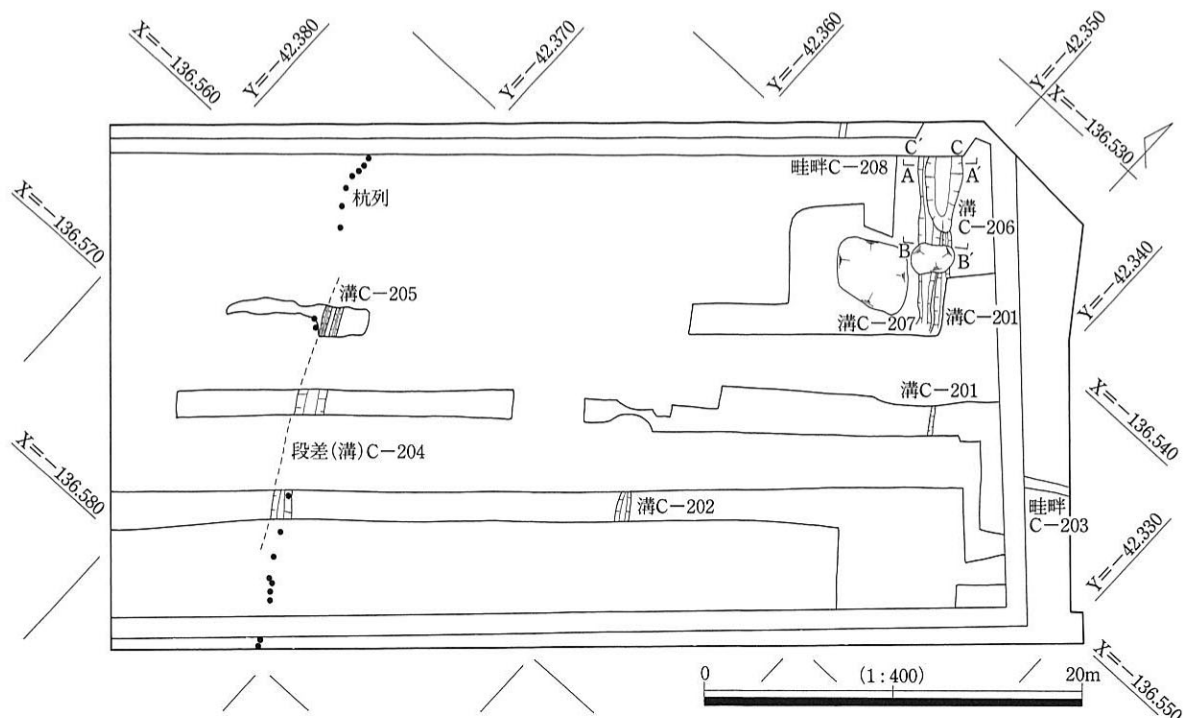


図67 C地区第2面 平面図

第2面で検出した遺構は条里に伴うと考えられる畦畔と段差と溝である。

溝 C-201 調査区の北端に位置する。直線であり、南東・北西方向である。溝の途中と南東端は攪乱を受けており、検出した長さは5.4mである。幅は50～70cm、深さは5～7cmを測る。断面形は皿形である。埋土は土壌化した中砂～シルトである。

平面図では溝の北西端が溝 C-206で切られているように見える。しかし、溝の埋土を検討した結果(図68)、A-A'とB-B'断面に溝 C-201が確認されることから、溝 C-201は溝 C-206が埋没した後、北西方向に延びていたと考えられる。遺物は出土しなかった。

溝 C-202 調査区の中央東側に位置する。直線であり、南東・北西方向である。両端は攪乱を受けており、検出した長さは1.2m、幅40～70cm、深さは10～12cmを測る。断面形は皿形である。遺物は出土しなかった。

畦畔 C-203 調査区の北東に位置する。畦畔は上層の第1層の削平を受けて平坦であり、平面で鉄分の沈着が少なく、灰色を呈す部分をもって検出した。また、断面では第2層下面の盛り上がりで畦畔の存在を確認した。直線であり、南西・北東方向である。北東端は調査区の外に続く。南西端は続きを検出することができなかった。幅は50cmを測る。

溝 C-206 調査区の北端に位置する。溝 C-201の北西に位置する。平面形は北西方向に向かって開いている。北西端は土留め C-103に切られている。長さは4mにわたって検出した。幅は0.7～1.7m、深さは25cm～40cmを測る。北西ほど幅が広く、深くなっている。

埋土の上層は地山ブロックや木片を含んだシルト～中砂、下層は中礫混じりの中砂～シルト堆積でラミナが観察された(図68)。上層は地山ブロック土や木片を含むことから、人為的に埋め戻したような埋土である。一方、下層は調査区北東端の第3層と第4層の間に堆積した砂に類似した砂を含むことから、流水の自然堆積層と考えられる。また、後述する土留め C-103との関係から、土留めによって溝を堰止め、地山の粘土や木片を一緒に埋めて溝を人為的に埋没させたと考えられる。

土層断面を検討した結果、溝 C-201・溝 C-207がそれぞれ断面 A-A'と B-B'で確認された。このことから2本の溝は、溝 C-206が埋没した後、直線に通っていたことが判明した。したがって、溝 C-206は、第2面よりも古い時期の遺構を誤って同時に検出したと考えられる。溝 C-206は調査区北東端で検出し

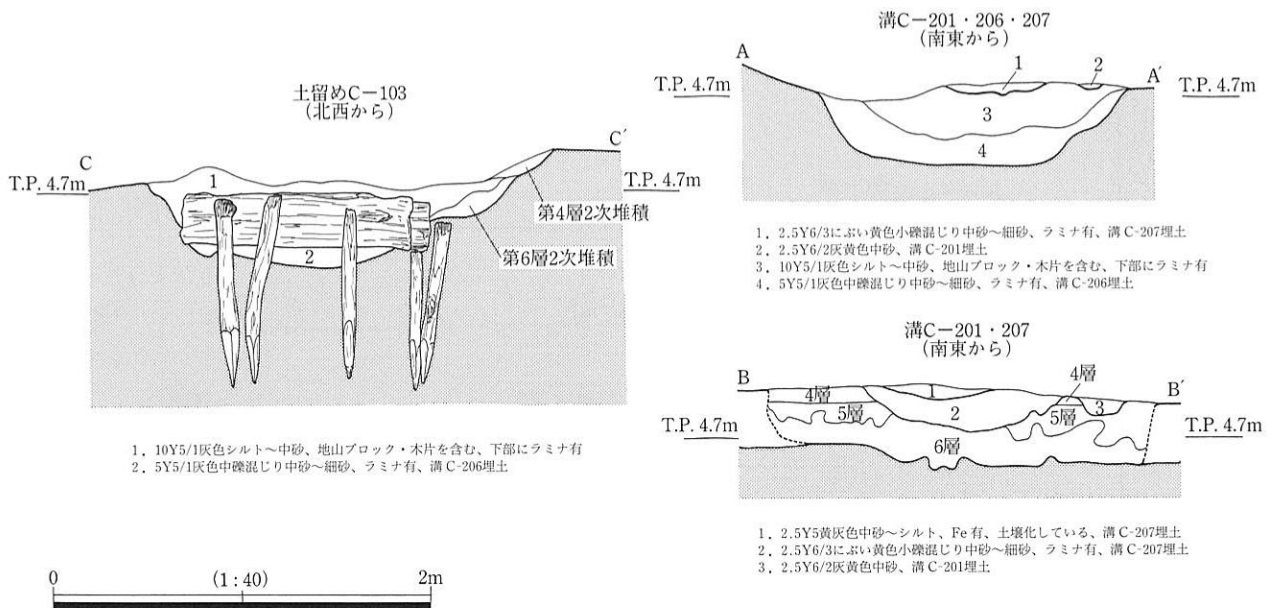


図68 土留め C-103・溝 C-201・206・207土層断面図

た砂に類似した砂を溝の埋土に含んでいることから、第4面に伴う遺構の可能性がある。遺物は出土しなかった。

溝 C-207 調査区の北端に位置する。溝 C-201に平行して南西側に位置する。直線であり、南東・北西方向である。南東端は攪乱を受けているが、検出した長さは9 m、幅は0.6~1.1m、深さは8~37cmを測る。断面形は皿形である。埋土は小礫混じりの中砂~細砂であり、ラミナが認められた(図68)。

平面図では溝の北東側は溝 C-206で切られているように見えるが、先述の溝 C-201と同様に A- \bar{A} と B- \bar{B} 断面に溝 C-207が確認されたことから、溝 C-207は溝 C-206が埋没した後、北西方向に延びていたと考えられる。

出土した遺物は図66の184~187である。184(図版39-2)は肥前磁器皿片である。185(図版39-2)は肥前磁器染付碗である。186(図版39-2)は伊賀・信楽焼行平の取手である。187(図版39-2)は道具瓦と思われる。遺構は18世紀後半の遺物を含みが、19世紀初頭が下限と考えられる。

畦畔 C-208 調査区の北側に位置する。畦畔は、畦畔 C-203同様に上層の第1層の削平を受けて平坦であり、平面で鉄分の沈着が少なく、灰色を呈す部分をもって検出した。また、断面では第2層下面の盛り上がりで畦畔の存在を確認した。

直線で、南東・北西方向である。北西端は調査区の外に続く。南東端は続きを検出できなかった。幅は50cmを測る。

段差(溝) C-204 調査区の南西側に位置する。南東・北西方向である(図版34-2)。段を挟む遺構面はその北東側が一段下がっており、段差は約20cmである。段差の北東側にはさらに深さ約10cmの溝が取り付いていた。したがって、南西の高い地面からの溝の深さは29~30cmを測る。溝の幅は1.1~1.5mである。段差は第2面で検出したが、溝の埋土に第1層を含んでいることから、第1層下面遺構と考えられる。遺物は出土しなかった。

溝 C-205 調査区の南西側に位置する。段差(溝)C-204に平行して、その北東側に位置する。幅は0.3~0.6m、深さは4~8 cmを測る。埋土は第1層であり、第1層下面遺構と考えられる。遺物は出土しなかった。段差(溝) C-204と一連のものと考えられる。

杭列 調査区の南西側に位置する。南東・北西方向であり、段差(溝) C-204に沿って杭列を検出した。それらは段差(溝) C-204を形成する際に打たれたと考えられ、その時の土留め、もしくは基礎杭の役割を果たしたと考えられる。溝を掘削した土は、南西横に盛り上げて、段差を形成したと推定される。

第1面

第1面は、吹田機関庫造成以前の耕作土層である第1層(10Y2/1黒色細砂~シルト)の上面である(図69)。攪乱や上層の盛土層を重機で除去した機械掘削終了面である。

第1面の地形は南西方向に高く、北東方向に低い。調査区の南西部分では T.P.5.6m、調査区の北東部分では T.P.5.3mを測る。

交通科学博物館所蔵の『工事写真其壺・其式』によると、吹田操車場は大正8年2月から第1期工事がおこなわれたことが判明しており、吹田機関区内のこの付近も、およそその頃から造成工事がおこなわれたと考えられる。第1面が盛土層に覆われた部分では、畝と畝間溝の連続する旧地表面(旧耕作面)を良好に検出することができた。その時期は大正時代以前と考えられる。

第1面で検出した遺構は、井戸が1基、埋め桶が1基、土留めが1箇所、土坑が1基、ピットが1基、

溝が2条、畝立てに伴う溝群である（図版33-1）。

埋め桶 C-101 調査区の東に位置する（図版33-2）。掘り方の中央に円形の桶を埋めていた。桶の上部は攪乱を受けて壊れていたが、桶の底の部分は良好に残存していた。桶は直径80cm を測る。桶の枠は竹のタガで固定していた。桶の底は4枚の板を組み合わせ、横木を渡し、鉄釘を打って固定していた。

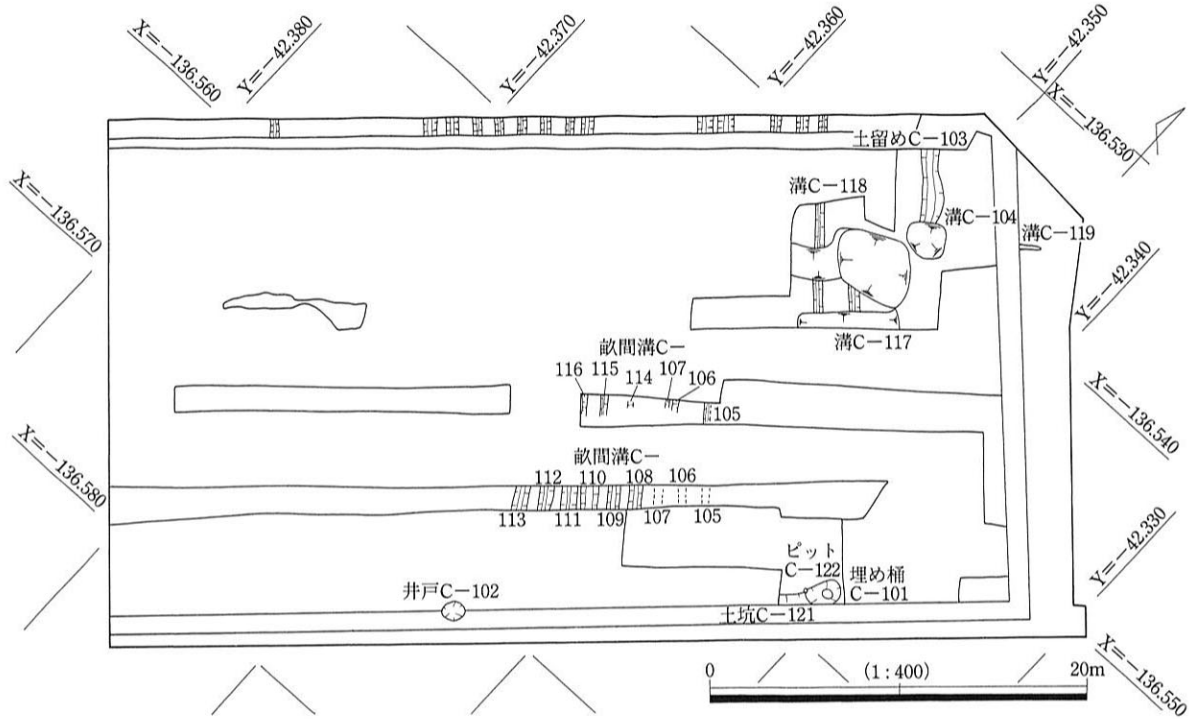


図69 C地区第1面 平面図

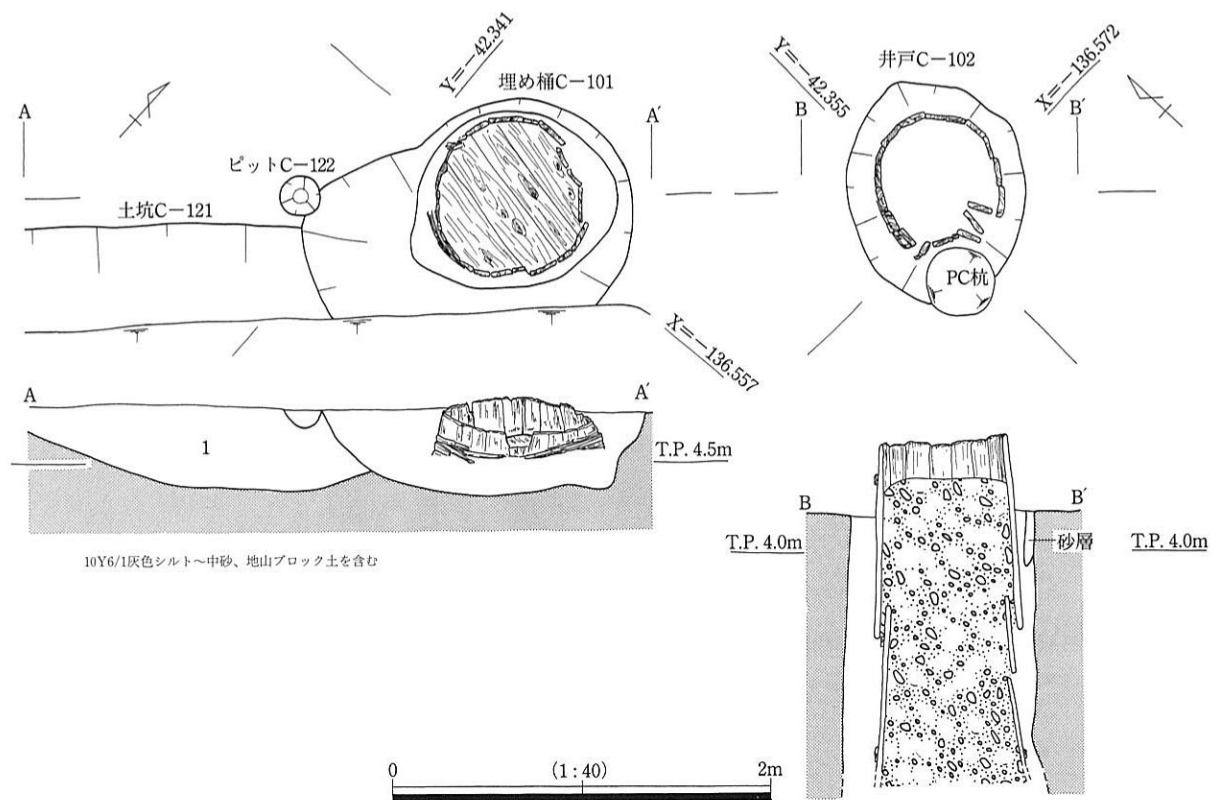


図70 埋桶 C-101・井戸 C-102 平面図・断面図

掘方の直径は1.7m、検出面からの深さは45cmを測る。切り合い関係は土坑 C-121を切り、ピット C-122は切り合いを持たずに接している。

出土遺物は図71の182・183である。182(図版39-1)は伊賀・信楽焼急須の口先部分である。183は平瓦である。ともに埋め桶内から出土した。細片であり、図化するには至らなかったが、掘り方から軟質施釉陶器が出土している。遺物の時期は19世紀前半と考えられる。

土坑 C-121 調査区の東に位置する。攪乱を受け、平面形は不明である。深さは45cmである。埋土は地山層をブロック状に含む砂質土である。

ピット C-122 調査区の東に位置する。平面形は円形である。直径は20cm、深さは10cmを測る。埋め桶 C-101の掘り方に接している。遺物は出土しなかった。

井戸 C-102 調査区の南東端に位置する円形の井戸である(図70)。南東端は PC 杭で攪乱を受けている。桶組であり、3段検出した。桶の直径は上端75cm、下端80cmを測る。桶は縦102cm、横13~14.5cmの板材を利用したものであるが、18枚で桶の一段を構成する。上から3段目の上部まで検出したが、それよりも下は検出できなかった。掘方の直径は1mを測る。埋土はよくしまっており、地山ブロック土が多く入っていた。遺物は出土しなかった。

土留め C-103 調査区の北端に位置する(図68)。溝 C-104の北西に位置する。土留めの北西側は攪乱を受けていたので、遺構の続きは不明である。長さ122cm、幅25cmの板材を横方向に用い、上下2段に重ね、長さ約1mの杭を5本打つことにより土留めしていた。残存した土留めの幅は1.5mである。

図68の立面図から、溝 C-206を堰止めていることが確認できた。埋土の上層に地山ブロック土や木片を含むことから、溝を堰止めた後は付近の地山層を掘削し、溝を埋没させたと考えられる。したがって、溝 C-206の埋没以前に土留めされたと考えられる。

溝 C-104 調査区の北端に位置する。直線で、南東・北西方向である。両端は攪乱を受けており、長さは4mにわたって検出した。幅は0.9~1.1m、深さは30~35cmを測る。断面形は皿形である。埋土は中砂~シルトである。遺物は出土しなかった。

畝間溝 C-105~C-118 調査区の中央部分に位置する。直線で、南東・北西方向である。溝は攪乱を受けて途切れているが、同一方向で調査区を横断していた可能性が高い。南東・北西方向に直線に延びると考えられる。溝は平均すると、幅は60cm、深さは20cmを測る。断面形は皿形である。検出した溝群の中でも溝 C-108から溝 C-113は、先述の盛土層で覆われていたので、溝の肩は削平を受けることなく良好に検出した。遺物は出土しなかった。

周辺の調査成果を考慮に入れると、第1面では調査区全体に畝間溝が広がっていたと考えられる。復原した地表面は、調査区中央部分では T.P.5.5m を測る。

溝 C-119 調査区の北側に位置する。直線で、南西・北東方向である。長さは1.4mにわたって検出した。幅は20cm、深さは2~3cmである。埋土は第1層である。第1面で検出したが、その付近では第1層が削平を受けていたので、本来、第2面で検出すべき遺構である。第1層下面遺構と考えられる。遺物は出土しなかった。

第6節 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、ほとんどが破片であり、図化するには至らない小片の遺物が多かった。また、図化しても残存率が低く、口縁の復元が厳密におこなえなかったものもあった。

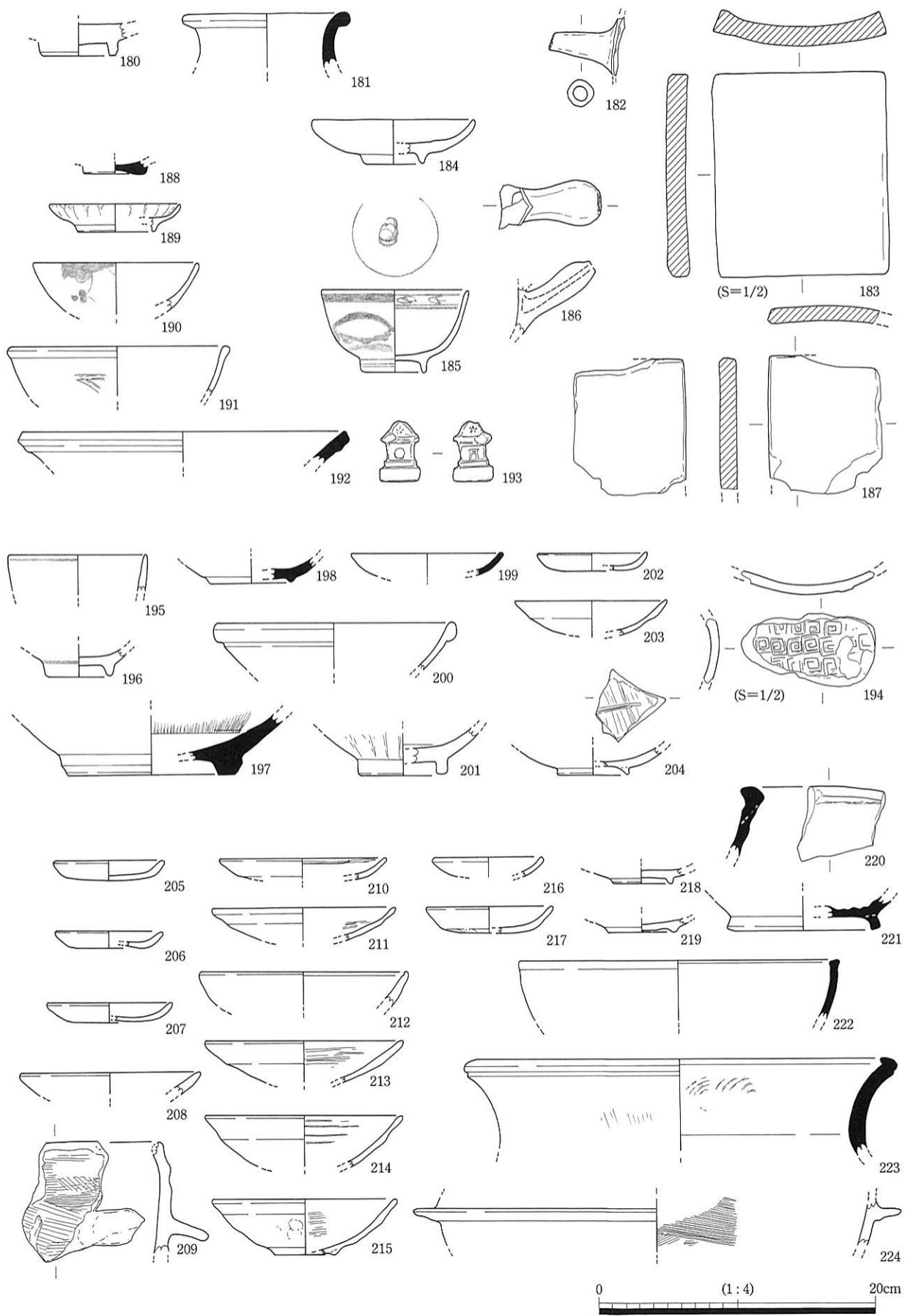


图71 C地区出土遗物实测图(1)

第1層からは図71（図版39-1）の180と181が出土した。180は青磁の高台部分である。深い灰オリーブ色の釉が内面底部を除いて全体にかかる。断面は灰色、露胎部分は暗灰黄色を呈す。181は須恵器の壺口頸部である。口縁部が一部欠けているが、この部分や断面を含めて内面全体に炭化物が付着している。これらの遺物は、第1面精査時に出土した。

第2層からは図71（図版40-1）の188～193が出土した。188は瀬戸・美濃焼天目茶碗の高台部である。内面の釉は黒褐色、底部は露胎で3箇所胎土目がある。面子として利用したと考えられる。17世紀中ごろのもの。189は肥前白磁の皿片である。190は肥前磁器の染付碗である。18世紀中から末の製品。191は青磁の碗口縁片である。玉縁状の口縁を有する。192は須恵器の甕口縁片である。193はミニチュア土製品である。祠を模している。表裏2面が同じ紋様で、鳥居と円を交互に配している。第2層は18世紀後半から19世紀初頭の近世の遺物を中心に包含している。遺物の下限は19世紀初頭と考えられる。

第3層からは図71（図版40-2・図版41-1）の194～204が出土した。194は青銅製品の破片である。表面に雷文が施されおり、緩く湾曲している。器壁の厚さは約3mm、復原最大径は10cm程度である。花瓶、もしくは線香立ての一部と考えられる。第3面精査時に出土した（図版34-4）。195は肥前磁器の染付碗口縁片である。196は肥前磁器の染付碗高台部片である。197は唐津系陶器の三島手鉢底部片である。上記3点は18世紀初頭の製品。198は瀬戸・美濃焼の輪花皿である。199は唐津焼の皿口縁部片である。上記2点は17世紀前半の製品である。200は中国製白磁碗口縁片である。201は肥前青磁碗の底部片である。灰オリーブ色の釉を施釉。底部内面露胎。断面は橙色。17世紀前半の所産。202は土師器の小皿片である。203は瓦器碗の口縁部片である。摩滅のため調整不明。204は瓦器碗の底部片である。ともに和泉型である。第3層は中世の瓦器を含むが、17世紀中ごろから18世紀初頭の近世の遺物を中心に包含している。遺物の下限は18世紀初頭と考えられる。

第4層からは図71（図版41-2・図版42-1・2）の205～224が出土した。205・206・207・216は土師皿片である。208は土師皿の口縁片である。209は土師器の羽釜の口縁部から鏝部片である。210・217は瓦器皿の口縁片である。211・212・213・214・215は和泉型瓦器碗の口縁片である。212は楠葉型である。213・214は、試掘調査で第4層と考えられる層から出土した。218・219は瓦器碗の底部片である。220は須恵質の東播系鉢の口縁片である。221は須恵器の壺底部である。底部内面はきわめて平滑で転用硯と思われる。222は須恵器の鉢口縁片である。223は須恵器の大甕口縁片である。224は土師器の羽釜の鏝片である。第4層は12世紀末から14世紀の鎌倉時代の遺物を包含しており、下層の遺物を攪拌したためか、一部古代の遺物を包含している。下限は14世紀である。遺物量としては、他の層と比較しても第4層が一番多い。

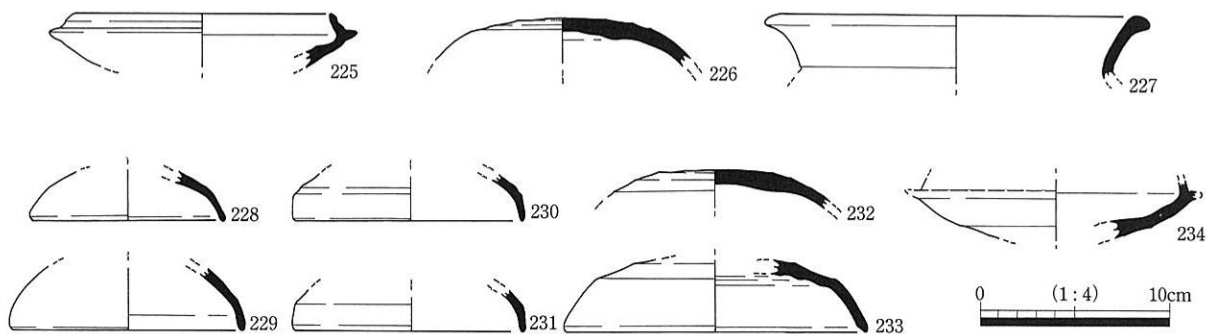


図72 C地区出土遺物実測図（2）

第5層からは図72（図版43-1）の225～227が出土した。225は須恵器の坏身口縁部片である。226は須恵器の坏蓋片である。227は須恵器の壺口縁部片である。焼成悪く灰褐色を呈している。第5層は6世紀後半の古墳時代後期の遺物を包含している。

第6層からは図72（図版43-2）の228～234が出土した。228・229・233は須恵器の坏蓋口縁部片である。230・231は同一個体の可能性高い。器形は坏蓋あるいは壺蓋か。232は須恵器の坏蓋片である。234は須恵器の坏身片である。端部はいずれも欠損している。第6層は6世紀後半の古墳時代後期の遺物を包含している。

第7節 C地区のまとめ

第9面では調査区北東部分に位置する谷状地形部分から、縄文時代前期初頭に降灰した鬼界アカホヤ火山灰層を検出した。谷状地形の中でも少し窪んだ部分に火山灰層が堆積していたが、窪地全体に層状に堆積していたのではなく、溝部分にのみ堆積していた。従って、降灰後のプライマリーな状態が保存されていたとは言えないが、灰層は10cm以上の厚さがあり、肉眼でも火山ガラスを多量に含むことがわかるほどで、ごくプライマリーな状態に近い2次堆積であると考えられる。この火山灰の検出によって谷の形成時期が約6300年前以前であることがわかった。

谷底の地山直上から樹木（ハンノキ）の幹材が検出され、BP2150±80年という放射性炭素年代測定結果を得た。このことから、谷状部分の堆積層はほぼその頃から形成が始まったと考えられる。2次堆積であることを考慮しなければならないが、鬼界アカホヤ火山灰層と地山直上の樹種の年代に約5000年の時期差がある。このことから、谷状地形部分は弥生時代前期ごろに一度削平をうけ、その後に粘土層が再堆積したと推定される。

第5面では洪水砂が帯状に残存して検出された部分があり、それは耕作によって攪拌されなかった部分すなわち畦畔の痕跡と認識した。第5層は6世紀後半の須恵器が入っており、古墳時代後期に水田を営んでいた可能性が示唆される。ただ、畦畔の上部は削平により失われ、水田区画の形状や利水状況など詳しいことはわかっていないが、畦の痕跡は蛇行して検出された。今後の調査が期待される。

谷状部分は、中世段階で谷状地形が平坦化されるまで、ちょうど湿地の縁辺部のような景観であったと考えられる。周囲の発掘調査成果を考慮に入れると、C地区（吹田操車場遺跡B地点）はもともと集落の縁辺部に位置していたと考えてよいであろう。

谷状地形が埋没して土地が平坦化すると、耕作地として利用され、水田や畑として耕作がおこなわれるようになったと考えられる。第4面の段階ではC地区では直線の畦畔が検出された。畦畔も周辺の条里地割に合致しており、条里畦畔と考えられる。第4層は古代の遺物も多少は含むが、基本的には鎌倉時代の遺物を下限として包含している。このことから、C地区では、中世以降には確実に条里地割の施行が考えられる。A地区の成果としては10世紀段階から条里の施行が考えられるが、C地区においては古代の層は削平されたと推定される。中世以降に再度、周辺の地形を平坦化したと考えられるが、このことは第4層の出土遺物がほかの層と比べて多いことからもうかがえる。これ以降、吹田貨車庫建設時の造成工事に伴って盛土がおこなわれるまでの間、耕作がおこなわれたと考えられる。

第7章 自然科学的分析

第1節 花粉・珪藻分析

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象として比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。なお、乾燥的な環境下の堆積物では、花粉などの植物遺体が分解されて残存していない場合もある。一方、珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映していることから、水域を主とする古環境復原の指標として利用されている。このように、堆積物について花粉分析と珪藻分析をあわせて行うことで、堆積時の植生および環境を復元することが可能である。

ここでは、吹田操車場遺跡(その2)A地区および、吹田操車場内発掘調査(その3)C地区において採取された試料について花粉分析と珪藻分析を行い、遺跡および周辺地域の植生ならびに堆積環境について検討を行う。

2. 試料

試料採取地点は、A地区の1A区南側断面と、C地区である。

A地区 A地区の分析試料は、上位よりI-1層(黒褐色細砂混シルトやや粘質、試料A-1)、I-2層(暗灰黄色細砂混シルトやや粘質、試料A-2)、II層(暗灰黄色細砂混粘質シルト、試料A-3)、III層(暗灰黄色粘質シルト、試料A-4)、IV-1層(灰黄褐色細砂混シルト質粘土、試料A-5)、IV-2層(灰黄褐色細砂混シルト、試料A-6)、IV-3層(黒褐色粘質シルト混粗砂、試料A-7)、V-1層(黄褐色粗砂～細砂、試料A-8)、灰色シルト、試料A-9)、V-2層(黒色シルト質粘土、試料A-10)、V-3層(黒褐色シルト質粘土、試料A-11)、V-4層(黄灰色粗砂、試料A-12)、VI-1層(黄灰色粗砂、試料A-13)、VI-2層(灰黄色シルト質粘土、試料A-14)、VI-3層(黄灰色粗砂、試料A-15)の計15点である。これらのうち、花粉分析はすべての試料について、珪藻分析は試料A-1～A-5、A-8、A-10、A-11、A-13、A-14の10点について分析を行った。

C地区 C地区の分析試料は、a地点の1層(試料C-1)、2層(試料C-2)、3層(試料C-3)、4層(試料C-4)、地山(試料C-18、C-19)の6点、bc地点の6層(試料C-5)、7層(試料C-6)、8層(試料C-7)、9-1層(試料C-8)、9-2層(試料C-9)、9-3層(試料C-10)、9-4層(試料C-11)、10-1-1層(試料C-12)、10-1-2層(試料C-13)、10-2層(試料C-14)、10-4層(試料C-15)、地山(試料C-16、C-17)の13点、溝C-801の埋土(試料C-20)の1点の合計20点である(図82)。すべての試料について花粉・珪藻分析をおこなった。

3. 方法

(1) 花粉分析 花粉粒の分離抽出は、基本的には中村(1973)を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え、1分間湯煎）を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離（1500rpm、2分間）の後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村(1974、1977)を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

(2) 珪藻分析 試料には以下の物理化学処理を施し、プレパラートを作成した。

- 1) 試料から乾燥重量1gを秤量する。
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温し反応させながら、1晩放置する。
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドおよび薬品の水洗を行う。水を加え、1.5時間静置後、上澄みを捨てる。この操作を5、6回繰り返す。
- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下し乾燥させる。マウントメディアによって封入しプレパラートを作成する。

プレパラートは生物顕微鏡で600～1500倍で検鏡し、直線視野法により計数を行う。同定・計数は珪藻被殻が100個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

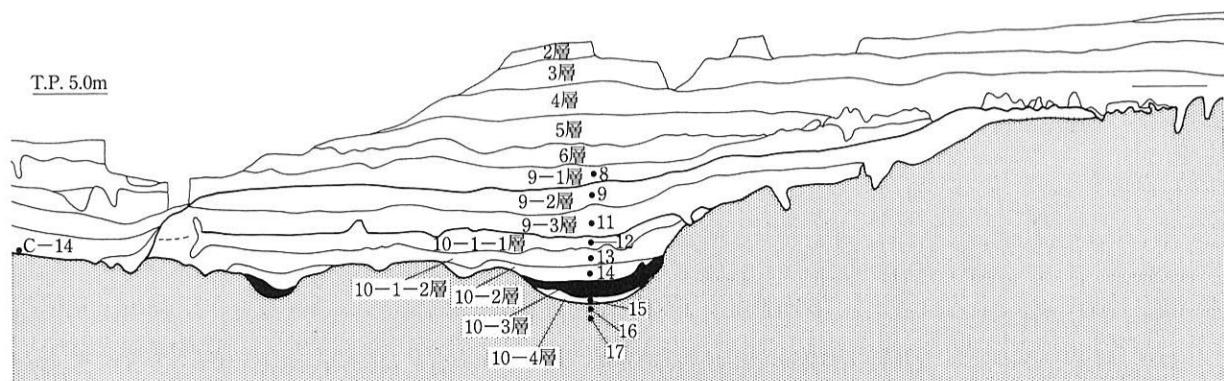


図73 花粉・珪藻分析 C地区 b・c地点サンプリング断面図

4. 花粉分析結果

(1) 分類群

A地区 A地区で出現した分類群は、樹木花粉26、樹木花粉と草本花粉を含むもの2、草本花粉22、シダ植物孢子2形態の計52である。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、主要な分類群を写真に示す。花粉数が200個以上計数できた試料は、花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図73に示した。200個未満であっても100個以上の試料については傾向をみるため参考に図示した。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕 マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複雑維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤマモモ属、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、サンショウ属、モチノキ属、カエデ属、ハイノキ属、ニワトコ属-ガマズミ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕 クワ科-イラクサ科、マメ科

〔草本花粉〕 ガマ属-ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、ノブドウ、アリノトウグサ属-フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、オミナエシ科、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕 単条溝孢子、三条溝孢子

C地区 C地区で出現した分類群は、樹木花粉28、樹木花粉と草本花粉を含むもの4、草本花粉23、シダ植物孢子2形態の計57である。これらの学名と和名および粒数を表2に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図74、図75、図76に示す。なお、200個未満であっても100個以上の試料については傾向をみるため参考に図示し、主要な分類群は写真に示した。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕 マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複雑維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤマモモ属、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属-アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ、エノキ属-ムクノキ、サンショウ属、モチノキ属、カエデ属、トチノキ、ミズキ属、ハイノキ属、ニワトコ属-ガマズミ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕 クワ科-イラクサ科、バラ科、マメ科、ウコギ科

〔草本花粉〕 ガマ属-ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、ユリ科、タデ属サナエタデ節、ソバ属、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、コウホネ属、キンポウゲ属、アブラナ科、アリノトウグサ属-フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、キツネノマゴ、オミナエシ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕 単条溝孢子、三条溝孢子

(2) 花粉群集の特徴

A地区 各試料の花粉群集の構成と組成の変遷から下位より、I帯、II帯、III帯の花粉分帯を設定した。以下、花粉分帯に沿って特徴を記す。

- ・ I帯 (V-1層、V-2層、V-4層)

花粉密度はやや低く、樹木花粉の出現率が草本花粉よりもやや高い。樹木花粉では、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ハンノキ属が比較的多く検出される。他に、シイ属、スギ、マツ属複雑

管束亜属などが伴われる。草本花粉では、イネ科がやや多く検出され、ヨモギ属、カヤツリグサ科などが出現する。

・II帯 (III層、IV-1層、IV-2層、IV-3層)

花粉密度はやや低く、草本花粉の占める割合が樹木花粉よりも高い。草本花粉では、イネ属型を含むイネ科が高い出現率を示し、ヨモギ属、カヤツリグサ科がやや多く検出される。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属、スギ、マツ属複維管束亜属、シイ属が検出される。

・III帯 (I-1層)

A 地区では花粉密度はやや低く、草本花粉の占める割合が樹木花粉よりも高い。草本花粉のアブラナ科が非常に優占し、イネ科が続いて検出される。樹木花粉では、マツ属複維管束亜属、スギなどが低率に出現する。

・I-2層、II層、V-1層、V-3層、VI-1層、VI-2層、VI-3層

A 地区では花粉はわずかに検出されるか、検出されなかった。

C 地区 a 地点

1層 (試料 C-1)、2層 (試料 C-2)、3層 (試料 C-3)、4層 (試料 C-4)、地山 (試料 C-18、C-19)

下位より地山 (試料 C-18、C-19) から2層 (試料 C-2) までの試料は、花粉密度が極めて低く、花粉がわずかに検出されるか、検出されなかったが、最上位の1層 (試料 C-1) は、花粉が比較的多く検出された。草本花粉の出現率が非常に高く、特にアブラナ科が優占して出現し、続いてイネ科の出現率が高い。これらの草本にカヤツリグサ科、ナデシコ科、アリノトウグサ属ーフサモ属、チドメグサ亜科、キツネノマゴ、ヨモギ属などが伴われる。

C 地区 bc 地点

花粉群集の特徴と変遷により、下位から SSS-I 帯、SSS-II 帯、SSS-III 帯の局地花粉帯を設定した。以下、花粉帯に沿って花粉群集の特徴を記す。

・SSS-I 帯：10-1-1層 (試料 C-12)、10-1-2層 (試料 C-13)、10-2層 (試料 C-14)、10-4層 (試料 C-15)

樹木花粉の出現率が草本花粉よりもやや高いが、上部に向かって草本花粉の出現率が増加する。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属が優占する。他に、モミ属、スギ、マツ属複維管束亜属、コナラ属アカガシ亜属などが低率に出現する。上位に向かってコナラ属コナラ亜属は減少傾向を示す。草本花粉は、イネ科、カヤツリグサ科が多く出現し、それらにヨモギ属が伴う。カヤツリグサ科は上部でやや高率になる。

・SSS-II 帯：9-2層 (試料 C-9)、9-3層 (試料 C-10)、9-4層 (試料 C-11)

草本花粉よりも樹木花粉の出現率がやや高い。樹木花粉は、コナラ属アカガシ亜属が増加し、コナラ属コナラ亜属とともに出現率が高く、モミ属、スギ、マツ属複維管束亜属などが低率に出現する。草本花粉は、イネ科、カヤツリグサ科が多く出現し、それらにヨモギ属、セリ亜科、キク亜科が伴われる。

・SSS-III 帯：6層 (試料 C-5)、7層 (試料 C-6)、8層 (試料 C-7)、9-1層 (試料 C-8)

草本花粉よりも樹木花粉の出現率がやや高い。下位に引き続き、樹木花粉は、コナラ属アカガシ亜属とコナラ属コナラ亜属の出現率が高いが、マツ属複維管束亜属、スギ、シイ属がやや増加する。草本花粉は、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属が多く出現する。他に、ガマ属ーミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属、ソバ属などが伴われる。

なお、最下部の地山 (試料 C-16、C-17) からはほとんど花粉が検出されなかった。

溝 C-801埋土 (試料 C-20)

樹木花粉の占める割合が草本花粉より高い。樹木花粉は、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属の出現率が高く、スギ、モミ属、マツ属複雑管束亜属、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ツガ属などが伴われる。草本花粉は、イネ科が優占し、カヤツリグサ科、ヨモギ属、マメ科、ガマ属-ミクリ属が出現する。

分類群	学名	和名	1A 区南側断面														
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
Arboreal pollen		樹木花粉															
	<i>Podocarpus</i>	マキ属										1	1	2			
	<i>Abies</i>	モミ属					2	6	4			5	8	6			
	<i>Tsuga</i>	ツガ属	1				1	1	10	3	3	10	1	4			
	<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	40				24	20	3		9	20	2	16	1		
	<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	10	1		6	31	43	20	6	15	58	2	18			
	<i>Sciadopitys verticillata</i>	コウヤマキ										1		1			
	Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	1			4	6	17	2	1		2		1			1
	<i>Myrica</i>	ヤマモモ属					1	1	1								
	<i>Juglans</i>	クルミ属					1										
	<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ					2	2	1			3		1			
	<i>Alnus</i>	ハンノキ属	4	1			1	1	11	9	5	35	2	40			
	<i>Betula</i>	カバノキ属	1			1	7	1	1			5		1	1		
	<i>Corylus</i>	ハシバミ属					2	2									
	<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ	1			1	2	2	3			2	5	4			
	<i>Castanea crenata</i>	クリ					2	3	1			2	3				
	<i>Castanopsis</i>	シイ属		2		3	16	23	28	2	7	22	1	19	1		
	<i>Fagus</i>	ブナ属	1				1	2			1	3					
	<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	3	1		7	11	23	51	4	16	101	25	71	4		
	<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属				8	39	47	70	8	20	163	9	57	5		
	<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ					1	1				1					
	<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ					3		2								
	<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属					1										
	<i>Ilex</i>	モチノキ属					1										
	<i>Acer</i>	カエデ属				1			4			1		3			
	<i>Symphlocos</i>	ハイノキ属										1	2				
	<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属-ガマズミ属							1								
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉					6	6	8		1						
	Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科															
	Leguminosae	マメ科							5								
Nonarboreal pollen		草本花粉															
	<i>Typha-Sparganium</i>	ガマ属-ミクリ属							1			3		1			
	<i>Alisma</i>	サジオモダカ属					1										
	<i>Sagittaria</i>	オモダカ属					1	1									
	Gramineae	イネ科	128	29		57	169	155	159	25	21	150	27	78	7		
	<i>Oryza type</i>	イネ属型	2			1		8									
	Cyperaceae	カヤツリグサ科	5			1	6	27	21	7	5	15		18		1	
	<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属										1					
	<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節	1				1										
	<i>Rumex</i>	ギンギン属					1										
	<i>Fagopyrum</i>	ソバ属					1										
	Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	1	1			3					2					
	Caryophyllaceae	ナデシコ科	2			1	1										
	Cruciferae	アブラナ科	327	42		2	2	1				2	4				
	<i>Ampelopsis brevipedunculata</i>	ノブドウ							1								
	<i>Halaragis-Myriophyllum</i>	アリノトウグサ属-フサモ属					1	1									
	Hydrocotyloideae	ナドメグサ亜科						2	1								
	Apiodeae	セリ亜科					2		11		2	10		5			
	Valerianaceae	オミナエシ科						1				1					
	Lactucoideae	タンポポ亜科	1				1	1						1			
	Asteroidae	キク亜科				1	1	2	12	2	2	14	3	4			
	<i>Xanthium</i>	オナモミ属		1			1										
	<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	2			12	19	34	63	4	3	27	10	29	1	1	
Fern spore		シダ植物胞子															
	Monolate type spore	単条溝胞子					2	4	3		1	1		2			
	Trilate type spore	三条溝胞子	1	1			5	2	2	1	2	3		4			
Arboreal pollen		樹木花粉	63	5	0	31	155	196	212	34	84	443	45	244	12	1	0
Arboreal・Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	0	0	0	0	6	6	13	0	1	0	0	0	0	0	0
Nonarboreal pollen		草本花粉	469	73	0	75	211	234	268	38	34	224	44	136	8	2	0
Total pollen		花粉総数	532	78	0	106	372	436	493	72	119	667	89	380	20	3	0
		試料 1 cc 中の花粉密度	3.4	4.7		6.4	1.8	2.1	3.0	4.3	7.1	2.1	5.3	9.1	1.2	1.8	
			4	2		2	4	4	3	2	2	5	2	3	2		
			×10	×10		×10	×10	×10	×10	×10	×10	×10	×10	×10	×10	×10	×10
Unknown pollen		未同定花粉	2	0	1	2	1	1	8	1	6	2	4	5	1	0	0
Fern spore		シダ植物胞子	1	1	0	0	7	6	5	1	3	4	0	6	0	0	0
Helminth eggs		寄生虫卵															
	<i>Ascaris</i>	回虫卵	40														
	<i>Trichuris</i>	鞭虫卵	32														
	<i>Metagonimus-Heterophyes</i>	異形吸虫卵	8														
Total		計	80	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
		明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

表 1 A 地区における花粉分析結果

分類群		a 地点							bc 地点										調査回数		
学名	和名	1	2	3	4	18	19	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	20
Arboreal pollen	樹木花粉																				
<i>Podocarpus</i>	マキ属																			1	
<i>Abies</i>	モミ属							1		3	16	12	11	7	13	4	28	22	3		20
<i>Tsuga</i>	ツガ属							3		4	1	5	3	2	1	1	2	3			5
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	6	1					14	3	37	15		1	8	7	4	3	9			6
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ							21	10	33	22	4	3	16	9		14	7			27
<i>Sciadopitys verticillata</i>	コウヤマキ							1			3		2	1			1				2
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科							5	1	7	5			7	2		2	1			10
<i>Myrica</i>	ヤマモモ属							1		1		1									
<i>Juglans</i>	クルミ属										1						1				
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ					1		1					1	1			4	1			
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	1						2			1	2			9	2	1	2	1		2
<i>Betula</i>	カバノキ属										4			1	1						3
<i>Corylus</i>	ハシバミ属									1											
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ							1		8	3	2		1	1	3	2	3			3
<i>Castanea crenata</i>	クリ							5		1	1	2			2	2	2	2			1
<i>Castanopsis</i>	シイ属							12	3	8	19	5	1	1	4		1				5
<i>Fagus</i>	ブナ属							1		1	1	2	2	1		2	1	2	1		3
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	1		4				82	8	23	89	60	12	87	88	128	129	167	3		70
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属				2			66	11	56	63	100	7	78	9	11	6	8	2		97
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ							1	1	2	2	1	2		3	2	9	10	1		5
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ											2	1		2	1	2	7	3		3
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属											1									
<i>Ilex</i>	モチノキ属												1								
<i>Acer</i>	カエデ属												1		1						
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ																		1		
<i>Cornus</i>	ミズキ属												1								
<i>Symplocos</i>	ハイノキ属												1								
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属-ガマズミ属																1	1			
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉																				
Moraceae-Urticaceae	タウ科-イラクサ科							1				2			2	2	5	2	3		
Rosaceae	バラ科										1										
Leguminosae	マメ科							1				1					1	5	1		7
Araliaceae	ウコギ科																1				
Nonarboreal pollen	草本花粉																				
<i>Typha-Sparganium</i>	ガマ属-ミクリ属							1									3				
<i>Alisma</i>	サジメガカ属									1	1						1				
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属										2										
Gramineae	イネ科	104	29	4				82	37	111	73	66	22	44	106	31	74	54	5		97
<i>Oryza type</i>	イネ属型	1								2	1										1
Cyperaceae	カヤツリグサ科	4	2					53	3	21	43	22	31	81	90	136	26	10	6		23
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属							5													
Liliaceae	ユリ科											1									
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節							1				1	1	1					1		
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属											1									
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科												1					1			
Caryophyllaceae	ナデシコ科	1											1								
<i>Nuphar</i>	コウホネ属											1									
<i>Ranunculus</i>	キンボウグ属																	2			
Cruciferae	アブラナ科	228	16	1							1		1								
<i>Haloragis-Myriophyllum</i>	アキノトウグサ属-フサモ属	1						1													
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科	1									1										
Apiodeae	セリ亜科							1				1	2	2	10	5	1	1			
<i>Justicia procumbens</i>	キツネノマゴ	1												1							
Valerianaceae	オミナエシ科												1								1
Lactucoideae	タンポポ科	1	1					1		2	1	1	1	1		1	3	1			
Asteroidae	キク亜科			1				5	2	1	7	6	2	3	2	3	3	1	1		2
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	1		1				22	10	18	35	38	8	25	17	12	13	16	1		27
Fern spore	シダ植物胞子																				
Monolate type spore	単条溝胞子		1				1	3	3	3	3	6	7	5	1	1	3	2	1		2
Trilate type spore	三条溝胞子	1						1	5	1	2	3			1		4	6	3		3
Arboreal pollen	樹木花粉	8	1	6	0	1	0	217	38	189	242	203	43	224	144	160	214	242	11	0	262
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0	0	0	0	0	2	0	1	3	0	0	2	3	6	7	4	0	0	7
Nonarboreal pollen	草本花粉	343	48	7	0	0	0	171	56	159	166	137	67	164	220	188	123	83	13	0	151
Total pollen	花粉総数	351	49	13	0	1	0	390	94	349	411	340	110	390	367	354	344	329	24	0	420
Unknown pollen	未同定花粉	2	2	3	1	0	0	5	4	7	3	8	4	6	10	3	8	3	2	0	2
Fern spore	シダ植物胞子	1	1	0	0	1	0	4	8	4	5	9	7	6	1	1	7	8	4	0	5
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

表2 C地区における花粉分析結果

5. 花粉分析から推定される植生と環境

A地区 A地区で設定した花粉分帯に沿って、植生と環境の変遷を推定する。

- ・I帯 (V-1層、V-2層、V-4層)

樹木花粉の出現率が草本花粉よりもやや高く、周囲には比較的多くの森林が分布していた。周辺地域の森林植生として、コナラ属アカガシ亜属、シイ属の照葉樹林、コナラ属コナラ亜属、スギ、ハンノキ属などで構成される森林が近隣に分布していた。ハンノキ属は生態上から河辺林と考えられ、近隣の河川沿いに分布していたと考えられる。堆積地の周囲には、イネ科やヨモギ属、カヤツリグサ科などのや

や乾燥した環境を好む人里植物ないし耕地雑草が生育し、花粉などの有機質遺体の分解されるやや乾燥した堆積環境が推定される。

花粉分析、珪藻分析から推定される植生と環境の変遷を、下位より層序順ないし時代順にまとめる。

・II帯（III層、IV-1層、IV-2層、IV-3層）

A 地区では草本花粉の占める割合が樹木花粉よりも高くなり、イネ属型を含むイネ科が高い出現率を示し、ヨモギ属、カヤツリグサ科などのやや乾燥した環境を好む人里植物ないし耕地雑草が増加する。水田雑草でもある抽水植物がほとんど出現しないことから、乾田が示唆される。ソバ属も少ないながら検出され、ソバなどの畑作が行われていたことも推定される。また、花粉密度がやや低いことから、花粉などの有機質遺体が分解される乾燥あるいは乾湿を繰り返す環境であったと考えられる。周辺地域の森林植生は、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属、スギ、シイ属などを要素とする森林が分布していたと考えられる。

・III帯（I-1層）

A 地区では花粉密度はやや低く、草本花粉の占める割合が樹木花粉よりも高い。このことから堆積地周辺はアブラナ科およびイネ科を主とする草本が生育し、花粉などの有機物が分解される乾燥あるいは乾湿を繰り返す堆積環境であったと推定される。また、これらの草本は、栽培植物を多く含み、周囲で畑が営まれていた可能性が示唆される。周辺地域の森林植生として、マツ属複維管束亜属（ニヨウマツ類）の二次林が分布していたと考えられる。

・I-2層、II層、V-1層、V-3層、VI-1層、VI-2層、VI-3層

A 地区では花粉はわずかに検出されるか検出されず、花粉などの有機物が分解される乾燥あるいは乾湿を繰り返す堆積環境であったか、もしくは粒度がシルト～砂であることから、水流の分別作用により花粉密度が低くなったことなどが考えられる。

C 地区 C 地区で設定した花粉分帯に沿って、植生と環境の変遷を推定する。

a 地点 1層（試料 C-1）、2層（試料 C-2）、3層（試料 C-3）、4層（試料 C-4）、地山（試料 C-18、C-19）

下位より地山（試料 C-18、C-19）から2層（試料 C-2）までの時期は、花粉密度が極めて低く、花粉がわずかに検出されるかあるいは検出されなかった。このことから、花粉などの有機質遺体が分解される乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境が推定される。最上位の1層（試料 C-1）の時期は、アブラナ科およびイネ科を主にカヤツリグサ科、ナデシコ科、アリノトウグサ属ーフサモ属、チドメグサ亜科、キツネノマゴ、ヨモギ属の草本が繁茂していたと推定される。アブラナ科は、陽当たりのよい乾燥した環境を好む人里植物であるとともに栽培植物を多く含む。アブラナ科と同様にイネ科は、人里植物ないし栽培植物を多く含む。堆積地周辺にはアブラナ科の集約性の高い畑が営まれていたと推定される。周辺地域の森林は、マツ属複維管束亜属の出現から、マツ二次林が推定される。

bc 地点

・地山（試料 C-16、C-17）の時期

花粉がほとんど検出されず、乾燥した堆積環境によって花粉などの有機質遺体が分解されたか、堆積速度が著しく速かったことなどが推定される。

・SSS-I 帯期：10-1-1層（試料 C-12）、10-1-2層（試料 C-13）、10-2層（試料 C-14）、10-4層（試料 C-15）

コナラ属コナラ亜属が優占し、ナラ類を主とする落葉広葉樹林が分布していた。モミ属がやや多く、コナラ属アカガシ亜属が伴われ、落葉広葉樹林帯の下部の様相が示唆される。堆積地は、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属の生育する草地であったと推定される。樹木花粉の割合が高く、近隣に森林が分布していたと推定される。上部ではカヤツリグサ科が増加し、沼沢地化したことが考えられる。

・SSS-II帯期：9-2層（試料C-9）、9-3層（試料C-10）、9-4層（試料C-11）

コナラ属アカガシ亜属が急増し、カシ林を主とする照葉樹林が成立し拡大した。コナラ属コナラ亜属は著しく低率にはならず、ナラ類を主とする落葉広葉樹林も分布していた。以上より、SSS-I帯よりもやや温暖な気候が示唆される。堆積地は、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属の生育する草地であったと推定される。

・SSS-III帯：6層（試料C-5）、7層（試料C-6）、8層（試料C-7）、9-1層（試料C-8）

前帯と同様に、コナラ属アカガシ亜属の照葉樹林とコナラ属コナラ亜属の落葉広葉樹林が分布するが、マツ属複維管束亜属やスギの針葉樹が微増し、シイ属も微増する。こうしたことから、二次林化ないし気候の冷涼化が推定される。イネ科、カヤツリグサ科にガマ属ーミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属などの水生植物が伴われることから、堆積地は湿潤な沼沢地から湿地の環境が推定される。また、栽培植物であるソバ属が検出されることより、ソバの栽培が示唆される。

溝 C-801埋土（試料20）

樹木花粉の出現率が草本花粉よりもやや高く、比較的近隣に森林が分布していた。周辺地域には、コナラ属アカガシ亜属の照葉樹林およびコナラ属コナラ亜属の落葉広葉樹林が分布する。スギやモミ属、マツ属複維管束亜属、イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科の針葉樹林が伴われる。溝ないし周囲は、イネ科、カヤツリグサ科の水生植物が生育し、周囲はイネ科やヨモギ属が生育するやや乾燥した環境が推定される。また、森林は比較的近接して分布していたとみられる。樹木花粉組成からみて bc 地点の SSS-III帯に属すると考えられる。

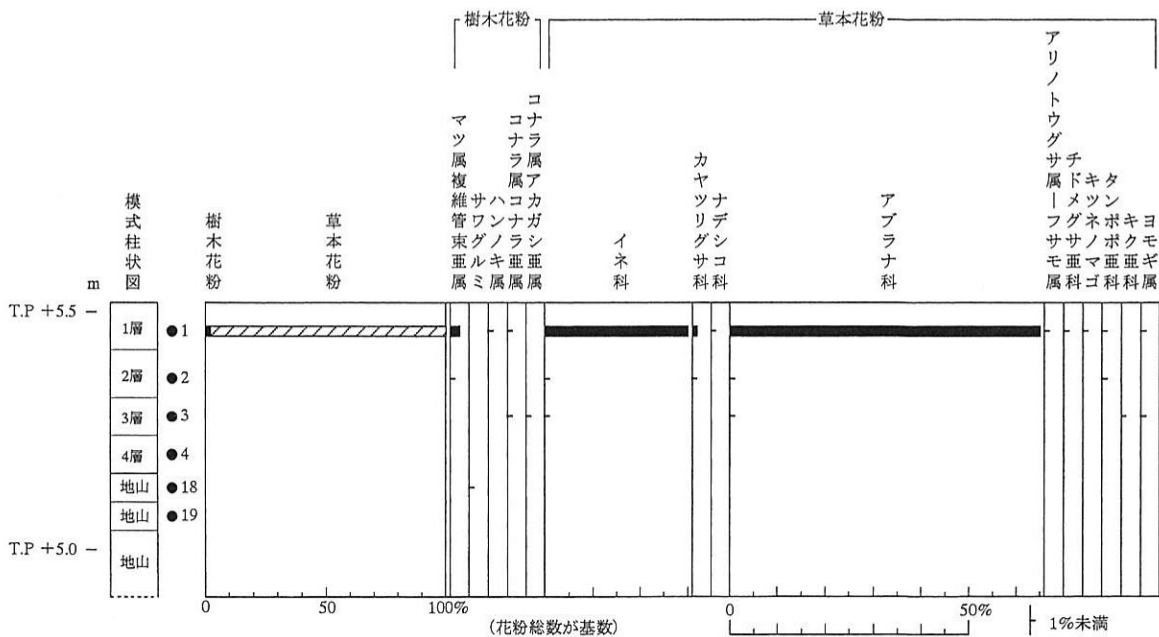


図74 C地区 a 地点における花粉ダイアグラム

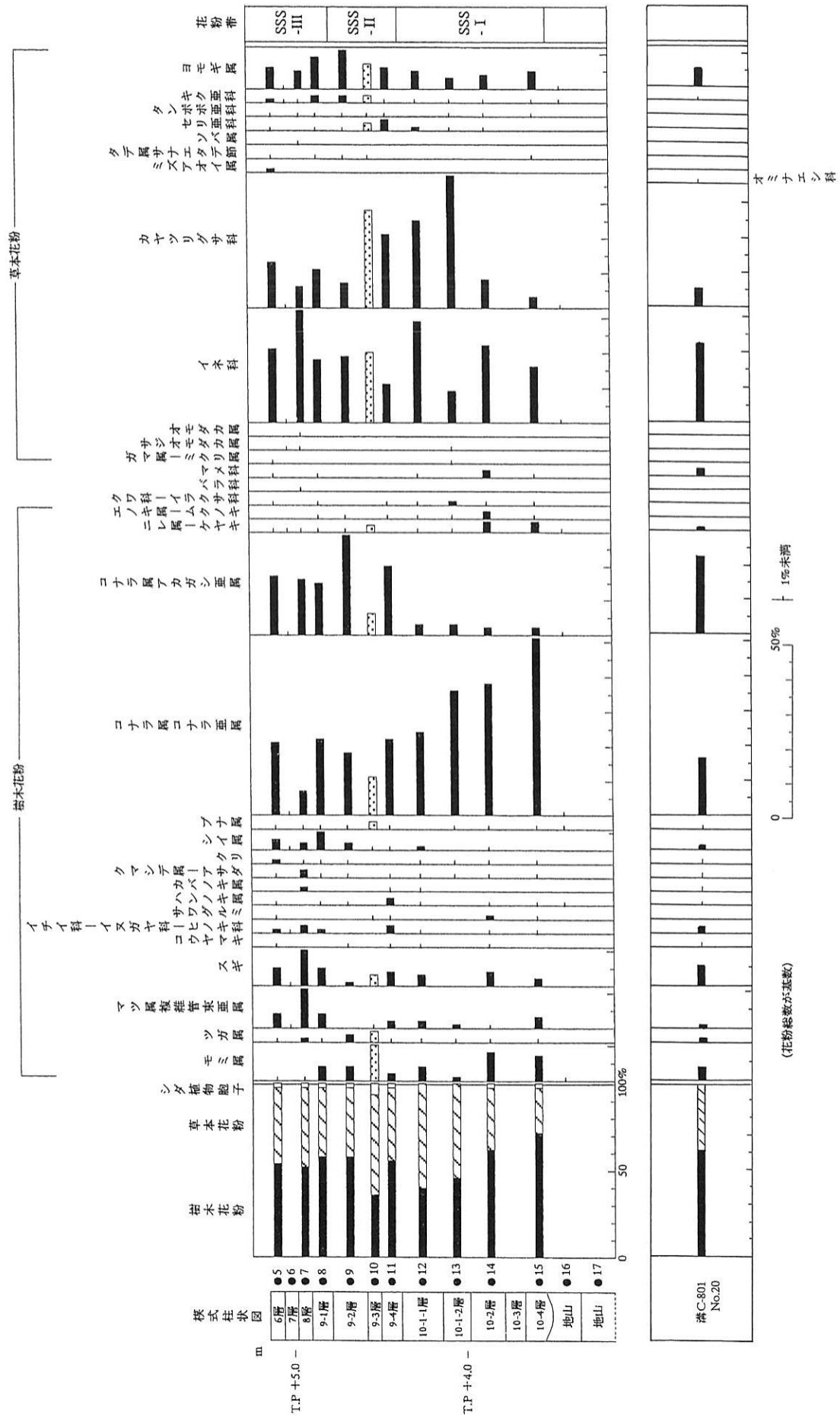


図76 C地区b・c地点・溝C-801における主要花粉ダイアグラム

6. 珪藻分析結果

A 地区 A 地区の試料から出現した珪藻は、貧塩性種54分類群、真一中塩性種1分類群である。計数された珪藻の学名と個数を表3に示す。また珪藻総数を基数とする百分率を算定したダイアグラムを図77に示す。

1A 区南側断面より採取の I-1層の堆積物では、*Navicula elginensis v. neglecta*、*Navicula viridula v. rostellata*、*Navicula decussis* などの、中～下流性河川指標種群や流水性種が多く検出される。また、*Hantzschia amphioxys*、*Caloneis hyaline* などの陸生珪藻、*Achnanthes exigua*、*Achnanthes hungarica*、*Caloneis bacillum*、*Navicula pupula* など各生態性が不定性の珪藻も比較的多く検出される。他に、*Nitzschia angustata* などの止水性種がわずかに出現する。

I-2層、II層、III層、IV-1層、V-1層、V-2層、V-3層、VI-1層、VI-2層のいずれの堆積物も珪藻が極めて少量であるか、もしくは検出されなかった。

C 地区 C 地区の試料から出現した珪藻は、貧塩性種（淡水生種）57分類群である。計数された珪藻の学名と個数を表4に示す。また、出現状況を珪藻総数を基数とする百分率で算定し、ダイアグラムにして図78、図79に示す。

分析の結果、図に示すような3つの珪藻分帯が設定された。

a 地点 1層（試料 C-1）、2層（試料 C-2）、3層（試料 C-3）、4層（試

種類	1A 区南側断面									
	1	2	3	4	5	8	10	11	13	14
貧塩性種										
<i>Achnanthes exigua</i>	29									
<i>Achnanthes hungarica</i>	13									
<i>Achnanthes lanceolata</i>	5									
<i>Amphora montana</i>	1					10				
<i>Amphora ovalis</i>								1		
<i>Anomoconeis sphaerophora</i>	2									
<i>Caloneis bacillum</i>	13									
<i>Caloneis branderii</i>	7						2			
<i>Caloneis hyalina</i>	9									
<i>Caloneis lauta</i>	1									
<i>Caloneis silicula</i>	5									
<i>Cymbella amphioxys</i>								2		
<i>Cymbella minuta</i>	14							2		
<i>Eumotia pectinalis v. minor</i>								2		
<i>Frustulia vulgaris</i>	1									
<i>Gomphonema angustatum</i>	1									
<i>Gomphonema augur</i>	3							4		
<i>Gomphonema gracile</i>	3	2								
<i>Gomphonema parvulum</i>	6									
<i>Gyrosigma</i> sp.	8									
<i>Hantzschia amphioxys</i>	44						4			
<i>Navicula bacillum</i>	1									
<i>Navicula confervacea</i>	4									
<i>Navicula contenta</i>	4	2					2		2	
<i>Navicula cryptotenella</i>	12						38			
<i>Navicula cuspidata</i>	7									
<i>Navicula decussis</i>	20									
<i>Navicula elginensis v. cuneata</i>	6									
<i>Navicula elginensis v. neglecta</i>	41									
<i>Navicula kotschy</i>	4									
<i>Navicula mutica</i>	3				2					
<i>Navicula placentula</i>	7									
<i>Navicula pupula</i>	14									
<i>Navicula radiosa</i>	1									
<i>Navicula viridula v. rostellata</i>	22									
<i>Neidium affine</i>	1									
<i>Nitzschia amphibia</i>	1									
<i>Nitzschia angustata</i>	9									
<i>Nitzschia brevissima</i>	3									
<i>Nitzschia debilis</i>	2									
<i>Nitzschia fonticola</i>	1									
<i>Nitzschia sinuata v. delognei</i>	1									
<i>Nitzschia tryblionella v. victoriae</i>	3									
<i>Pinnularia acrosphaeria</i>	2									
<i>Pinnularia borealis</i>								2	2	
<i>Pinnularia gibba</i>	4									
<i>Pinnularia interrupta</i>	7									
<i>Pinnularia mesolepta</i>	3									
<i>Pinnularia microstauron</i>	1									
<i>Pinnularia subcapitata</i>	5							2		
<i>Pinnularia viridis</i>	2									
<i>Rhopalodia gibba</i>	3									
<i>Stauroneis anceps</i>	1									
<i>Surirella splendida</i>	1									
真・中塩性種										
<i>Rhopalodia gibberula</i>	1									
合計	362	4	0	2	0	56	15	4	0	0
未同定	32	0	0	0	1	4	1	0	0	0
破片	252	4	0	10	8	6	36	10	0	0
試料 1 g 中の個数密度	2.9	8.0	0.0	4.0	0.0	1.2	3.0	8.0	0.0	0.0
	$\times 10^5 \times 10^2$		$\times 10^2$		$\times 10^4$	$\times 10^3 \times 10^2$				
完形殻保存率 (%)	61.0	-	-	-	-	90.9	30.8	-	-	-

表3 A 地区における珪藻分析結果

分類群	a 地点						bc 地点													計C-別
	1	2	3	4	18	19	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	
貧塩性種 (淡水生種)																				
<i>Achnanthes lanceolata</i>	6																			
<i>Amphora libyca</i>							1		2					7	9	2	2			21
<i>Anomoeoneis sphaerophora</i>	2																			
<i>Aulacoseira ambigua</i>													1	41			2			
<i>Aulacoseira canadensis</i>											1	6	16	109	4			6		1
<i>Caloneis hyalina</i>												4		2	2					1
<i>Caloneis silicula</i>																				1
<i>Cyclotella</i> sp.														1	2					
<i>Cymbella cuspidata</i>														1						
<i>Cymbella gracilis</i>																				3
<i>Cymbella lanceolata</i>														5						4
<i>Cymbella naviculiformis</i>																				6
<i>Cymbella silesiaca</i>																				
<i>Diploneis finnica</i>													2							
<i>Diploneis ovalis</i>													2	5	8	2				1
<i>Diploneis</i> sp.									1											
<i>Diploneis yatukaensis</i>							1						26	72	5					1
<i>Eumotia formica</i>																				1
<i>Eumotia minor</i>														2	2		8			31
<i>Eumotia monodon</i> v. <i>tropica</i>																				1
<i>Eumotia pectinalis</i>														3						
<i>Eumotia praerupta</i>														5						1
<i>Eumotia</i> sp.														4	1		1			
<i>Gomphonema angustatum</i>														1						
<i>Gomphonema angustum</i>	2																			
<i>Gomphonema bipunctatum</i>															1					
<i>Gomphonema gracile</i>														1						1
<i>Gomphonema minutum</i>																4				5
<i>Gomphonema parvulum</i>									2						1					2
<i>Gyrosigma</i> sp.																				11
<i>Hantzschia amphioxys</i>	2													2	1					5
<i>Navicula americana</i>														3	7					2
<i>Navicula contenta</i>																	2			
<i>Navicula cuspidata</i>	2																			
<i>Navicula elginensis</i>																4	2			1
<i>Navicula goeppertiana</i>																	2			
<i>Navicula mutica</i>													2	2	3	4	12	4		12
<i>Navicula pupula</i>															1					
<i>Navicula saxophila</i>																	4			
<i>Navicula tokyoensis</i>														1						
<i>Neidium ampliatum</i>															1					
<i>Neidium hercynicum</i>																				5
<i>Pinnularia acrosphaeria</i>														3	2					10
<i>Pinnularia appendiculata</i>																				1
<i>Pinnularia borealis</i>													4	5	1	2	8			12
<i>Pinnularia gibba</i>																		2		10
<i>Pinnularia microstauron</i>																				5
<i>Pinnularia nodosa</i>														2	1					
<i>Pinnularia schroederii</i>													2	7	2	2				
<i>Pinnularia subcapitata</i>															1		6			7
<i>Pinnularia viridis</i>														1		2				11
<i>Rhopalodia gibba</i>	2																			
<i>Rhopalodia gibberula</i>										1	1	6	37	14	2	4				76
<i>Stauroneis acuta</i>													4	14						1
<i>Stauroneis anceps</i>																		2		
<i>Stauroneis phoenicenteron</i>																				5
<i>Stauroneis</i> sp.															7					
合計	16	0	0	0	0	0	2	0	5	0	1	2	58	201	222	30	53	14	0	254
未同定	8	2	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	4	10	18	4	10	0	0	16
破片	154	2	0	0	0	0	29	2	62	40	62	94	624	807	387	32	106	18	2	251
試料 1 g 中の殻数密度	3.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.0	0.0	1.0	0.0	2.0	4.0	1.2	1.6	1.8	6.0	1.1	2.8	0.0	4.1
	$\times 10^3$						$\times 10^2$		$\times 10^3$		$\times 10^2$	$\times 10^2$	$\times 10^4$	$\times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10^4$	$\times 10^3$		$\times 10^6$
完形殻保存率 (%)	13.5											2.1	9.0	20.7	38.3		37.3			51.8

表 4 C 地区における珪藻分析結果

料 C-4)、地山 (試料 C-18、C-19)

分析の結果、各試料とも珪藻はほとんど検出されず、好・真流水性種、不定性種、陸生珪藻が極めて低率で出現するのみである。

bc 地点

- ・ I 帯：10-2層 (試料 C-14)、10-4層 (試料 C-15)、地山 (試料 C-16、C-17)

各試料の分析の結果、珪藻は検出されないか、極めて低率に出現するのみである。

- ・ II 帯：10-1-1層 (試料 C-12)、10-1-2層 (試料 C-13)

珪藻は比較的多く検出され、*Aulacoseira canadensis* や陸生珪藻である *Diploneis yatukaensis* などが多く出現する。10-1-1層 (試料12) の下位である10-1-2層 (試料13) では湖沼沢湿地付着性種群である *Aulacoseira ambigua* が特徴的に出現する。好塩性の *Rhopalodia gibberula* もやや多く出現する。

- ・ III 帯：6層 (試料 C-5)、7層 (試料 C-6)、8層 (試料 C-7)、9-1層 (試料 C-8)、9-2層 (試料 C-9)、9-3層 (試料 C-10)、9-4層 (試料 C-11)

各試料からは珪藻は検出されないか、検出されても極めて低率である。

溝 C-801埋土 (試料 C-20)

珪藻は比較的多く検出され、高温性かつ沿岸種の *Rhopalodia gibberula* が多く出現するほか、沼沢湿地付着生の *Eunotia minor*、*Pinnularia gibba*、*Pinnularia viridis*、*Pinnularia acrosphaeria* などがやや多く出現する。また、陸生珪藻である *Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*、*Pinnularia borealis*、*Pinnularia subcapitata* などが検出される。

7. 珪藻分析から推定される堆積環境

A 地区 A 地区の I-1層の堆積物は、中～下流性河川指標種群や流水性種、陸生珪藻、各生態性が不定性の珪藻、止水性種などが多様に出現し、比較的多く検出される。以上より、流水、止水、湿地、湿った土壌などの多様な環境からの影響ないしそれらの環境の時期があったと考えられる。I-1層が耕作土であることから、中～下流性河川指標種群や流水性種は用水の供給に伴なって混入したものと考えられ、乾燥して湿った土壌となった時期に陸生珪藻が生育したと推定される。

I-2層、II層、III層、IV-1層、V-1層、V-2層、V-3層、VI-1層、VI-2層のいずれの堆積物も、珪藻密度が非常に小さく、珪藻が生育できない乾燥した堆積環境であったか、もしくは粒度がシルト～砂であることから、水流の分別作用により珪藻密度が低くなったなどが考えられる。また、水田稲作の環境下ではイネが珪酸を極度に吸収することから、珪藻殻の形成が不十分であったり、分解された可能性も考えられる。

C 地区 a 地点 1層 (試料 C-1)、2層 (試料 C-2)、3層 (試料 C-3)、4層 (試料 C-4)、地山 (試料 C-18、C-19)

分析の結果、各試料とも珪藻はほとんど検出されないことから、珪藻の生育しにくい比較的乾燥した堆積環境であったと推定される。

bc 地点

- ・ I 帯：10-2層 (試料 C-14)、10-4層 (試料 C-15)

珪藻の出現密度は低く、珪藻はほとんど検出されないことから、乾燥し珪藻が生育しにくい堆積環境であったと推定される。

・II帯：10-1-1層（試料 C-12）、10-1-2層（試料 C-13）

止水性種や沼沢湿地付着生種群、湖沼沢湿地付着生種群、不定性種など多様に出現し、陸生珪藻も比較的多く出現することから、沼沢地の環境が示唆される。上部の10-1-1層では陸生珪藻が増加し、陸化が進む。また、好塩性の *Rhopalodia gibberula* がやや多く出現することから、低鹹水の影響が考えられる。

・III帯：6層（試料 C-5）、7層（試料 C-6）、8層（試料 C-7）、9-1層（試料 C-8）、9-2層（試料 C-9）、9-3層（試料 C-10）、9-4層（試料 C-11）

珪藻がほとんど検出されないことから、珪藻の生育しにくい比較的乾燥した堆積環境であったと推定される。

以上の分析結果から、bc 地点では、I 帯は珪藻の生育しにくい比較的乾湿した堆積環境が推定され、II 帯には水域になり、III 帯では再び比較的乾燥した堆積環境になったと考えられる。

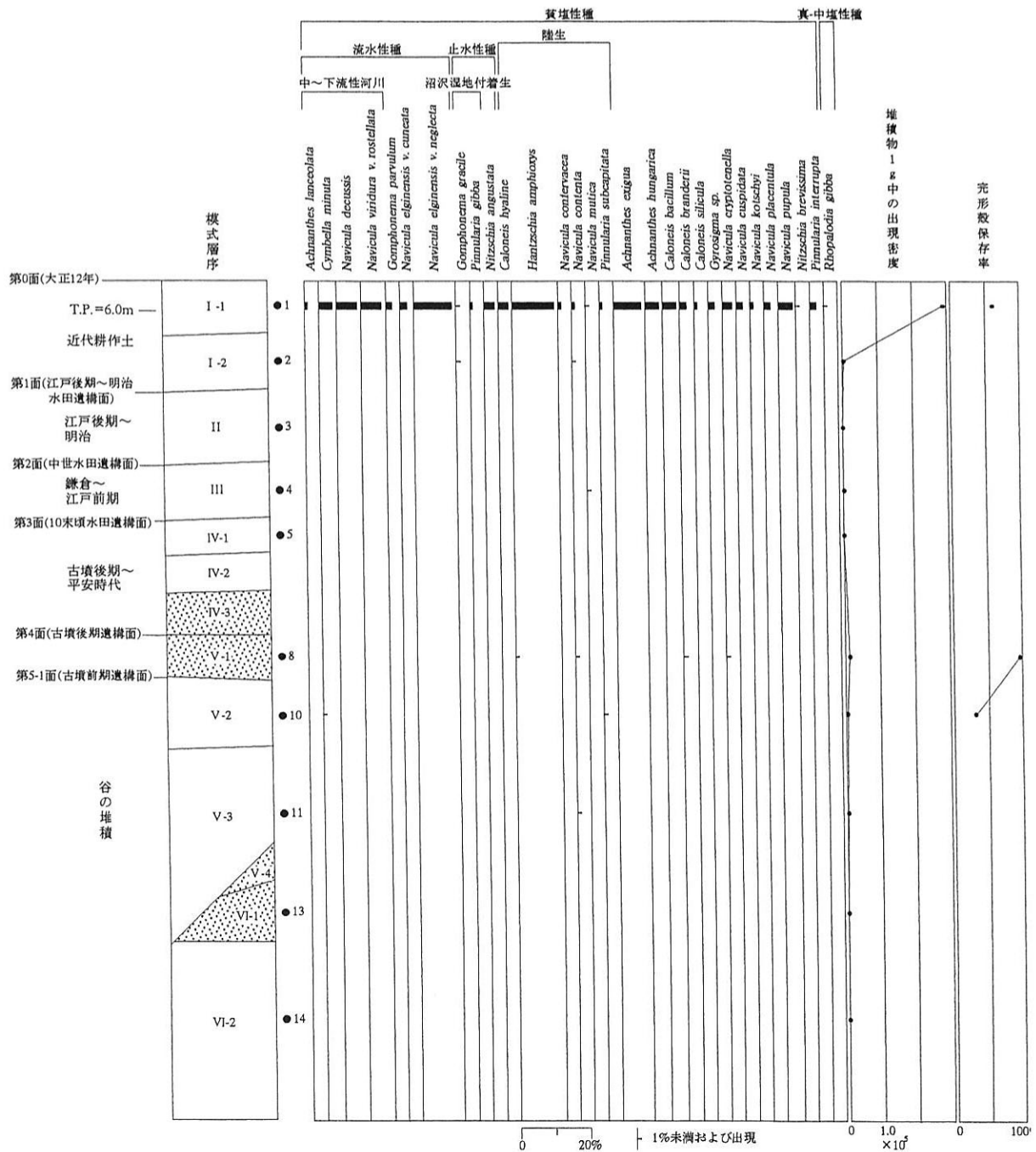


図77 A区1A区南側断面における主要珪藻ダイアグラム

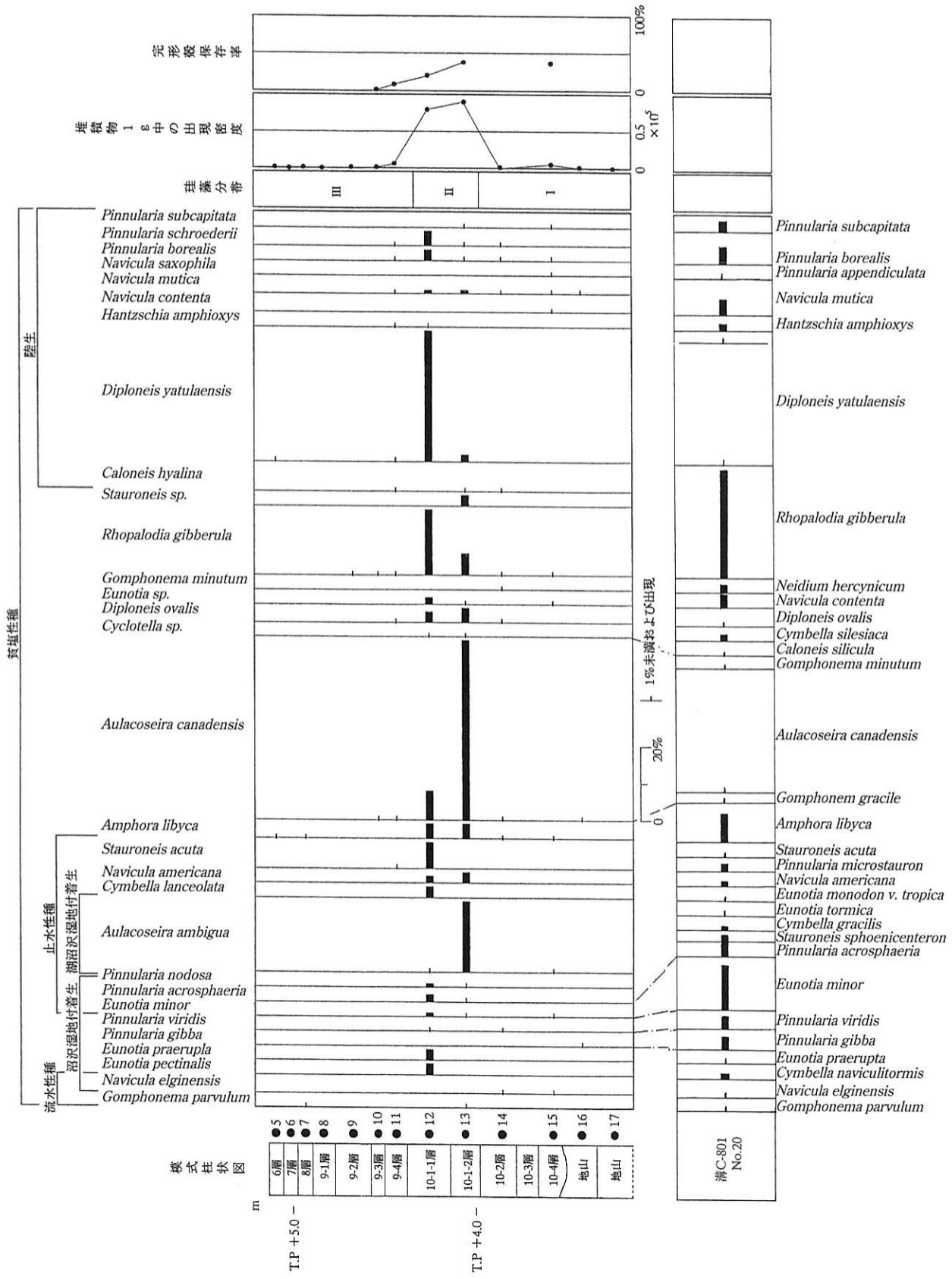


図78 C地区b・c地点・溝C-801における主要珪藻ダイアグラム

溝 C-801埋土 (試料 C-20)

沼沢湿地付着生種がやや多く出現し、他に、止水性種および陸生珪藻などが多様に出現することから、溝は水草の生育する水域を呈していたとみなされる。また、好塩性の *Rhopalodia gibberula* が多く出現することから、塩分濃度がやや高かった可能性が考えられる。このことの原因として、塩分を含む生活排水などの流れ込みがあったことが考えられる。

8. 花粉・珪藻分析から推定される植生と環境の変遷

A 地区 花粉・珪藻分析から推定される植生と環境の変遷をまとめる (図80)。

・ I 帯：V層以前 (古墳時代前期以前、谷の堆積)

珪藻が検出されず、水流による分別作用で珪藻などの微細粒子が堆積されないか、堆積速度の速い環境が考えられる。周囲には比較的多くの森林が分布し、コナラ属アカガシ亜属、シイ属の照葉樹林、コナラ属コナラ亜属、スギ、ハンノキ属などで構成される森林が分布していた。ハンノキ属は生態上から河辺林と考えられる。イネ科やヨモギ属、カヤツリグサ科などのやや乾燥した環境を好む人里植物ないし耕地雑草が生育していた。上部のV-2層は黒色粘土層であるが珪藻が検出されないことから、湿性の堆積物ではなく腐植の多い土壌の累積と考えられる。

・ II 帯：VI層～III層 (古墳時代後期～江戸時代前期)

イネ科を主にやや乾燥した環境を好む人里植物ないし耕地雑草が増加し、草本域が拡大する。水田やソバ属の畑作が行われ、耕作地が広がっていたと推定される。珪藻があまり検出されないのは、水田の環境により珪酸を十分得ることができず分解されたためと考えられる。花粉密度も低く、花粉などの有機質遺体が分解される乾燥あるいは乾湿を繰り返す乾田が推定される。周辺地域の森林植生は、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属、スギ、シイ属などを要素とする森林が分布していた。

・ III 帯：II層～I層 (江戸時代後期～近代)

下部では、花粉も珪藻もほとんど検出されず、畑や乾田の環境によって分解されたと考えられる。上部のI-1層では、アブラナ科およびイネ科を主とする草本が生育し、アブラナの集約性の高い畑が推定される。周辺地域の森林植生では、マツの二次林が分布していたと推定される。

C 地区 C 地区では、花粉分析と珪藻分析を行った結果、bc 地点で局地花粉帯が設定され、以下の植生と環境の推定された (図81)。

下位より、地山は花粉、珪藻とも検出されず比較的乾燥した環境が推定される。10-1-1層・10-4層 (SSS-I 帯) はナラ林を主とする落葉広葉樹林が分布し、堆積地はイネ科が主に生育するやや乾燥した環境であったが、上部でカヤツリグサ科の繁茂する沼沢地ないし湿地の環境へと変化し、低鹹水の影響が認められる。9-2層～9-4層 (SSS-II 帯) になると、カシ林が急増し、堆積地はイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属が生育し、やや乾燥した環境になる。6層～9-1層 (SSS-III 帯) ではマツ林やスギ林が増加し、堆積地はイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属が主に分布する草地であった。a 地点の1層では、アブラナ科などを栽培する集約性の高い畑作が示唆された。溝 C-801は水草の生育する水域を呈し、生活排水などの影響が示唆された。

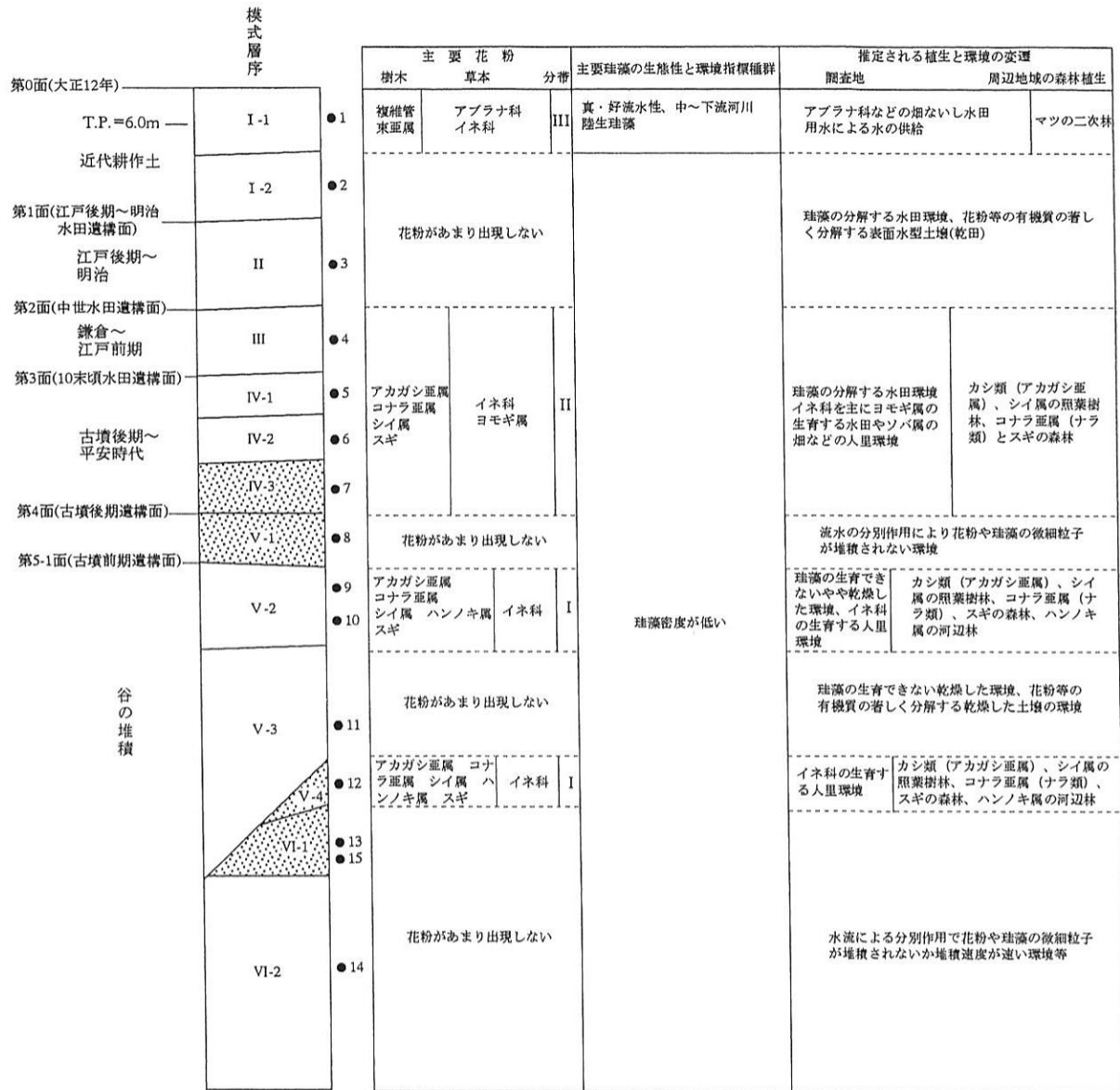


図79 A地区南側断面における主要花粉・珪藻と推定される植生・環境の変遷

地点	層位・遺構	局地花粉帯	主要森林植生	堆積地の植生と環境	
a地点	1層		マツ林	アブラナ科の集約的な畑作	
	2層				
	3層				
	4層				
bc地点	6層	溝801	カシ林(照葉樹林) ナラ林(落葉広葉樹林) マツ林とスギ林の増加	イネ科・カヤツリグサ科・ヨモギ属と水生植物が生育し、不安定に乾湿を繰り返す環境	
	7層				
	8層				
	9-1層				
	9-2層	SSS-II	カシ林(照葉樹林)の増加 ナラ林(落葉広葉樹林)	イネ科・カヤツリグサ科・ヨモギ属の草木が生育し、やや乾燥した環境	
	9-3層				
	9-4層	A h	SSS-I		カヤツリグサ科が増加し、繁茂沼沢湿地の環境であり、上部にむかって乾燥化 イネ科が主に生育する、やや乾燥した環境
	10-1-1層				
	10-1-2層				
	10-2層				
10-3層	地山			比較的乾燥した環境	
10-4層					

図80 C地区の花粉・珪藻分析から推定される植生と環境

9. 吹田操車場遺跡における植生と環境の変遷と対比

A 地区と C 地区から推定される植生と環境の対比を行いつつ、検討を行う (図83)。A・C 地区とも最下部の地山とされる堆積物は、花粉と珪藻とも検出されず、流水域や堆積速度が速いか比較的乾燥した堆積環境であったことが考えられる。

C 地区の bc 地点では局地花粉帯が設定され、下位より、10-1-1層～10-4層 (SSS-I 帯) は、ナラ林を主とする落葉広葉樹林が分布し、堆積地はイネ科が主に生育するやや乾燥した環境であったが、上部でカヤツリグサ科の繁茂する沼沢地ないし湿地の環境へと変化する。この帯には鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah) を挟む。9-2層～9-4層 (SSS-II 帯) になると、カシ林が急増し、堆積地はイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属が生育し、やや乾燥した環境になった。カシ林を主とする照葉樹林の増加は K-Ah 降灰以降である。6 層～9-1層 (SSS-III 帯) は、カシ林とナラ林が優勢であるが、スギ林が増加し、堆積地はイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属が主に分布しやや乾燥した草地であった。

6 層～9-1層 (SSS-III 帯) と A 地区の 1A 区の 5 層 (古墳時代前期以前、谷の堆積、I 帯) は層序および花粉群集から対比される。A 地区はシイ林とハンノキ属林、C 地区の b 地点はマツ林が局地的要素として分布する。A 地区のほうが、相対的に乾燥化し、イネ科を主にヨモギ属やカヤツリグサ科の生育する集落域や耕地などの人為環境が分布していた。5-2層は黒色粘土層であるが、珪藻が検出されず、腐植の多い土壌の累積と考えられる。この時期の C 地区溝 C-801 は水草が生育し滞水していた。

A 地区の 3 層～4 層 (古墳時代後期～江戸時代前期、II 帯) では、イネ科を主にやや乾燥した環境を好む人里植物ないし耕地雑草が増加し、やや乾燥した草本域が拡大する。水田やソバ属の畑作が行われ、耕作地が拡大したと推定される。周辺地域には、カシ林、ナラ林、スギ林、シイ属などを要素とする森林が分布していた。層序から C 地区の a 地点 4 層に対比されるが、C 地区の a 地点 4 層は花粉と珪藻ともほとんど検出されず、花粉や珪藻の分解される乾田や畑の環境が推定される。

同様に A 地区の 2 層～1-1層 (江戸時代後期～近代、III 帯) と C 地区の a 地点 2・3 層は、花粉も珪藻もほとんど検出されず、分解の著しい畑や乾田の環境が考えられる。

最上層にあたる A 地区の 1-1層 (近代、III 帯) と C 地区の a 地点 1 層は、アブラナ科およびイネ科を主とする草本が生育し、アブラナの集約性の高い畑と水田が営まれ、周辺地域では、マツの二次林が成立し分布する。

以上の変遷の中で、吹田操車場遺跡でのカシ林を主とする照葉樹林の増加は、K-Ah 降灰以降になる。大阪湾 (前田、1977) や河内平野 (安田、1977) では、約7500年前ないし約7600年前頃にカシ林を主とする照葉樹林が増加しだし、K-Ah 降灰を挟んで約6000年前ないし約6400年前頃に優勢になる。京都深泥ヶ池 (深泥ヶ池団研、1976) では、約5000年前からカシ林を主とする照葉樹林が優勢になる。本遺跡では、K-Ah 降灰以前より、コナラ属アカガシ亜属が出現し、K-Ah 降灰以降に増加しカシ林の拡大が示唆され、大阪湾、河内平野、京都盆地と大きく矛盾のある変遷はなく、ほぼ同時期の変遷が考えられる。地域的な特徴として、カシ林の拡大後もナラ林が比較的多く分布する。本遺跡では、堆積地の環境が湾や内湾、池沼湿原などの水域の堆積物でないため、局地的な植生がより強く反映されたと考えられる。

		(その2) A 地区				(その3) C 地区					
1A区	分層	主要樹木	花粉	主要花	主要粉	主要草	主要木	主要草	主要木	主要樹木の生態性と環境指標種群	推定される植生と環境
第0面(大正12年)	1-1層	III	アブラナ科 イネ科	アブラナ科 イネ科	アブラナ科 イネ科	アブラナ科 イネ科	アブラナ科 イネ科	アブラナ科 イネ科	アブラナ科 イネ科	アブラナ科などの畑 ないし水田	アブラナ科などの畑 ないし水田
	1-2層										
近代耕作土	2層										
	3層										
第1面(江戸後期～明治 水田遺構面)	4-1層										
	4-2層										
第2面(中世水田遺構面)	4-3層										
	5-1層										
第3面(10米切水田遺構面)	5-2層										
	5-3層										
古墳後期 ～平安時代	5-4層										
	6-1層										
第4面(古墳後期遺構面)	6-2層										
第5-1面(古墳前期遺構面)	6層										
	7層										
谷の堆積	8層										
	9-1層										
	9-2層										
	9-3層										
	9-4層										
	10-1層										
	10-1-2層										
	10-2層										
	10-3層										
	10-4層										
	地山										

図81 A地区・C地区における植生・環境の変遷と対比

第2節 火山灰分析

1. はじめに

今回の火山灰分析は、財団法人 大阪府文化財調査研究センターが川崎地質株式会社に委託して実施したものである。今回の分析は、吹田操車場内発掘調査（その3）で検出した火山灰層の同定と、地層の年代判定、地層に含まれる火山灰の起源を明らかにするためにおこなった。

分析試料は、財団法人 大阪府文化財調査研究センターとの協議の上、川崎地質株式会社が採取をおこなった。分析処理数と検出数量および計画数量を表5に示す。

2. 分析試料の採取について

試料採取地点の平面図（図84）に、断面図（図85・86）に、採取状況（写真1・2）に示す。試料は図2に示すように2箇所において柱状の連続試料として採取した。No.1地点より6個、No.2地点より20個の試料を採取し、そのうちNo.1地点より6個、No.2地点より9個の合計15試料について分析を行った。

3. 火山灰分析方法

（1）火山灰分析の目的と原理

火山噴出による火山灰の堆積によって形成された火山灰層は、一般に広範囲に分布するとともに高い同時性を有している。

我が国の地層中には多数の火山灰層が挟在されているが、同一の火山マグマを起源とする火山灰は、その鉱物学的・岩石学的性質に高い類似性が見られ、それらは各火山灰に特有の性質を示すことから、火山灰層の識別・同定が可能となる。

火山灰分析はこのような原理に基づいて、火山灰層や粘土層中に含まれる火山ガラスの屈折率・重鉱物組成を分析することによって、鉱物岩石学的特徴を把握し、調査地域に出現する火山灰層間の比較対比を行うとともに、既存の火山灰資料・文献を参照して、火山灰層を挟在している地層の年代対比を行うものである。

（2）分析処理の方法

火山ガラス・重鉱物を試料から抽出し、顕微鏡で観察可能な処理を行って、火山ガラスの含有比・屈折率・種類・数を検定するまでの過程は、以下に示す通りである。

[処理手順]

- 1) 採取試料(湿潤試料)50~100g程度を抽出し重量(W)を測定する。
- 2) 同じ試料から別に5~10g程度をとって、乾燥器(110°C)によって乾燥し、含水比(W)をもとめる。
$$W = (\text{湿潤土中の水の重量} / \text{乾燥土の重量}) \times 100$$

※ 110°C乾燥によるガラスの脱水により、屈折率が変化するため、1)の試料とは別にこの操作を行う。
- 3) 1)の湿潤重量(W)と、2)の含水比(w)より、下式より乾燥重量(W1)をもとめる。
$$W1 = 100 \times W / (100 + w)$$
- 4) 1)の試料を水洗しながら60メッシュ(250ミクロン)と250メッシュ(62.5ミクロン)で篩別して

地名 点	No.1 地点	No.2 地点
採取数	6	20
処理数	6	9
検出数	6	9

表5 火山灰分析処理
検出数量法

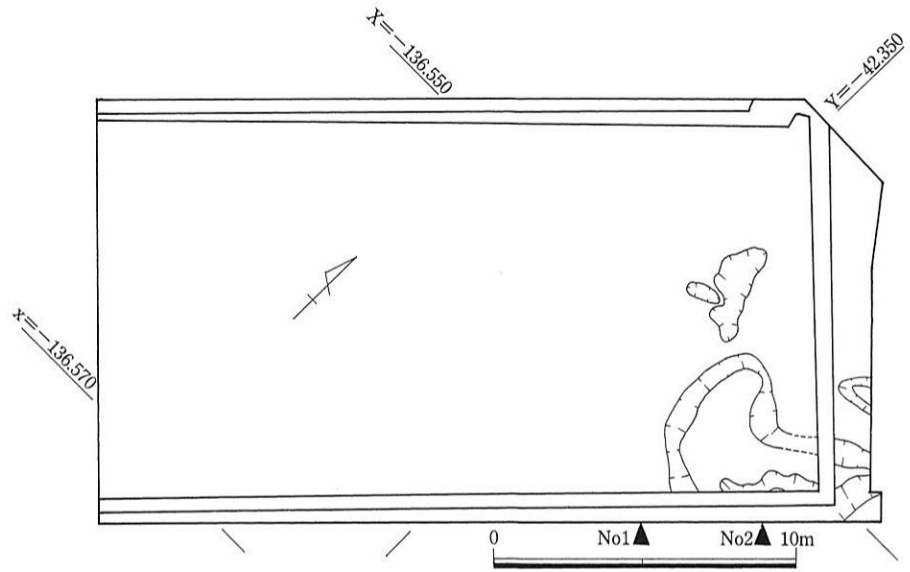


図82 火山灰分析試料採取地点 平面図

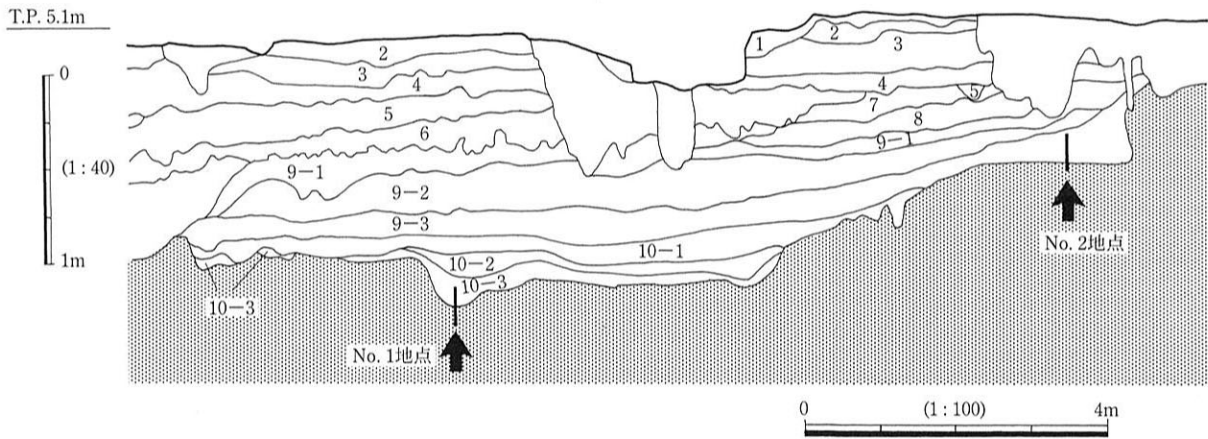


図83 火山灰分析試料採取地点 断面図-1

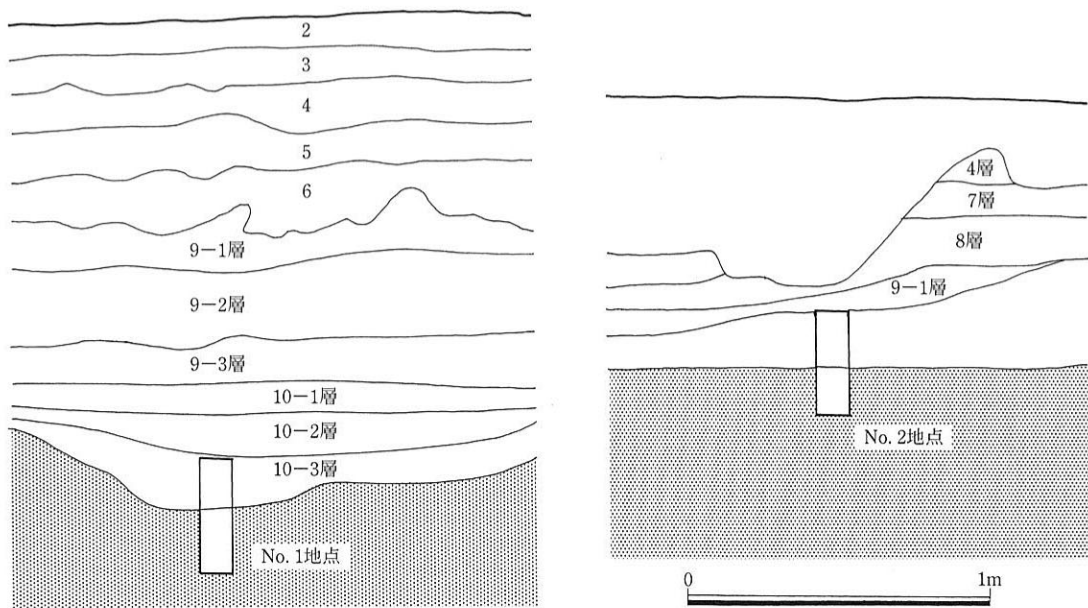


図84 火山灰分析試料採取地点 断面図-2

粘土、シルト分を除去した後、50.C以下の低温で乾燥(理由は上記の通り)し、フルイ後の乾燥重量(W2)をもとめる。

これよりもとの乾燥重量(W1)に対するフルイ後の乾燥重量(W2)の比:W2/W1(フルイによる減量比)をもとめる

- 5) 4)の試料の一部を抽出して(A)、顕微鏡下で含まれる火山ガラスの粒数(x)を計数し、粒数比を算出する。同時に顕微鏡写真を撮影する。

$$\begin{aligned} \text{火山ガラスの粒数比} &: Rg \cdot x / (4348 \times (A/9.5) \times 100) \\ &= x \times 0.023 \times (9.5/A) \end{aligned}$$

(9.5mg中に4348個の砂粒分が含まれると仮定する)

- 6) 2)～5)の計測値より、もとの試料に対する火山ガラスの重量比を算出する。

火山ガラスの重量比の算出方法は以下の通りである。

- ・試料の乾燥重量・W1(g)…上記3)
- ・フルイ処理後の乾燥重量・W2(g)…上記4)
- ・火山ガラスの粒数比: $Rg = x \times 0.023 \times (9.5/A)$ …上記5)
- ・火山ガラスの比重=2.2とする。

$$\begin{aligned} \text{火山ガラスの重量比} &: Wg = (2.2 \times Rg / (2.2 \times Rg + 2.7(100 - Rg))) \times (W2/W1) \times 100 \\ &= 440 \times x / (2471 \times A - x) \times (W2/W1) \end{aligned}$$

- 7) 火山ガラスを比較的多く含む試料についてプレパラートをつくり篩別試料中の火山ガラスを含む全鉱物組成(粒数%)、重鉱物組成(粒数%)を測定する。

- 8) 篩別試料から重液を用いて重鉱物を分離してその組成粒数%を測定する。

重鉱物組成分析は、比重2.7プロモホルムのアルコール溶液を用い、遠心分離器によって行なう。特に、重鉱物組成は起源となる火山の岩石学的特徴をよく表わし、重鉱物として含まれる鉱物には、雲母類、角閃石類、輝石類、ジルコン、アパタイト、不透明鉱物などがある。

- 9) 火山ガラスの全鉱物組成(粒数%)が数%以上のものについては、火山ガラスの形状分析、屈折率測定を行う。

- 10) 火山ガラスの形状は吉川(1976)にもとづいて偏平型、中間型、多孔質型、その他の型に分類する。

- 11) 火山ガラスの屈折率測定は、浸液法により位相差偏光顕微鏡下で波長可変光源と標準ガラスを用いて、分散法によって行う。標準ガラスと波長可変光源を使用することにより、温度条件に左右されることなく、0.001の精度までの測定が可能である。

(3) 分析結果のまとめ

火山灰分析の結果は以下の一覧表、図にまとめて表示する。

- 1) 火山ガラスの含有量分析表(表6・7)
- 2) 火山ガラスの粒数比、重量比一覧図(図87)
- 3) 火山灰の分析結果表(表8～10)

(4) 解析方法

肉眼的に火山灰層と確認できない試料についても、火山ガラス重量比により、テフラとして認定され

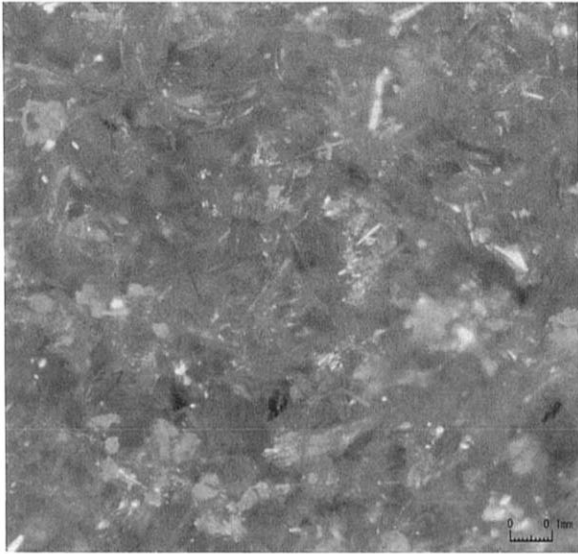


写真3 ガラス粒数比99%以上 (試料1-1)

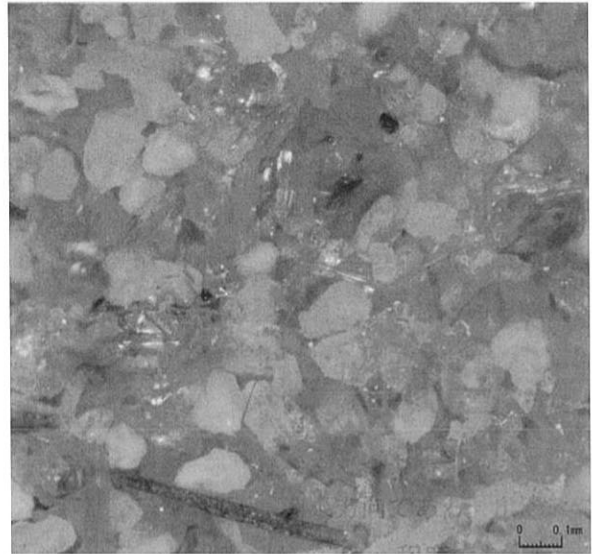


写真4 ガラス粒数比1.93 (試料2-4)

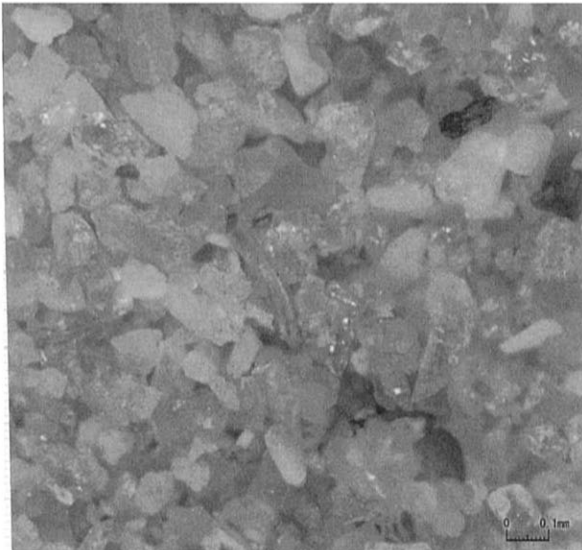


写真5 ガラス粒数比0.09%以上 (試料2-19)

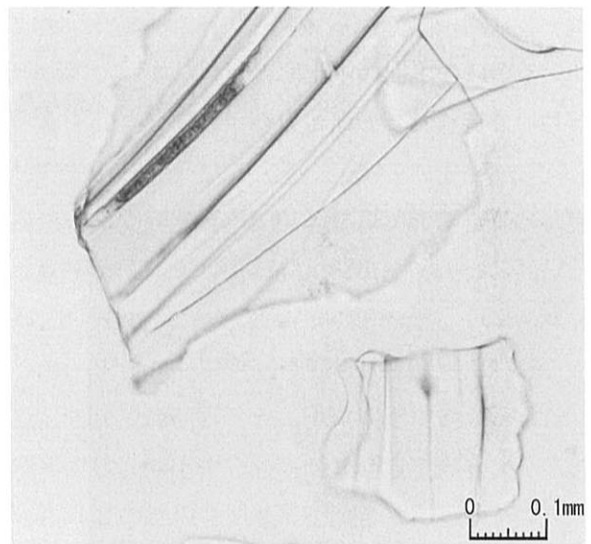


写真6 扁平型火山ガラス

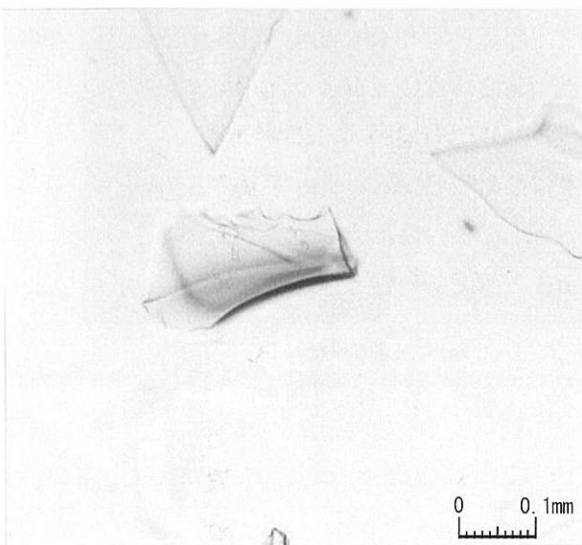


写真7 褐色火山ガラス

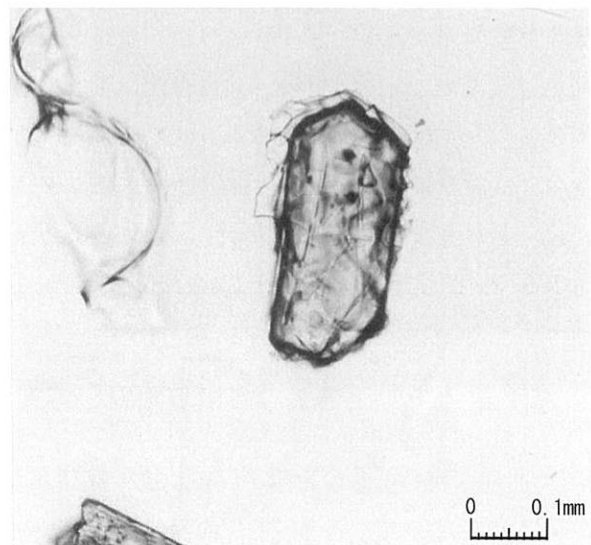


写真8 火山ガラスの付着した斜方輝石

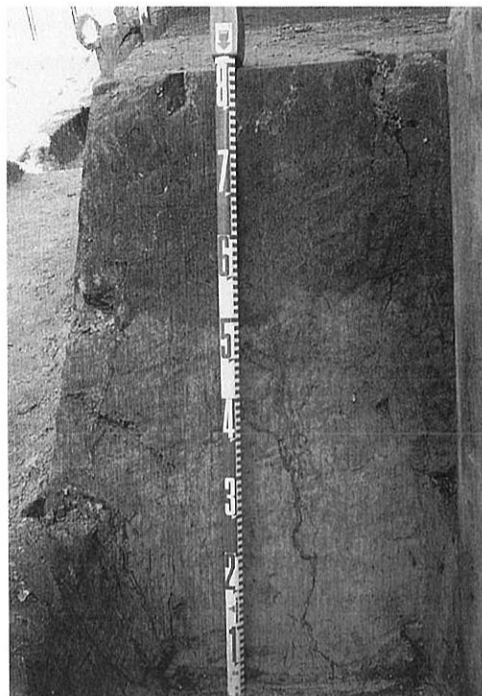
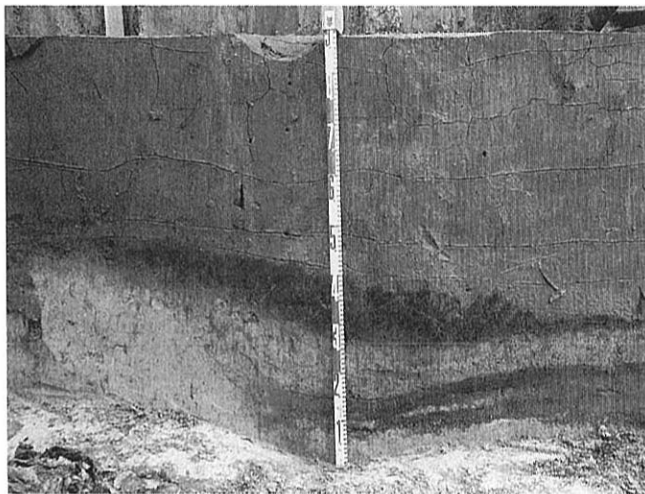
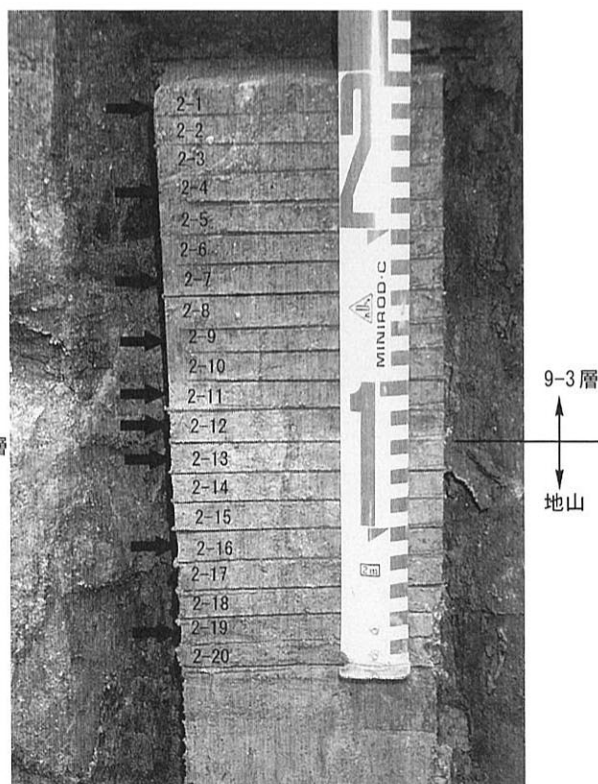
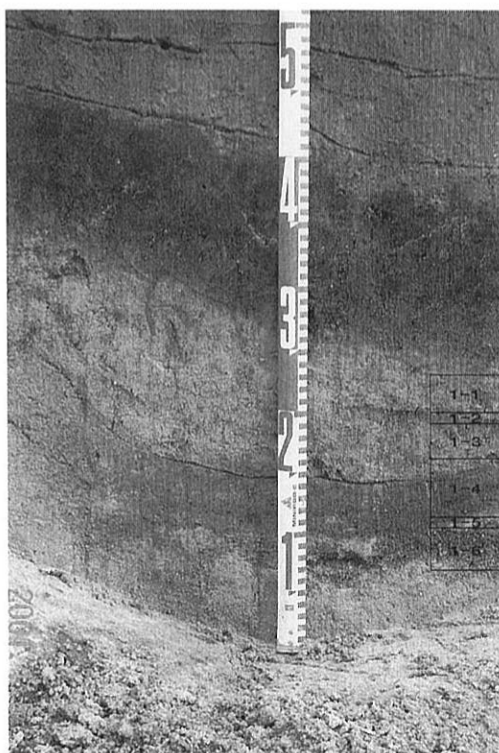


写真1 試料採取地点全景写真 (左; No. 1地点、右; No. 2地点)



← 分析実施試料

→ 分析実施試料

写真2 試料採取地点状況写真 (左; No. 1地点、右; No. 2地点)

るものかどうかの検討を行い、火山ガラス重量比が数%以上の試料は、ガラスの屈折率測定、全鉱物組成分析、重鉱物組成分析を行って、テフラとしての属性を求める。こうした属性を広域的テフラの既往資料と比較対照して、地層の年代推定の基準とする。

4. 火山灰分析結果

(1) 含有状況

分析した15試料の全てから火山ガラスが検出できた。これらのうち火山ガラスを1%以上(粒数比)含む試料を対象に、鉱物分析、火山ガラスの屈折率測定などを行った。

(2) 分析結果

火山ガラスの含有状況を下記の火山ガラス含有量分析表、火山ガラスの粒数比、重量比一覧表に示す。また火山灰の分析結果表に、全鉱物組成、火山ガラスの形態分類及び屈折率、重鉱物組成を示す。

5. 考察

分析した15試料全てに火山ガラスの含有が認められた。No. 1地点では試料1-3~1-1に多量の火山ガラスが認められ、火山灰の純層であると判断できる。下位の試料1-4にも6.76%の火山ガラスが認められるが、これは火山灰層最下部の試料が混入しているためと考えられる。一方、No. 1地点の見かけ上位にあたるNo. 2地点においては、試料2-11にごく小さなピークが見られるが、粒数比で2.19%と少なく降灰層準と認定するのは困難で、再堆積したものと考えられる(吉川;1981によれば、大阪平野地下に分布する更新~完新統のほとんどすべての細粒堆積物中には少量の火山ガラスが含まれており、それらは再堆積したガラスと判断される)。

次に詳細分析を行った7試料について見ると、No. 1地点の試料1-3及び試料1-4については火山ガラスが扁平型主体で屈折率が1.509~1.506の範囲にあり、表5-1に示す鬼界アカホヤ火山灰(横大路火山灰)の特徴と一致する。重鉱物組成については、試料1-3が斜方輝石主体、試料1-4が角閃石主体と異なっているが、これは1-4には火山灰以外の碎屑物が多量に混入しているためと考えられる。一方、No. 2地点の火山ガラスについてみると、屈折率が1.500付近のものと、1.507~1.510付近のものが混在している。ガラスの形状はいずれも扁平型が主体である。このうち屈折率の高いグループの火山ガラスは鬼界アカホヤ火山灰起源の火山ガラスと考えられる。屈折率の低いグループの火山ガラスは、始良 Tn 火山灰(平安神宮火山灰)起源の可能性が高いが、類似した屈折率を示す阪手火山灰や松河戸火山灰(天保山火山灰)起源の火山ガラスが混入している可能性も否定できない。ただしこれらの火山灰の火山ガラスは中間型~多孔質型主体で、No. 2地点の火山灰とは形状が異なる。

以上のことから、本調査地点については火山灰の降灰層準はNo. 1地点の試料1-3~1-1すなわち10-3層であり、それは約7300年前に降灰した鬼界アカホヤ火山灰であると判断される。また、No. 2地点については、試料2-12の上位すなわち9-3層に、鬼界アカホヤ火山灰及び始良 Tn 火山灰、またはそれ以外の火山灰起源の火山ガラスが再堆積しているものと思われるが、下位の地山からはほとんど検出されなかった。

6. まとめ

火山灰分析を実施した結果、以下のことが明らかになった。本調査地点の火山灰の降灰層準は、No. 1 地点の試料番号1-1～1-3すなわち10-3層である。また、この火山灰は約7300年前に降灰した鬼界アカホヤ火山灰層と考えられる。

※鬼界アカホヤ火山灰の年代について……鬼界アカホヤ火山灰の¹⁴C年代は約6300年前とされているが、最近の暦年代較正法によれば、6300BP はほぼ7300calBP に較正される。一方、これとは別に福沢1995は、福井県三方五湖の水月湖底の堆積物から本火山灰を検出し、堆積物の年縞を計数することにより、その降灰年代を「AD1995年より7325年前」と特定した。これらのことにより現在では、鬼界アカホヤ火山灰の降灰年代は約7300年前とすることが一般化しつつある。

試料 No.	試料の湿潤重量 W(g)	含水比 w	試料の乾燥重量 W1(g)	フルイ後の重量 W2(g)	計数した試料重量 W3(g)	ガラス粒数 X (個)	粒数比 Rg(%)	重量比 Wg(%)	備考
1-1	30.87	83.02	16.9	5.704	—	—	>99	>99	火山ガラスがほとんどを占めるため計数せず
1-2	27.47	89.78	14.5	3.330	—	—	>99	>99	
1-3	29.54	82.72	16.2	5.470	—	—	>99	>99	
1-4	30.50	29.03	23.6	7.844	0.010	292	6.76	1.841	
1-5	28.15	13.24	24.9	7.563	0.012	29	0.56	0.137	
1-6	30.68	13.36	27.1	7.601	0.012	25	0.48	0.110	

W, w は1/1000で四捨五入、W1は1/100で四捨五入してある

表6 No. 1 地点の火山ガラスの含有量分析表

試料 No.	試料の湿潤重量 W(g)	含水比 w	試料の乾燥重量 W1(g)	フルイ後の重量 W2(g)	計数した試料重量 W3(g)	ガラス粒数 X (個)	粒数比 Rg(%)	重量比 Wg(%)	備考
2-1	29.93	19.15	25.1	4.341	0.011	96	2.02	0.281	
2-2	29.97	20.84	24.8	4.140	0.014	117	1.93	0.268	
2-3	31.02	20.57	25.7	3.754	0.014	60	0.99	0.121	
2-4	29.87	22.01	24.5	3.476	0.016	102	1.48	0.169	
2-5	29.60	19.90	24.7	3.999	0.017	161	2.19	0.287	
2-6	29.83	22.02	24.5	4.344	0.014	63	1.04	0.153	
2-7	30.38	19.91	25.3	4.485	0.015	40	0.62	0.091	
2-8	30.58	19.39	25.6	4.697	0.018	12	0.15	0.022	
2-9	30.11	22.80	24.5	5.112	0.015	6	0.09	0.015	

W, w は1/1000で四捨五入、W1は1/100で四捨五入してある

表7 No. 2 地点の火山ガラスの含有量分析表

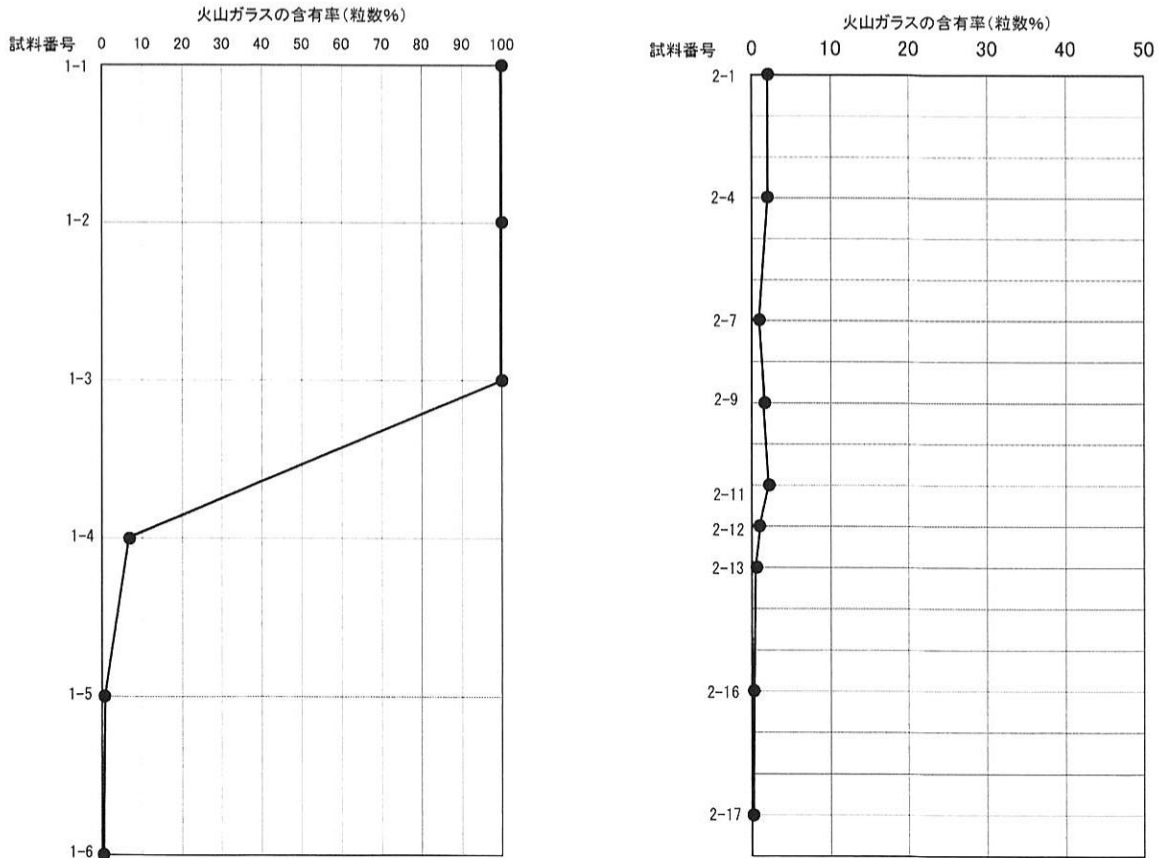


図85 火山ガラスの含有率 (粒数%) グラフ

地点	試料 No.	鉱物組成 (粒数%)					
		ガラス	長石	石英	岩片	風化鉱物	重鉱物
No.1	1-3	98	1	0	0	0	1
No.1	1-4	17	71	4	0	6	2
No.2	2-1	7	73	4	0	12	4
No.2	2-4	3	73	9	0	10	4
No.2	2-9	5	80	5	0	7	1
No.2	2-11	6	81	5	0	6	1
No.2	2-12	3	77	8	0	8	4

* 1%未満

表8 分析試料の鉱物組成

地点	試料 No.	ガラスの形状(粒数%)					屈折率 n
		H	C	T	O	Br	
No.1	1-3	70	29	0	0	1	1.514-1.516(1.515)
No.1	1-4	74	17	0	9	0	1.509-1.512(1.510)
No.2	2-1	87	0	0	0	13	1.499,1.500-1.502,1.504,1.508-1.511
No.2	2-4	86	14	0	0	0	1.505-1.509(1.507)
No.2	2-9	82	18	0	0	0	1.500-1.505,1.508-1.510
No.2	2-11	77	8	0	0	15	1.497-1.501,1.507,1.509-1.510
No.2	2-12	100	0	0	0	0	1.497-1.501,1.506-1.511

H:扁平型 C:中間型 T:多孔質型 O:その他 Br:褐色ガラス ()はモード値、* 1%未満

表9 火山ガラスの形状および屈折率

地点	試料 No.	重鉱物組成 (粒数%)					
		黒雲母	角閃石	斜方輝石	単斜輝石	ジルコン	不透明鉱物
No.1	1-3	0	16	32	*	*	51
No.1	1-4	0	84	3	0	0	13
No.2	2-1	0	90	1	0	1	7
No.2	2-4	0	88	1	0	*	10
No.2	2-9	0	88	2	*	1	6
No.2	2-11	0	85	1	0	2	10
No.2	2-12	1	93	1	0	1	2

* 1%未満

表10 分析試料の鉱物組成

地質	層序	火山灰	鉱物組成				火山ガラスの形状				火山ガラスの屈折率
			ガラス	長石	石英	重鉱物	扁平型	中間型	多孔質型	他	
沖積層 (難波累層)	Ma13	天保山	93	5	1	1	2	39	50	9	1.497-1.503(1.499-1.502)
		横大路	95	4	0	1	75	23	2	0	1.509-1.515(1.511-1.512)
		港	53	34	7	5	1	26	72	0	1.521-1.526(1.522-1.523)
		阪手	12	40	9	38	2	49	36	4	1.498-1.503(1.500)
低位段丘層 (天満累層)		鬼虎川	44	37	2	17	18	30	42	12	1.500-1.504(1.502-1.504)
		平安神宮	98	2	0	0	74	22	3	1	1.498-1.501(1.500)

表11 近畿地方における後期更新世以降の火山灰の性質

火山灰	重鉱物組成							広域テフラ	年代 (ka)	引用文献
	角閃石	斜方輝石	単斜輝石	黒雲母	ジルコン	燐灰石	不透明			
天保山	29	32	4	8	0	3	24	松河戸	3	吉川他(1993)
横大路	17	37	21	1	1	5	17	鬼界アカホヤ	7.3	吉川他(1986)
港	19	4	3	24	4	2	43	鬱陵隠岐	9.5	〃
阪手	98	0	0	1	0	0	2		十数	〃
鬼虎川	66	20	0	2	0	2	10			〃
平安神宮	12	54	17	1	0	0	15	始良 Tn	24	〃

表12 放射性炭素年代測定および樹種同定結果

第3節 放射性炭素年代測定

1. はじめに

吹田操車場遺跡は大阪平野北部に位置する。遺跡北側には千里丘陵が迫っており、今回の発掘調査区は丘陵から伸びる開析谷の谷口付近に位置している。今回の発掘調査では、開析谷を流下していたとみられる流路跡、その充填堆積物上部で古墳時代（6世紀後半）の遺構・遺物などが確認されている。

このように本遺跡の立地環境を考える上で調査区内を流下する流路の形成時期や当時の環境を復元することが重要と考えられた。そこで、今回の調査では流路充填堆積物下部と流路が浸食している堆積物中から出土した木材について、放射性炭素年代測定を実施し、流路の形成年代に関する情報を得る。また、放射性炭素年代測定結果を評価する上で試料の性質や由来を捉えることが重要であり、出土木材の樹種同定も合わせて実施する。

2. 調査地点の層序概要

調査区内の流路は、北西－南東の流向を示している。この流路は、丘陵を開析する谷内から流下してきたものと推定される。検出された流路の深さは浅く、灰色の細粒碎屑物（9-1～9-3層）により充填されている。この上位には、不整合で土壌化が進行した腐植質堆積物（6層）、灰色泥質堆積物（5層）が覆っている。流路が形成されている堆積物下部には、テフラが認められている。本テフラは分析の結果、約6,300年前に九州の鬼界カルデラより噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah：町田ほか,1978）に由来するものと推定されている。また一方、6層からは、古墳時代の遺物・遺構が確認されている。

3. 試料

試料は、流路充填堆積物上部（試料名：その2調査区B地区地山内）より出土した木材1点、流路充填堆積物下部（試料名：その3調査区C地区A4-e4地山直上）より出土した木材1点の合計2点である。試料の詳細は結果とともに表12に示す。

4. 分析方法

（1）試料の樹種同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

（2）前処理

蒸留水でよく洗浄して表面の異物を取り除いた。乾燥後、水酸化ナトリウム溶液を加えて煮沸した。煮沸後の水酸化ナトリウム溶液は傾斜法で除去した。この水酸化ナトリウムの処理は、除去した水酸化ナトリウム溶液の色が薄い褐色になるまで繰返した。次に塩酸を加えて煮沸し、塩酸は水で充分洗い流した。この試料を乾燥後、蒸し焼き（無酸素状態で400°Cに加熱）にした。蒸し焼きにした試料は純酸素中で燃焼させて二酸化炭素とし、アンモニア水に捕集した。これに塩化カルシウムを反応させ、純粋な炭酸カルシウムを回収した。

(3) 試料の調製

前処理で得られた炭酸カルシウムから真空状態で二酸化炭素、アセチレン、ベンゼンの順に合成した。最終的に得られた合成ベンゼン 5 ml (足りない場合は、市販の特級ベンゼンを足して 5 ml とした) にシンチレーターを 0.075g 加えたものを測定試料とした。

(4) 測定

測定は、1 回の測定時間 50 分間を繰り返し行った。未知試料の他に、値が知られているスタンダード試料と自然計数を測定するブランク試料と一緒に測定した。

(5) 計算

放射性炭素の半減期として LIBBY の半減期 5,570 年を使用した。

5. 分析結果

年代測定試料である 2 点の木材は、いずれも同じ材組織を示す。散孔材で、管孔は単独または 2～4 個が放射方向に複合する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状に配列する。放射組織は同性、単列、1～30 細胞高のものと集合放射組織とがある。このような解剖学的特徴から、カバノキ科ハンノキ属ハンノキ亜属 (*Alnus subgen. Alnus*) に同定された。

2 点の木材の年代測定結果を表 12 に示す。年代値は、その 2 調査区 B 地区地山内出土木材が 2450 年前、その 3 調査区地区 CA4-e4 地山直上出土木材が 2150 年前の値を示す。

6. 考察

今回年代測定を実施した、その 2 調査区 B 地区地山内出土木材、その 3 調査区 C 地区 A4-e4 地山直上出土木材の年代値は各々 2450 年前・2150 年前の値を示した。層位的には、前者の方が下位層準にあたることから、層位的な年代値の逆転はないことになる。この年代値から調査地点の流路は 2450～2150 年前頃の間の時期に形成されたことが推定される。また、得られた年代値は河内平野に位置する遺跡で行われた放射性炭素年代測定結果と比較すると、縄文時代晩期～弥生時代前期に相当する層準で得られている値に類似する (例えば、辻本ほか, 1996)。

また、今回の測定試料であった木材は、いずれもハンノキ属ハンノキ亜属に同定された。現在日本に分布するハンノキ亜属の種類には、ハンノキ (分布: 北海道～琉球。水質のある低地・湿原)・サクラバハンノキ (本州茨城・新潟以西・宮崎県。湿地に稀)・ケヤマハンノキ (北海道～九州。溪流沿い)・ミヤマカワラハンノキ (本州福井県以北の日本海側。多雪地帯の山の斜面)・カワラハンノキ (本州東海以西・四国・宮崎。暖地の河岸)・ヤハズハンノキ (山形～福井県の多雪地帯。深山疎開地・崩壊地)・サルクラハンノキ (八甲田山にのみ分布) がある。年代値が示す頃の河内平野は、気候的には暖温帯の気候下に属していたことが推定されている (大見ほか, 1996)。このような気候を考慮すると、ハンノキ亜属の種としてはハンノキ・サクラバハンノキ・ケヤマハンノキ・カワラハンノキなどの一種に該当する可能性がある。種の特定は種実類などから検討する必要があるが、いずれの種も流路の集水域ないしその近辺に分布する種であること、充填堆積物下部の層相が腐植質にとむ堆積物からなり、木材が多数認められることから、ここでの木材は当時の流路周辺に分布していたものに由来する可能性がある。

ところで、日本の海岸平野のうち、濃尾平野では縄文時代中期および縄文時代晩期の二時期に浅谷地形が形成されたことが確認されている（海津,1994）。これらの浅谷地形は海面低下に伴い形成されたものと考えられている。また、この地形環境変化と海水準変化は、太田ほか（1982）がまとめた縄文海進以降の海水準変化、「縄文中期の小海退」と「弥生の小海退」の認められる海水準変化の状態とほぼ同じ変化のパターンを示していることが指摘されている。このような海水準の変化は河内平野でも確認されており、森ノ宮遺跡ではこれらの基準面低下に伴って下刻されたと思われる開析谷が認められている（別所ほか,1998）。

今回の調査区内で認められた流路（浅谷）は、年代値から、縄文時代晩期頃に形成されたと思われる。これと同時期の浅谷については、茨木市の五日市東遺跡の発掘調査でも検出されている（茨木市教育委員会,2000）。五日市東遺跡で確認された谷は、晩期前半頃に開析され、縄文時代晩期後半～弥生時代前期頃に埋積を完了しており、谷周辺では、縄文時代晩期～弥生時代前期の土器を含む遺構が検出されている。

これら北摂地域で認められた浅谷は、上記の海水準変動に伴って形成された地形の可能性はある。但し、扇状地～沖積低地で認められる河川の地形形成は、海水準変動のみで決定されるものではなく、降雨時の流出様式および上流域の土砂生産様式や周辺地域の地盤運動などの多変量的な変動から説明される必要がある（松田,1999）。そのため本地域の地形発達史については、当時の気候環境等の情報を含めて総合的に評価することが必要と思われる。

試料番号	試料名	試料の質			測定年代 BP	誤差		Lab-No.
		質	樹種	部位		+σ	-σ	
1	その2 B地区地山内	木材	ハンノキ属ハンノキ亜属	幹材	2,450	80	80	PAL-850
2	その3 C地区A4-e4地山直上	木材	ハンノキ属ハンノキ亜属	幹材	2,150	80	80	PAL-849

注. (1) 年代値：1950年を基点とした値。

(2) 誤差：測定誤差 σ （測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

(3) PAL：パリノ・サーヴェイ株式会社で測定。

図版1 木材

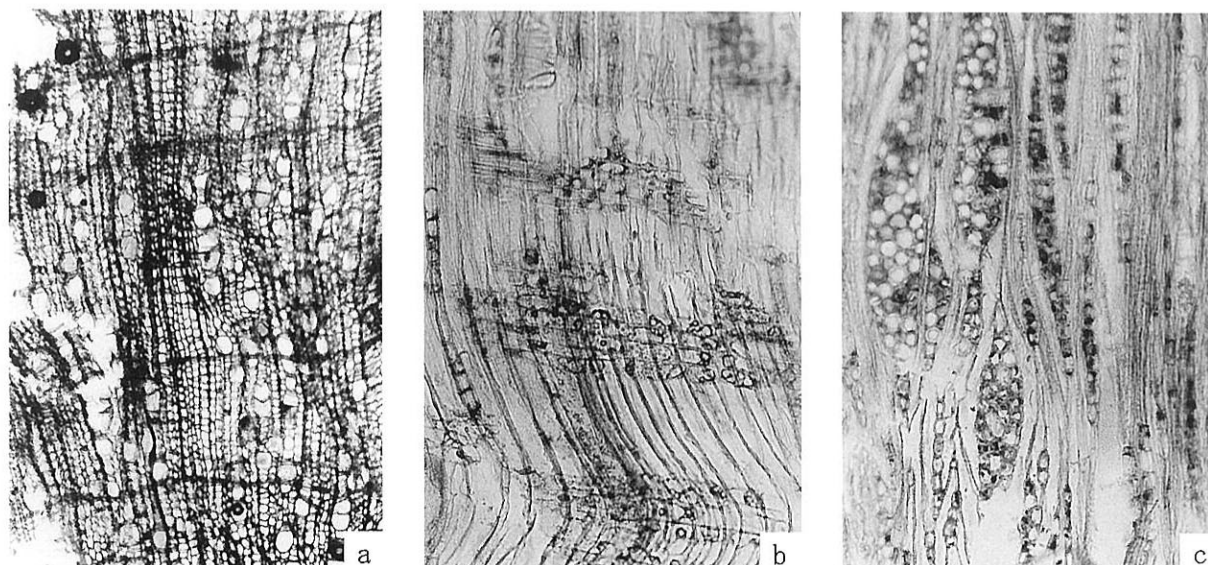


写真9 ハンノキ属ハンノキ亜属（吹田その2 Bトレンチ地山内）

a：木口、b：柱目、c：板目

200 μm : a
200 μm : b, c

【参考・引用文献】

第1節 花粉珪藻分析

- ・金原正明(1993)花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p. 248-262.
- ・島倉巳三郎(1973)日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.
- ・中村純(1973)花粉分析. 古今書院, p.82-110.
- ・中村純(1974)イネ科花粉について、とくにイネ(*Oryza sativa*)を中心として. 第四紀研究, 13, p.187-193.
- ・中村純(1977)稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学, 第10号, p.21-30.
- ・中村純(1980)日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.
- ・安藤一男(1990)淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 東北地理, 42, p.73-88.
- ・伊藤良永・堀内誠示(1991)陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, p.23-45.
- ・小杉正人(1986)陸生珪藻による古環境解析とその意義—わが国への導入とその展望—. 植生史研究, 第1号, 植生史研究会, p.29-44.
- ・小杉正人(1988)珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, p.1-20.
- ・Hustedt, F. (1937-1938) Systematische und ologische Untersuchungen über die Diatomeenflora von Java, Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch. Hydrobiol., Suppl. 15, p.131-506.
- ・Patrick, R. eimer, C. W. (1966) The diatom of the United States, vol.1. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No.13, The Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 644p.
- ・Lowe, R.L. (1974) Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. 333p., National Environmental Reserch. Center.
- ・Patrick, R. eimer, C. W. (1975) The diatom of the United States, vol.2. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No.13, The Academy of Natural Sciences of Philadelphia, 213p.
- ・Asai, K. & Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, p.35-47.
- ・伊藤良永・堀内誠示(1991)陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 9, p23-45.
- ・前田保夫(1977)照葉樹林の出現と拡大, 考古学ジャーナル, 138号, p.2-6.
- ・安田喜憲(1978)大阪府河内平野における過去一万三千年間の植生変遷と古地理, 第四紀研究, 16(4), p. 244-299.
- ・深泥ヶ池団体研究グループ(1976)深泥ヶ池の研究, 地球科学, 30巻2号, p.122-140.

第2節 火山灰分析

- ・吉川周作(1976):大阪層群の火山灰層について. 地質学雑誌, 82, 8, 497-515.
- ・吉川周作(1981):堆積物中の火山ガラスの研究—大阪平野の更新〜完新統について—. 第四紀研究, 20, 2, 75-87.
- ・吉川周作・那須孝悌・樽野博幸・古谷正和(1986):近畿地方に分布する後期更新世〜完新世の火山灰について. 地球科学, 40, 1, 18-38.
- ・吉川周作・小倉博之・福西佐代(1993)大阪平野地下の中・上部更新統火山灰層序. 地質学雑誌, 99, 467-478.
- ・辻誠一郎・奥野充・福島大輔(2000):テフラの放射性炭素年代. 日本先史時代の¹⁴C年代. 日本第四紀学会. 41-58.

第3節 放射性炭素年代測定

- ・別所秀高・松田順一郎(1998)大阪府河内平野完新統中. 上部の堆積相解析と相対的海水準変動に関する予察, 日本第四紀学会講演要旨集, 28, 160-161.
- ・町田 洋・新井房夫(1978)南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ—アカホヤ火山灰—. 第四紀研究, 17, p.143-163.
- ・大見元子・伊藤良永・馬場健司(1996)第三章 古環境. 「布施駅北口駐車場及び寝屋川流域調整池建設工事に伴う宮ノ下遺跡第2次発掘調査報告書」, p.21-46, 財団法人東大阪市文化財協会.
- ・太田陽子・松島義章・森脇 広(1982)日本における完新世海面変化に関する研究の現状と問題—Atlas of Holocene Sea-level Records in Japanを資料として—. 第四紀研究, 21, p.133-143.
- ・辻本裕也・伊藤良永・馬場健司(1996)III-2 古環境. 「宮ノ下遺跡第1次発掘調査報告書—第2分冊—」, 東大阪市教育委員会・財団法人 東大阪市文化財協会, p.27-56.
- ・海津正倫(1994)沖積低地の古環境学. 270p. 古今書院.
- ・濱野俊一・中東正之(2000)五日市東遺跡(南耳原一丁目). 「平成11年度発掘調査概報」, 茨木市教育委員会.
- ・松田順一郎(1999)瓜生堂40次調査地における河川堆積作用の変化. 「瓜生堂・若江北・山賀遺跡発掘調査報告書—電気工事予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の調査報告—」, 財団法人 東大阪市文化財協会, p. 93-105.

第4節 自然科学的分析結果からみた谷の形成と埋没

1. 「谷」の形成

今回の調査においては、各トレンチにおいて、主に黒色粘土で埋没した「谷」を検出した。検出位置や埋没状況から見てこれらはすべて同一の「谷」の一部をそれぞれで検出していることは間違いない。ただし、B地区においては、調査区の中央部分がやや高く、東西に下がっている状態が観察されている。このことから、「谷」の内部にはごく微地形的な高低があったものと思われる。また、調査区付近では大きく深く開析する谷ではなく、緩やかな傾斜をもった浅く広い「谷」であった。

「谷」の形成要因については二つの可能性が考えられる。1つは一旦平坦に堆積した古淀川の沖積層の「地山」を千里丘陵からの水流が浸食し開析したことによると解釈するものである。砂礫やシルトの地山を水流が開析した場合、C地区の溝C-801のように相当の下方浸食が想定されるが、この「谷」の肩部の傾斜はそのような状況ではない。また、浸食された場合、谷の斜面に古淀川沖積層の累層が観察されるのであるが、この「谷」の下部の地山の様相は上部から下部まで大きな変化や層界はみられなかった。

このように見た場合、「谷」は海水準がより低い時期に形成された「原地形の谷」が淀川の沖積作用で埋没する過程で凹地として残された「谷」、すなわち地理学の用語でいう「埋没浅谷」と考えなければならない。A地区における黒色粘土の堆積範囲が、北西部分で幅10m程度と狭く、厚さも10cm程度と薄く、谷頭に近い状況を示していることも、この「谷」が千里丘陵を浸食した谷と直接地形的に連続するものではなく、いわば「原地形の谷」の「痕跡」であることを示すものである。「原地形の谷」は、開析方向から見て、千里丘陵を開析した谷の延長であると思われる。図3に示したように、昭和36年大阪府3000分の1地形図から作成した現地表の1m間隔等高線でも調査区付近に谷地形が読み取れる。位置と方向からみて、今回検出した「谷」がこれに繋がるものであることは間違いないと思われる。明治18年仮製2万分の1地形図(図88)で読み取れる谷は、調査区のやや西に中心を持つように描かれているが、発掘調査においては旧地表は調査区の西側が高く、東に低いことが確認されている。従って、この等高線で示された谷筋は、調査区より南ではやや東にふついていると思われる。この等高線で示された谷が「原地形の谷」の痕跡を示すものとおもわれる。この谷頭には「竜ヶ池」が築造されている。

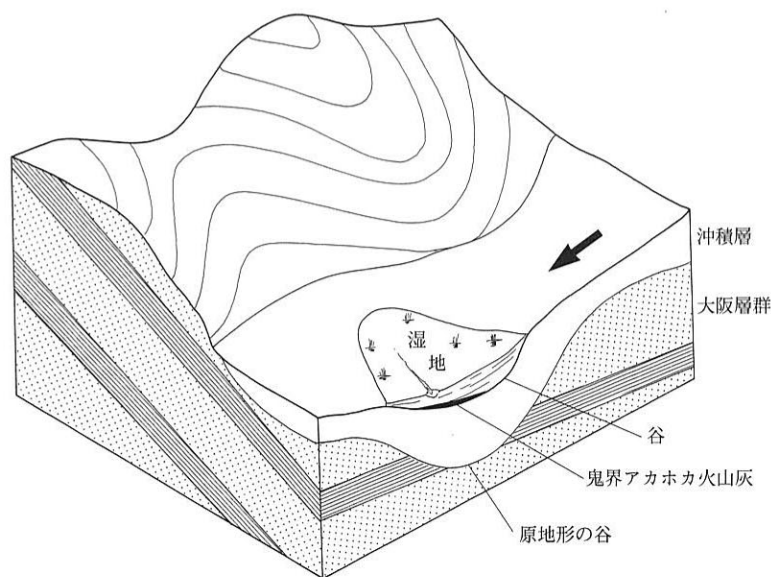


図86 谷の形成復原模式図

この等高線で示された谷が「原地形の谷」の痕跡を示すものとおもわれる。この谷頭には「竜ヶ池」が築造されている。

土地条件図の沖積層基底等深線図(図87)をみると調査区付近に等深線の入りこみがみられ、この付近に「原地形の谷」に相当する可能性のある凹地が存在することがわかる。千里丘陵東南辺ではかなり大規模なものであり、これを開析した谷は規模から見て相当大きいものとおもわれるので、今回調査の結果と直接結びつくかどうかは更なる検討を必要とするが、「谷」の規模が大きいこと

が証明されれば、その可能性もあるものと考えている。

2. 「谷」の形成時期

「谷」の形成時期を知る手がかりは、谷底部に堆積した火山灰である。火山灰は分析の結果、鬼界アカホヤ火山灰であることが判明した。火山灰は谷のなかでも一段と低い溝の中に良好に堆積していたが、谷の底全体には残存しておらず、付近の降灰の二次堆積が溝に残ったものであると考えられている(図89)。ただし、その二次堆積の状況は降灰時にきわめて近い時期のものと推定されている。従って、「現地形の谷」はB.P. 6300年ごろ(^{14}C 測定による年代。暦年代に補正してB.P.7300年と報告されている。第7章第2節参照)までにはほぼ埋没し、その痕跡の「谷」が形成されていたといえる。

「谷」は粘土を主体とした埋土で徐々に埋没する。埋土の粘土は上層では黒色、下層でもやや灰色かかった暗褐色を呈し、有機物を多量に含んでいることがわかる。花粉分析では谷埋土の上部ほどカヤツリグサなどが多く湿地性が強いと判断される。下層(第10-1-1層以下)では、珪藻の出現密度がきわめて低く、珪藻が生育しにくい乾燥した環境と推定されている。

3. 「谷」の再開析と「新しい谷」の形成

土層断面を観察すると、地山の

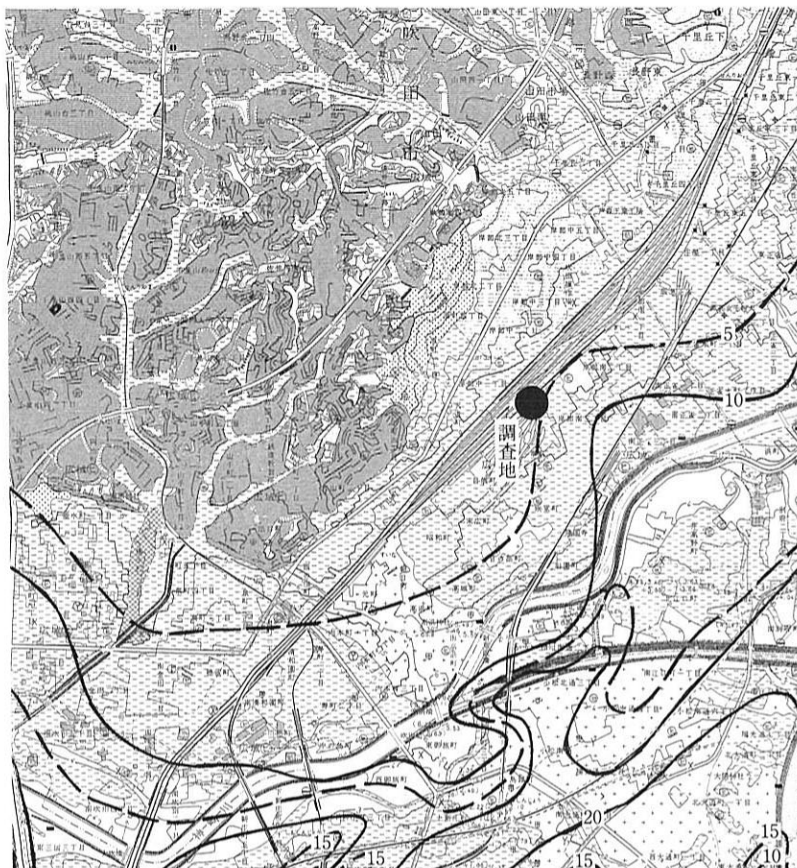


図87 沖積層基底面等深線(土地条件図より作成 5万分の1)

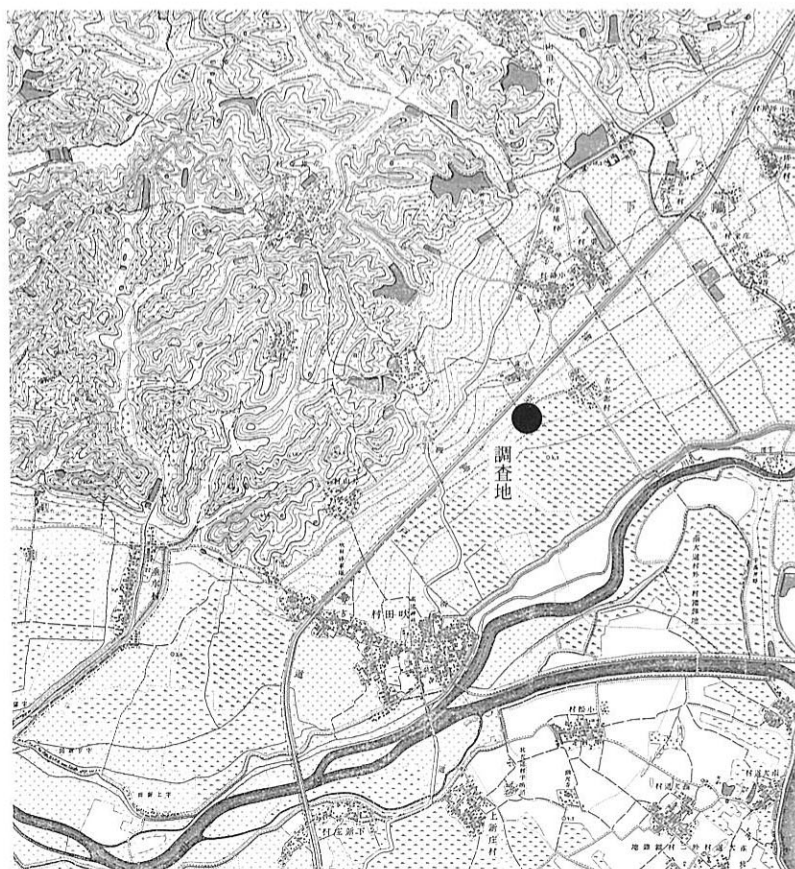


図88 周辺の地形図(明治17年仮製2万分の1地形図から作成 5万分の1)

上部に堆積した粘土層が浸食されて不整合を生じている部分が観察される。この「新しい谷」の浸食後、その部分に堆積した層も黒色粘土であったため、調査時点では双方を連続した同一層順としてとらえてしまっていた部分もある。このため「新しい谷」の範囲は明瞭ではないが、北東壁の断面には「新しい谷」埋土が連続して観察されるので、「谷」の中央部のかなりの部分を浸食したと考えられる。

上下に連続した層序における花粉分析では、「谷」埋土の第9-2層以下と「新しい谷」浸食後に全体を覆って堆積した第9-1層との間で分帯が可能であり、上層はマツ属が増加傾向をみせる（C地区 SSS-III帯）。

「新しい谷」の形成時期は、谷底から出土した木材の放射性炭素年代測定により推定が可能である。両試料ともハンノキ属ハンノキ亜属の幹材で、湿地に自生する性格から、「新しい谷」周辺に繁茂したものが倒伏し埋没したものと考えられる。C地区での試料は谷最下層でほぼ地山上面で採取したもので B.P.2150 (±80) 年、B地区での試料も地山にくい込んだような状態で出土した試料で B.P.2450 (±80) 年と測定されている。

「新しい谷」の形成後、ある程度時間が経過して粘土が堆積した後に年代測定したハンノキが倒伏して埋没した可能性を考えれば、「新しい谷」はおおよそ弥生時代前期ごろ形成され、弥生時代には湿地を呈し、最上層は出土遺物から考えて古墳時代後期ごろまでに埋没したと考えられる。

4. 海水準の変化と「谷」の形成

沖積層堆積前の地形、すなわち最終氷期（約1万5千年前）の海水面は現在より110～120m 低かったと考えられている。この当時の古大阪平野の様子は趙・松田によって推定復原されている（図90）。古淀川は深い谷となって流下し、これに北摂山地や千里丘陵や北摂山地を開析した小河川が合流していた。

その後、約6000年前には海水準が最高となって、古大阪平野は湾になってしまうのであるが、この間の海水準の上昇過程で古淀川による大規模な沖積作用が行われる（図91）。調査地周辺での沖積層基底面の深さは「土地条件図」によれば5 m 程度であるので、約1万年間にこの部分では5 m の厚さの砂礫が堆積したわけである。約6000年前の最高海水準は現在よりどの程度高かったかについては2～5 m と諸説あるが、一旦地盤の変動を考慮せずに、現在の地形でみてどの高さまで海水面が上昇したかを検証することが吹田操車場遺跡の谷の解釈に有効である。成瀬洋氏の研究によれば、千里丘陵南縁の崖地形は旧海食崖であって崖下の海拔高度が5～7 m であると考えられている。この地点からわずか数 km の位置にある本調査区においては、谷の肩部の高さはA地区で TP5.3m、C地区で4.5m 程度であることから考えて、海水準が最高の時には水面下であった可能性も考えられる。

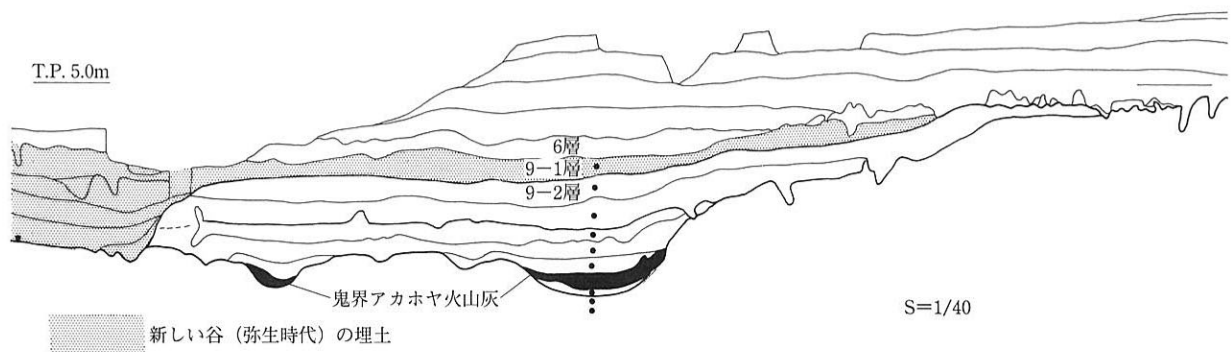


図89 谷埋土断面図

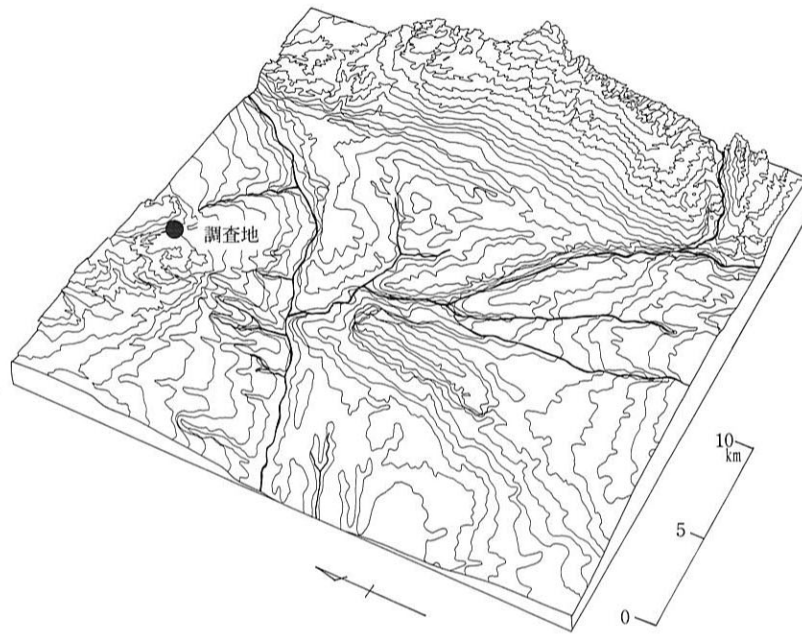


図90 最終氷期の古大阪平野（趙・松田原図）

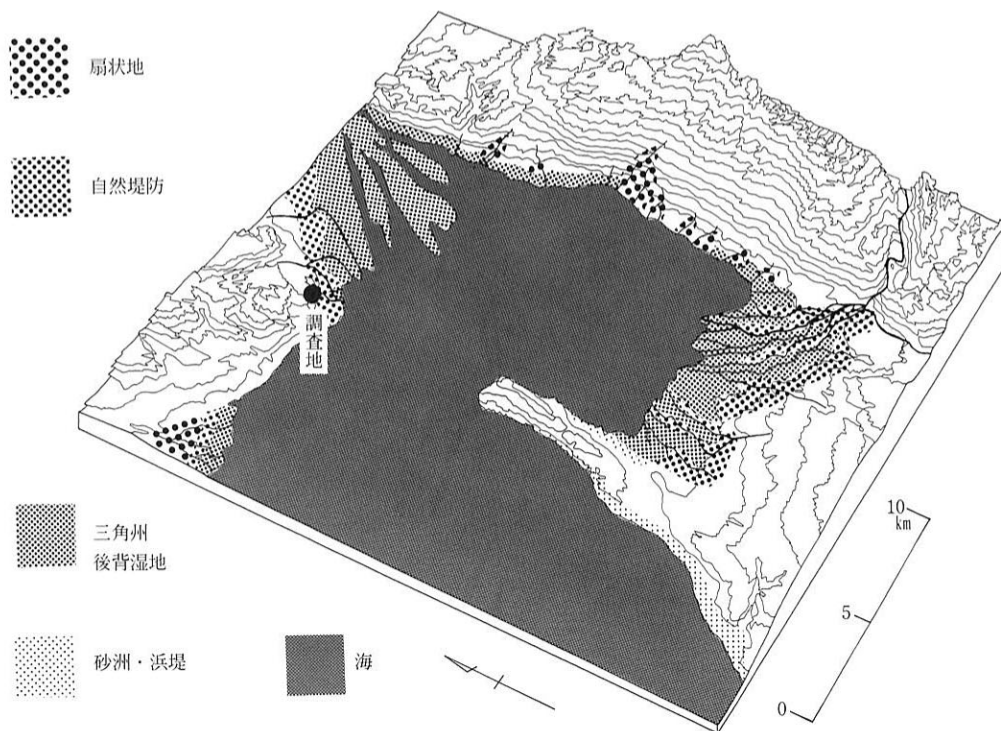


図91 縄文海進最高水準期の河内湾（松田・別所原図を一部改変）

調査区付近の砂礫層は、花粉珪藻化石が保存されないような状況で、すなわち非常に短期間に堆積したと考えられている。この想定は堆積土層の観察と一致している。その後一旦乾燥地となったあと、鬼界アカホヤ火山灰の降灰があって、さらにその後の湿地化によって黒色粘土の堆積がすすんだものと考えられる。

黒色粘土の堆積をもたらした湿地化が、縄文海進の最高時にむかっての変化であるかどうかは確証がないが、鬼界アカホヤ火山灰の降灰が縄文海進のピーク以前であると考えられているので、上の想定は遺跡の堆積状況と一致している。すなわち、鬼界アカホヤ火山灰降灰以前に吹田操車場遺跡付近では淀川の沖積作用がほぼ終了し、乾燥状態となっていた。その後、B.P.6300年ごろ（¹⁴C年代）鬼界アカホヤ火山灰の降灰があった後、縄文海進最高時（¹⁴C B.P.6000年ごろ）以前にその影響で谷部分が湿地化し黒色粘土が溜まったと考えられるわけである。

「新しい谷」の形成はC地区のハンノキの¹⁴C年代からB.P.2450（±80）年ごろのことと推定される。2500年前から2000年前ごろにかけて、太平洋岸で寒冷期があったといわれており、これに伴う海面の低下の影響をうけて、「新しい谷」が開析したものと推定される。調査の結果は全国的な海水準の変化に符合している。

【参考・引用文献】

- ・中田正夫「最終氷期以降の海水準変更」（『古代の環境と考古学』 古今書院 1995年）
- ・成瀬 洋「完新世海進最盛期における大阪平野北縁部の海岸線」（『大阪経大論集』第43巻第6号 1993年3月）
- ・日下雅義「古代の開発と環境」（『古代の環境と考古学』 古今書院 1995年）

第8章 まとめと考察

第1節 調査成果と今後の課題

各調査区ごとに遺構の変遷や調査成果のまとめが記述されているので、ここでは調査区全体をとおしての調査の成果と今後の課題を提示してまとめとしたい。

1 微地形

A・B・Cすべての調査区にわたって検出された、黒色粘土で埋没した谷地形は、その底部に堆積した火山灰が鬼界アカホヤ火山灰と同定されたことから、その形成時期と埋没過程が検証され、それぞれが汎日本的な気候変動と地形の形成に合致していることが確認された。すなわち、鬼界アカホヤ火山灰の降灰のあった6300年 B.P. (暦年代補正では7300年前)にはすでに埋没浅谷が形成されており、縄文海進最高期にかけて湿地化しつつ谷が埋没したこと、また弥生時代前期ごろには谷の再開析（浸食）とその後の再堆積があったことが確認された。(第7章参照)

2 開発

弥生時代以前の遺物は過去の試掘調査においても散見されているが、今回調査でも当該時期の遺構は検出されていない。

この地域の開発を示す重要な遺構はA地区で検出された溝A-19である。この溝は掘り込み面の標高の高いところでは幅2.3m、深さ1.2mにおよび、全体として底幅では約1mの規模をもつ直線の溝で、延長120mの調査区を縦断してさらに北東-南西方向にのびている。溝底の高低差が120mでわずか0.4mしかないことは、「この溝が長距離にわたる勾配を考慮して掘削された計画的なものである」ことを示しており、「小規模な地形の起伏をこえた連続性をもつ溝」であると考えられる。(第4章第2節参照)

溝の掘削時期は、溝を埋没させ遺構面全体を覆う洪水砂層からの出土遺物に、古墳時代前期の土師器が含まれ、それ以後の遺物を含まないことから古墳時代前期と推定されている。幾度かの掘り返しがあり、溝の最上層には6世紀後半から末ごろの須恵器甕がまとまって出土していることから最終埋没の時期は6世紀末ごろと考えてよいと思われる。

この溝が耕地開発に伴うものか、あるいはより総合的な計画水路であったかはわからないが、今後、花粉分析やイネ科花粉のうちのイネ花粉の同定やプラントオパール分析によって水田化の層序が特定でき、出土遺物からその時期が推定できればこの地域の開発の時期がより詳細に明らかになろう。そのときには、溝も再評価が必要となろう。

溝A-19はこの地域の開発が谷田などの小規模な開発ではなく、計画的な大規模なものであり、背景にはそれを可能とした集団の存在を示唆しているといえる。

3 条里水田と住居

10世紀ごろには条里地割をもつ水田が形成されていたことが確認された。ただし、このことは、条里地割がそれ以前に存在したことを否定するものではない。層位的にみると、この水田面は6世紀末以後の堆積をベースにした耕作土であると思われる。歴史地理学の研究成果によれば、この地域に土地把握

の基準線としての統一的な条里地割が施行された時期は8世紀半ばに遡るものであろうが、実態として10世紀における耕地の区画として検出された意義は大きいといえる。広大な「牧」として囲い込まれた地域のなかで「荘園」として把握される可耕地と居住地のありかたを示すものかもしれない。

条里区画をもつ水田の間近で、やや地盤の高い部分に掘立柱建物が検出されている。集村的な村落のイメージとは程遠い、主屋と倉庫からなる「一軒屋」のような様相はこの時期の村落のありかたの一端を示しているといえよう。

4 交通路

千里丘陵の東南辺にそって、かつて「大坂道」あるいは「高槻街道」と呼ばれた道路がある。これは、北摂山地の南を直線的にはしる西国街道から、千里丘陵の北東部で南に分岐し、吹田を經由して新庄・柴島・長柄から大阪に通じる道路である。この道路は、古代の直線的計画道路である「山陽道」（西国街道）から千里丘陵北東にある独立丘陵「幣久良（山）」で分岐し、さらにやや西に斜行しながらほぼ南に直線にはしる古代計画道路であると考えられている。（注1）

吹田は、淀川から神崎川を經由して西国と京都を結ぶ水上交通の要地でもある。江口や高浜は平安時代以来、貴族の別荘が建ち、遊女など芸能をこととする人々が集まる繁華の地であった。

近代に至っては、大阪・京都間の鉄道交通がこの地を通過し、さらに貨物輸送の基地「吹田操車場」が建設されるなど、各時代における交通路としての重要性は一貫している。本章第3節で考察される「摂津C型羽釜」の分布もこれに関連するものであろう。

交通に関連する遺構としては、道路遺構そのものなどを除いては検証困難なテーマであるが、今後の調査における視点とすべき課題として提示しておきたい。

（注1）足利健亮「摂河泉の古代計画道路」

（『日本古代地理研究』1985年 所収）

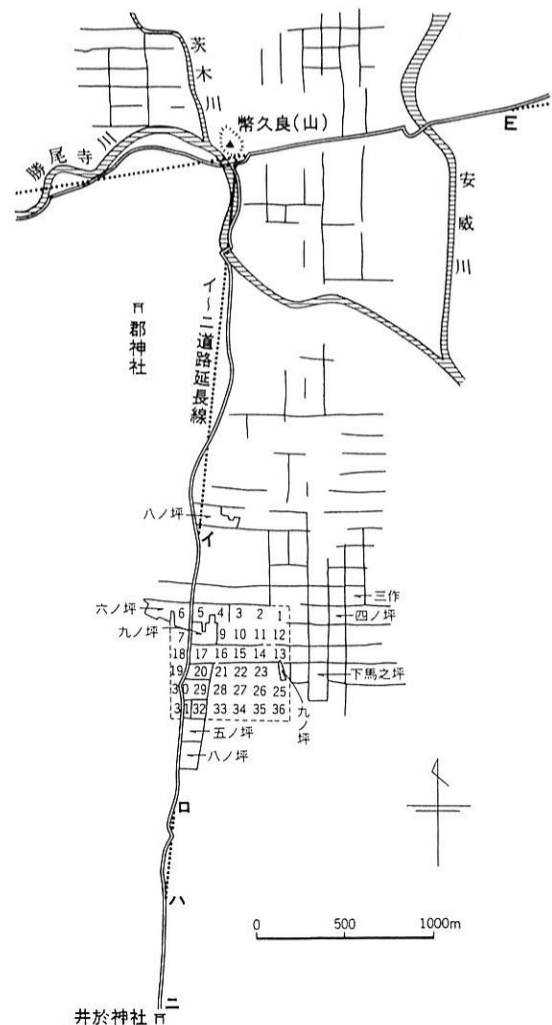


図92 計画的三嶋路と幣久良山（注1文献）

第2節 出土遺物からみた吹田操車場遺跡

1. はじめに

本節では、今回の調査で出土した遺物の中で特筆すべきものを挙げ、遺物からみた吹田操車場遺跡を若干述べたい。

2. 弥生時代の遺物

A 地区では、古墳時代より古い時期の明瞭な人為的遺構が存在しないことが想定された。よって、断面の調査により、最終遺構面から下層の確認をおこなった。その結果、A 地区第6層中から弥生土器の底部と考えられる土器片が出土した。この弥生土器片の器表面は内外面ともに摩滅が著しく、詳細な時期は限定できなかった。

また、後世の包含層中からも1点のみであるが、これも摩滅した弥生土器の底部片が出土している。土器以外では、弥生時代の石器や剥片などが出土している。石器や剥片の出土層位は、第6層出土の剥片、古墳時代の遺構出土の石鏃・石槍、B 地区の後世包含層出土のものである。石器と剥片は、すべてサヌカイト製のものである。以上、弥生時代の遺物は土器片とサヌカイト製石器及び剥片が出土した。これらのうち、第6層出土の土器片とサヌカイト製剥片を除いては、すべて後世包含層への混入遺物と考えられる。

これらの弥生時代の遺物は、B 地区で石鏃が1点出土している以外はすべてA 地区からの出土である。C 地区では、古墳時代前期以前の遺物は出土しなかった。これらの遺物が周辺から流されてきたものと考えれば、今回の調査区より北側に弥生時代の居住域等が存在した可能性が考えられる。

3. 須恵器

古墳時代から古代にかけての遺物は、須恵器が主体を占め、杯身、杯蓋、高杯、壺、甕などの器種が出土した。出土した6世紀後半から7世紀半ばまでの須恵器に関しては、胎土の肉眼観察、形態などから吹田須恵器窯跡群で生産された可能性が高いと考えられる。

出土した7世紀半ばの須恵器は、吹田産のものより他地域で生産されたと思われるものが増加する傾向にあり、千里丘陵での須恵器生産の消長を反映していると考えられる。他地域産の須恵器では播磨のものと考えられる須恵器が比較的多くみられるようである。

4. 古代の遺物

今回の調査では、この遺跡の性格を考えるうえで重要な古代の遺物が多く出土している。特に、須恵器杯身・杯蓋、灰釉陶器碗を転用した硯が出土している。また、底部外面に「令」と墨書された灰釉陶器碗がA 地区第4層から出土した。これらの転用硯・墨書土器などの遺物より、8世紀後半から10世紀にかけて付近に識字層が存在していたと推測できる。しかし、円面硯など専用硯はみられず、さらに瓦の出土数の少なさや建物のあり方などから官衛的な施設の存在は考えられない。A 地区の建物2A-91は、柱穴内から出土した遺物の年代観より10世紀末から11世紀初頭の廃絶が考えられる。このため、中世に入り耕作地と化す以前の建物であると評価することができ、先述した識字層との関連性が注目される。

5. 馬形土製品

また、土師質の馬形土製品が A・B 両地区で各 1 点ずつ出土している。いずれも、頭部の破片であるうえに包含層からの出土であるため時期判定に苦しむが、律令祭祀で使用され、定型化したいわゆる土馬とは一線を画する形態である。いわゆる土馬は、頭頂部から鼻先にかけて反る半月形あるいは三日月形を呈する頭部に目が表現されている。しかし、今回出土した馬形土製品は、断面多角形をした棒状の頭部に目・鼻が刺突具による刺突で表現されている。また、口、耳や馬具などは表現されていない簡素な馬である。律令期以前である古墳時代の土馬は、しばしば馬具が表現され、口や耳もあるのが一般的である。この形態の差異より本報告では、これらをいわゆる土馬と区別するために馬形土製品という語句を用いた。ただし、用途としては、いわゆる土馬と同じく祭祀行為に用いられたのであろうか。

6. 輸入陶磁器

中世の雑多な遺物に混じって輸入陶磁器類が、A・B・C 地区で出土している。各地区で出土した輸入陶磁器類は、これらを手に入れることのできた富裕な階層が近辺に存在していたことを示唆するものである。特に今回の調査では、中世の耕作地が広がっており、中世の住居跡などの遺構は、存在しなかった。しかし、比較的まとまった量の青磁や白磁の存在は調査区周辺に中世の居住地が広がっていた可能性が指摘でき、今後の周辺の調査に期待される場所である。

7. おわりに

今回の調査では時代、種類問わず多彩な遺物が出土した。本節では興味深い資料しか紹介できなかった。今後の周辺の調査例が増えれば千里丘陵の南地域の歴史も詳細に解明されることであろう。

【引用・参考文献】

- ・藤原学ほか「須恵器の編年」『古墳時代の研究 6 土師器と須恵器』
- ・鍋島敏也・藤原学『千里古窯跡群』1974
- ・網干善教ほか編『吹田市史』
- ・金子裕之編『律令期祭祀遺物集成』1988

第3節 摂津C型羽釜考

1. はじめに

畿内では、古代から中世を通じて日用の煮炊具として製作、使用された土器に羽釜、土釜、罏釜などと呼ばれる土師質や瓦質の器種が存在する。今回、これら羽釜のうち古代末期に生産された、いわゆる摂津C型羽釜と呼ばれる土師器羽釜に着目した。

この「摂津C型」という分類名称を付与したのは菅原正明氏である。氏は、この摂津C型羽釜を「半球形の体部と直立する口縁からなり、口縁部外面に幅の狭い罏をめぐらす。口径と器高はほぼ同じである。口縁部内外面はヨコナデ調整、胴部外面は縦方向にハケメ調整している。胎土に砂粒を含み、器面は灰褐色系の色調を呈する。土師器釜。・・・」と定義している。(菅原1987) この名称にはまだ疑問を挟む余地はあるが、現段階ではそれ以外に適当な呼称がないため、ここでは、便宜的にこの菅原分類の名称で論を進めたい。

本報告の吹田操車場遺跡の発掘調査では、合計3個体の摂津C型羽釜片が出土しており、これをもとに各地で出土した摂津C型羽釜と合わせて様々な角度から分析し、この羽釜の特徴をふまえた若干の私見を述べたいと思う。

2. 吹田操車場遺跡出土の摂津C型羽釜

当遺跡出土の摂津C型羽釜は、全部で3個体である。内訳は、遺構出土のもの1個体、包含層出土のもの2個体である。

遺構出土の羽釜1は、ピット2A-35の中から出土した(図27-36)。このピットは、A区の建物2A-91を構成する柱穴を切るピットである。この建物2A-91は、付属部と庇を持つ掘立柱建物で、調査地点の中においては中心的な遺構であると評価できる。よって、この羽釜1は、この建物を含む周囲の遺構を考える上で看過することのできない重要な遺物であるといえる。

出土した羽釜1は破砕していたが、比較的まとまった状態で検出された。また、共伴遺物としては、黒色土器碗が2個体出土し、羽釜1と黒色土器は、一括投棄されたかのようにそれぞれ複雑に重なって出土した。また、このうち一方の黒色土器は、建物2A-91の柱穴8上層から出土した黒色土器と接合関係にある。なお、これらの黒色土器碗は、いずれもA類(内黒)である。

この羽釜1は、口縁から胴部にかけての破片で、40%程度残存している。口縁や罏の遺存状態は良好で、その形状を詳しく観察することができる。口縁は、直立し上端部に水平な面を持つ。罏は、口縁の外面1.5cm下がった位置にほぼ水平にめぐる。罏の下端部には、ほぼ一定間隔で指の痕跡がみられる。調整は、体部外面で縦方向のハケメとユビオサエをいくらか残し、内面は丁寧なナデで調整されている。口縁および罏は、ヨコナデである。復元した口径は24.1cm、器厚は最大1.2cmを測る。

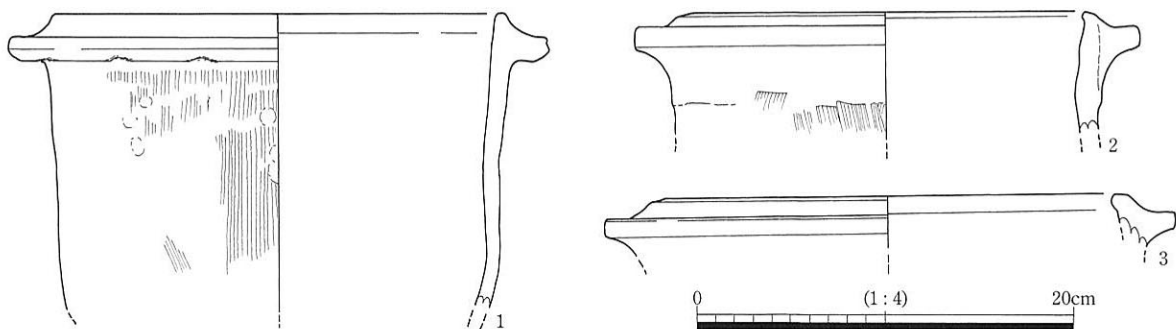


図93 吹田操車場遺跡出土摂津C型羽釜

包含層出土の2個体は、それぞれ同一包含層から出土した(図38-84・85)。この包含層は、12～13世紀の遺物をもっとも多くみられる中世の耕作土層である。

羽釜2は、口縁から胴部上半にかけての破片で、30%程度残存している。口縁や鏝の遺存状態は良好で、その形状を詳しく観察することができる。口縁は、直立し端部近くでわずかに内傾する。鏝は、口縁端部に続けて、水平よりやや上向きにめぐる。調整は、外面で縦方向のハケメ、内面は丁寧なナデが施されている。口縁および鏝はヨコナデである。復元した口径は22.0cm、器厚は最大厚1.3cmを測る。

羽釜3は、口縁から鏝にかけての破片で、30%程度残存している。鏝の遺存状態は良好である。口縁はやや内傾し、上端部に面を持つ。鏝は、口縁よりやや下がった位置にほぼ水平にめぐる。調整は、口縁から鏝にかけてヨコナデである。復元した口径は25.2cm、器厚は最大1.3cmを測る。

吹田操車場遺跡出土の摂津C型羽釜は前述したとおり、黒色土器碗と供伴し、出土状況から考えても両者はほぼ同時期の所産である可能性が高い。よって、この供伴する黒色土器碗の時期をもって出土した羽釜に時期が与えられる。この黒色土器碗はA類に属し、その時期は10世紀後半から11世紀初頭であると考えられる。また、その時期決定を補足するものとして、同一遺構面の一連のピットから「て」の字状口縁土師器皿が出土しており、より正確な時期決定が可能である。

3. 摂津C型羽釜の分布

(1) 摂津とその周辺地域

「摂津C型」という名称の通り、この羽釜の分布の中心は摂津国である。摂津では、淀川沿岸地域はもちろんのこと西摂の平野部から北摂の山間部にまで及ぶ。しかし、摂津国内だけで出土するのではなく、周辺地域にまで及ぶことが明らかになっている。当時、日本の中心である平安京からも多数出土が確認されている。また、摂津国と平安京の中間的位置関係にある山城国乙訓地域でも多数出土が確認されている。そのうえ、淀川北岸地域にとどまらず、河内国でも若干量が出土する。しかも、河内での出土は、淀川沿岸地域に限定されることは重要である。

これら摂津C型羽釜は、近畿においては摂津国を中心に分布するが、古代の行政区画を越えた分布状況が看取できる。そのうえ、その分布は主に淀川の沿岸地域に限られる。

(2) 播磨地域

播磨では、龍野市、赤穂市など西播磨の一角でいくらか確認されている。まとまった出土数ではないが、かなり限定された地域での出土である。

(3) 四国地域

四国においても、出土数は摂津周辺よりも少ないが、摂津C型羽釜は出土がみられる。しかも、その出土は、ほぼ四国全土において確認されており、畿内の分布域との関係が注目される。特に、讃岐では安定した出土数がみられ、同時に胎土から在地での製作が想定されており、忠実に模倣された土器のひとつであると考えられている。(佐藤1996)

阿波では、板野町黒谷川宮ノ前遺跡で多量の摂津C形羽釜が出土しており、出土数において四国では突出している。また、土佐では、大河川の流域を中心に摂津周辺のものと同形的に近似した羽釜が分布している。

(4) その他の地域

その他の地域では、近江、紀伊、備中などでも摂津C型羽釜の出土が確認されているが、分布はきわめて点的である。

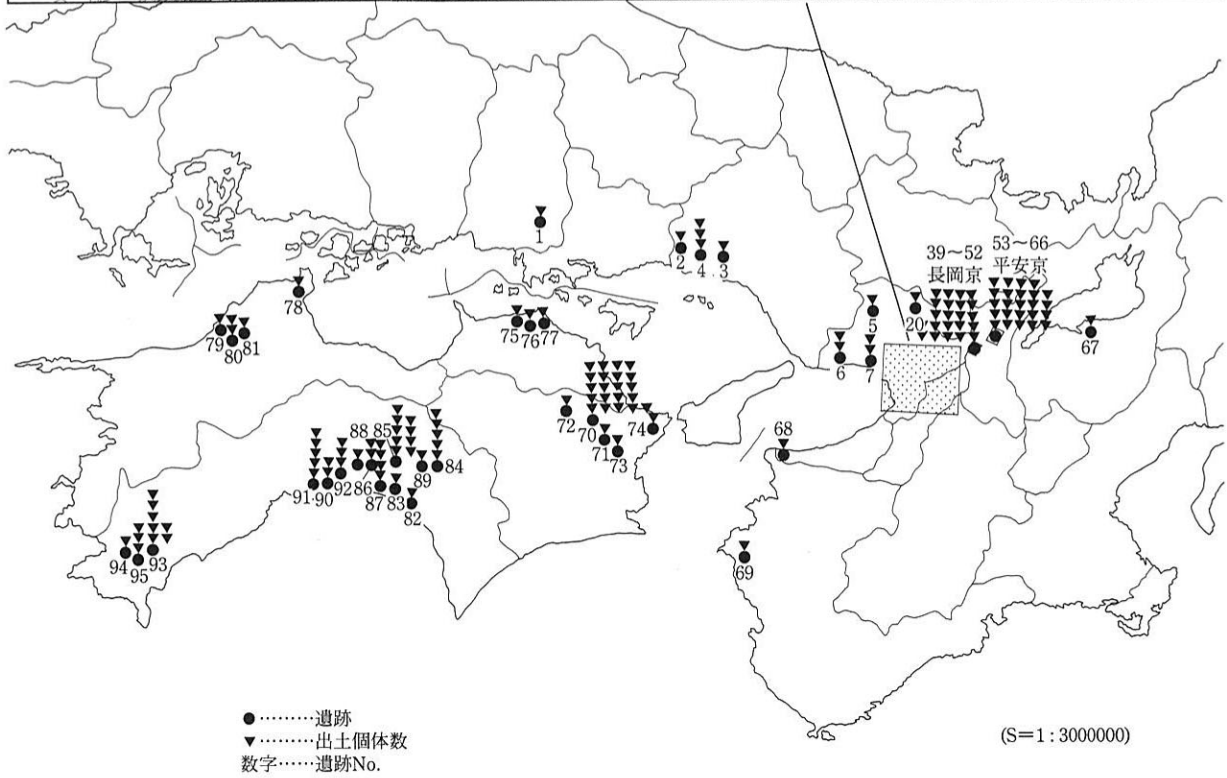
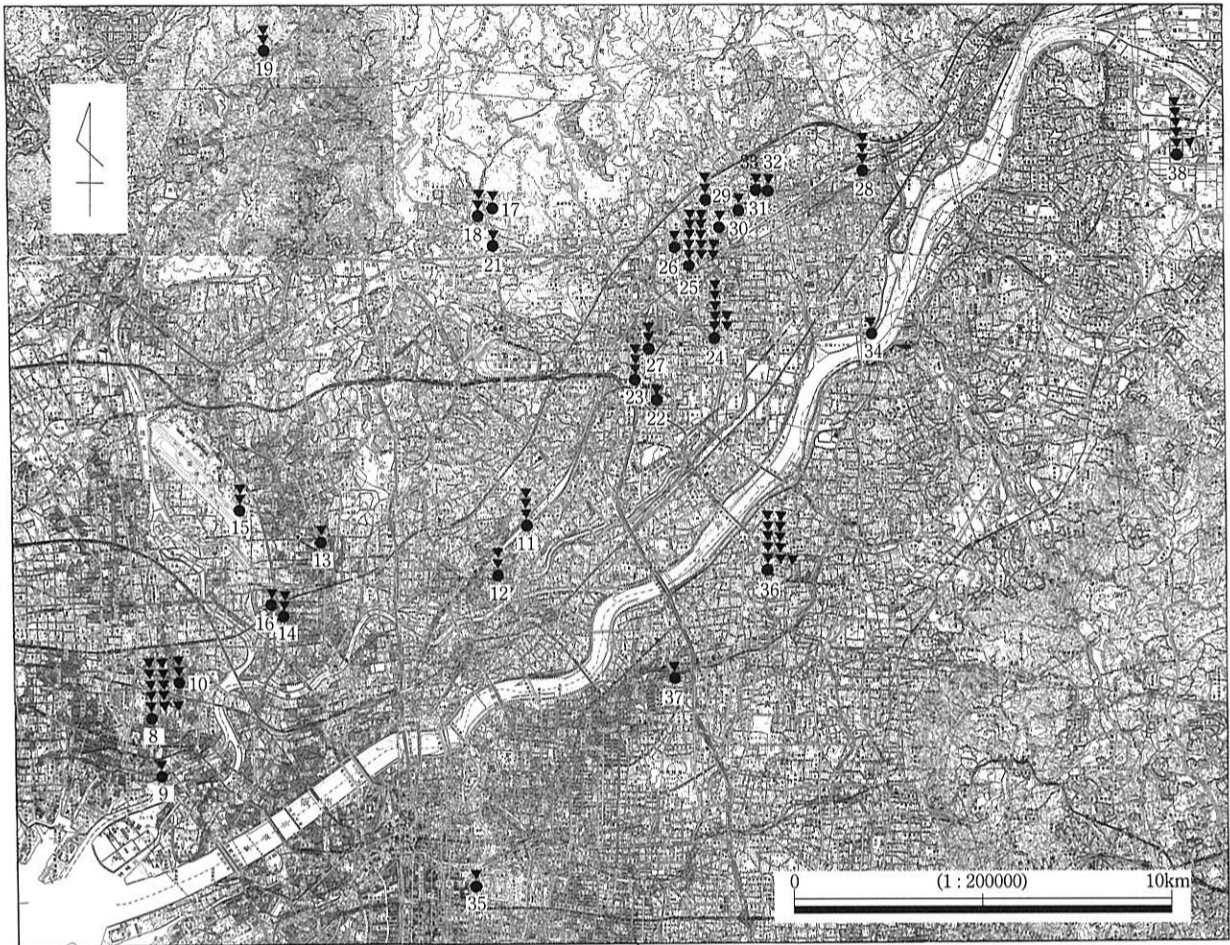


図94 摂津 C 型羽釜出土分布図

No.	出土遺跡名	旧国	都道府県	市町村	個数	甕K	出土状況	備考
1	竪木遺跡	備中	岡山県	総社市	1	×	包含層	
2	有年原・田中遺跡	播磨	兵庫県	赤穂市	1	○	包含層	
3	宝林寺北遺跡	播磨	兵庫県	龍野市	2	×	屋外炉	
4	小大丸遺跡	播磨	兵庫県	龍野市	3	×	包含層、瓦葺?	
5	川除・藤ノ木遺跡	摂津	兵庫県	三田市	2	×	建物、井戸	
6	神楽遺跡	摂津	兵庫県	神戸市	2	○	溝	
7	深江北町遺跡	摂津	兵庫県	神戸市	2	○	包含層	
8	金葉寺貝塚	摂津	兵庫県	尼崎市	11	○	包含層	
9	辰巳橋遺跡	摂津	兵庫県	尼崎市	1	×	包含層	
10	猪名庄遺跡	摂津	兵庫県	尼崎市	2	×	包含層	
11	吹田探車場遺跡	摂津	大阪府	吹田市	3	×	獨立柱建物、中世包含層	
12	高城B遺跡	摂津	大阪府	吹田市	2	×	SK06	
13	服部遺跡	摂津	大阪府	豊中市	1	×	井戸	
14	島田遺跡	摂津	大阪府	豊中市	2	×	整地層	
15	勝部遺跡	摂津	大阪府	豊中市	2	×	土器集積群	
16	上津島南遺跡	摂津	大阪府	箕面市	1	×	包含層	
17	徳大寺遺跡	摂津	大阪府	箕面市	1	×	包含層	
18	粟生間谷遺跡	摂津	大阪府	箕面市	5	×	包含層	
19	小畑遺跡	摂津	大阪府	箕面市	2	×	土坑	同一個体?
20	大里遺跡	摂津	大阪府	能勢町	2	○	包含層	
21	宿久庄西遺跡	摂津	大阪府	茨木市	1	×	自然河川	
22	玉櫛遺跡	摂津	大阪府	茨木市	1	×	包含層、溝	
23	東奈良遺跡	摂津	大阪府	茨木市	3	×	包含層、溝	
24	溝昨遺跡	摂津	大阪府	茨木市	7	×	包含層	
25	総持寺遺跡	摂津	大阪府	茨木市	12	×	包含層	
26	総持寺北遺跡	摂津	大阪府	茨木市	1	×	包含層	
27	新庄遺跡	摂津	大阪府	茨木市	2	×	包含層	
28	安瀨遺跡	摂津	大阪府	高槻市	3	○	包含層	
29	ツゲノ遺跡	摂津	大阪府	高槻市	2	×	合わせ土器棺	
30	宮田遺跡	摂津	大阪府	高槻市	1	×	包含層	
31	郡家今城遺跡	摂津	大阪府	高槻市	1	×	包含層	
32	郡家川西遺跡	摂津	大阪府	高槻市	1	×	包含層	
33	嶋上郡宿跡	摂津	大阪府	高槻市	1	×	井戸	
34	大塚・柱本遺跡	摂津	大阪府	高槻市	1	×	包含層	
35	大坂城跡	摂津	大阪府	高槻市	1	×	包含層	
36	高柳遺跡	河内	大阪府	寝屋川市	11	○	包含層、土器群、溝	
37	橋波口遺跡	河内	大阪府	門真市	1	×	土坑(炭の詰まった穴)	
38	内里八丁遺跡	山城	京都府	八幡町	6	○	溝、包含層	
39	百々遺跡	山城	京都府	大山崎町	1	○	溝、包含層	
40	下櫃野南遺跡	山城	京都府	大山崎町	2	○	土坑、包含層	
41	今里遺跡	山城	京都府	長岡京市	1	×	包含層	
42	長岡京跡右京第650次	山城	京都府	長岡京市	1	×	溝	
43	長岡京跡右京第29次・朝岡跡寺	山城	京都府	長岡京市	1	×	土坑	
44	長岡京跡右京第635次	山城	京都府	長岡京市	3	×	土坑	
45	長岡京跡右京第319次	山城	京都府	向日市	1	×	包含層	
46	長岡京跡左京第222次	山城	京都府	向日市	4	×	包含層	
47	長岡京跡左京第26次・中福知遺跡	山城	京都府	向日市	1	×	性格不明遺構	
48	長岡京跡左京第26次・中福知遺跡	山城	京都府	向日市	1	×		

No.	出土遺跡名	旧国	都道府県	市町村	個数	甕K	出土状況	備考
49	長岡宮跡第350次	山城	京都府	向日市	1	×	溝	
50	長岡宮跡第204次	山城	京都府	向日市	1	○	包含層	
51	水邊遺跡	山城	京都府	京都市	1	×	包含層	
52	羽東跡遺跡	山城	京都府	京都市	4	×	溝	
53	平安京左京二条二坊六町	山城	京都府	京都市	1	×	包含層	
54	平安京左京三条一坊	山城	京都府	京都市	1	×	包含層	
55	平安京左京三条三坊七町	山城	京都府	京都市	1	×	溝	
56	平安京左京三条三坊十一町	山城	京都府	京都市	1	×	溝	
57	平安京左京二条二坊	山城	京都府	京都市	5	○	性格不明遺構	
58	平安京左京四条一坊	山城	京都府	京都市	1	×	土坑	
59	平安京左京八条三坊	山城	京都府	京都市	6	○	包含層	
60	平安京右京北辺二坊	山城	京都府	京都市	1	×	溝	
61	平安京跡72年立会	山城	京都府	京都市	2	○	包含層	
62	烏丸線内遺跡	山城	京都府	京都市	1	×	土坑	
63	平安宮中務省	山城	京都府	京都市	1	×	溝	
64	平安宮左馬寮	山城	京都府	京都市	1	×	包含層	
65	北野藤寺	山城	京都府	京都市	1	×		
66	仁和寺境内	山城	京都府	京都市	1	×		
67	高木・後川遺跡	近江	滋賀県	近江八幡市	1	×		
68	小島北隣遺跡	紀伊	和歌山県	御坊市	1	○		
69	岩内古墳群他	阿波	徳島県	板野町	21	○	土坑、溝	
70	黒谷川宮ノ前遺跡	阿波	徳島県	板野町	2	○		
71	古城遺跡	阿波	徳島県	板野町	2	×		
72	神宮寺遺跡	阿波	徳島県	上板町	2	×		
73	名東遺跡	阿波	徳島県	徳島市	1	○		
74	光勝院寺内遺跡	阿波	徳島県	鳴門市	1	○		
75	下川津遺跡	讃岐	香川県	坂出市	1	○		
76	讃岐国府跡	讃岐	香川県	高松市	1	○		
77	讃岐国分寺跡	讃岐	香川県	国分寺町	1	×		
78	中寺遺跡	伊予	愛媛県	松山市	1	×		
79	古照遺跡	伊予	愛媛県	松山市	1	×		
80	石井幼稚園遺跡	伊予	愛媛県	松山市	2	×	溝	
81	筋違G遺跡	伊予	愛媛県	松山市	1	×	性格不明遺構	
82	十万遺跡	土佐	高知県	香我美町	1	○	溝	
83	下ノ坪遺跡	土佐	高知県	野市町	1	×		
84	ひびきのサウジ遺跡	土佐	高知県	土佐山田町	6	○	井戸	
85	土佐国面跡	土佐	高知県	南国市	9	○	性格不明遺構	
86	奥谷南遺跡	土佐	高知県	南国市	2	○	窯跡	
87	田村遺跡群	土佐	高知県	南国市	4	×	土坑、溝	
88	栄エ田遺跡	土佐	高知県	南国市	1	×	ピット	
89	陣山遺跡	土佐	高知県	南国市	1	×	包含層	
90	八田奈呂遺跡	土佐	高知県	伊野町	2	×	包含層	
91	天崎遺跡	土佐	高知県	土佐市	5	×	包含層	
92	尾立遺跡	土佐	高知県	高知市	3	×	包含層?	
93	具同中山遺跡群	土佐	高知県	中村市	7	○	包含層	
94	船戸遺跡	土佐	高知県	中村市	1	○	包含層	
95	風指遺跡	土佐	高知県	中村市	3	○	包含層	

表13 摂津C型羽釜出土遺跡 一覧表

4. 土師器甕 K 形態と摂津 C 型羽釜

羽釜とともに煮沸具の代表である甕は時代、地域を問わず普遍的にみられる器種である。ここでは、そのなかでも甕 K 形態と呼ばれるものに特に注目したい。この甕 K 形態は、9 世紀には既に成立しており、淀川流域、平安京を中心に広く分布する。丸い底部とやや直線的に立ち上がる長胴気味の体部を持ち、口縁は外方へ直線的に強く開き、端部は上方に摘み上げて拡張するか肥厚させて端面を持つ。外面調整はタテハケ、底部付近は不定方向のハケ、内面調整は体部上部から口縁にヨコハケを施すものが多い。器壁は厚手で、胎土は粗く砂粒を多く含む。

この土師器甕 K 形態と摂津 C 型羽釜との類似性と関連性はかねてから指摘されている。両者の類似点は、淀川流域を中心とする分布、厚手の器壁、粗い胎土、粗いタテハケによる外面調整、長胴気味の体部の形状など多くみられる。このような類似点の多くは製作に関わるものであることから、両者は共通の生産地あるいは共通の製作集団が作り出したものである可能性が高い。しかし、両者の間には相違点もある。この相違点は、口縁を作り出すものと鑿を付けるものという形態差、内面ヨコハケのものとハケの無いものという調整差の 2 点がある。このうち調整差は、甕の口縁を作り出す際にハケ工具で口縁部を押し倒す作業を想定すれば、甕だけに横方向のハケが残ることは説明できる。しかし、決定的な相違点は、上部を折り曲げて甕の口縁にするか、上部を折り曲げることなく鑿を貼り付けたものという差である。これは、それぞれ使用法が異なる点に起因するのではないだろうか。

土師器甕 K 形態と摂津 C 型羽釜の使用法については、煮沸具としてセット関係が存在しているのか、または、二者択一なのかという問題がある。両者が煮沸具として併用されているのであれば、煮沸方法の差、内容物の差など考慮に入れる必要があるかもしれない。しかし、現段階では不明であると言わざるを得ない。よって今後、二次的な被熱痕跡、出土状況、内面の様子などに注目し比較する必要があるかもしれない。

5. まとめ

今回、吹田操車場遺跡から出土した摂津 C 型土師器羽釜を足掛かりに、この土器について閃いたこと、分析をおこなったことを交えて述べてきた。ここでは、それをまとめ、問題点を明らかにし、若干の私見を述べたいと思う。

まず、この羽釜の時期に関しては、従来の認識通り、大きくは 10 世紀から 11 世紀とみて間違いはない。分布については、摂津に限定されたものではなく、より広範に存在するものである。特に、分布の中心地域の摂津に隣接する地域に分布するのは当然であり、また、当時の都である平安京から出土するのも当然と言えば当然である。しかし、四国地方のような遠隔地でもみられることは当時の土器生産や流通を考える上で重要である。このような遠隔地にも分布がみられるにも関わらず、淀川を挟んで摂津の南に隣接する河内地域では、淀川に近い北河内を除いて、まったくと言っていい程出土が確認されていない。海を隔ててまでも、同様の形態をなす煮沸具が分布しているにも関わらず、隣接地域でみられないということが、この摂津 C 型羽釜の特性のひとつであろう。分布状況から摂津 C 型羽釜という一煮沸具は、摂津を中心に淀川両岸の水系、海を渡った四国と陸路よりも水路を中心に広がりを見せ、旧国単位を越えて水系でのつながりが強く現れている。また、讃岐では、胎土などから在地産摂津 C 型羽釜も指摘されている。土器の流通ではなく、製作者の移動や技術、情報の伝播を示すものなのかにはわかに断じ得ないが、今後注目すべき事項である。その後 12 世紀に入ると讃岐では在地産の羽釜が大量に生産されており、羽釜を通じて古代的土器生産から中世的土器生産へ移行していく過渡期的な状況がみられる。

推定の域を出ないが、地方に赴任した官人層らに伴い、土器の製作者も移動し、地方で製作したのかもしれない。

摂津に隣接する北河内に位置する寝屋川市高柳遺跡では、この羽釜が比較的多く出土している。この高柳遺跡における煮沸具組成には、きわめて興味深い特殊性がみられる。淀川南岸に位置するこの高柳遺跡は、平安時代を中心とする大規模な集落遺跡であり、なかには茨田郡の郡衙と考える説もある。そのうえ、この遺跡は河内国内であるにも関わらず摂津 C 型羽釜が多数出土している遺跡でもある。過去 2 度の発掘調査が実施・報告されており、合わせて 11 個体の摂津 C 型羽釜が出土している。それに加え、土師器甕 K 形態、河内産土師器甕、河内 B 型羽釜なども出土しており、なかでも 1990 年の調査では、土器群の一括資料としてこれら 4 煮沸具が共伴して出土している。このような 4 煮沸具の共存関係は、摂津地域を含め、他ではみられない点で特異である。この様相は、この集落が摂津・河内両地域の煮沸具の接点であることを示すと考えられる。

また摂津 C 型羽釜としばしば供伴する土師器甕 K 形態とは類似点が多く、深い関係にあると思われるが、両者の関係については今後の大きな検討課題である。また、この羽釜は、特に形態にばらつきがあり、規格性が乏しいため使用法を想定しかねる。使用法の問題も今後の課題であろう。

資料収集等の準備と筆者の知識・力量が不十分であったため、この土器から読みとることができる歴史的背景を十分に追求することができなかつた。しかし、この拙稿を契機にこの羽釜に対する何らかの反応があれば幸いである。今後、収集しきれなかつた資料を充実させ確実にしたうえで深く追求し、別に機会を設け論考したいと考えている。末尾になつたが、高柳遺跡出土資料の実見に際しては、大阪府教育委員会の山田隆一氏に便宜をはかっていただき、資料収集に際しては、同僚瀬戸哲也氏の手を煩わした。また、当センター諸氏からも再三様々ご教示を得た。お詫びすると同時に記して感謝申し上げる。

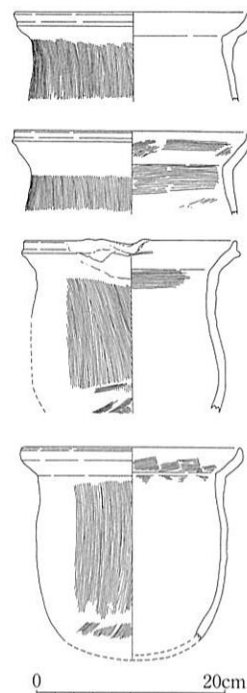


図95 高柳遺跡出土 K 型甕

【引用・参考文献】

- ・菅原 正明 「畿内における土釜の製作と流通」 『文化財論叢』 1987 奈良国立文化財研究所
- ・中世土器研究会編 『概説 中世の土器・陶磁器』 1995
- ・古代の土器研究会編 『古代の土器 4 煮炊具』 1996
- ・橋本 久和 「大阪北部の古代後期・中世土器様相」 『高槻市文化財年報 昭和63・平成元年度』 高槻市教育委員会 1991
- ・橋本 久和ほか 「中世土器研究予察」 『上牧遺跡発掘調査報告書』 高槻市教育委員会 1980
- ・橋本 久和 「古代後期・中世の土器」 『中世土器研究序論』 1992
- ・橋本 久和 「中世日常雑器類の分析—高槻市における編年試案—」 『大阪文化誌 第2巻 第3号』 (財)大阪文化財センター 1977
- ・片桐 孝浩 「古代から中世にかけての土器様相—香川県における予察」 『中近世土器の基礎研究VI』 日本中世土器研究会 1996
- ・松田 直則 「土佐における古代末から中世の土器様相—模倣系土器の展開を中心にして」 『中近世土器の基礎研究V』 日本中世土器研究会 1989
- ・松田 直則 「四万十川流域の遺跡」 『中近世土器の基礎研究VI』 日本中世土器研究会 1996
- ・吉成 承三 「土佐の古代末から中世前期にかけての土器様相—高知平野を中心に—」 『中近世土器の基礎研究』 日本中世土器研究会 1997
- ・勝浦 康守 「徳島県における古代末から中世の土器様相について」 『中近世土器の基礎研究VIII』 日本中世土器研究会 1992
- ・池澤 俊幸 「土佐からみた平安時代の土器」 『中近世土器の基礎研究XV』 日本中世土器研究会 2000
- ・佐藤 竜馬 「四国の煮炊具」 『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東4煮炊具—』 古代の土器研究会 1996
- ・鋤柄 俊夫 『中世村落と地域性の考古学的研究』 1999
- ・寝屋川市教育委員会 『高柳遺跡』 1991
- ・大阪府教育委員会 『高柳遺跡』 2000
- ・徳島県教育委員会・(財)徳島県埋蔵文化財センター 『黒谷川宮ノ前遺跡』 1994

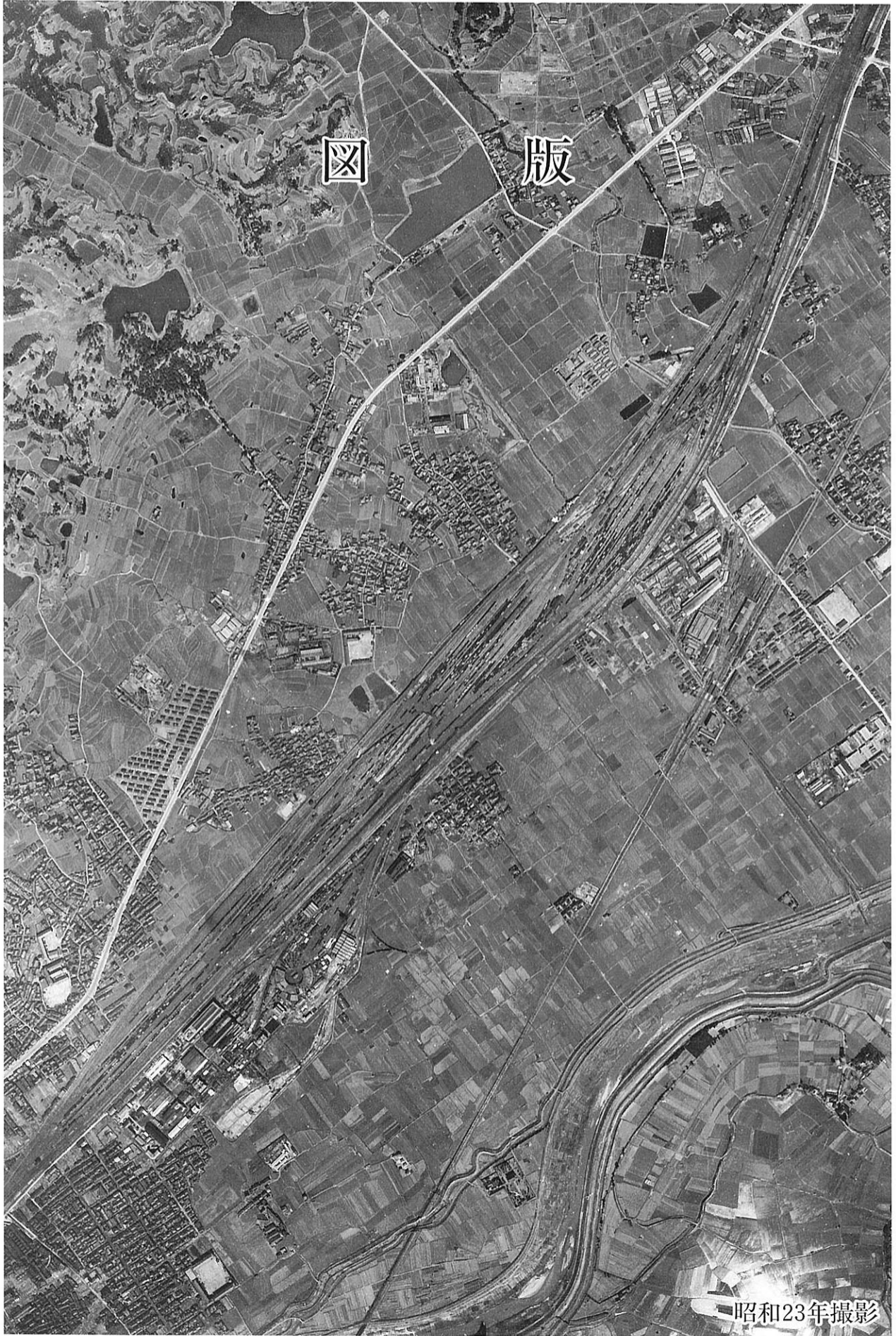
表14 掲載遺物一覧表

No	挿図	図版番号	器種器形	残存率	時期	地区	層名・遺構面・遺構名	法 量(cm)					色 調			胎土	焼成	実測No	特 徴
								口径	器高	厚さ	胴径	脚径	外 面	断 面	内 面				
1	図10	22-1	弥生土器壺?	5%未		1A	5-2面溝1A-76		(2.3)	1.5			10YR6/2 褐灰色	10YR4/1 褐灰色	10YR4/2 灰黄褐色	× 白灰色礫	△	76	磨滅、剝離著しい。
2	図13	22-4	土師器器台	10%	古墳前	1A	4面溝1A-35		(2.5)	0.5		(2.8)	10YR7/2 黄褐色	10YR8/4 浅黄褐色	2.5Y8/2 灰白色	△	◎	63	外面全体に粗いハケ目
3	図13	22-3	土師器器台	3%	古墳前	1A	4面溝1A-33	(11.0)	(2.0)	0.4			2.5Y7/3 浅黄色	2.5Y6/2 灰黄色	2.5Y7/3 浅黄色	×	○	64	短く垂直に立ち上がる口縁。
4	図13	25-5	土師器椀形	40%	6C前	1A	4面溝1A-21	(11.6)	6.9	0.5		(12.4)	10YR7/2 黄褐色	10YR7/1 灰白色	10YR7/3 黄褐色	△	◎	55	内外ともにハケ目調整。内面に炭化物の付着あり。煮炊きに使用か?
5	図21	25-8	須恵器蓋		6C前	2A	4面溝2A-16	(10.0)	(3.8)	0.7			N6/0 灰白色	N6/0 灰白色	N5/0 灰白色	△	◎	138	腹の屈曲は明瞭。沈線あり。口縁端部に内傾する面あり。
6	図21	23-2	須恵器蓋		7C	2A	4面溝2A-12	(14.0)	(3.8)	0.8			N7/0 灰白色	N3/0 暗灰色	N7/0 灰白色	△	◎	133	
7	図21	23-6	須恵器環蓋	45%	6C前	1A	4面溝1A-20	(15.0)	3.7	0.8			N5/0 灰白色	N5/0 灰白色	N5/0 灰白色	△	△	54	平坦な頂部と短い口縁。鈍い稜縁。
8	図21	24-3	須恵器環身	100%	7C前	2A	4面溝2A-12 土器溜り2	11.4	3.6	0.7			N7/0 灰白色	N7/0 灰白色	10BG6/1 青灰色	○	○	137	焼き歪み、大きい。口縁の立ち上がりは退化し、著しく内傾する。粗製。
9	図21	24-2	須恵器環身	80%	6C後	2A	4面溝2A-12 土器溜り2	11.0	3.1	0.7			10BG6/1 青灰色	N7/0 灰白色	N7/0 灰白色	○	◎	136	18よりも丁寧な製品。
10	図21	24-1	須恵器環身	98%	6C後	2A	4面溝2A-12 上層	13.0	4.4	0.8			N7/0 灰白色	N8/0 灰白色	N7/0 灰白色	△	◎	122	受け部短く、口縁の立ち上がりは内傾。
11	図21	24-5	須恵器壺	40%	6C後	2A	4面溝2A-11 中層		(2.6)	1.0			10BG6/1 青灰色	N6/0 灰白色	N7/0 灰白色	△	○	126	外面へラ削り
12	図21	23-1	須恵器環蓋		8C前	2A	4面溝2A-11		(2.2)	0.9			5Y4/1 灰白色	N7/0 灰白色	10Y6/1 灰白色	△	◎	124	扁平な円柱形のつまみ。
13	図21	23-8	須恵器環身	70%	7C	2A	4面溝2A-13	9.4	3.6	0.7			N5/0 灰白色	N7/0 灰白色	10G5/1 青灰色	△	◎	132	不定方向のナデで形を整える
14	図21	24-9	須恵器高環	30%	6C	2A	4面溝2A-12		(5.2)	1.3			10BG6/1 青灰色	N6/0 灰白色	N6/0 灰白色	△	○	129	3方向に円形スカシあり。
15	図21	25-8	須恵器高環		6C後	2A	4面溝2A-11		(3.8)	0.5		(9.8)	N7/0 灰白色	N7/0 灰白色	N5/0 灰白色	○	◎	134	3方向に方形スカシあり。裾に鈍い沈線あり。
16	図21	23-2	須恵器高環	50%	6C末 7C初	2A	4面溝2A-11	(18.4)	(10.0)	1.5		(12)	N8/0 灰白色	N8/0 灰白色	N8/0 灰白色	△	×	125	大きく開いた杯部、太く短い脚部をもつ。2方向に円形スカシあり。
17	図21	24-4	須恵器壺		7C	2A	4面溝2A-12 土器溜り2	17.4	(7.4)	1.1			N8/0 灰白色	5Y8/1 灰白色	7.5Y8/1 灰白色	△	×	172	頸部から肩部に幅広のカキ目
18	図21	24-8	須恵器壺	10%	6C	2A	4面溝2A-12	(12.8)	(6.5)	1.1			5B5/1 青灰色 2.5GY6/1 オリーブ灰	N7/0 灰白色	N7/0 灰白色	○	◎	130	
19	図21	24-7	土師器把手		古代?	2A	4面溝2A-12			1.8			5YR6/6 褐色	5YR7/6 褐色	5YR6/6 褐色	△	○	128	
20	図21	24-6	土師器環	30%	古代	2A	4面溝2A-12	(14.0)	4.8	0.6			10R6/6 明黄褐色	10YR5/3 黄褐色	2.5Y8/2 灰白色	○	◎	163	一部に黒斑あり。内面は精良。
21	図21		土師器環	20%	古代	2A	4面溝2A-11 土器溜り1	(10.8)	(4.7)	0.5			7.5YR6/8 褐色	10YR8/1 灰白色	10YR8/1 灰白色	△	○	140	口縁端部をわずかに内傾させ稜をつくる。
22	図21		土師器高環	5%未	古代	2A	4面溝2A-20! 下層		(4.0)	0.6			10YR6/4 黄褐色	10YR3/3 暗褐色	10YR7/4 黄褐色	○	◎	139	古式土師器。小型器台の可能性あり。
23	図21	23-7	土師器壺		古代	2A	4面溝2A-20	(12.8)	(5.8)	0.5			10YR7/4 黄褐色	10YR5/1 褐灰色	10YR8/4 浅黄褐色	×	△	131	磨滅、剝離著しい。布留壺か?
24	図23	23-5	須恵器壺		6C後	2A	4面溝 A-19 上層			1.5			2.5Y6/1 黄褐色	10BG7/1 明青灰色	5GY6/1 オリーブ灰 7.5Y4/3 暗オリーブ	△	◎	118	頸部内面に接着痕あり。
25	図23	23-9	須恵器壺	65%	6C後	2A	4面溝 A-19 土器溜り1	(20.6)	(34.0)	1.0		(34.8)	N4/0 灰白色	N5/0 灰白色	N5/0 灰白色	△	△	155	口縁部、回転ナデの下に並行タタキ痕が残る。
26	図23	23-3	須恵器壺	5%未	6C後	2A	4面溝 A-19 土器溜り2			0.9			N4/0 灰白色	N5/0 灰白色	N5/0 灰白色	△	◎	173	3条の沈線に2段の粗雑な刺突文あり。
27	図23	23-3	土師器壺	3%	庄内 布留?	1A	4面溝 A-19	(23.0)	(5.5)	0.5			5Y8/1 灰白色	5Y4/1 灰白色	5Y7/2 灰白色	△	○	67	二重口縁壺。
28	図23	23-4	土師器壺	10%	布留 IV	1A	4面溝 A-19	(15.0)	(5.0)	0.7			2.5Y8/1 灰白色	2.5Y5/1 黄褐色	2.5Y8/1 灰白色	△	△	66	剝離著しい。
29	図27	25-2	土師器小皿	98%	12C	2A	3面ビット2A-89	8.9	1.4	0.5			5YR6/6 褐色	5YR7/4 黄褐色	5YR6/8 褐色	△	◎	169	
30	図27	25-3	土師器皿	30%	10C後	2A	3面ビット2A-89	10.0	1.2	0.45			2.5Y6/2 灰黄色	2.5Y7/2 灰黄色	2.5Y7/2 灰黄色	○	○	168	「て」の字状口縁
31	図27	25-7	黒色土器椀	20%	10C	2A	3面ビット2A-88	(12.0)	(3.7)	0.6			7.5YR5/4 黄褐色	7.5YR4/4 黄褐色	10YR3/2 黒褐色	○	◎	171	

凡例 胎土：○密 △やや粗 ×粗 焼成：◎良好 ○やや甘い △甘い ×生焼け

No	挿図	図版番号	器種 器形	残存率	時期	地区	層名・遺構面・遺構名	法 量(cm)				色 調			胎土	焼成	実測Na	特 徴
								口径	器高	厚さ	胴径	脚径	外 面	断 面				
179	図55	22-2	石鉢			B	3層	長3.4	0.6	幅2.1	重量 2.6g		-	-	-	-	-	サスカイト製。
180	図71	39-1	青磁	20%	中世	C	1面	5.2	(2.3)	(1.1)		2.5GY6/1 オリーブ灰 10YR6/2 灰黄褐色	7.5Y7/1 灰白色	2.5GY6/1 オリーブ灰 色			12	
181	図71	39-1	須恵器	15%	7 C	C	1面	(12.0)	(4.0)	(0.9)		N6/0灰色	2.5Y6/1 黄灰色	N5/0灰色	○	◎	13	内面火を受け、煤付着。
182	図71	39-1	陶器 注口片	10% 未	19C 前半	C	1面 埋桶 C-101				(4.7)	7.5Y7/1 灰白色	2.5Y7/2 灰黄色	7.5Y7/1 灰白色 2.5Y7/3 浅黄色	○	◎	35	伊賀、信楽急須
183	図71		井戸 枡瓦	100%	近現代 ?	C				3.1		7.5Y6/1 灰白色	-	10Y5/1 灰白色	○	◎		凸面ケズリ、凹面ナデ。
184	図71	39-2	磁器 皿	15%	18C末 ~19初	C	2面 溝 C-207	(11.4)	3.2	0.8	(4.4)	10Y7/1 灰白色	7.5Y7/1 灰白色	10Y7/1 灰白色 N7/0 灰白色	○	◎	21	肥前
185	図71	39-2	磁器 碗	60%	19C 前半	C	2面 溝 C-207	(10.6)	5.9	0.5			N8/0 灰白色		○	◎	19	肥前
186	図71	39-2	陶器 把手		19C 前半	C	2面 溝 C-207				(7.1)	2.5YR3/1 暗赤灰色	2.5Y8/2 灰白色	2.5Y6/4 にぶい黄色	○	◎	20	伊賀、信楽
187	図71	39-2	道具 瓦	30%	近世?	C	2面 溝 C-207				(1.2)	N5/0灰色	N7/0 灰白色	N4/0灰色	○	◎	23	
188	図71	40-1	天目 茶碗		17C 中頃	C	2層	(4.4)	(0.9)	(0.9)		10YR5/2 灰黄褐色	5Y8/1 灰白色	N2/0黒色	○	◎	27	瀬戸・美濃
189	図71	40-1	白磁 皿	10%	18後 ~19初	C	2層	(9.4)	2.0	(0.3)	(5.4)	10Y8/1灰 白色	N8/0 灰白色	5GY8/1 灰白色	○	◎	25	肥前
190	図71	40-1	磁器 碗	5%	18 中~末	C	2層	(12.0)	(3.5)	(0.8)		5GY7/1 明オリーブ 灰色	5Y7/1 灰白色	5GY7/1 明オリーブ 灰色	○	◎	26	肥前
191	図71	40-1	青磁	10%	中世	C	2層	(16.0)	(3.7)	(0.4)		10Y6/2 オリーブ 灰色	5Y7/1 灰白色	10Y6/2 オリーブ 灰色	○	◎	30	中国製
192	図71	40-1	須恵器 麩	5%	6C	C	2層					N5/0 灰色	N6/0	N7/0	○	○	28	
193	図71	40-1	土製品	90%	18後 ~19初	C	2層				(4.3)	10YR8/2 灰白色	10YR8/2 灰白色	10YR8/2 灰白色	○	◎	24	
194	図71	40-2	銅製品	10%	近世	C	3面				0.3	-	-	-			29	雷文
195	図71	41-1	磁器 碗	10%	18初	C	3層	(10.0)	(2.7)	(0.5)		5GY8/1灰 白色	N8/0 灰白色		○	◎	31	肥前
196	図71	41-1	磁器 碗	20%	18初	C	3層	(4.8)	(1.9)	(0.6)		5GY8/1灰 白色	N8/0 灰白色		○	◎	32	肥前
197	図71	41-1	陶器 鉢	10%	近世	C	3層	(12.0)	(4.3)	(1.0)		5YR4/2灰 褐色 10YR5/4 赤褐色	10R5/4 赤褐色	2.5Y6/1 黄灰色	○	◎	34	唐津系
198	図71	41-1	陶器 皿	10%	17C前	C	3層	(6.0)	(1.7)	(0.7)		2.5Y8/2 灰白色	5Y8/1 灰白色	10YR8/4 浅黄褐色	○	◎	39	瀬戸・美濃
199	図71	41-1	陶器 皿	5%	17C前	C	3層	(10.8)	(1.7)	(0.4)		10YR7/1 灰白色	10YR6/3 にぶい 黄褐色	5Y8/1 灰白色	○	◎	38	唐津
200	図71	41-1	白磁 碗	5%	中世	C	3層	(16.6)	(3.5)	(0.5)		7.5Y7/1灰 白色	10Y7/1 灰白色	7.5Y7/1 灰白色	○	◎	33	
201	図71	41-1	青磁 碗	20%	17C前	C	3層	(6.4)	(3.3)	(0.9)		7.5Y5/2 灰オリーブ 色	10YR8/3 浅黄褐色	7.5Y5/2 灰オリーブ 色	○	◎	40	肥前
202	図71	40-2	土師器 小皿	15%	13C末	C	3層	(8.0)	1.3	0.4		2.5Y7/2灰 黄色	2.5Y7/2 灰黄色	2.5Y7/2 灰黄色	○	◎	44	
203	図71	40-2	瓦器 椀	20%	14C 初	C	3層	(11.0)	(2.6)	(0.5)		7.5Y5/1 灰色 5Y8/1 灰白色	5Y5/1灰色	2.5Y6/2 灰黄色	△	○	42	
204	図71	40-2	瓦器 椀	10%	12C 中?	C	3層	(5.2)	(1.9)	(0.6)		N4/0灰色	5Y8/1 灰白色	7.5Y4/1 灰白色	○	○	41	
205	図71	42-1	土師器 小皿	25%	13C末	C	4層	(6.0)	1.4	0.5		2.5Y8/2灰 白色	2.5Y8/2 灰白色	2.5Y8/2 灰白色	○	◎	57	
206	図71	42-1	土師器 皿	10%	14C?	C	4層	(7.6)	1.2	0.4		2.5Y8/2灰 白色	2.5Y7/2 灰白色	2.5Y8/2 灰白色	○	◎	65	
207	図71	42-1	土師器 小皿	25%	13C末	C	4層	(9.0)	1.4	0.4		2.5Y7/2灰 黄色	2.5Y6/2 灰黄色	2.5Y7/2 灰黄色	○	◎	73	
208	図71	42-1	土師器 皿	10%	14C?	C	4層	(13.0)	(1.6)	(0.6)		2.5Y7/2灰 黄色	5Y8/1灰 白色	2.5Y7/2 灰黄色	○	◎	60	
209	図71	41-2	土師器 羽釜	10%	中世	C	4層				(8.0)	2.5Y7/2灰 黄色	N4/0 灰色	2.5Y7/1 灰白色	△	◎	75,76	
210	図71	42-2	瓦器 皿	5%	中世	C	4層	(12.0)	(1.5)	(0.4)		N5/0灰色	7.5Y7/1 灰白色	N5/0灰色	○	◎	53	
211	図71	42-2	瓦器 椀	5%	13C末	C	4層	(13.0)	(2.4)	(0.4)		5Y4/1 灰色	7.5Y8/1 灰白色	N4/0灰色	○	○	67	
212	図71	42-2	瓦器 椀	5%	14C前	C	4層	(13.0)	(2.5)	(0.7)		7.5Y7/1 灰白色	N5/0灰色	7.5Y7/1 灰白色	○	○	69	
213	図71		瓦器 椀	15%	12C末	C	試掘 (4層)	(14.2)	(3.0)	(0.5)		N4/0灰色	N8/0 灰白色	N4/0灰色	○	◎	1	
214	図71		瓦器 椀	10%	13C前	C	試掘 (4層)	(14.2)	(3.7)	(0.4)		N7/0 灰白色	N8/0 灰白色	5Y7/1 灰白色	○	△	2	

No	挿図	図版番号	器種器形	残存率	時期	地区	層名・遺構面・遺構名	法 量(cm)					色 調			胎土	焼成	実測No	特 徴
								口径	器高	厚さ	胴径	脚径	外 面	断 面	内 面				
215	図71	42-2	瓦器 椀	15%	13C初	C	4層	(11.2)	4.0	0.5	(4.4)		5Y8/1 灰白色	N7/0 灰白色	5Y7/1 灰白色	○	△	62	
216	図71	42-1	瓦器 皿	10%	14C?	C	4層	(7.6)	(1.4)	(0.4)		5Y7/1 灰白色	5Y7/1 灰白色	5Y7/1 灰白色	○	◎	61		
217	図71	42-2	瓦器 小皿	10%	中世	C	4層	(9.2)	1.9	0.5		N3/0 暗灰色	5Y8/1 灰白色	N4/0灰色	○	◎	52		
218	図71	42-2	瓦器 椀	40%	13C前?	C	4層	4.1	(1.1)	(0.5)		N7/0灰色	N7/0灰色	N7/0灰色	○	○	50		
219	図71	42-2	瓦器 椀	10%未	13C前?	C	4層	(4.6)	(1.0)	(0.4)		N4/0灰色	5Y6/1灰色	N4/0灰色	○	◎	71		
220	図71	41-2	東播系鉢	10%	中世	C	4層		(5.4)	(0.8)		N7/0灰色	N6/0灰色	N7/0灰色	△	○	48		
221	図71	41-2	須恵器 壺底部	10%未	8c	C	4層	(11.0)	(2.4)	(0.8)		N6/0灰色	N6/0灰色	N6/0灰色	○	◎	47	転用硯	
222	図71	41-2	須恵器	10%未	8C?	C	4層	(23.0)	(4.3)	(0.6)		N6/0灰色	N7/0 灰白色	N6/0灰色	○	◎	77		
223	図71	41-2	須恵器 壺口縁	10%未	8C	C	4層	(28.6)	(7.0)	(1.2)		N6/0灰色	5PB6/1 青灰色	N5/0灰色	○	◎	78		
224	図71	41-2	土師器 羽蓋	10%	中世	C	4層	(35.0)	(3.4)	(0.8)		2.5Y7/2灰黄色	N4/0灰色	2.5Y6/2 灰黄色	○	◎	56		
225	図72	43-1	須恵器 坏身	7%	6C中	C	5層	(13.4)	(2.8)	(0.7)		5Y6/1灰色	2.5Y7/2 灰黄色 N7/0 灰白色	2.5Y7/2 灰黄色	○	◎	84		
226	図72	43-1	須恵器 坏蓋	40%	6C	C	5層		(2.6)	(0.9)		7.5Y7/1 灰白色	5Y7/1 灰白色	5Y7/1 灰白色	△	○	80		
227	図72	43-1	須恵器 壺	5%未	古墳?	C	5層	(18.4)	(3.3)	(0.7)		N8/0 灰白色	2.5Y7/4 浅黄色	N8/0 灰白色	○	×	82		
228	図72	43-2	須恵器 坏蓋	10%	6C未?	C	6層	(10.2)	(2.6)	(0.5)		5Y5/1灰色	N5/0灰色	N6/0灰色	○	◎	96		
229	図72	43-2	須恵器 坏蓋	10%	6C未?	C	6層	(12.2)	(3.3)	(0.4)		N4/0灰色	N7/0 灰白色	N6/0灰色	○	◎	99		
230	図72	43-2	須恵器 坏蓋	5%	6C未	C	6層	(10.2)	(2.4)	(0.4)		N6/0灰色	N6/0灰色	N4/0灰色	○	◎	97	壺蓋か、231と同一個体か	
231	図72	43-2	須恵器 坏蓋	5%	6C未	C	6層	(12.0)	(2.1)	(0.4)		N6/0灰色	N7/0 灰白色	N4/0灰色	○	◎	98	壺蓋か	
232	図72	43-2	須恵器 坏蓋	30%	6C	C	6層		(2.2)	(0.8)		N5/0灰色	N7/0 灰白色	N7/0 灰白色	○	◎	94		
233	図72	43-1	須恵器 坏蓋	15%	6C中~後	C	6層	(15.6)	(3.8)	(0.7)		5Y7/1 灰白色	2.5Y7/1 灰白色	2.5Y8/1 灰白色	○	○	79		
234	図72	43-2	須恵器 坏身	15%	6C中	C	6層		(3.0)	(0.9)		5Y6/1 灰色	2.5Y6/2 灰黄色 2.5Y6/1 黄灰色	2.5Y7/2 灰黄色 N7/0 灰白色	○	△	95		
235	図10		石器 石鏃	95%	弥生	1A	5-1層		長2.7	0.35	幅2.1	重量1.5g	-	-	-	-	-	201	サヌカイト製
236	図10		石器 剥片			1A	溝1A-76		長5.8	1.3	幅3.8	重量16.5	-	-	-	-	-	202	サヌカイト製
237	図10		石器 石槍	95%	弥生	2A	溝A-19		長13.0	1.2	幅3.0	重量37.3	-	-	-	-	-	203	サヌカイト製



版 図

昭和23年撮影



1. 1A西区 第1面 全景 (南西から)



2. 1A東区 第1面 全景 (北東から)



1. 2A区 第1面 全景 (南西から)



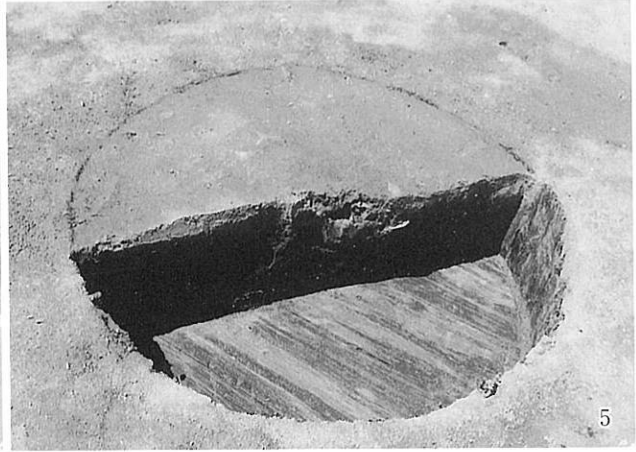
2



3



4



5

2. 井戸1A-10 断ち割り状況
4. 土坑2A-3 断ち割り状況

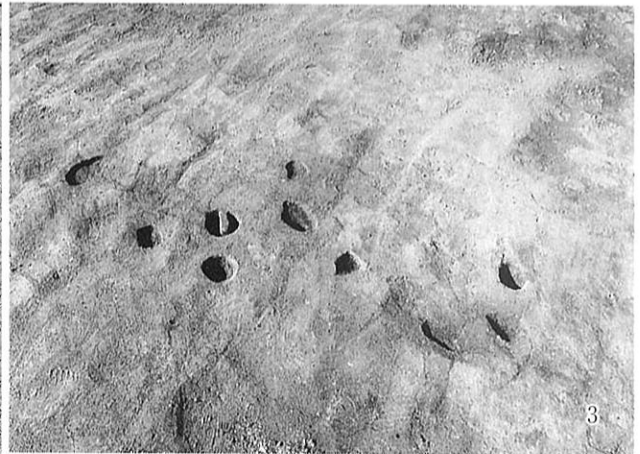
3. 井戸1A-10 井戸枠出土状況
5. 埋め桶2A-2 断ち割り・出土状況



1. 1A区 第2面 全景 (南西から)



2. 人の足跡 完掘状況



3. 牛・馬の足跡 完掘状況



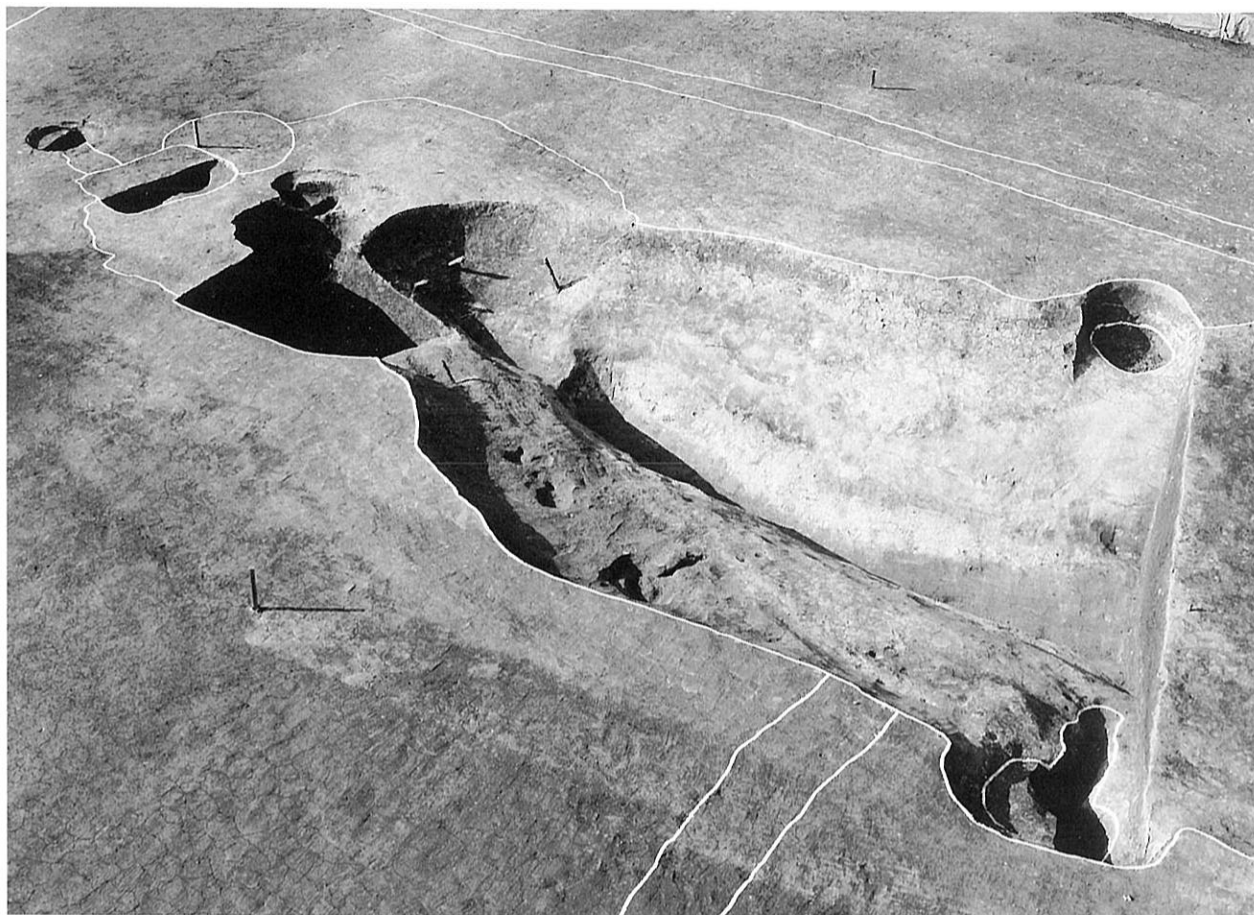
4. 落ち込み1A-12 杭出土状況



1. 1A区 第2面 全景 (北東から)



2. 1A区 第3面 面全景 (北東から)



1. 落ち込み1A-12 完掘状況



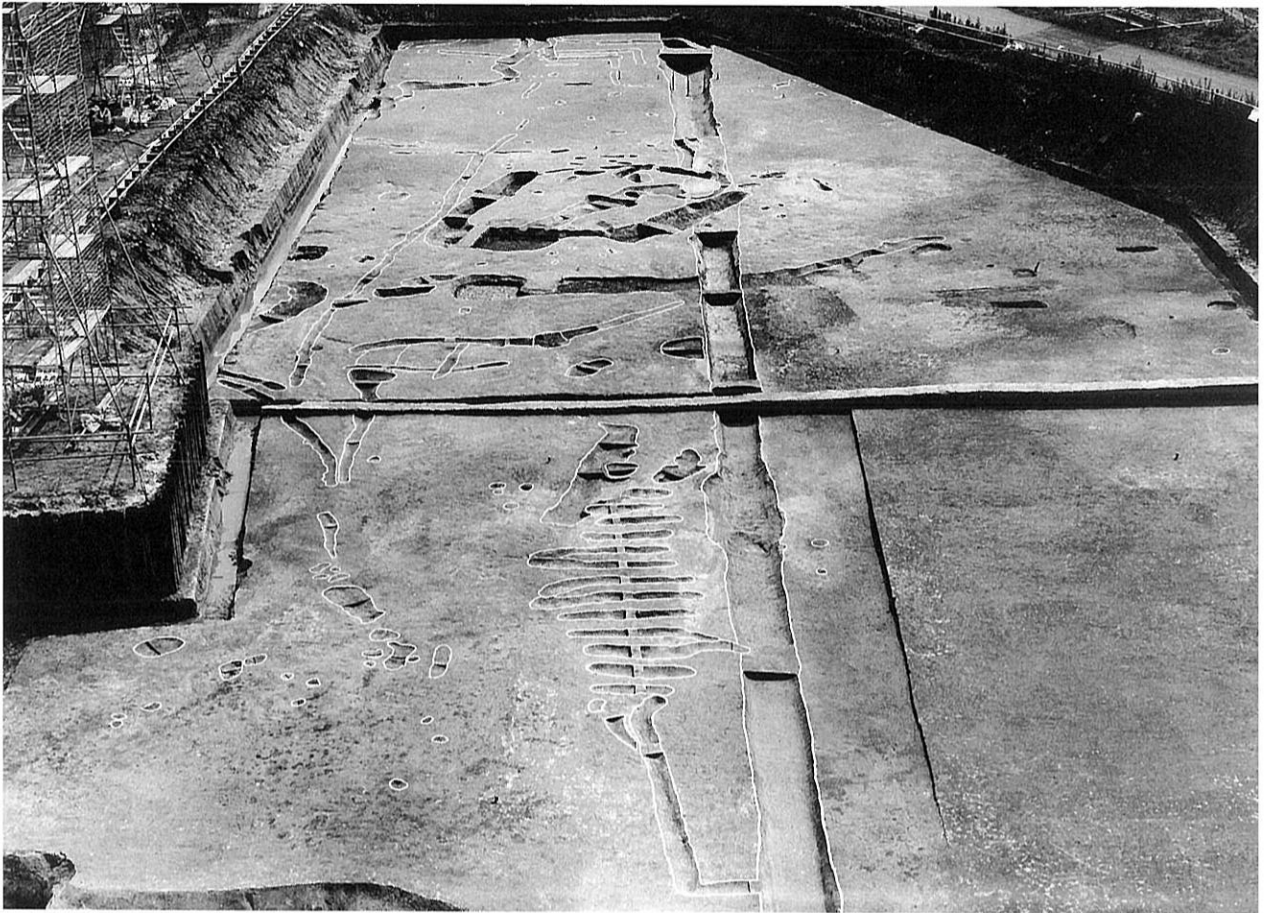
2. 落ち込み1A-12 断面



1. 1A区 第4面 全景 (南西から)



2. 溝1A-21周辺遺構 完掘状況



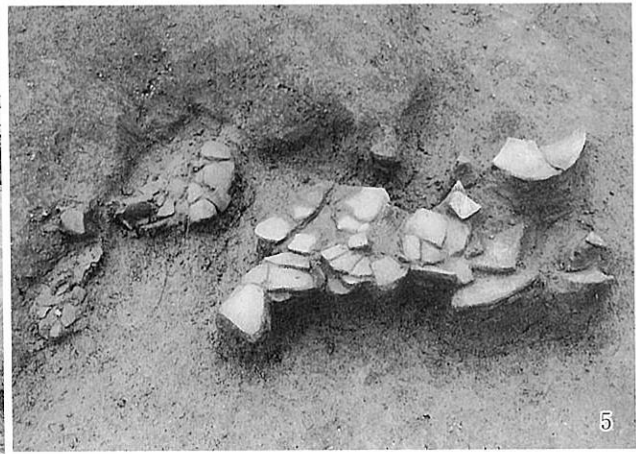
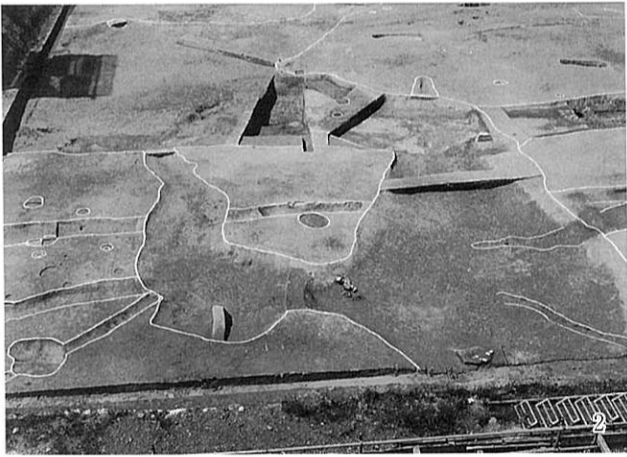
1. 1A区 第4面 全景 (北東から)



2. 1A区 溝群1A-31 完掘状況



1. 2A区 第2面 全景 (南西から)

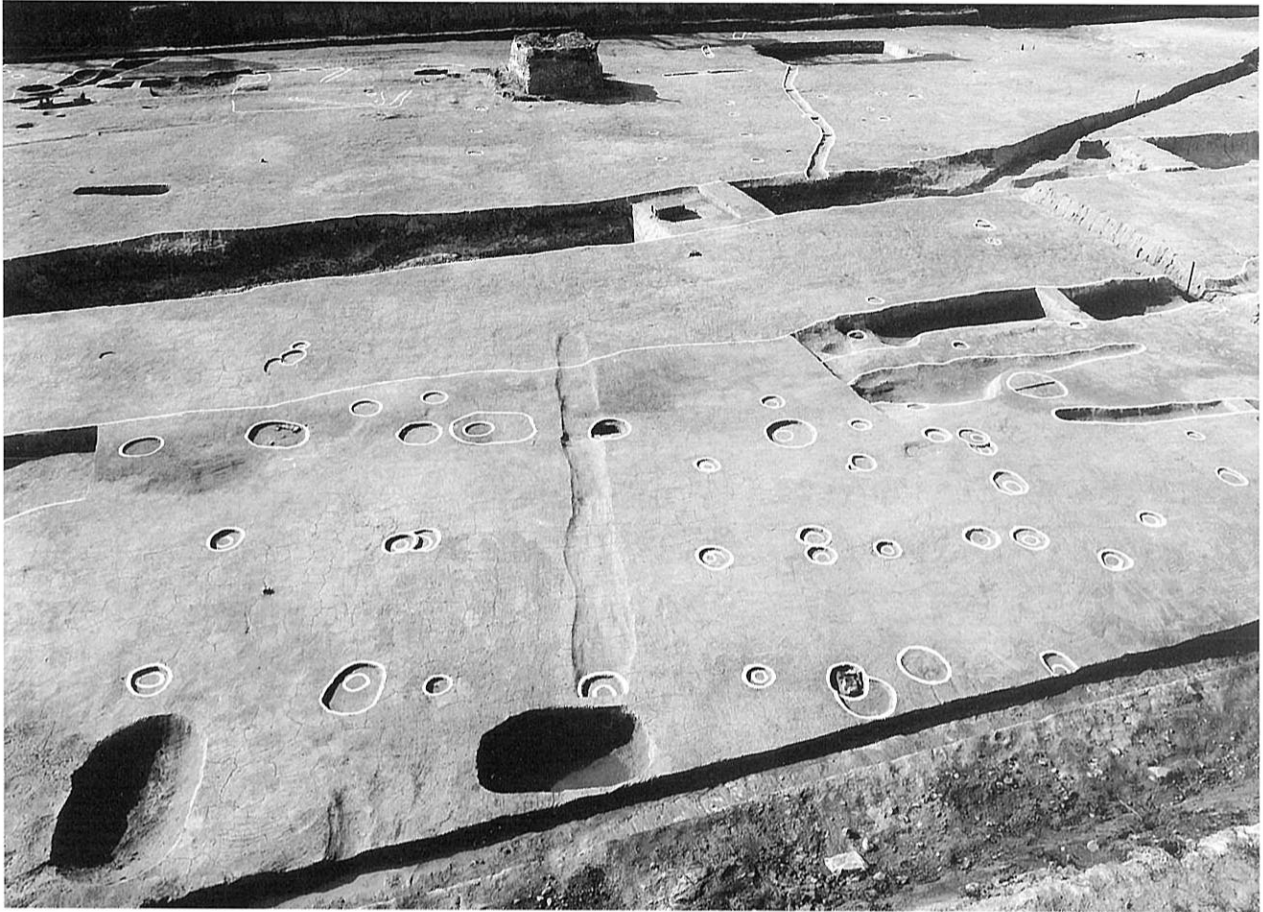


2. 溝2A-12 完掘状況 (南から)

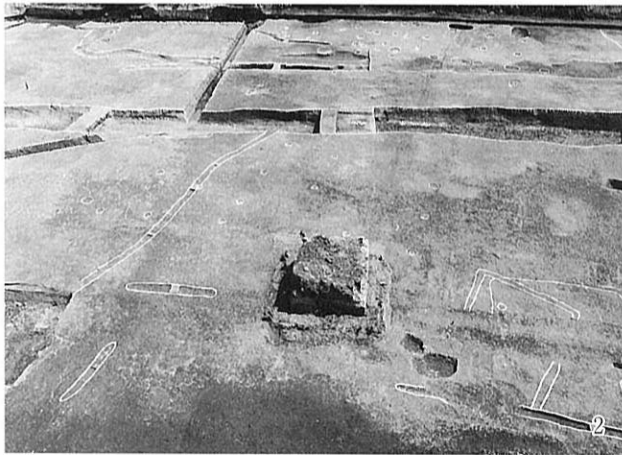
3. 溝2A-12 断面

4. 溝2A-12 土器溜り1 遺物出土状況

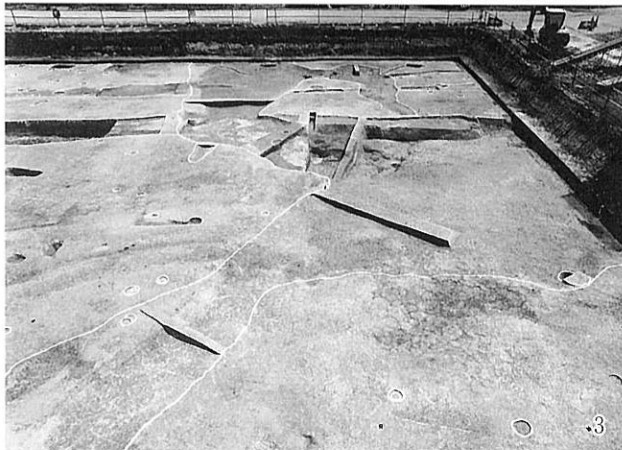
5. 溝2A-12 土器溜り2 遺物出土状況



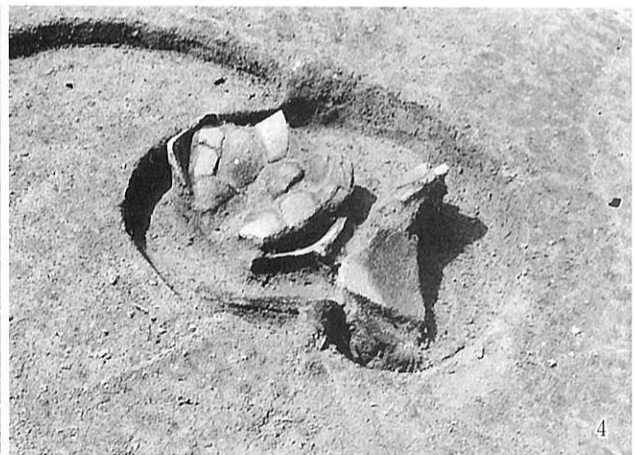
1. 建物2A-91 ピット検出状況 (南から)



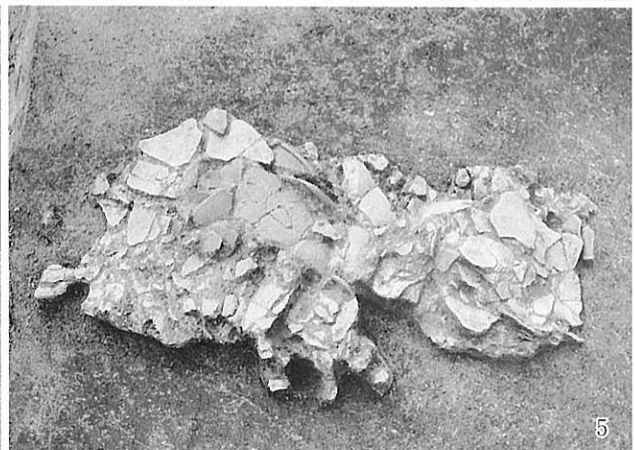
2. 建物2A-92 検出状況 (北から)



3. 溝2A-11・建物2A-93 検出状況



4. 建物2A-91-P11・P35 遺物出土状況



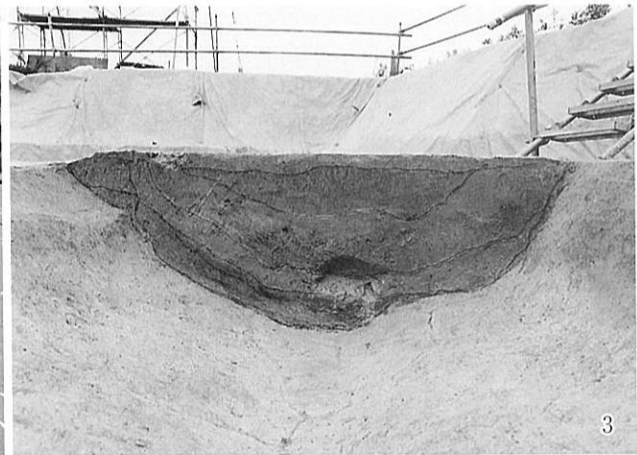
5. 溝2A-19上層 遺物出土状況 土器溜り 1



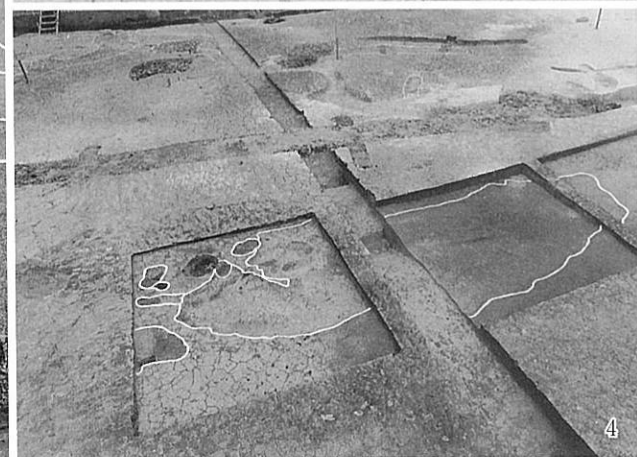
1. 1A区 第5-1面 全景 (北東から)



2. 溝 A-19 完掘状況



3. 溝 A-19 断面



4. 第5-2面 不定形土坑検出状況



1. B地区第1面 全景 (南西から)



2. B地区第2面 全景 (南西から)



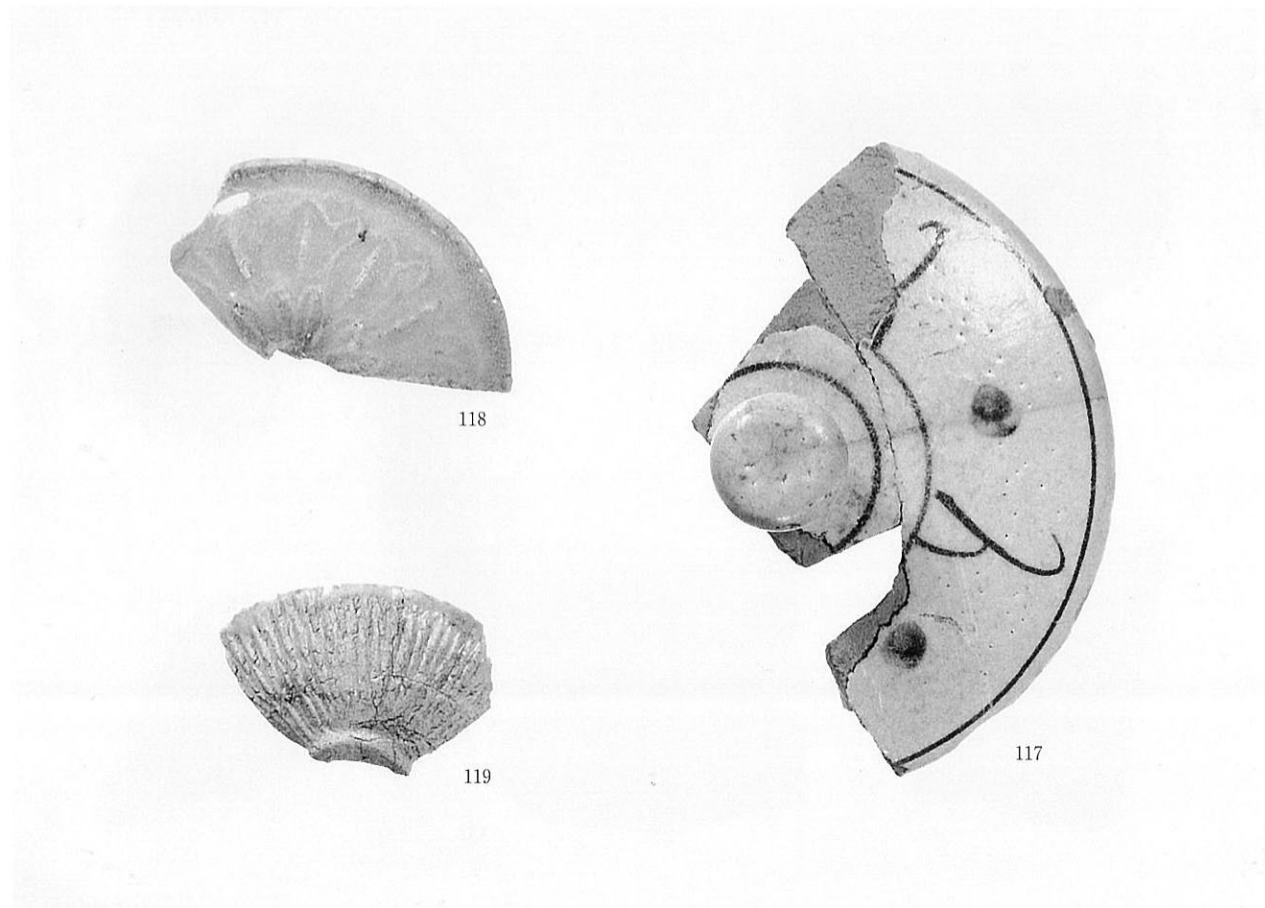
1. B地区第3面 全景 (南西から)



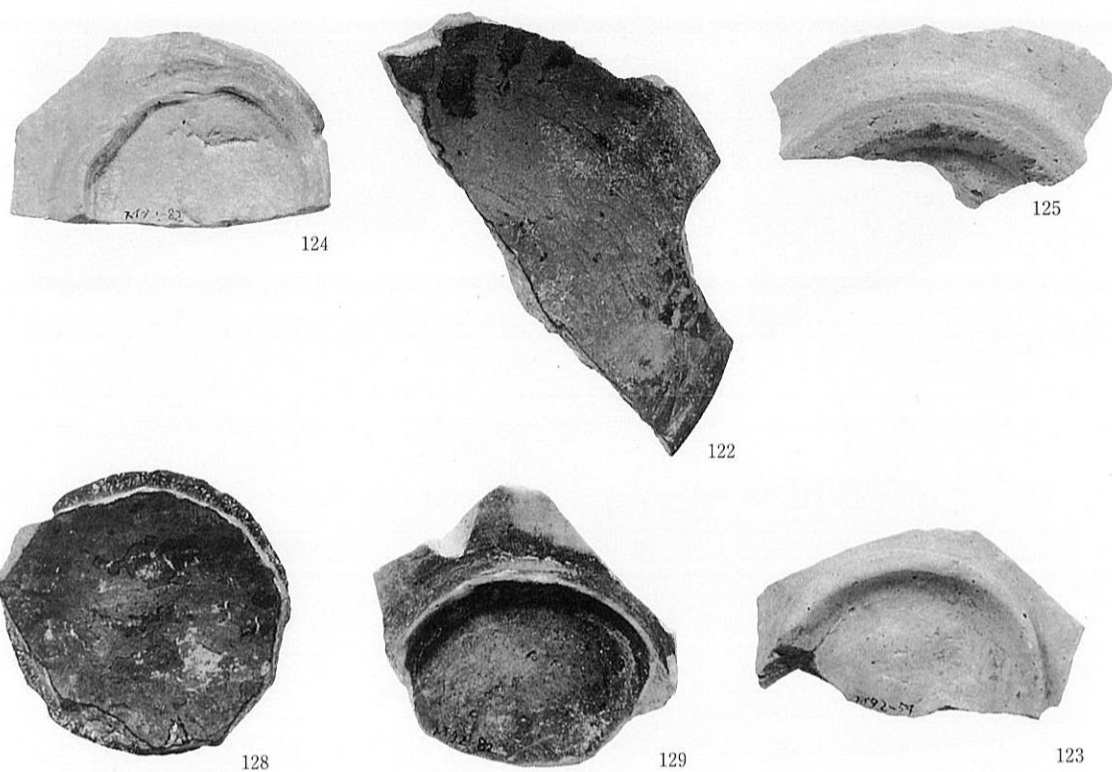
2. 溝 B-1・土坑 B-2 完掘状況



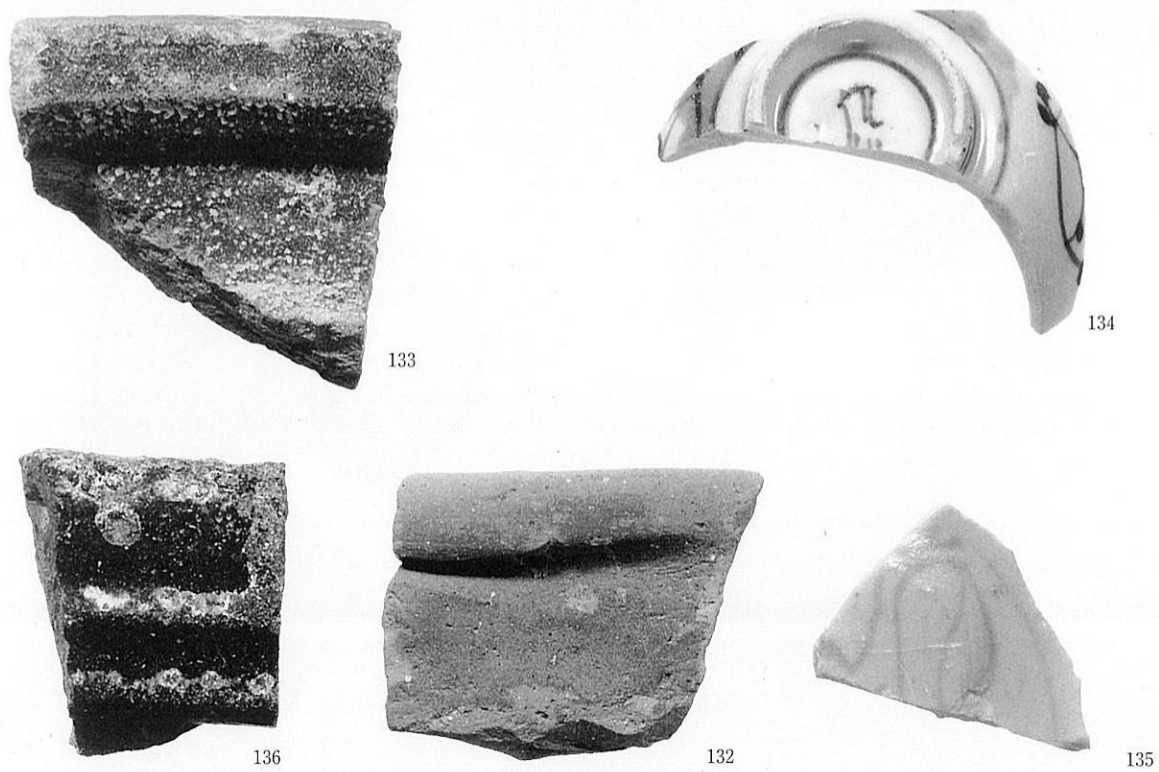
1. A地区第1・2層 出土遺物



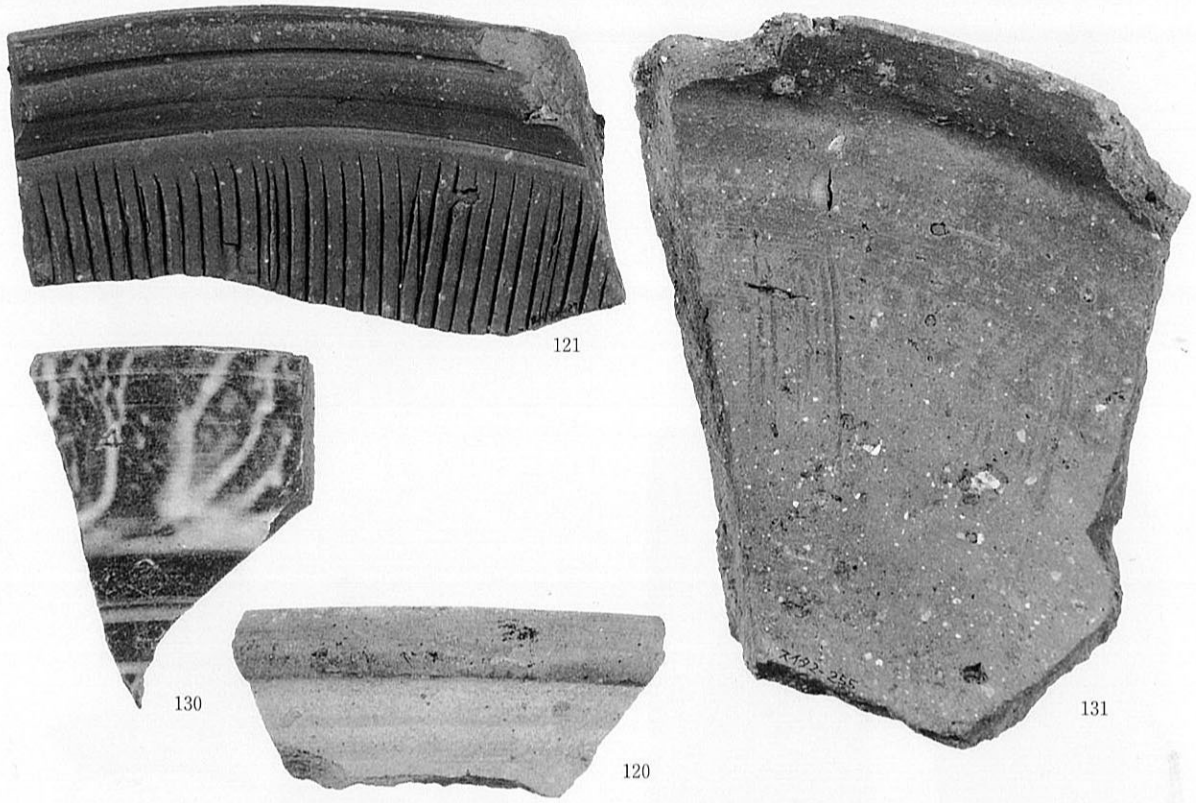
2. A地区第1・2層 出土遺物



1. A地区第1・2層 出土遺物



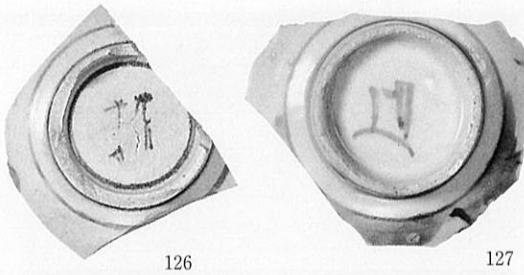
2. A地区第1・2層 出土遺物



1. A地区第1・2層 出土遺物



2. A地区第1・2層 出土遺物



126

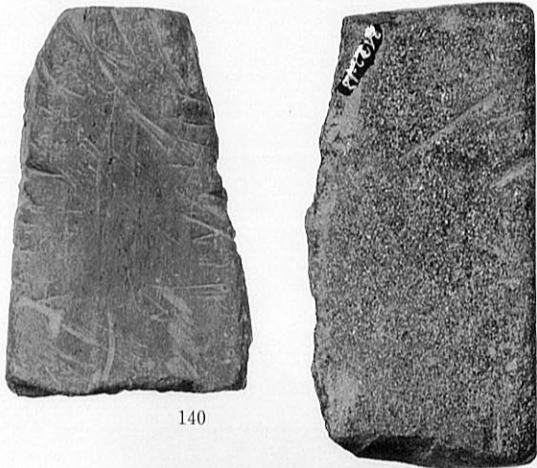
127

1



103

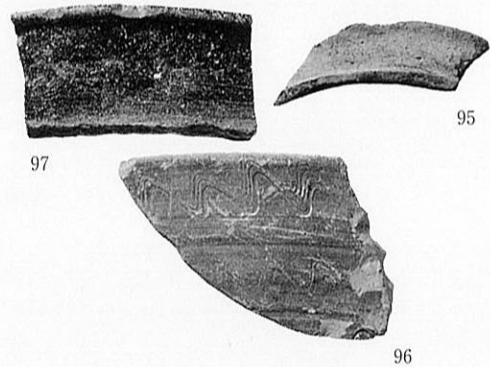
4



140

139

2

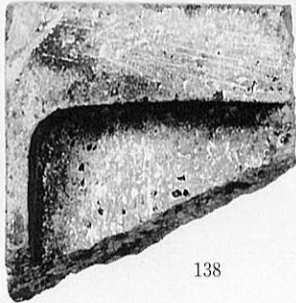


97

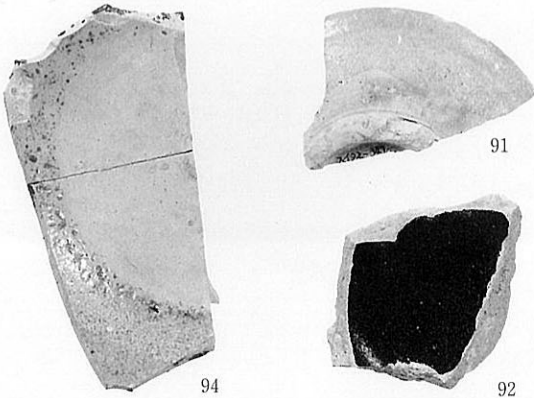
95

96

5



138

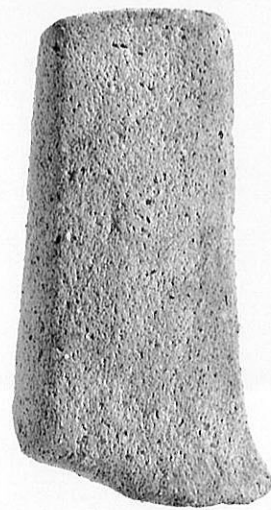


94

91

92

3

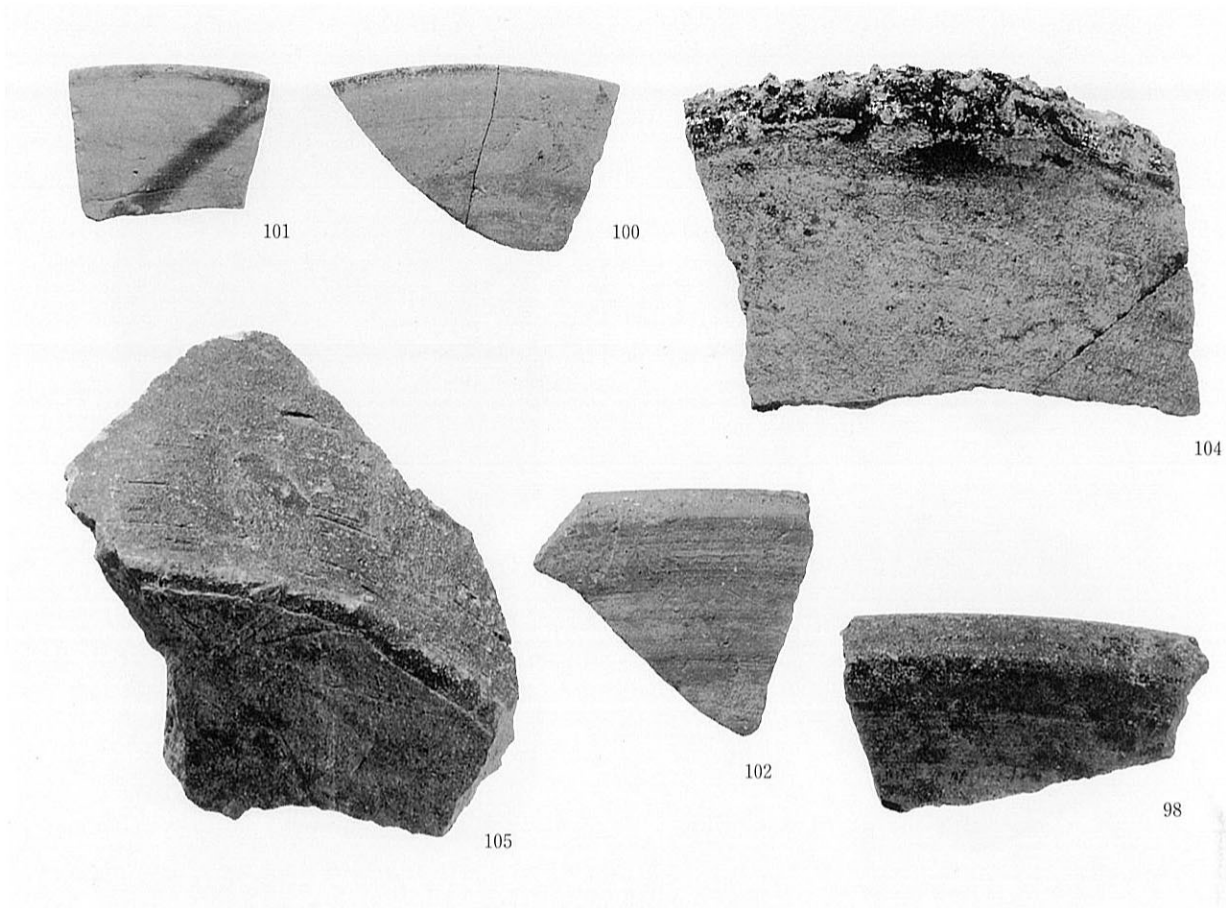


106

6

1・2. A地区第1・2層 出土遺物

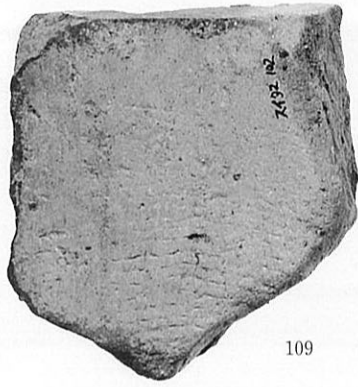
3～6. A地区第3層 出土遺物



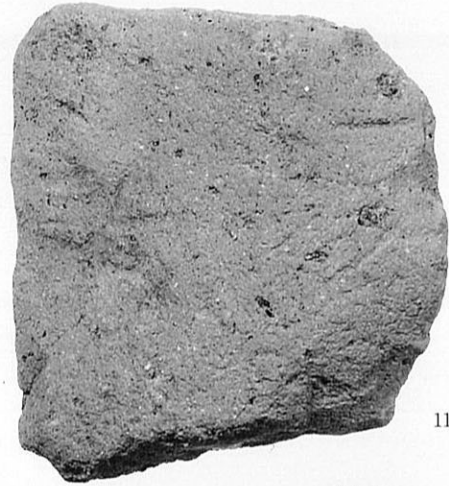
1. A地区第3層 出土遺物



2. A地区第3層 出土遺物



109



110

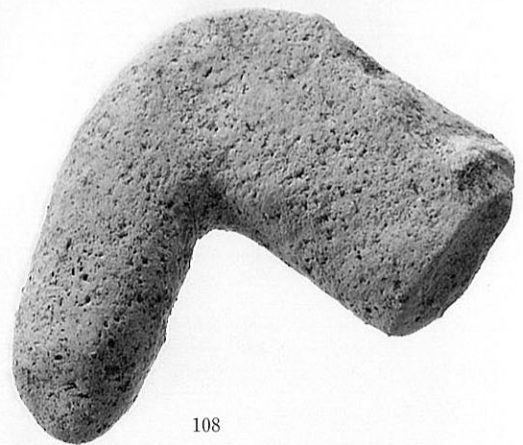


112



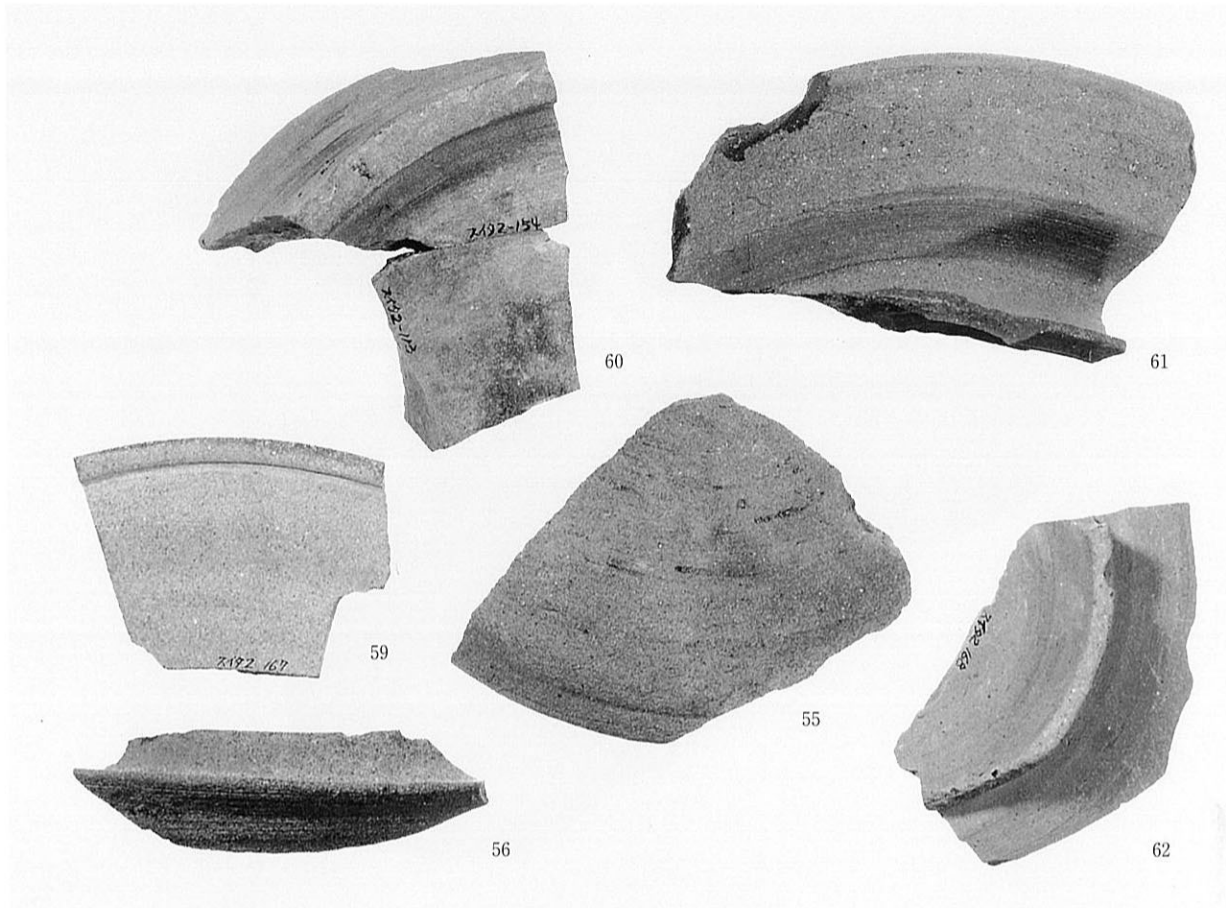
111

1. A地区第3層 出土遺物

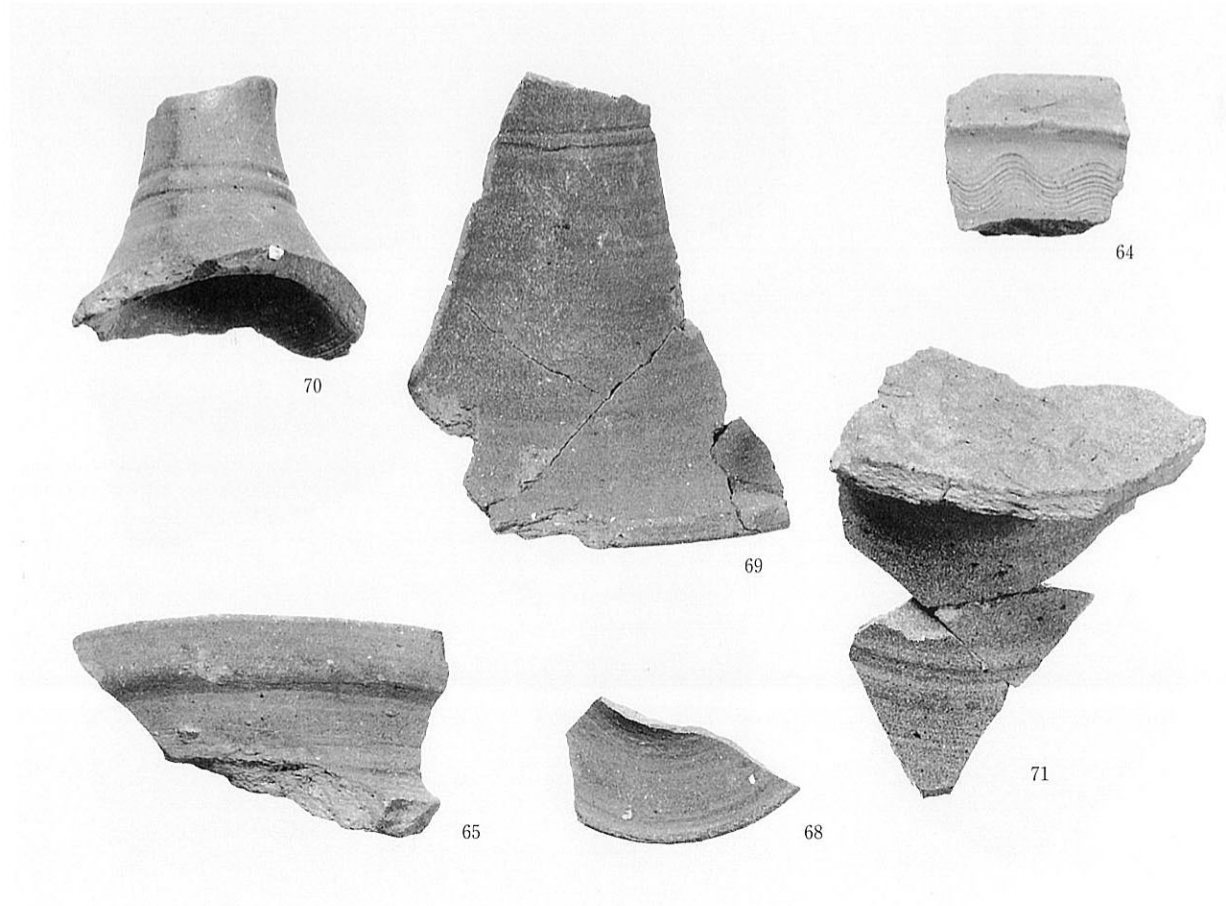


108

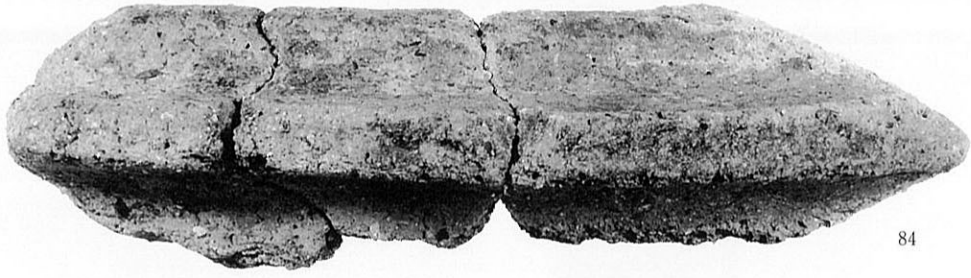
2. A地区第3層 出土遺物



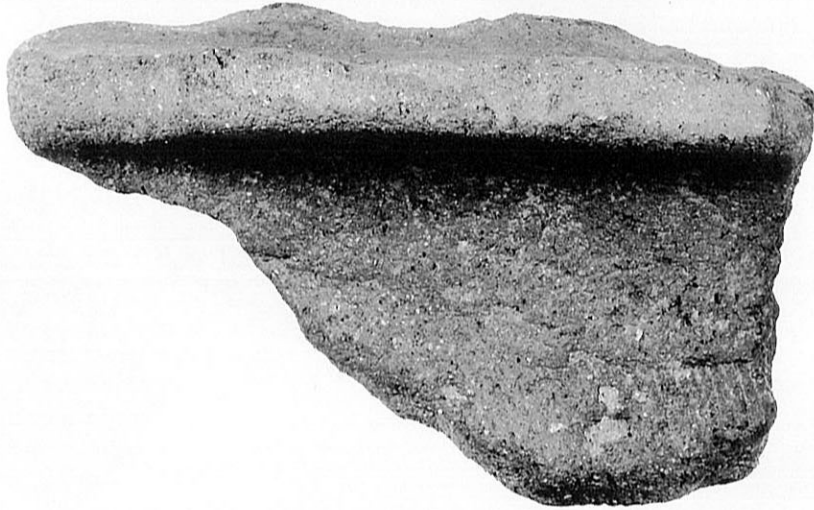
1. A地区第4層 出土遺物



2. A地区第4層 出土遺物

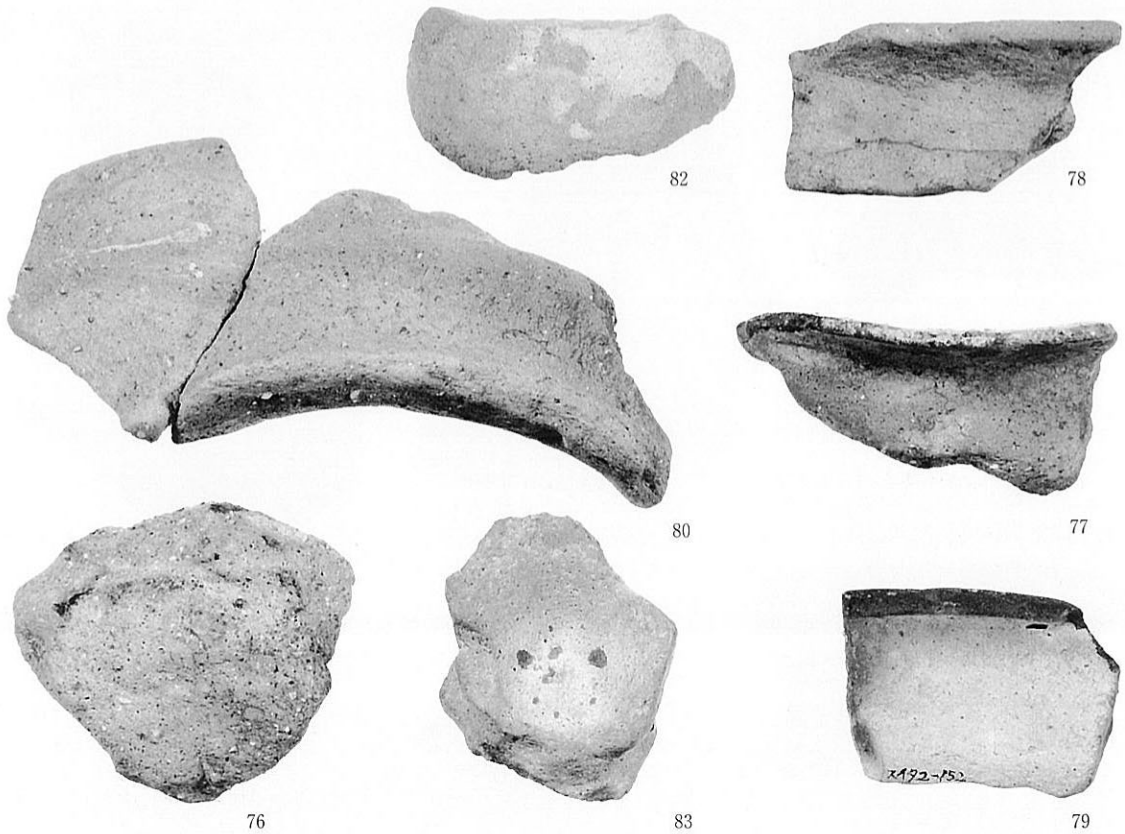


84



85

1. A地区第4層 出土遺物



76

80

82

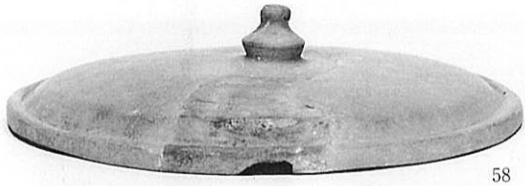
78

77

83

79

2. A地区第4層 出土遺物



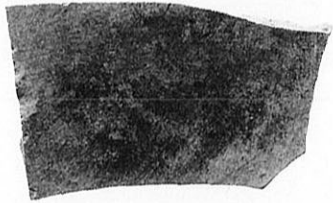
58

1

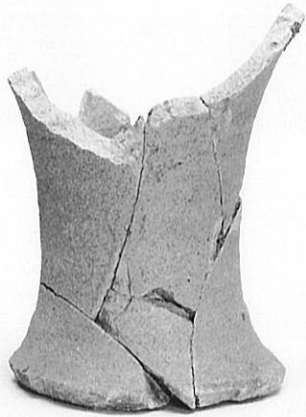


57

4



2



67

3



66

5



87



86

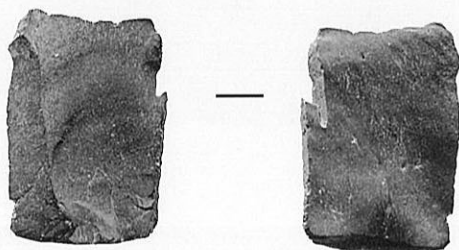
6

1～6. A地区第4層 出土遺物

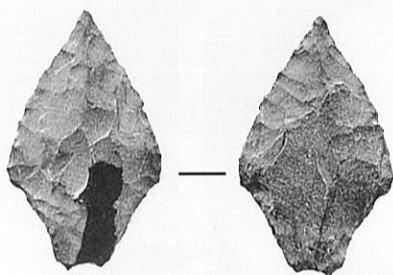


1

1



5



179

2



235

6



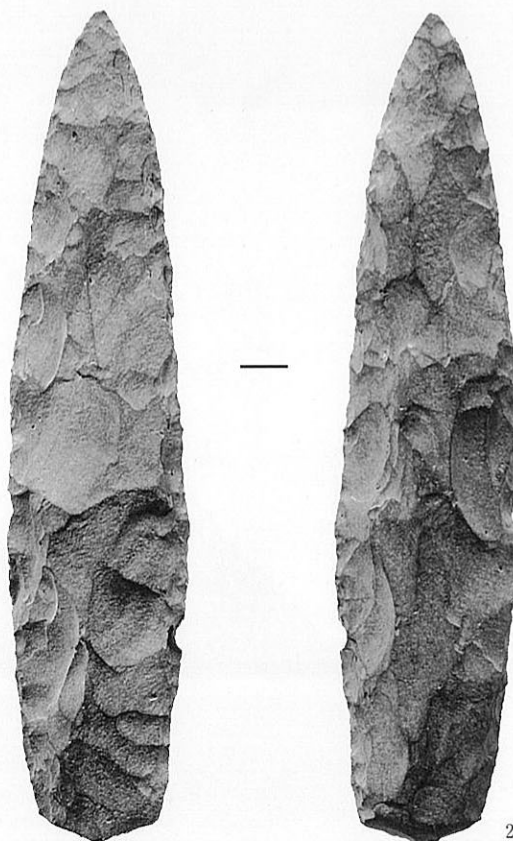
3

3



2

4

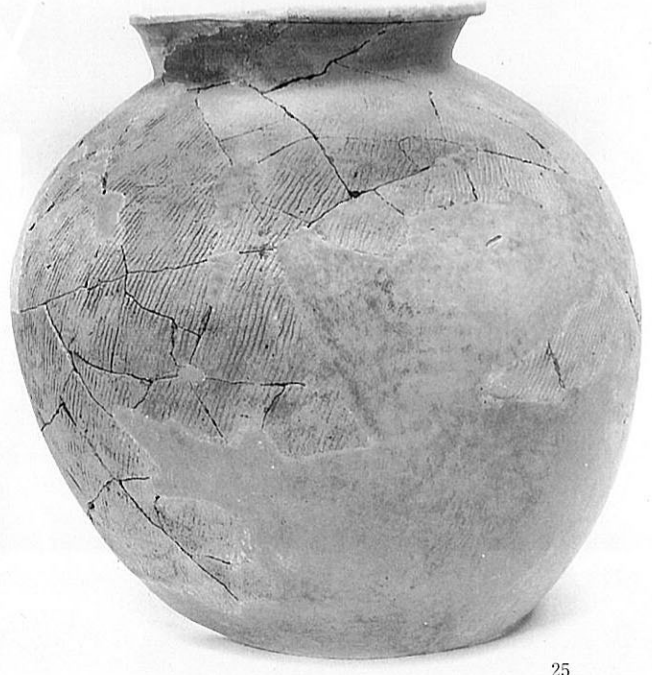
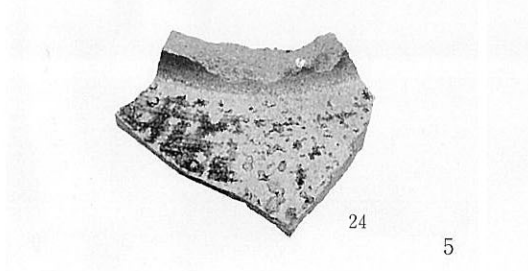
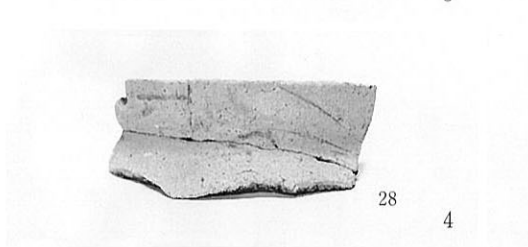
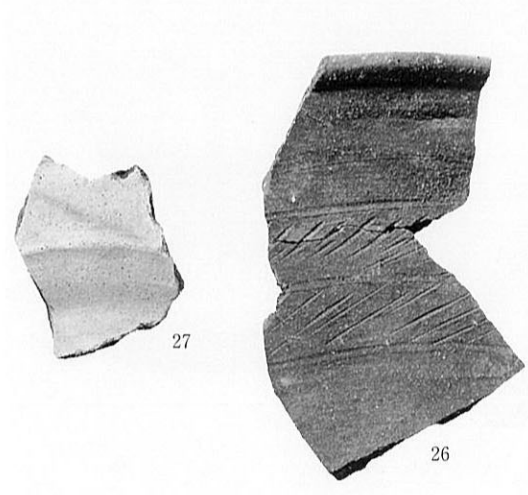


237

7

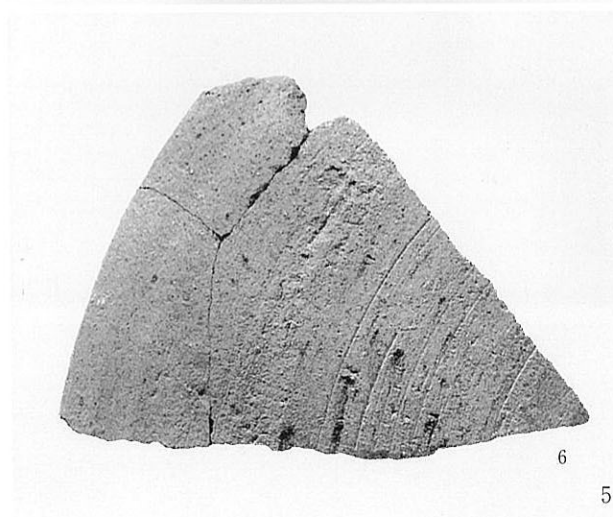
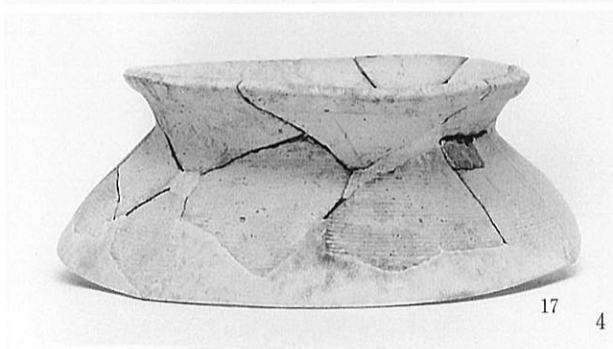
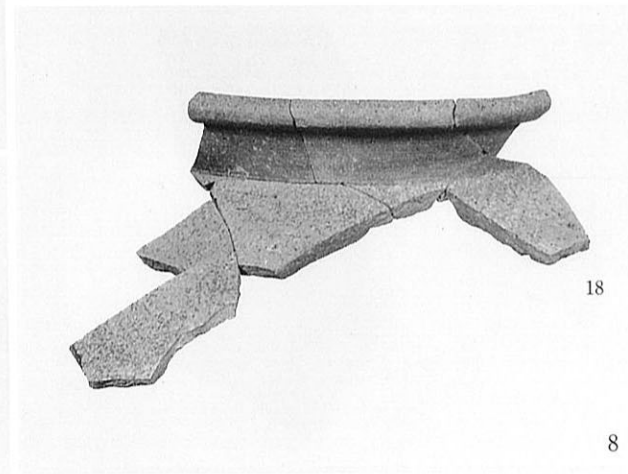
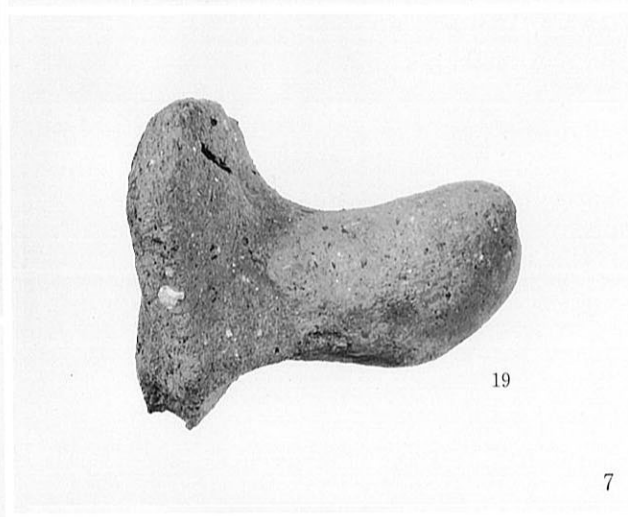
1. A地区第5-2層 出土遺物
2. B地区第4層 出土遺物
3・4. 土坑1A-33・35 出土遺物

5. A地区第5-2層 出土遺物
6. 土坑1A-33・35 出土遺物
7. 溝A-19 出土遺物

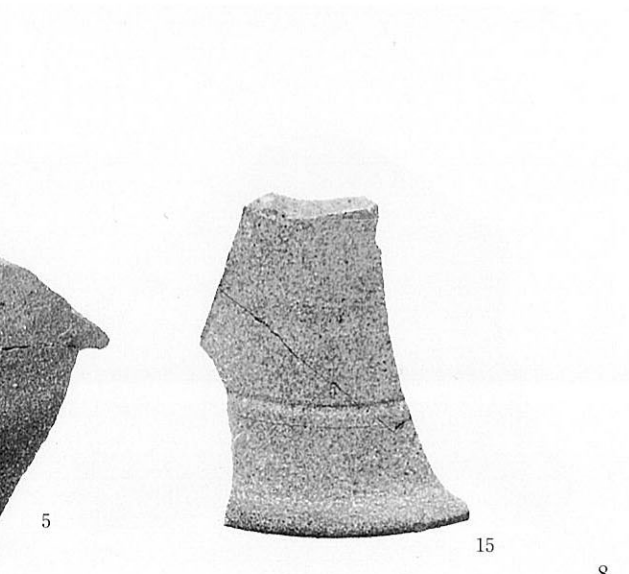
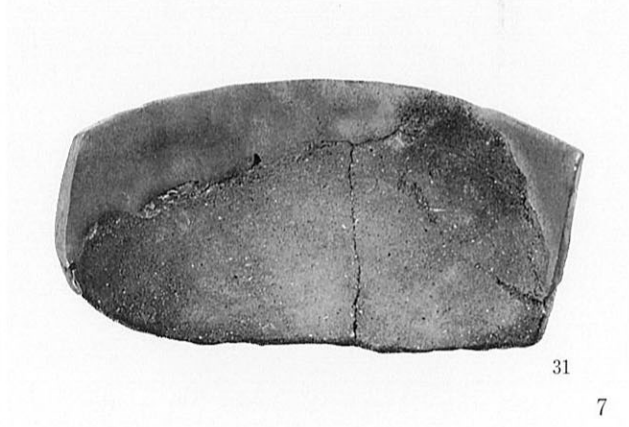
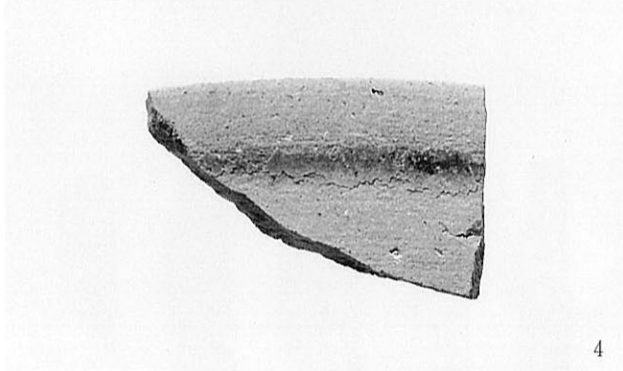
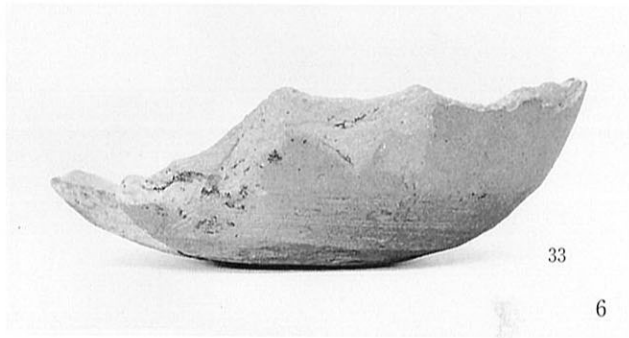
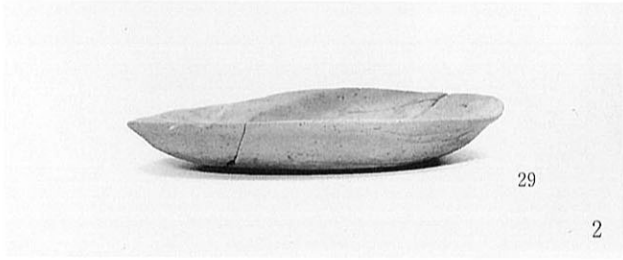


1・2. 溝2A-11 出土遺物
3～5・9. 溝A-19 出土遺物

6・7. 溝1A-20 出土遺物
8. 溝2A-13 出土遺物



1～9. 溝2A-12 出土遺物



1・6. 建物2A-91ピット1 出土遺物
2・3. ピット2A-89 出土遺物
4. 溝1A-11 出土遺物

5. 溝1A-21 出土遺物
7. ピット2A-88 出土遺物
8. 溝2A-16 出土遺物



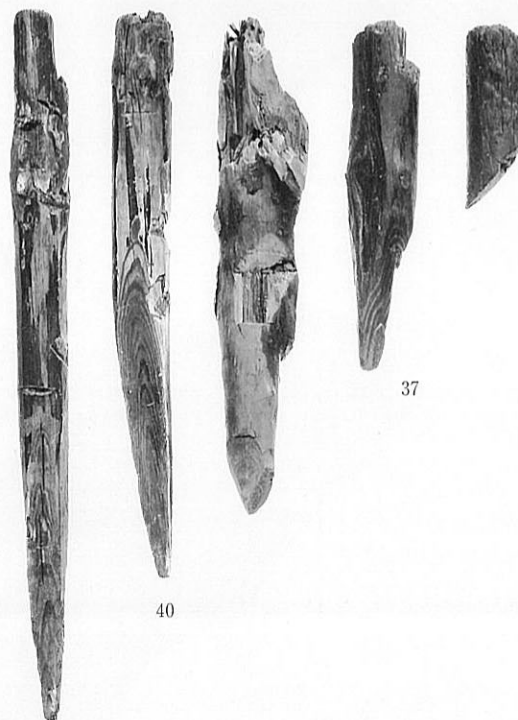
36

1



34

2



37

40



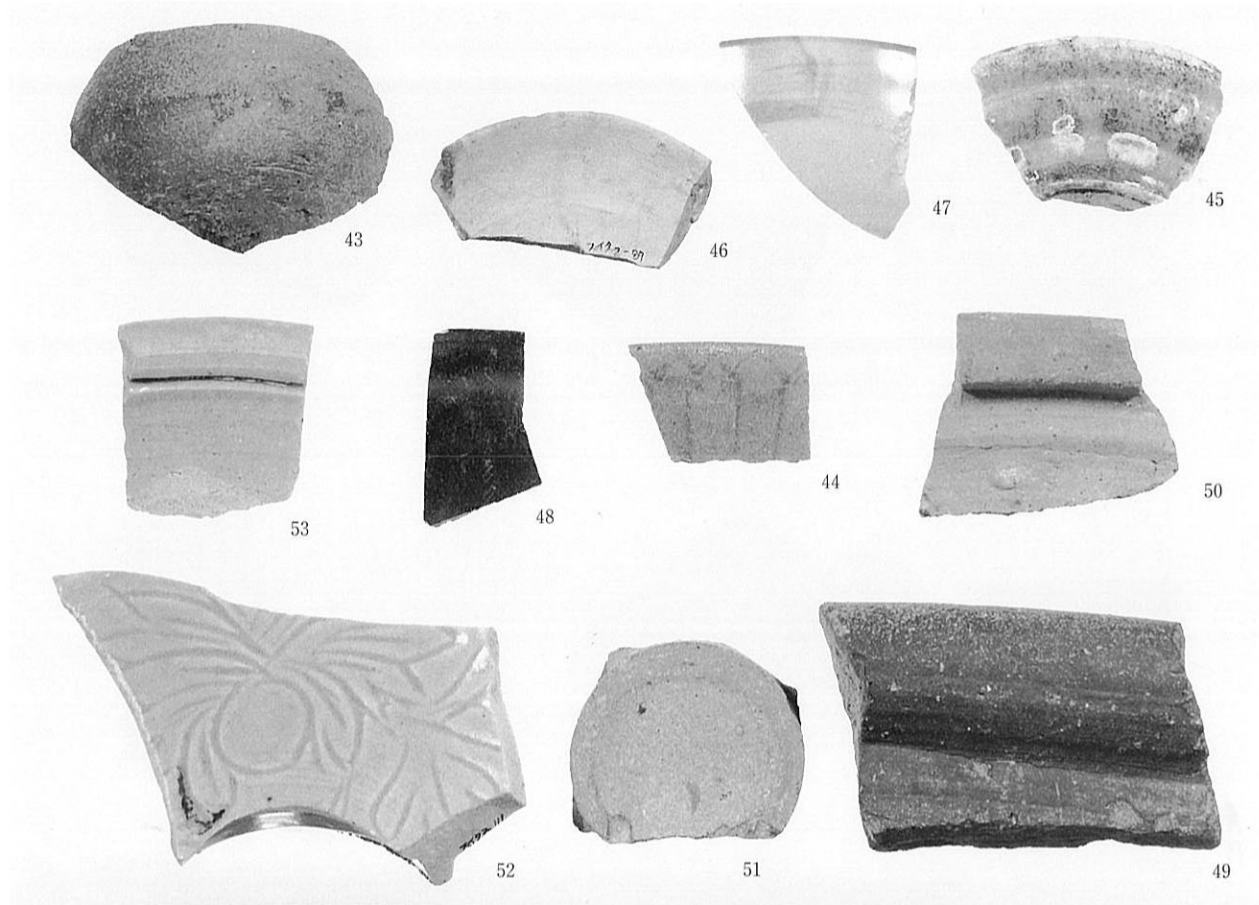
35

3

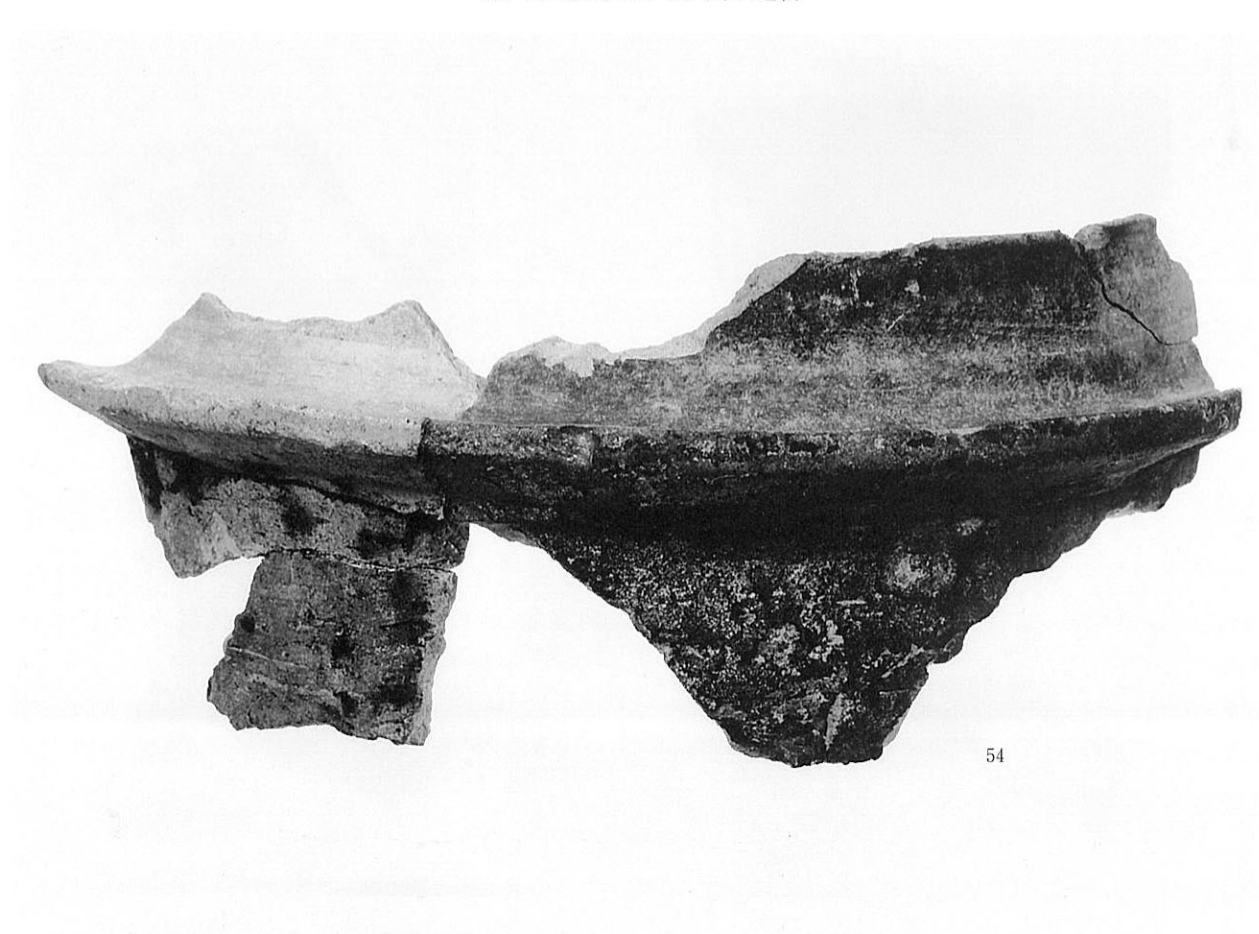
4

1・3. ピット2A-35 出土遺物
2. 建物2A-91ピット8 出土遺物

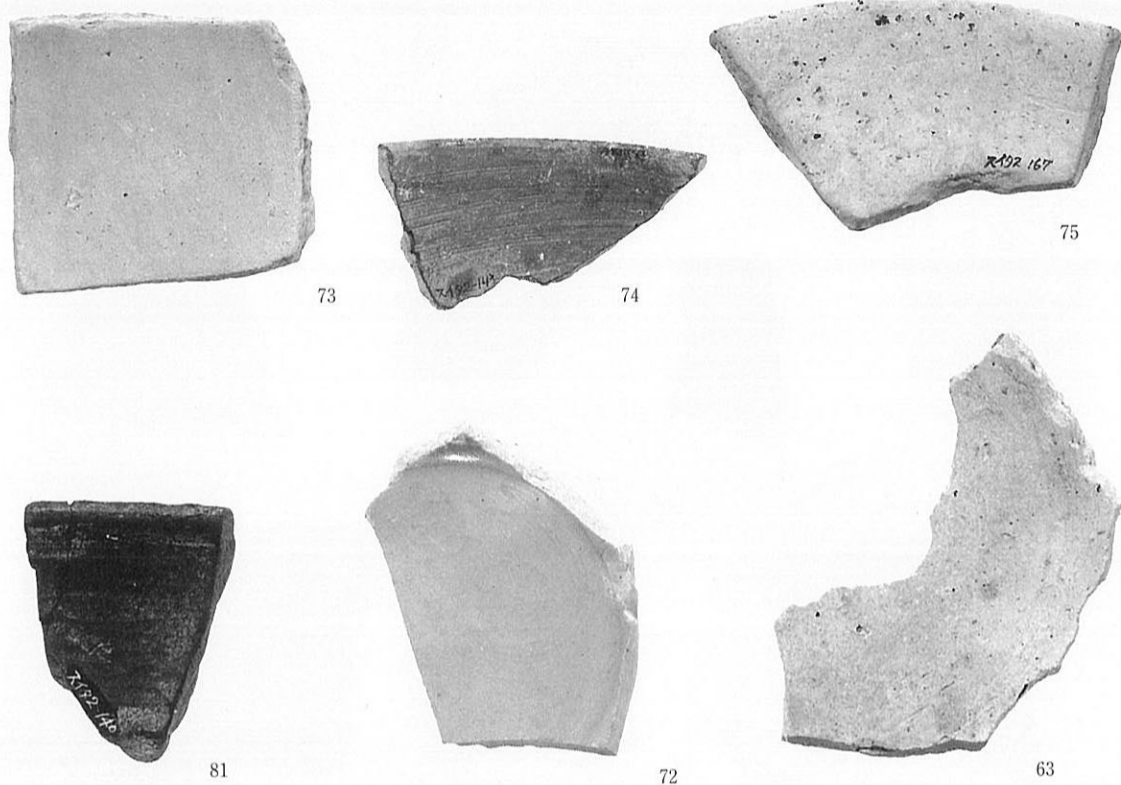
4. 落ち込み1A-12 杭



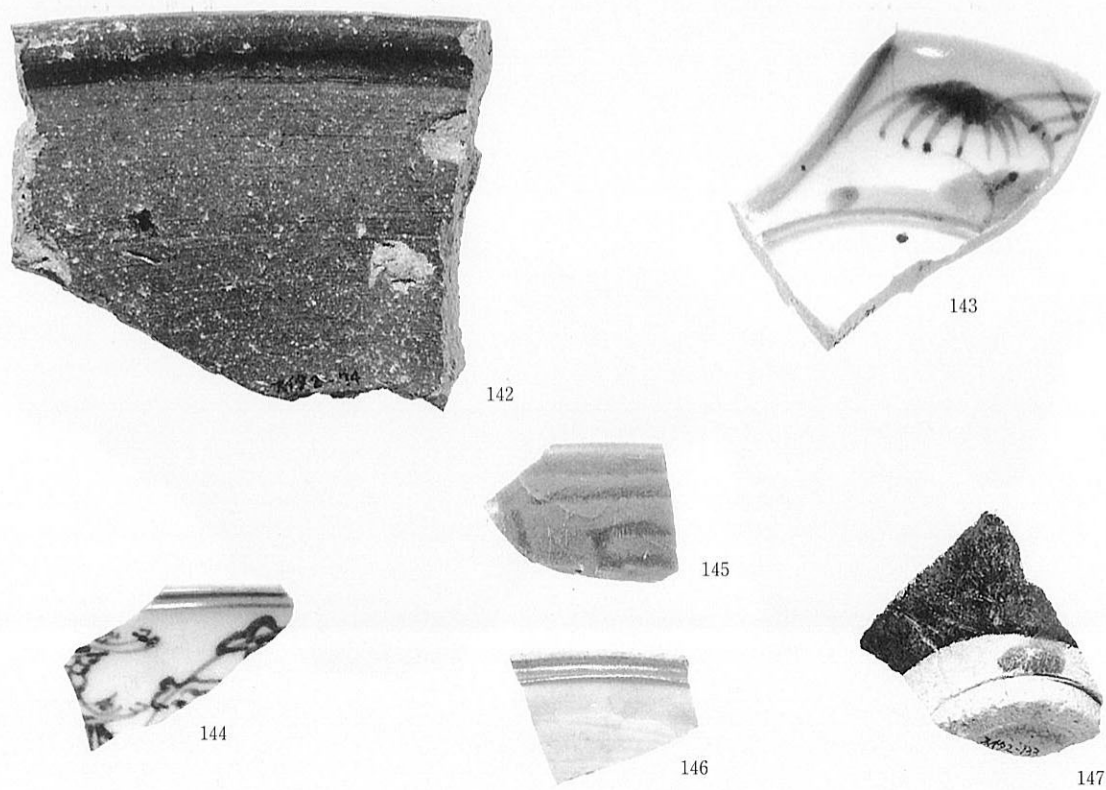
1. 落ち込み1A-12 出土遺物



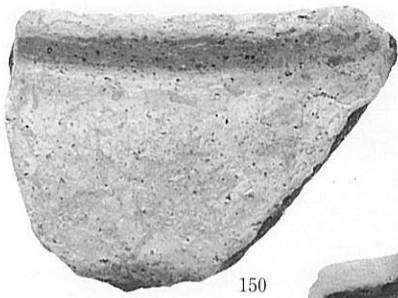
2. 落ち込み1A-12 出土遺物



1. A地区第4層 出土遺物



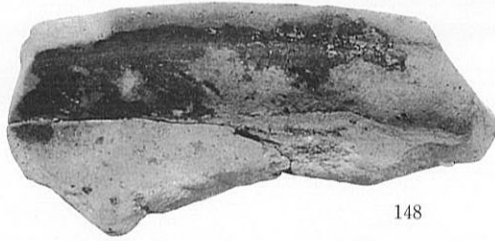
2. B地区 出土遺物



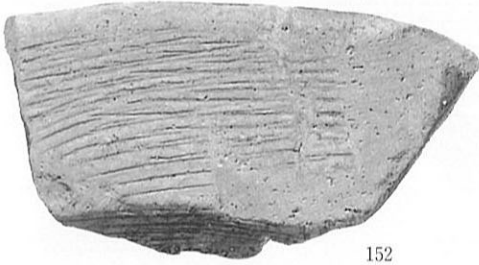
150



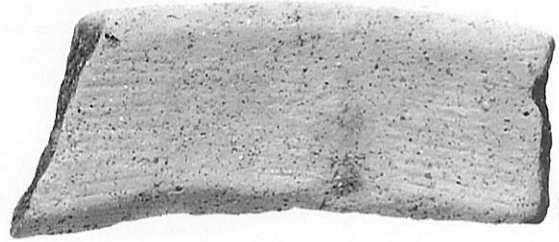
149



148

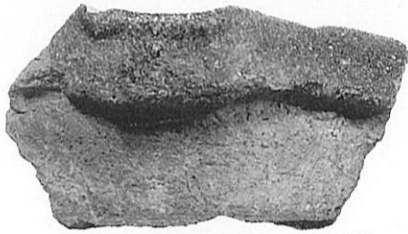


152

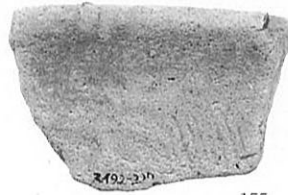


151

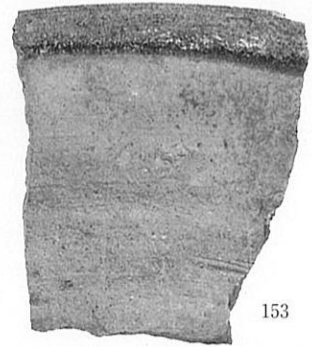
1. B地区 出土遗物



154



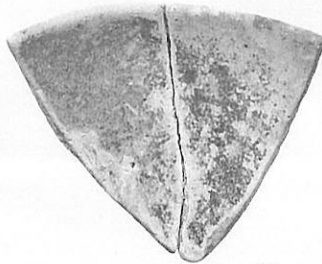
155



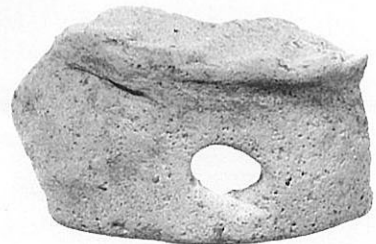
153



158

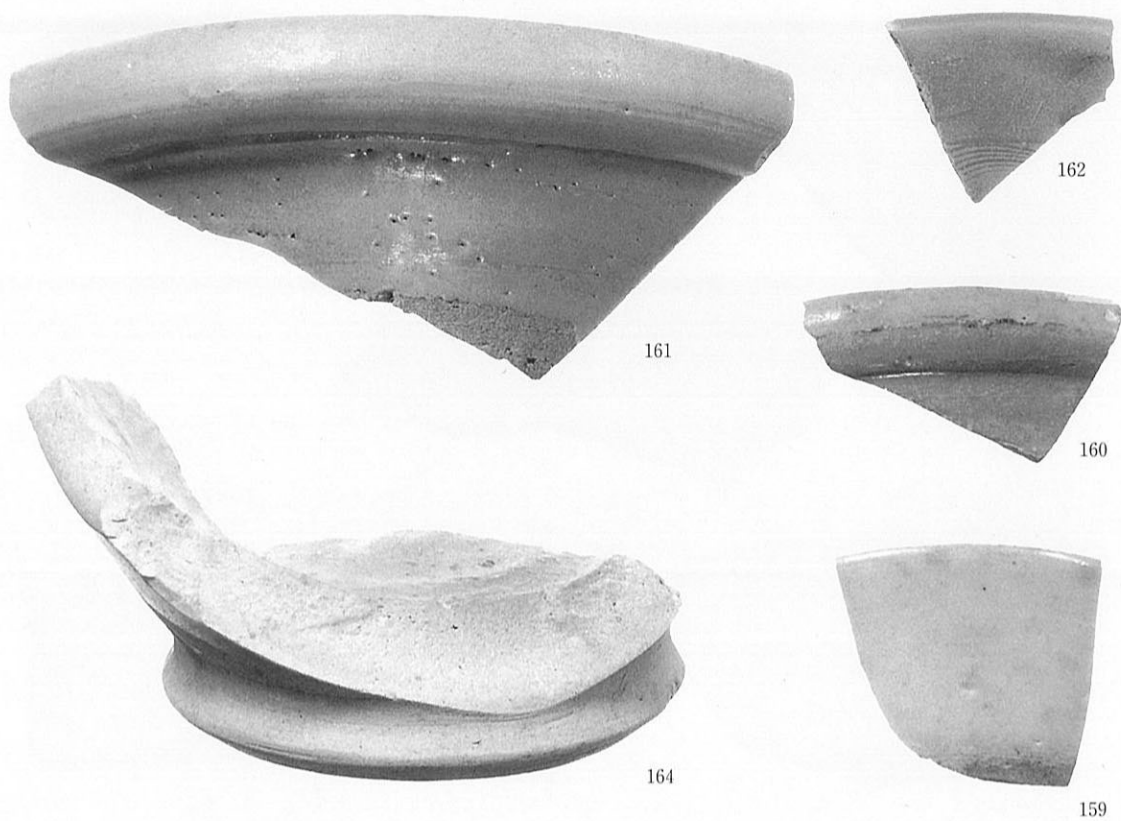


157



156

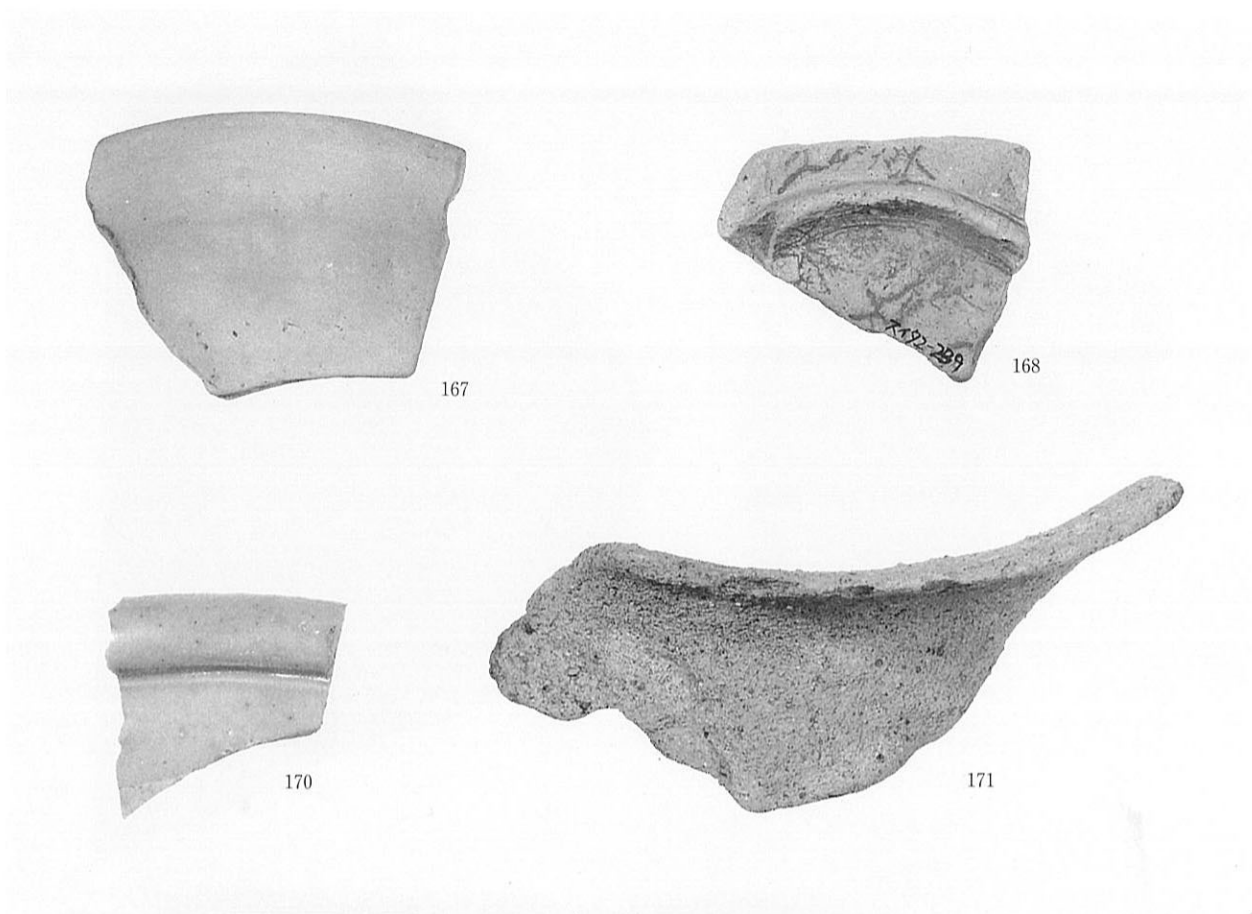
2. B地区 出土遗物



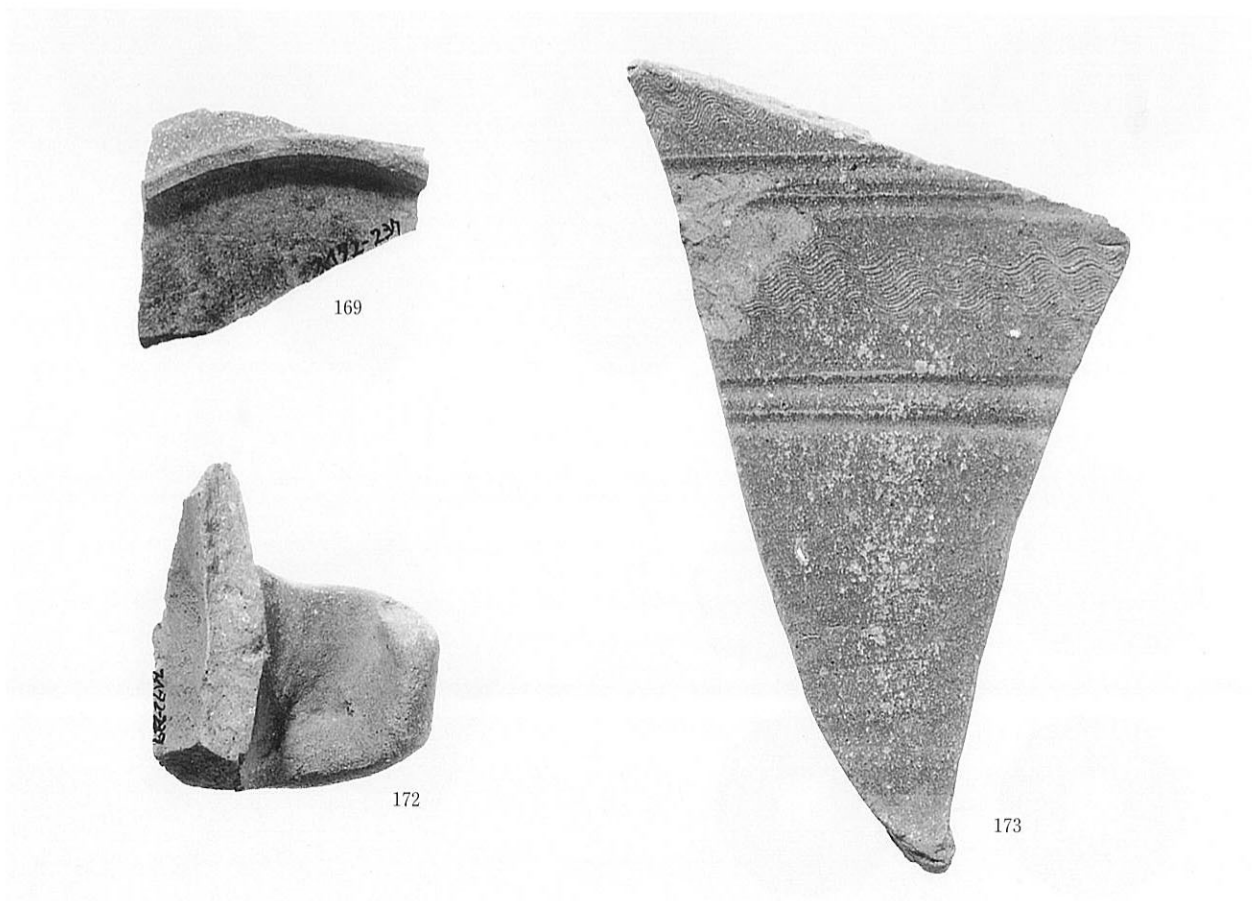
1. B地区 出土遺物



2. B地区 出土遺物



1. B地区 出土遗物



2. B地区 出土遗物



174



177

1



175

2



141

3



176

5



178

4

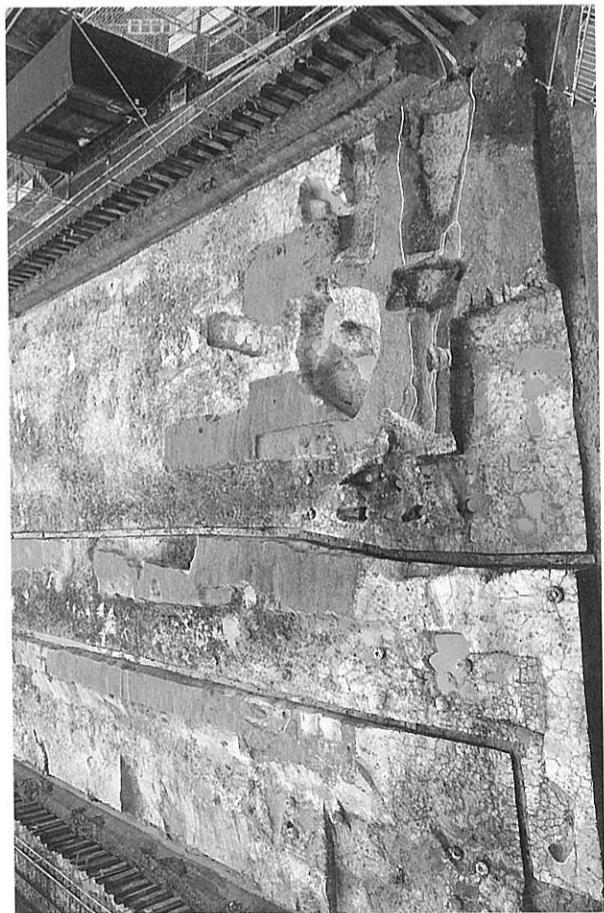
1 · 2 · 4 · 5. B地区 出土遺物
3. 土坑 B-1 出土遺物



1. C地区第1面 畝間溝群C-108~113 (北西から)



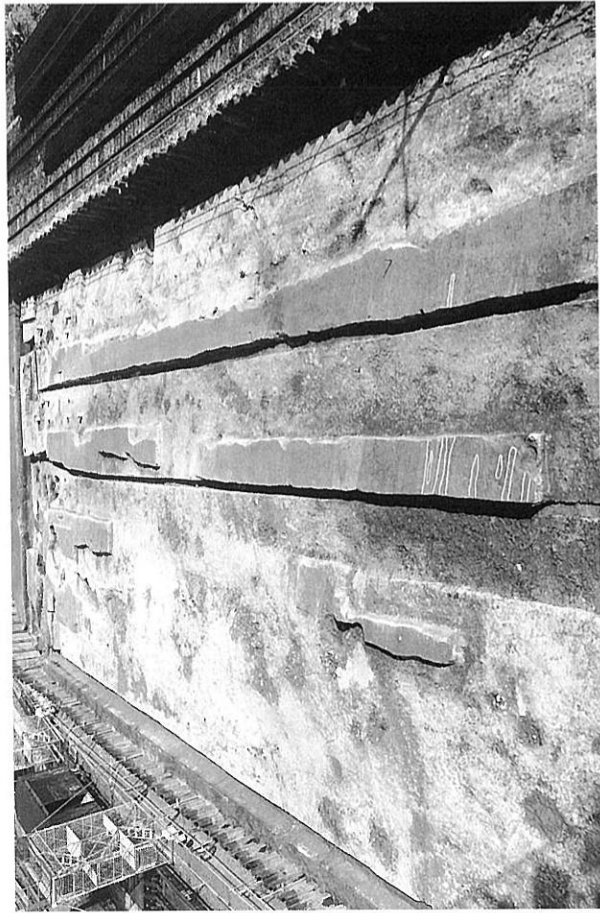
2. C地区第1面 埋め桶C-101 (南東から)



1. C地区第2面 全景 (北東から)



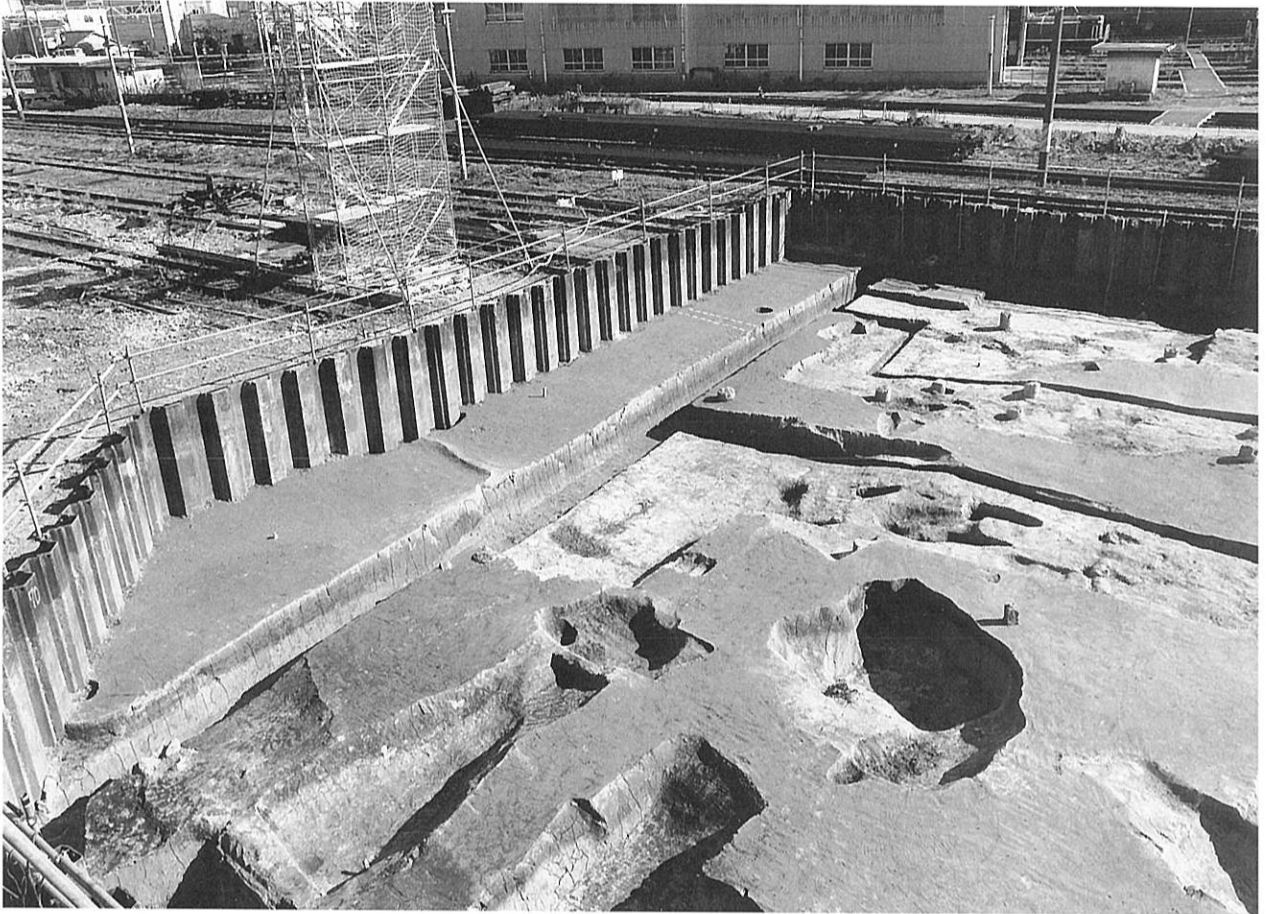
2. C地区第2面 段差 C-204 (北西から)



3. C地区第3面 全景 (南西から)



4. C地区第3面 青銅製品出土状況 (北西から)



1. C地区第4面 全景 (西から)



2. C地区第5面 全景 (西から)



1. C地区第6面 全景 (南西から)



2. C地区第6面 全景 (北東から)



4. 第C-6面 溝C-601断面 No. 3 (東から)



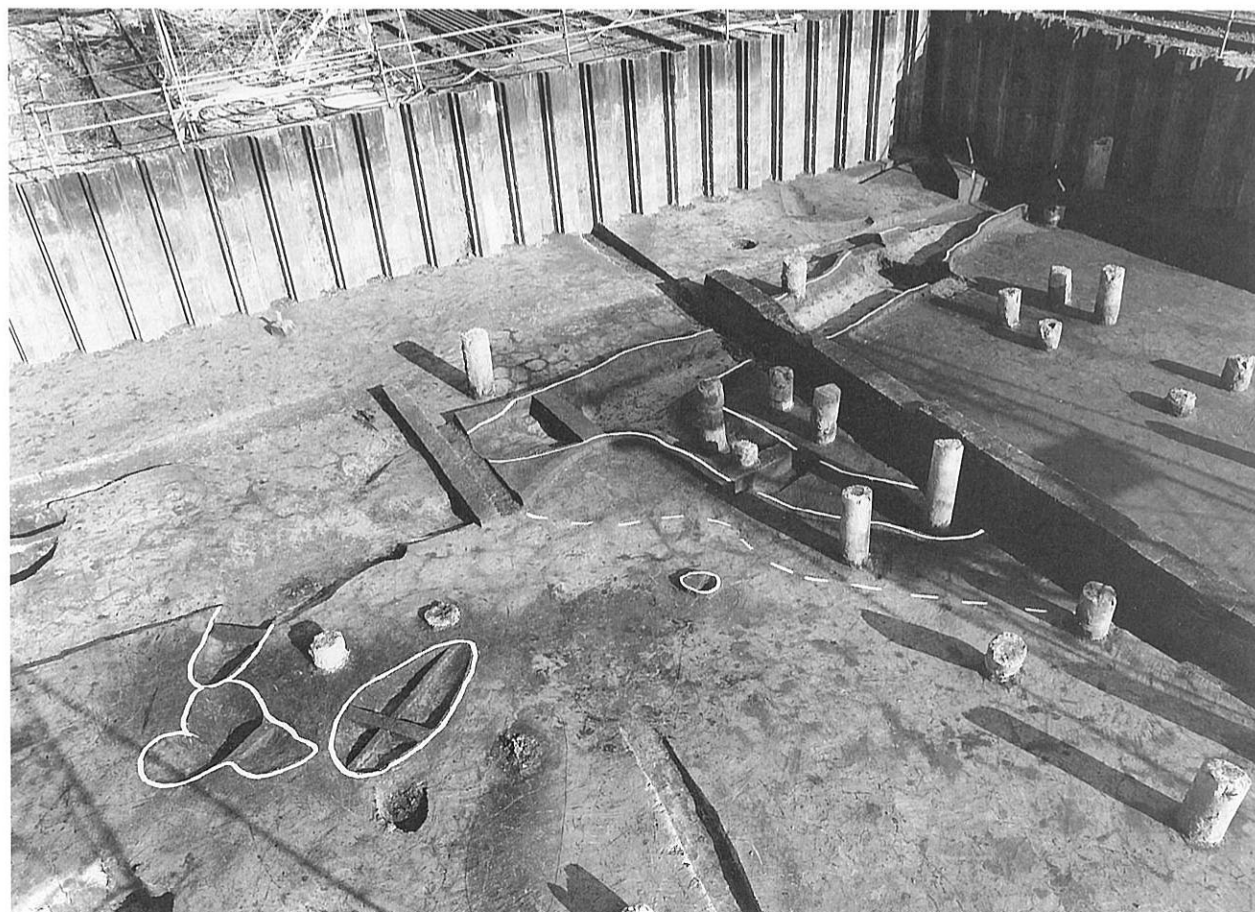
3. C地区第6面 溝群 (西から)



5. 第C-6面 溝C-601断面 No. 1 (東から)



1. C地区第7面 全景 (西から)



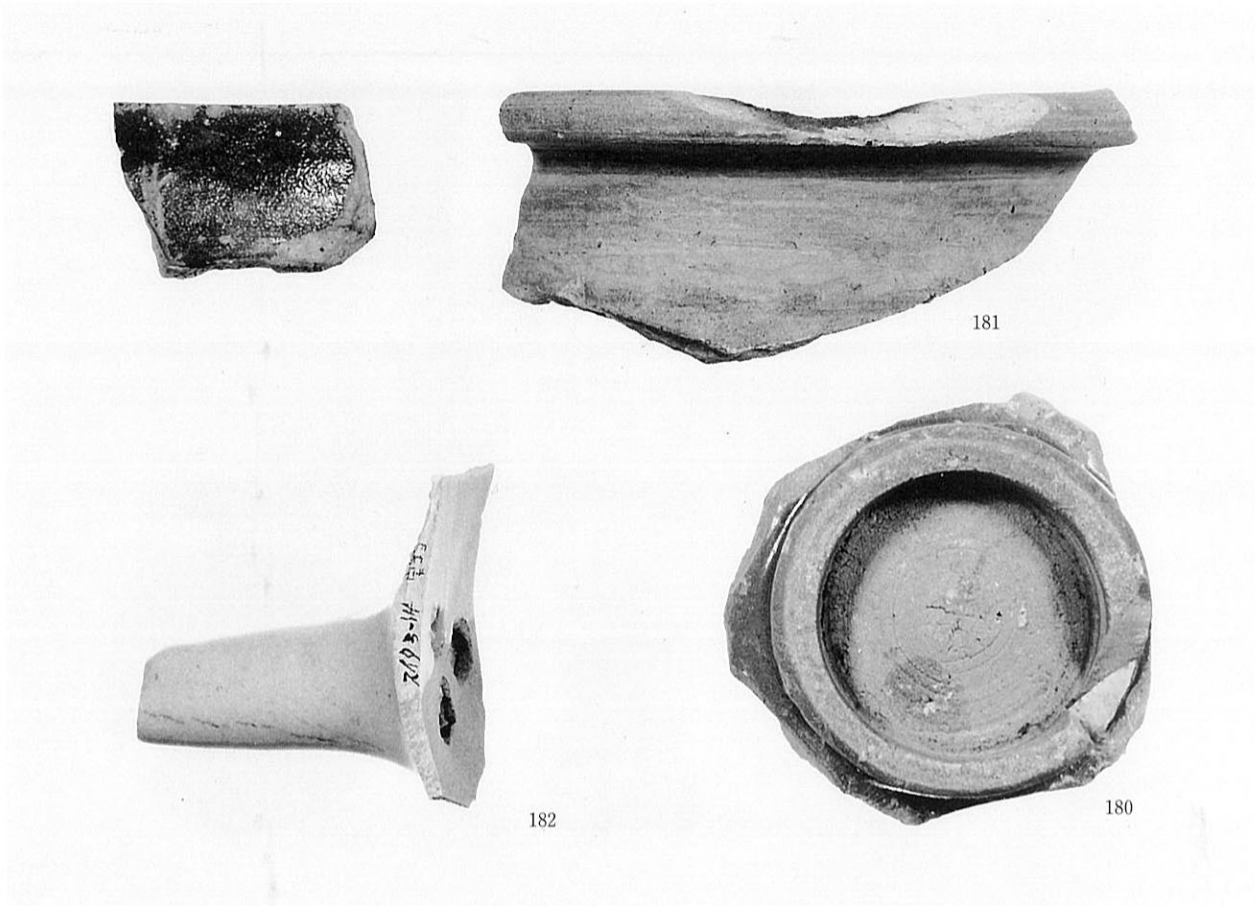
2. C地区第8面 全景 (西から)



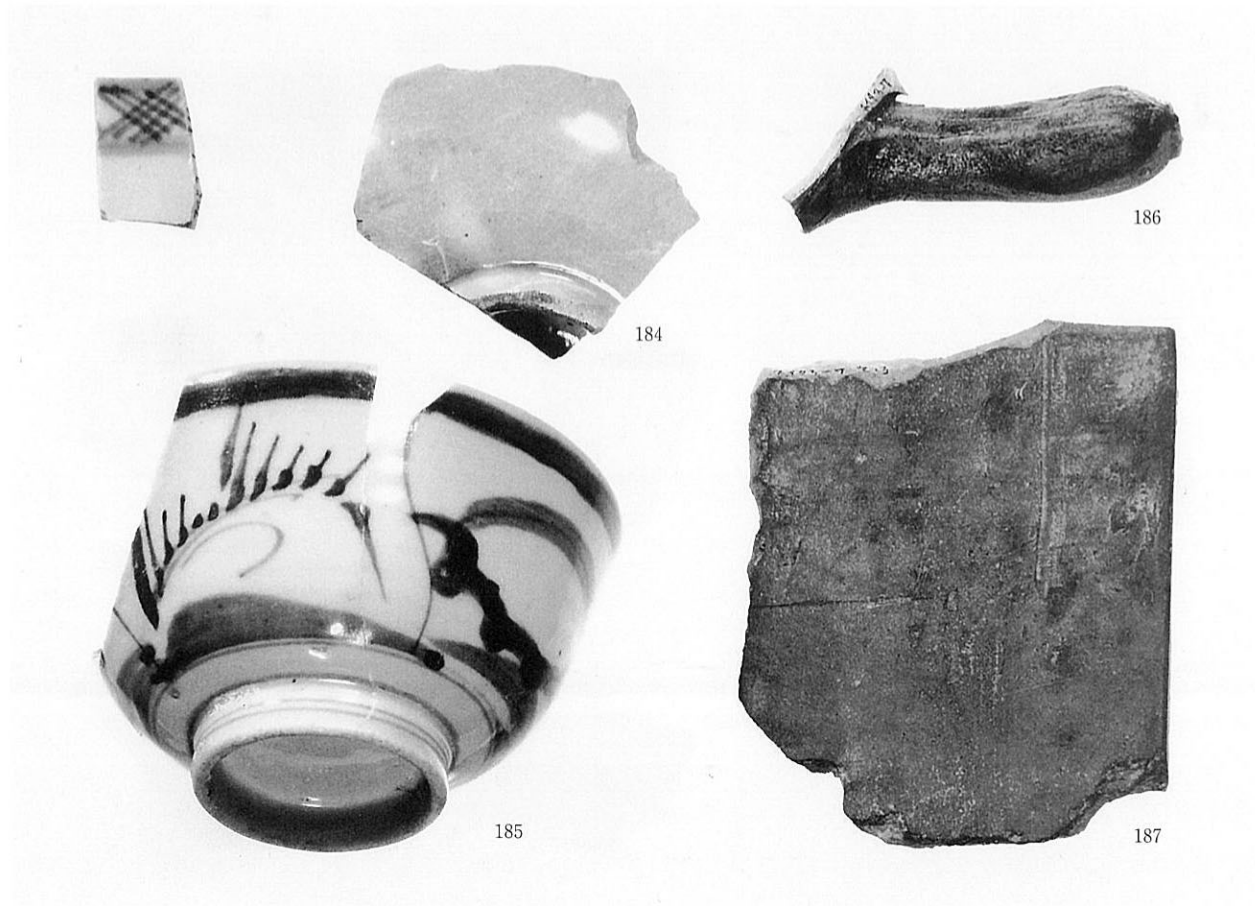
1. C地区第9面 全景 (南西から)



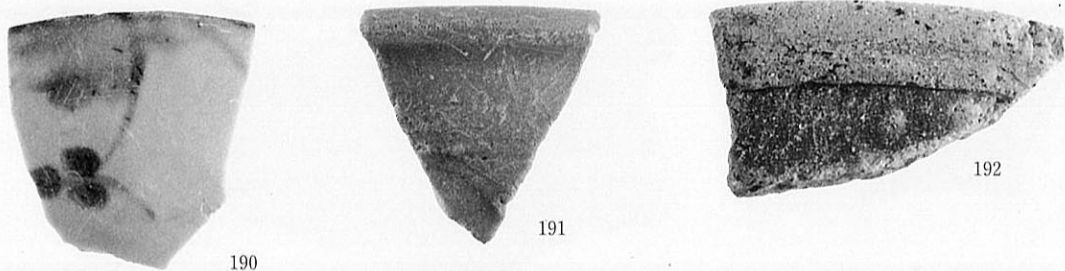
2. C地区第9面 溝C-903断面 (南東から) 下から2層目が鬼界アカホヤ火山灰層



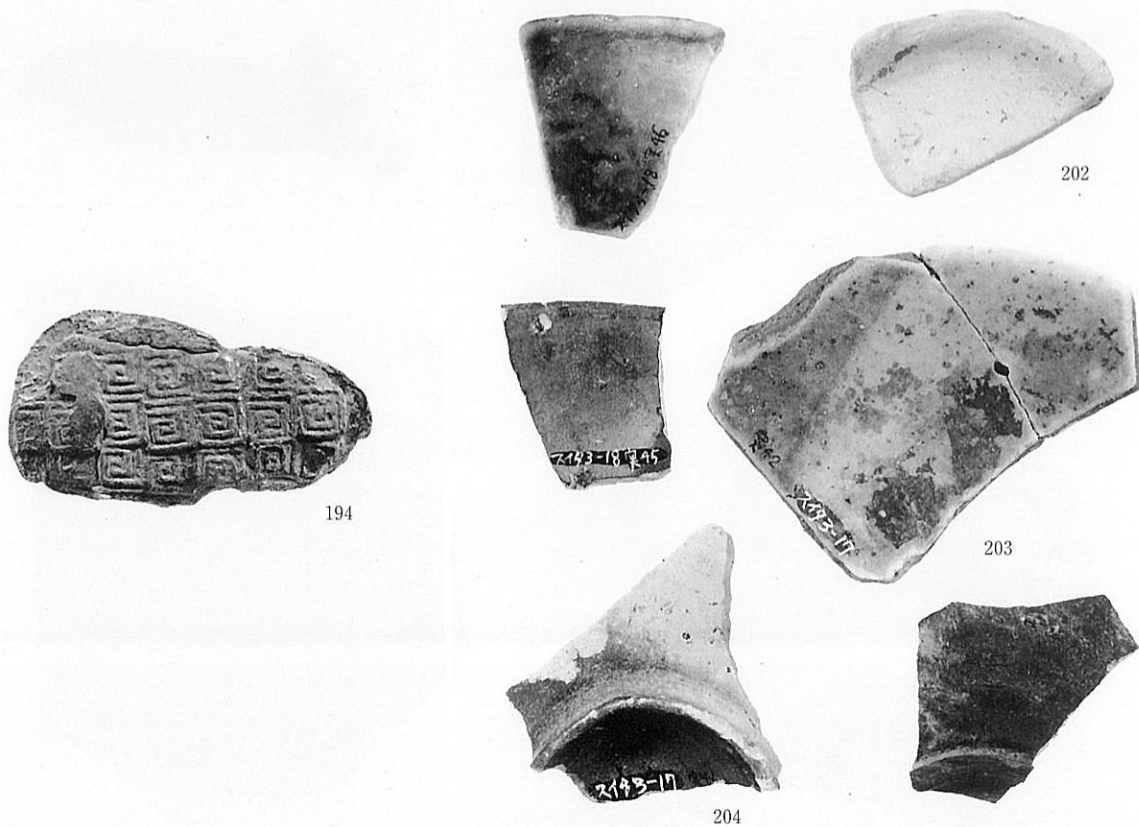
1. C地区第1面 埋め桶 C-101 出土遺物



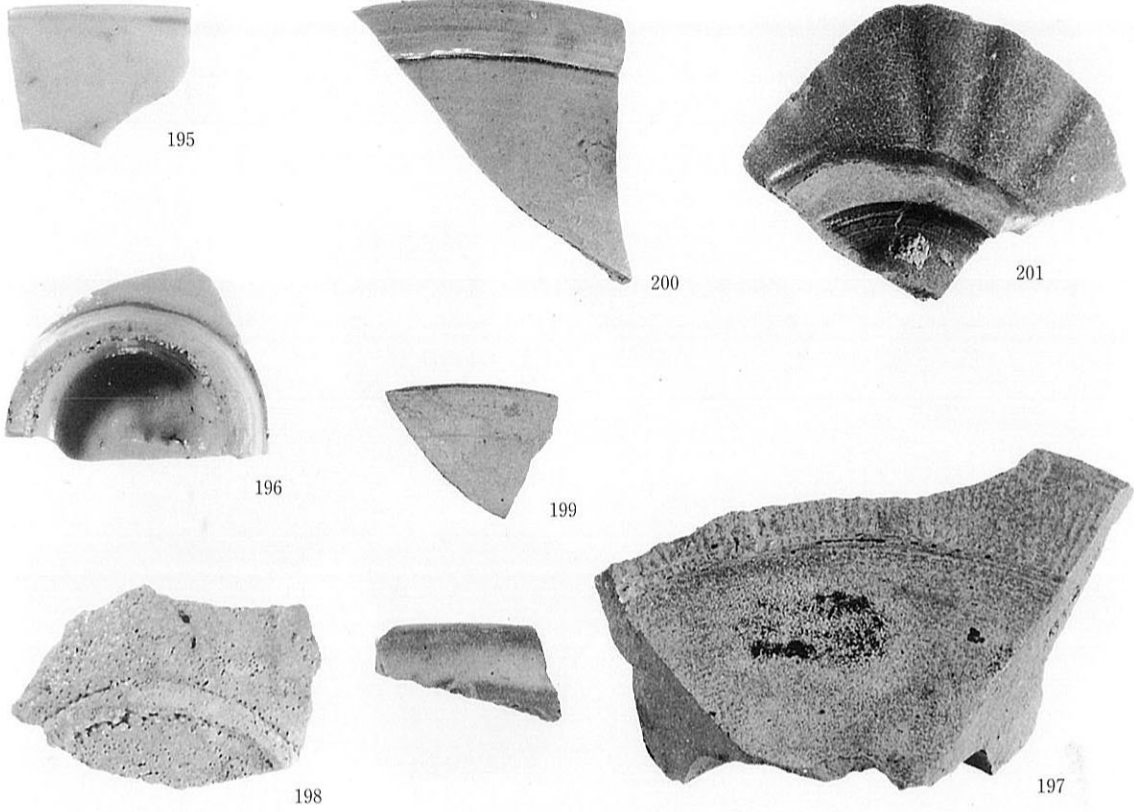
2. C地区第2面 溝 C-207 出土遺物



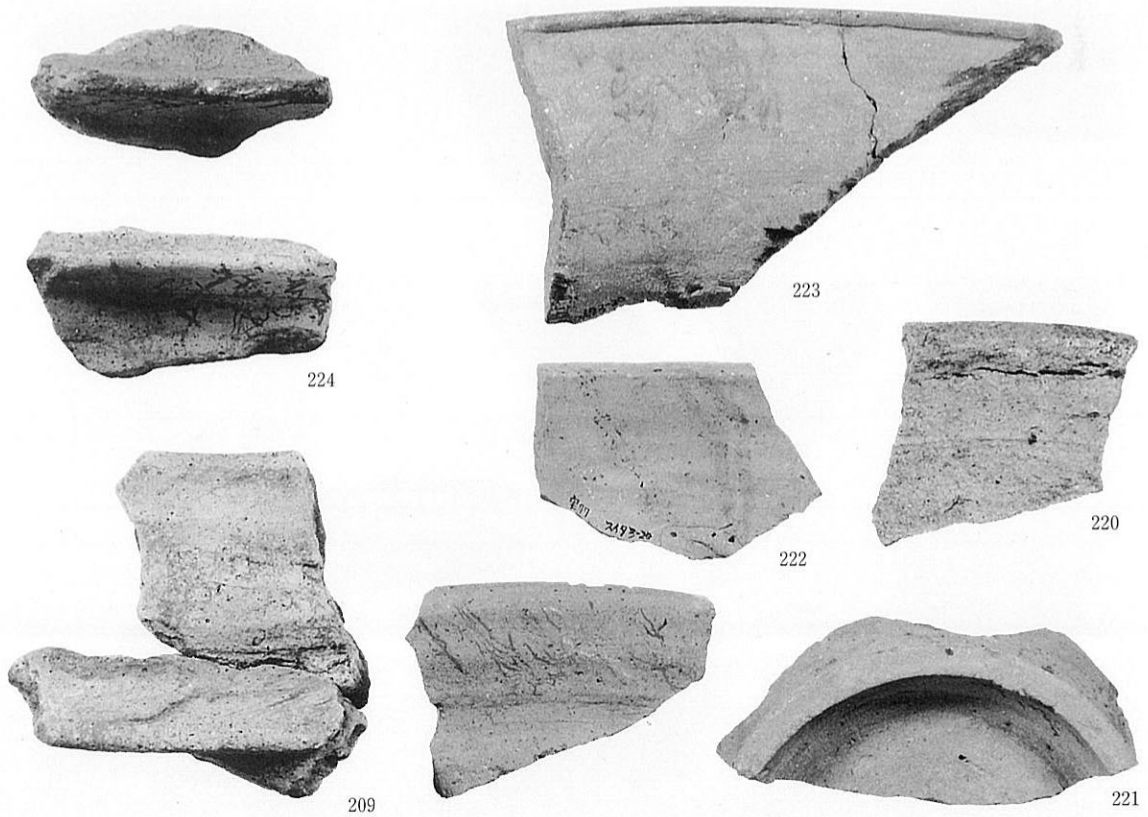
1. C地区第2層 出土遺物



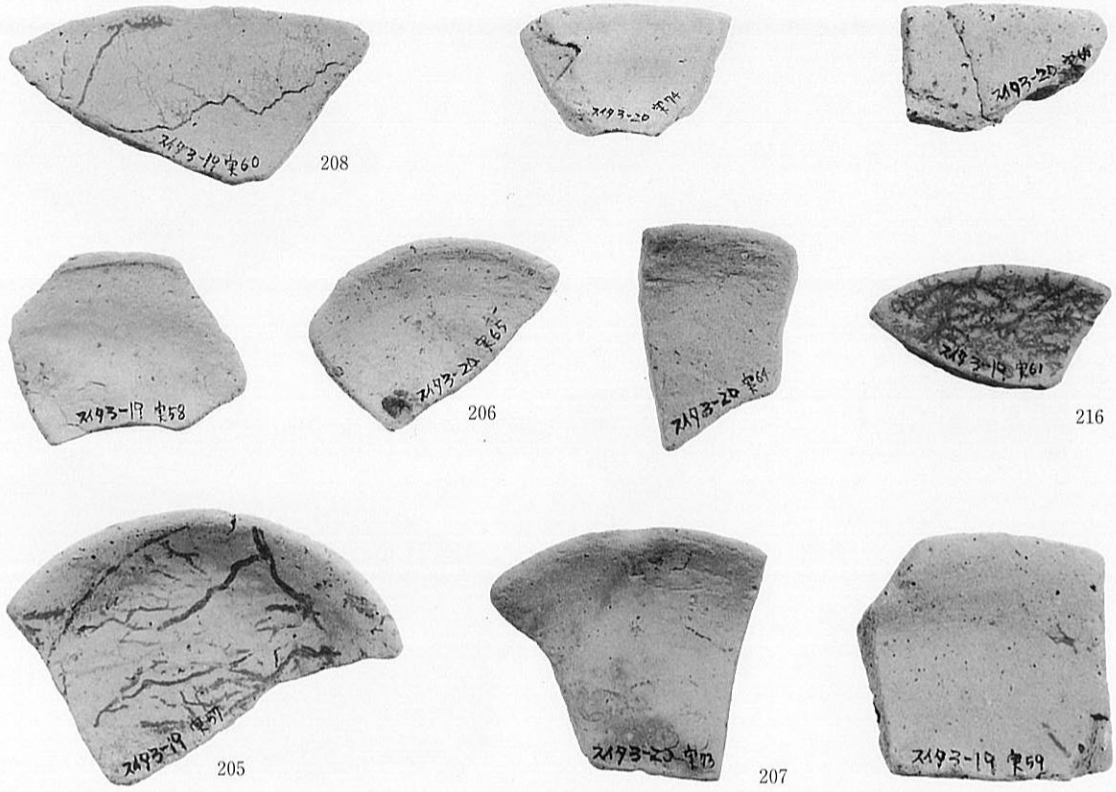
2. C地区第3面・第3層 出土遺物



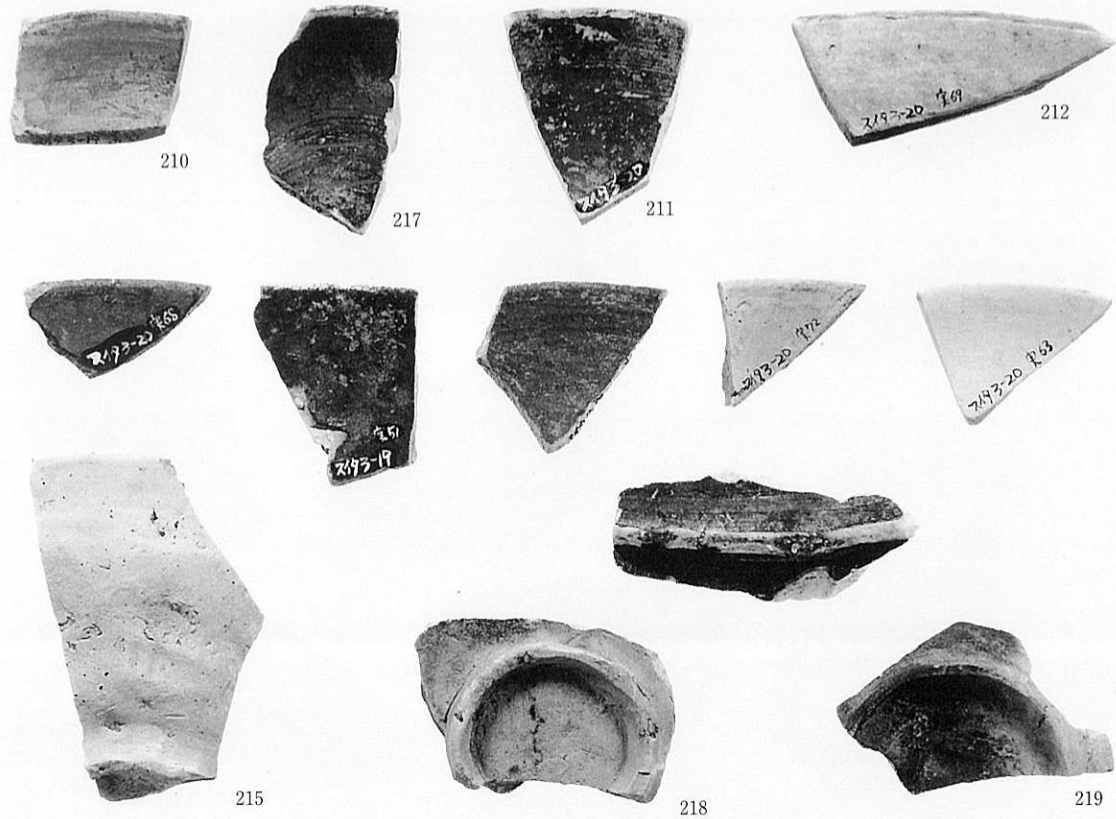
1. C地区第3層 出土遺物



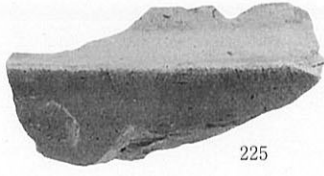
2. C地区第4層 出土遺物



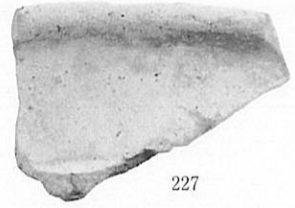
1. C地区第4層 出土遺物



2. C地区第4層 出土遺物



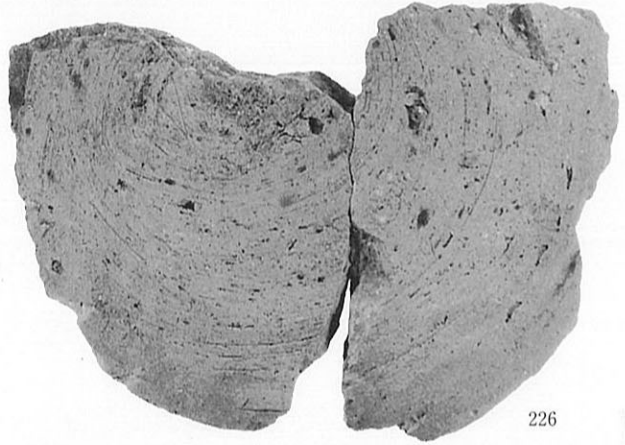
225



227



233



226

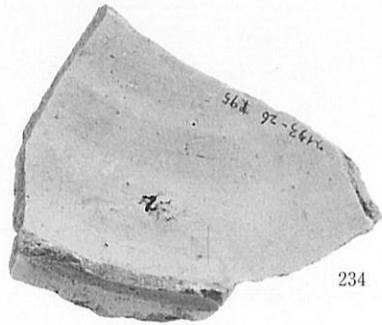
1. C地区第5層 出土遺物



230



231



234



228



229



232

2. C地区第6層 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	すいたそうしゃじょういせき・すいたそうしゃじょういせき B ちてん							
書名	吹田操車場遺跡・吹田操車場遺跡 B 地点							
副書名	吹田信号場駅基盤整備工事及び吹田地区貨車区改良工事に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書							
シリーズ番号	第66集							
編著者名	阪田育功 黒須亜希子 河端 智 福島正和							
編集機関	財団法人 大阪府文化財調査研究センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市竹城台 3 丁21番 4 号 TEL.0722-99-8791							
発行年月日	西暦2001年10月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
すいたそうしゃじょういせき 吹田操車場遺跡	おおさかふ 大阪府 すいたし 吹田市 しばたちょう 芝田町	27205	73	34°46'06"	135°32'10"	2000.3.4) 2000.9.29	4,168㎡	吹田信号場駅基 盤整備工事
すいたそうしゃじょういせき 吹田操車場遺跡 B 地点	おおさかふ 大阪府 すいたし 吹田市 ひらまつちょう 平松町		133	34°46'03"	135°32'11"	2000.9.4) 2001.3.31	1,360㎡	吹田地区貨車区 改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
吹田操車場遺跡 吹田操車場遺跡 B 地点	集落跡 水田跡	古墳時代 平安時代 鎌倉時代	水路 掘立柱建物 ピット 土坑 溝 水田畦畔 足跡 不定形土坑 井戸 落ち込み		須恵器 土師器 馬形土製品 黒色土器 施釉陶器 墨書土器 瓦器 瓦 輸入陶磁器		古墳時代から古代にか けての溝及び直線をな す基幹水路を確認 平安時代の掘立柱建物 と条里畦畔を持つ水田 跡を確認 古代の条里を踏襲した 中世から近代にかけて の水田跡を確認 鬼界アカホヤ火山灰層 を良好に確認を明らか にした	

(財) 大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第66集

吹田操車場遺跡・吹田操車場遺跡 B 地点

—吹田信号場駅基盤整備工事・吹田地区貨車区改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行年月日：2001年10月31日

編集・発行：財団法人 大阪府文化財調査研究センター
大阪府堺市竹城台 3 丁21番 4 号

TEL(0722)99-8791 FAX(0722)99-9805

印刷・製本：株式会社 じんのう

